THE CENTRAL REVIEW

中央公論

2-1919

二月號

第三十四年第二號　第三百六十六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



第十版出來‖賣行評書界を風靡す!!

ノベル賞金を得たる白耳義文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

附錄
『交靈術とは何ぞや』

四六判總布製
正價壹圓五拾錢
郵税十錢

大歡迎・大好評‖忽再版

印度マドラス大學教授 ナラス原著
曹洞宗大學教授 立花俊道譯

佛教の要諦

（釋尊影像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入）

四六判總布製
紙數約六百頁
正價貳圓六拾錢
郵税十二錢

世界的碩學として知らるゝ印度スマンガラ大僧正評して云ふ

「……余は佛教の知識を得んと欲する萬人に此書の熟讀を勸む、憶ふに此の書はかゝる主題に關する空前の良書と稱するに憚からず」——スマンガラ大僧正——

東京本郷西片町　玄黄社　電話小石川一三九番　振替東京七九九五番

久保田万太郎氏著

戀の日

―新刊發賣―

特製箱入最上製
名取春仙氏裝畫
定價金九拾五錢
郵送料金八錢

「東京夜話」以後の作を集めたるものにして最近嘖々の世評を喚べる『末枯』亦此の中に在り。東京人を主材となし、其の生活の種々相と生活にまつはる濃かな氣分とを極めてデリケエトなる筆觸を以て描き來り、淡々しきが中に、しみじみとせる情趣の、おのづから人の心を牽くものある、眞に此の作者獨壇の境と云ふ可く、文壇の異色として他の何人の追隨をも許さゞるものあり。

松井須磨子著

牡丹刷毛

―改訂新版出來―

竹久夢二裝
特製頗美本
定價金壹圓
郵稅料六錢

是れ愛人の死に殉じて一世の涙を絞らしめたる須磨子女史が唯一の遺著也。文章二十篇、小說あり、隨筆あり、感想あり、樂屋日記あり、彼女が筆の人としての爛漫の才華を示せるもの。何れも女優生活の欺らざる告白録にして、中には其の死にまでの戀の悩みをほのめかしたる一節もあらむ。中に挿む所の寫眞三十餘面、彼女が扮せる重もなるものをコロタイプ版網版に刷して、其の舞臺寫眞全集たり。

久保田万太郎氏著
■東京夜話
定價九拾錢送料八錢

長田幹彦氏著
■鴨川情話
定價九拾錢送料八錢

吉井勇氏著
■祇園夜話
定價六拾五錢送料八錢

トルストイ原作
島村抱月氏脚色
■復活■
カチューシャの名と共に天下に喧傳せられたる名脚本。縮刷出來す
價五拾五錢 ▲送料六錢

東京牛込矢來中の丸
振替(東京)一七四二

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番

見よ讀め

（年中無休刊）

講和談判に際して

▽本紙は完全なる一切の設備を了したることを敢て告ぐ。世界大變局の終結する處を、迅速に確實に知らんと欲せば、先づ本紙の通信機關に據らざる可からず。

東京日日新聞

「戰後」の新時代

▽已に眼前に迫れり。經濟界に思想界にあらゆる事象は動搖し推移して何處にか歸趨せんとす。新時代を明察せんとするには本紙を離るゝ可からず。

三ヶ月分前金郵税共金貳圓

東京日日新聞社

東京市丸の内（振替口座二八〇〇番）

戰後重大問題の羅針盤、一日も不可缺大新聞

正大切實の意見、的確精緻の報道は日本の代表的新聞として夙に内外に至大の信用を博し且つ近時の紙面は更に益々活躍せり

日本一の時事新報を讀め!!

時事新報は夙に代價を引上げたるに拘らず其發行部數益々增加せるは私に誇りとする所、今や世間は實價ある新聞を要求せり

夕刊四頁、朝刊八頁、何人にも興味多き大新聞

東京　時事新報社　發行・取次所全國各地に在り

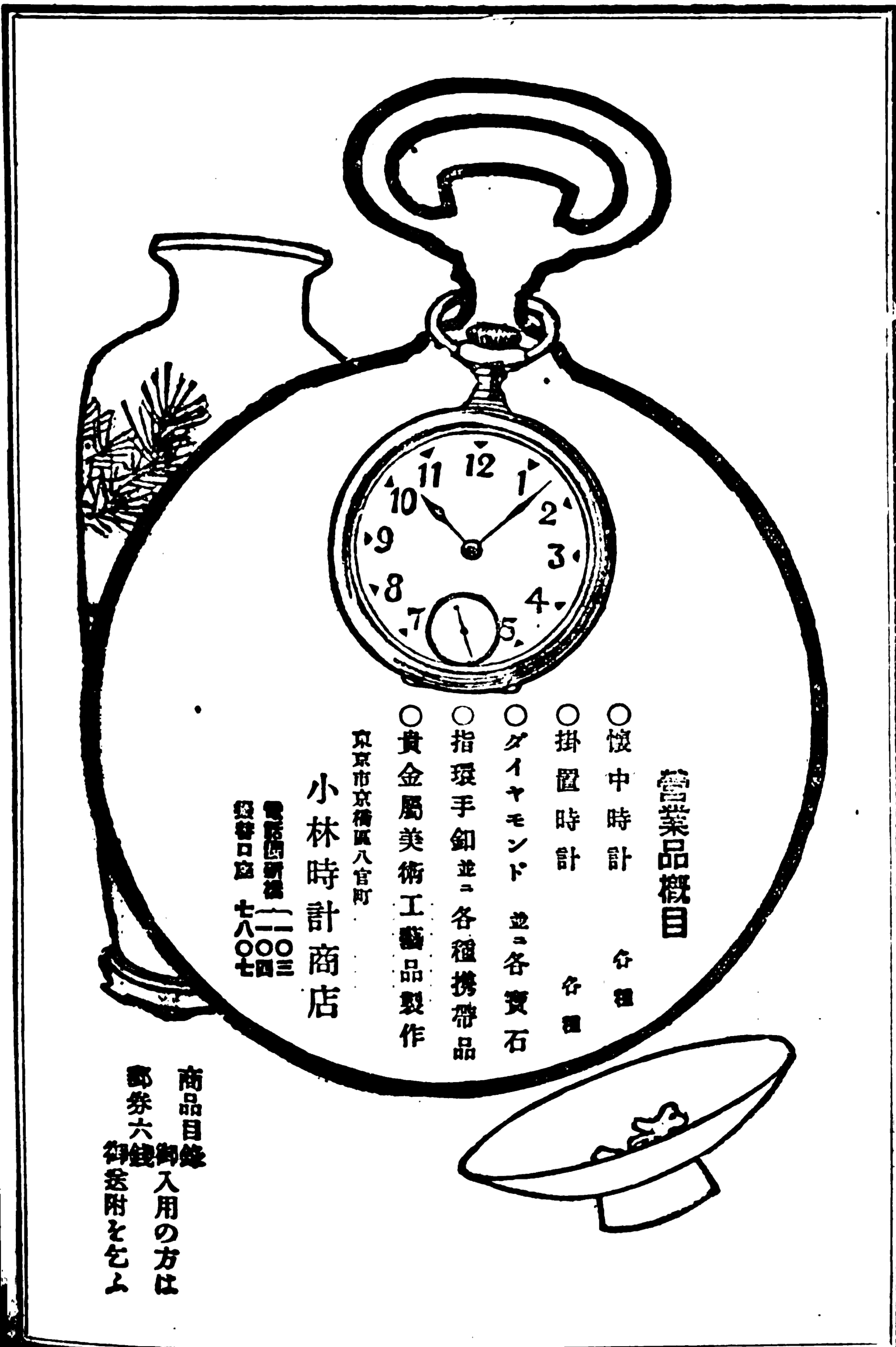


中央公論第卅四年二月號目次

▼公論

▼說苑




12
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋　一一〇三　一一〇四
振替口座　七八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



LISEUSE

BY PIERRE-AUGUST RENOIR



LISEUSE

BY PIERRE-AUGUST RENOIR

中央公論



第卅四年第二號
二月號
第三百六拾六號

選擧權擴張問題

法學博士 吉野作造

第一 序論

新議會に於て討論せらるべき最も重大なる問題の一が選擧法改正——殊に選擧權の擴張を主とする——であることは疑ひない。原內閣は國民の期待に應じて已に改正案を提出するの準備を完了せりといふ事である。選擧法の改正殊に選擧權の擴張は、多年國民輿論の要求する所であり、從つて新聞雜誌は勿論、各政黨の每度の宣言等に於ても、久しく之に對する要求の聲を聞いたのであつたが、然し未だ曾て今日ほど強く叫ばれた事はあるまい。是れ畢竟戰勝の結果として民本主義的思想の旺盛を極むるに至つた自然の結果であらう。兎に角、選擧法の改正は今や熱烈なる輿論の要求である。

此要求に促されて、選擧法の改正が近く議會の問題に上らんとするのは、吾人の甚だ愉快とする所である。

然るに、昨今政界の各方面に起つて居る選擧法改正に關する論議を、從前の夫れに比較すると、吾人は其間に多少趣を異にする所のあるを認めざるを得ない。そは何かといふに、昨今の論議は前のと比べると餘程自由奔放の氣魄に充ち滿ちて居るといふことである。從來の論議に在つては、例へば選擧權の擴張を論ずるに方つても、少數の急進派を除いては、何等か或物に遠慮して思ふ存分の所を言ひ切り得なかつた趣があつた。少くとも、理論上擴張には賛成だが實際上の弊害を避くる爲めには漸進的に進んだ方がいゝなどゝ云つたやうな微温的の議論が多かつた。若し夫れ各政黨の方面に至つては、一方民間の輿論に媚びて改正の必要を唱道するにはするが、いよ〳〵具體的の案を發表するといふ段になると、極めて不眞面目不徹底なものであつた。云はゞ内心は之を欲しないのだが、多年改正を唱道し來れる面目上已むを得ず好い加減なものを公表するといふ風がないではなかつた。ウツカリ普通選擧なんどいふことを口にすると、亂臣賊子の樣に思はれた時代もあるのだから、右位の事は考へて見れば、また已むを得ない事でもあつたらう。然るに昨今の形勢を觀ると、此點が餘程變つて來た。新聞雜誌の議論に勇ましい意氣込を見るは言ふまでもなく、政黨界の議論にも、此頃はなか〳〵思ひ切つた進んだ説が見える。中には進み過ぎて却つて贊成し兼ぬる樣なのもないではない。斯の如きもの畢竟時勢の促す所に外ならずして、之によつて我々は選擧法改正、殊に選擧權擴張の機運の今日大に熟せるを認むるものである。

唯併し乍ら、吾人の仍ほ甚だ遺憾に堪へざるは、次の二點に於て今日の論議が從來のそれに比して餘りに著しき進歩を見て居ない事である。一つは擴張の主張に尚人に徹底を缺くものある事である。委しく言へば擴張の必要を認めつつ、尚實際の結果如何に迷ふて、思ひ切つた斷行を躊躇するの色を示してる事である。次には、問題の重點が專ら權利擴張と云ふ一點に偏して居ることである。尤も坊間傳ふる所に依れば、現内閣の近く提出せんとする改正案は、(一)選擧資格、(二)區制、(三)罰則、(四)別表、(五)選擧訴訟の五項に亙つて居ると云ふ。けれども、世上の論壇が主として問題とするのは、主として選擧資格の改正に就てではないか。選擧法上選擧權の問題が一番肝要であることは云ふを俟たない。

殊に選擧權の著しく制限されて居る我國の現行法の批評としては、此點が最も八釜しい論議の焦點にならざることを得ない。併し乍ら、我國選擧制度の完成を期する目的より云へば、我々は更に區制問題、罰則の問題の極めて重要なるものあるを看過してはならない。所謂大選擧區小選擧區の利害得失如何及び大選擧區單記の現行制度の可否如何の問題の如き、又選擧取締方法の煩瑣なること世界無比なる我現行制度の果して合目的的のものなりや否やの問題の如き、代議政治に於ける選擧制度の實效を擧ぐるため、且つ又我國將來の政治道德の發達の爲め、最も細心の考察を要すべき問題である。此點を看過して獨り選擧權の擴張のみに熱中するのは、佛作つて魂を入れざるの憾なきを得ない。

以上の立場より我國今日の選擧法改正に關する問題を吟味して見ようと云ふのが予の本編の目的である。此の同じ問題に就ては、數日來いろ〳〵の人からいろ〳〵の説明が公にされた。中には敬服に値する議論も少くないが、然し此問題の全斑に亙つての比較的纏つた意見には、予の寡聞なる、今日までまだ接して居ない。最近予の尊敬する美濃部博士は「國家學會雜誌」に於て普通選擧論を連載されて居る（本年一月號より始まる）。之が纏つた意見と見るべき殆んど唯一のものと思ふが、然し其完結は之を數ケ月の後に待たなければならない。是れ予の自ら揣らず取敢へず不完全なる此一編を提供して世上の急需に應ぜんとする所以である。

尤も予輩は選擧權問題の研究を專門とするものではない。随つて此問題の十分なる論究は自ら其任に非ざることを知つて居る。只最近此問題に著しく興味を感じた結果として、予は東京帝國大學法科大學の特志なる數名の學生諸氏と謀つて先頃來此問題の包括的研究を企てゝ居る。予は一日の長あるの故を以て、先づ自ら研究の綱目を編成し、之を夫々學生諸君に頒つて各自研究事項を分擔せしめたのであるが、其事が偶々世上に傳唱され、爲めに直接に選擧權に關する予の積極的意見を徴せらるゝ方が少く無い。此事も亦予をして匆卒に本論を草せしむるに至つた一つの理由である。而して遠からざる將來に於て、予輩は學生諸君の研究の結果を編纂し、尚一層纏つた詳論を公にし得べきを信ずる。

第二　選擧權の理論的根據

選擧權の問題を論ずるに當つて先づ第一着に決めねばならぬのは、何の爲めに選擧權と云ふものが存在するかと云ふことである。此問題が決らなくては、選擧權に關する他の一切の問題の埒が明かない。

扨て、選擧權の理論的根據に就ては、實は古來いろいろの説明が與へられて居る。而して今日に於ても吾々は屢古い説明が仍ほ尤もらしい形に於て唱へられて居るのを見る。そこで眞の理論上の根據の何れに在るやを明白に認識する爲めには、古來唱へられ來つた色々な説明を列擧して之を比較對照する事が一番便利であると思ふ。

前述の如く、選擧權の根據を説明せんとする學説は昔からいろ〳〵のものがあるが、之を大別すると先づ次の二種類になる。第一は選擧權を國民の固有の權利と觀るもので、第二は國民に固有なるものではない、國家の方から或目的の爲めに特に國民に賦與した權利だと觀るものである。

先づ選擧權を國民の固有なる權利にあらずと觀る方の學説を吟味するに、之に屬する主なるものにまた二つある。第一は選擧權を以て國民の國家に捧ぐる或る特殊の勞務乃至提供に對し國家が報償的に與ふるものと爲すの説である。今日でも我國の一部の政客が説くが如き、兵役義務を完了せる者に選擧權を與ふ可しとの説は、解きやうによつては此種類に屬すると云へる。英米に於ても、婦人に參政權を認むべしとの論據を、戰時に於ける婦人の功績の著大なるに置くものであるが、是亦前記の思想に多少かぶれて居ることを蔽ふことが出來ない。併し選擧權に關する今日の學理上の通説としては、最早此種の説明は認められない。蓋し今日の理論から云へば、若し國家に勞務乃至提供を捧げた者に此種の報償を與ふ可しとせば、獨り兵役の義務に服する者に之を限るの道理が無い。一體兵役の如き國民一般の共同に負擔すべき義務に對しては、何も特殊の報償を與ふるの必要はない筈である。のみならず、之を事實上特殊の役務なりと見ねばならぬとしても、之に對しては他に自ら報償の途あるべく、選擧權を以て之に報ゆるのは決して適當と云ふことは出來ない。而して之は兵役に限つた事ではない、總じて國民の特別なる役務に對する報償として選擧權を論ずるは、今日は最早陳腐の説となつて居る。

尤も議會制度發達の沿革の上から云へば、此説には大に歴史的の意義がある。今日の議會制度は英國に濫觴して居る

が、その英國に於て昔し之が何のために起つたかといへば、租稅負擔の承諾を求むる爲めに、民間の代表者を中央に召集したといふ事に在る。之は英國に限つた事ではないが、昔時一切の國務は原則として國王の私産の收入に依つて賄はれた。併し世の進むに連れ國用多端となり、到底王室の收入のみではやり切れない。そこで新しい負擔を大名小名から段々地方の豪族にまで仰ずることになる。之が一度や二度ならいゝが、段々度重なると貴族豪族は却々おいこれと之に應じなくなる。斯くて時には上下の間に不幸な衝突を見る事もある。斯ういふ經驗を重ねて往く中に、玆に漸く穩便に民間の貢納を承諾せしむる爲めに、豫め彼等の代表者を會して一體何の爲めに之れだけの金が要るかを明白に說き聞かすといふ慣例が開かれた。斯くして特別の貢納金を負擔すべき豪族は、謂はゞ政府の財政問題に容喙する權利を得、此權利の實行のために自分の代表者を中央に送るといふ事に進む。之が即ち民選議員の發生を見た因緣である。して見ると、少くとも其起源に於て代議士は、租稅の負擔に承諾を與ふる爲めのもので、選擧權は則ち租稅納付に對する報償に外ならなかつたのである。從て租稅を拂はない人は選擧權を有すべき謂れはない。租稅を拂ふが故に選擧權があつたのである。今日我國にも行はるゝ選擧權の資格を一定の稅額に置くの制度は、實に此沿革に基くものである。併し乍ら今日では、少くとも理論上租稅は特定の國民の特別なる負擔と視るべき性質のものでない。國民一般の負擔たること兵役と同一である。從て租稅と選擧權との間に今尙一定の關係を法制上に認めて居るのは、實は何の根據もないのである。

今日に於て若し選擧權に特別の制限を認むべき根據ありとすれば、夫は租稅納付の有無若くは其多少にあらずして、國政に參與する能力の有無乃至高低にあらねばならぬ。故に納稅額の多寡に制限の標準を置くは、財産の多少が實に能力の高低を判すべき唯一若くは最主要の標準たる場合に限るとせねばならぬ。而して今日では財産の多寡は事實上必しも能力の高低を意味するものではない。是れ今日の財産的制限の制度が著しく非難せらるゝ所以である。而してかゝる非難の起る所以のものは、畢竟選擧權の根據を租稅負擔の報償と見た時代の遺制を、其儘今日に於ても維持して居るが爲めである。

選擧權の根據を特殊の義務に對する報償と觀るの說は前述の如く全然誤りであるが、併し特殊義務に對する國民の感

情を誘致し、國民をして喜んで此義務を竭さしむる爲めの一方法として、義務の負擔と公權の賦與とを相交換せしむる事は、政策として一顧の價値が無いではない。佛蘭西が兵役義務の完了を以て被選擧資格の一要件として居るが如きは即ち此例である。但選擧權に就ては、今日の歐羅巴各國は選擧權をば兵役義務の一般的なるが如く同じく一般的として居るから、二者を相交換せしむる實際上の必要はない。這般の問題は選擧權を特に狹く限つて居る國に於て始めて論ぜらるゝのである。現に最近我國に於ても熱心に此點を主張する者を見受くるが、唯呉れ〴〵も注意せねばならぬのは、此兩者の關係を決して報償的に觀る可からざる事である。且又予輩の考では、兵役義務に關する國民の感情を誘導するといふ點から觀ても、此方策は必しも得策でないのみならず、選擧權の擴張に伴つて當然無意義に歸す可きものであるから、餘り力瘤を入れて説く可き問題でもないと思ふ。是よりも一定の程度の教育を受けた者に選擧權を與ふ可しとする説の方が餘程實益も理窟もある。

選擧權を國民の固有の權利に非ずとする種類に屬する第二の説は、議會を以て一定の權限を有する君主の諮詢機關と看做し、而して之を構成するに方り、最も適任なる者を擧用するの方法として人民一部の公選といふ制度を認めたと爲し、所謂選擧權は議會といふ諮詢機關の構成に關し國法によつて一部の人民に認められたものに外ならぬとする説である。此説の特色は、議會に認むるに立法權と豫算議定權との一定の狹い權限を以てし、其限られたる範圍内に於て主權者の諮詢に應ふる丈けの機關と看做す點と、又人民の有する所謂選擧權は國家の命令權發動の反射として存在するに止まるとする點とにある。憲法條文の形式的解釋論としては或は之に一應の理窟を認め得ないでもなからうが、然し今日の議會の權限は　實に於て立法權と豫算議定權とに限られて居ないのみならず、單純なる諮詢機關と觀るのでは、之と樞密院などとの實質上の差別を明にする事が出來ない。而して選擧權についても、之を適任者選拔の方法に過ぎずとしては、何故にあんな不便な遣り方に依らねばならぬの理由が判らず、又國法の反射として存するに止まると觀ては、今日事實上強く叫ばるる選擧權擴張の要求の意味が解らない。要するに此説明は今日の憲政運用上の實情とは餘りに矛盾して居る。從て一部の保守的專制政治家輩が僅に此理論に合ふやうに憲法の解釋と憲政の運用とを窮屈に押し付けようと

する者あるに止り、政界の大勢は遠慮なくどん〱其赴る可き途を走つてやまない。尤も此第一の説は其が政界の實情に合はないからとて、直に理論上も駄目なものと速斷する譯には行かない。然し予輩は斯かる下らぬ閑問題に此上時と精力とを費すの遑を有たない。

以上論ずる所に依つて見ると、今日の議會乃至選擧の制度を論ずるに方ては、形式的法律論は姑く別問題として、少くとも政治の實質的研究に於ては、吾人は選擧權――即ち、人民の參政權――を本來人民に固有なる權利と觀るの立場から出發しなければならない。玆に固有といふ意味は、法律に根據なくして先天的に有するとの謂ではない。法律に據つて有するには相違ないが、法律に依つて作られた全然新しい權利でなくて、法律が之を認めて權利とするに相當の理由があり、其實質に於て法律以前に既に何等かの存在を有して居つたといふ意味である。此意味に於て選擧權の本質が人民の固有の權利たるに在ること一點の疑を容れないが、只問題となるのは人民は何ういふ理由で國政に參與するの地位を其固有の權利として要請する事が出來るかの一點である。之が中々の大問題である。而して此に關する最近思想の沿革を歷史的に觀ると、十九世紀の初め以來今日まで三大變遷を經て居る。從て今日迄選擧權の根據として擧げられた說明には大體三つあると言ふ事が出來る。

第一に來るものは天賦人權論である。玆に天賦人權論と言ふのは、十八世紀の末主として佛國に盛に起つた各個人の絕對的自由、各個人の無上の權利を主張する所の各種の說を總稱するのである。是等の思想の起り並に其文化史上の意味に就ては玆に詳論するの限りでないが、兎に角各個人は生れながらにして絕對獨立の主格である、何者も彼の獨立自由を侵すことが出來ないと言ふのが天賦人權論の根本主張である。併し乍ら人類は如何なる時代に於ても國家といふ團體を作つて其生存を完うして居る。人類が國家生活に於て著しく其自由獨立の上に拘束を受けて居るといふ已むを得ざる事實は、當時の人と雖も之を認めざるを得なかつた。然らばこの已むを得ざる事實と天賦人權論とは如何にして之を調和する事が出來るか。此點を說明する爲めに彼等の當時唱道したものは即ち社會契約說に外ならない。彼等以爲らく、自由なる人格者が他に對して義務を負ふ場合は、其の自由意志に出づる契約に依つてのみである。私法生活に於ける此

の古來の原則は、移して以て公生活にも應用すべく、即ち公けの義務拘束も亦契約に依るものと考へて始めて理解する事が出來るとした。之れから段々押し詰めて、結局、各個人を拘束する所謂國家命令の權威の基く所は、個人の自由意志の統一的綜合にある。從つて各個人は凡て皆國家意思の決定に參與す可き固有の積極的權利を有すと言ふことになる。之を通俗に言ふならば、各個人は少くとも全體を造る有機的一部分としては、夫れ〴〵皆主權者であると言ふべきである。此理から押せば凡ての國民は洩れ無く皆國政に參與する所なければならぬことになる。之れやがて人民參政權の主張せらるる論據になる。人民參政權が制度の上に初めて顯はれたのは一七九三年の佛國憲法に於てであるが、此時の論據は實に右述ぶるが如き理論であつたのである。

此の天賦人權論は當時啻に選擧權の論據として唱へられしのみならず、一般民主政治の理論上の根據でもあつた。從つて獨り人民參政權論者ばかりでなく、所謂デモクラシーの主張者も、亦等しく其議論の根據を茲處に求めたのであつた。是れ當時の政論を讀む者の注意を要する所である。而して其後政治學理は大に變遷したに拘らず、今日尚平然として夫の舊るい理論に執着して居る者の鮮く無いことも亦特に注意する必要がある。

人民參政權が其最初の論據とした天賦人權論が、また大に選擧權擴張の氣勢を旺にした事は疑を容れない。併し乍ら天賦人權論は果して選擧權擴張の眞實唯一の根據であらうか。先づ第一に考へねばならぬことは天賦人權論を執れば自ら民主共和を以て唯一の合理的國體と做し、君主主義を否認するの結論に陷らざるを得ない點である。第二に考へねばならぬは、天賦人權といふ思想は、人文發達史上の特殊の意味は姑く措き、今日の學問からいへば夫れ自身文字通りに受入れられぬことである。蓋し我々は決して生れながらにして獨立自由ではない。獨立自由は將來に於て達成す可き吾人人類の理想的目標である。少くとも、我々は修養努力に由り獨立自由の人格者たるの可能性を有すと考ふる事は出來るけれども、生れながらにして然りといふ事を出發點として議論を進むる事は出來ない。之等の理由よりして人民參政權論は今や天賦人權論に據つては其基礎を說明する事が出來なくなつたのである。

さて人民參政權論が若し元來天賦人權論を唯一の根據とするものであつたならば、其基礎の崩壞と共に之も亦倒れね

ばならぬ事である。然るに事實人民參政論は天賦人權論の崩壞後に於ても、依然其主張を弛めざるのみならず、益々盛に主張さるゝを見るのである。然らば之は天賦人權論に據らずして説明され得べきもの、否な別の根據に基して彼れとは全く獨立に存在し得べきものと視なければならぬ。只其創唱の當初偶々時の流行したる天賦人權論を藉りて其根據を説明せんとしたまでゝあらう。而して今や天賦人權論は間違といふことになつた。然らば之よりは之を捨てゝ他に別の合理的根據を探し求めなければならない事になる。斯くして人民參政從つて又選擧權といふ事柄それ自身は天賦人權論と其運命を共にせずして益々盛に發達の歩を進めたのであつた。

第二に選擧權の根據として採用せられたものは第三階級説である。即ち國民の大部分を占むる第三階級の利益を圖り其權利を伸張するの手段として選擧權は普く與へらるべきものといふ考である。

天賦人權論の根據に立つ選擧權論が第三階級説を論據とするに變つて往く道筋は歴史的に見ると一層明白である。而して此變遷を促すに最も與つて力あつたものは、第一には最大多數の最大幸福説であり、第二には社會主義の政利であると言はなければならぬ。天賦人權説に基く國家觀が、個人に對する國家の權力行動を出來る丈け狹きに限らんとした事、而して其國權の個人に對する命令關係を是認すべき範圍は、彼が最大多數の最大幸福を圖る場合に限るとせし事は今詳しく説くの必要はあるまい。兎に角斯くして國權發動の主たる標目の一として、最大多數の最大幸福を着眼す可しとするの見解が段々起つて來たことを念頭に置けば可い。唯問題は何が國内の最大多數者なりやといふに在るが、此點は社會主義の段々發達するに從て、所謂第三階級が夫れであるといふ思想が起つて來る。元來最大多數の最大幸福説の本家と觀る可き英吉利に於ては斯ういふ考まで進まなかつたのに、大陸に於ける社會主義の運動が勞働者の權利伸張を説くに及び、此と彼と結び付いて國家の目的は第三階級の保護伸張にありといふ考が強く主張さるゝ樣になつたのである。

然らば第三階級とは何ぞや。一體佛蘭西革命以來十九世紀の初頭大陸の諸所方々に起つた政治的革命運動は、或程一般民衆の名に於て爲され、又實際一般民衆の力が大に與つて其成功を助けたのではあるが、改革の結果に由つて新に權力の

地位に登つた者は主として所謂中產階級以上の者であつた。そこで取殘された所謂勞働者階級は、一般文運の進步に伴ふ下層階級の自覺といふ現象に伴つて、段々不當に壓倒せられたる自家權利の伸張を叫ぶに至る。斯くして結束したる彼等は自ら第三階級を以て居り、而して此第三階級が實に國民の大部分を占むる者なるの故を理由として、此階級の利益幸福を圖る事が即ち國家の主要なる目的たらざる可からずとするに至つたのである。

第三階級の利益幸福の增進が國家の主要なる目的の一なりとする思想から、更に一轉して選擧權の國民的普及を說くに至らしめたものは、獨逸社會主義者の功である、主としてはフェルヂナンド・ラッサールの功であると謂はなければならない。ラッサール以外にも、又彼れ以前にも、之と同じやうな說を唱へた者が無いではない。けれども此點に於てはラッサールの功績が一番著しくもあり、又此方面の說明が大に天下に普及したのも彼に依てゞある。然らば彼が如何なる意味に於て此方面の功勞者と言はるゝのか。

茲に予輩は獨逸社會主義の主張を詳しく述ぶるの遑を有たない。唯其創始者と言はふか大成者と言はふか兎に角獨逸の社會主義はカール・マルクスに始まる事、而してフェルヂナンド・ラッサールの說は決して多くマルクスを出づるものに非る事を一言するに止める。唯一つ茲に看逃す事の出來ないのは、マルクスとラッサールとは根本の思想を同うするも其理想實現の方法に關する考は全然相違せることである。マルクスは此點に於ては所謂國際社會主義の主唱者である。彼は所謂國境を重んじない。世界中の勞働者はみな結束して資本家と闘ふ可き事を唱へた。彼の見解に據れば、國家と國家との戰爭の如きは專ら資本家の慾の爲めの戰に過ぎない。故に勞働者に取つては全然無意義である。勞働者に取つてもし有意義の戰爭ありとせば、それは資本家撲滅といふ所謂一階級戰爭あるのみである。而して今日資本家は凡ゆる便宜を利用して勞働者を不當に壓迫して居るのであるから、吾々は之に對抗するが爲めにまた腕力に訴へて最も有效なる正當防衛の手段を講ずべきであるといふのである。若し之を難じて國家の法的秩序を紊亂すと言ふ者あらん乎、彼は答へて云ふだらう。國家の法律といふものが既に資本家に取つて勞働者壓迫の爲めの一好武器に外ならないと。之がまた今日露西亞のレーニン、トロツキー等の取つて居る主張である事は付け加ふるまでもない。然るにラッサールは之に反對

して「國家」を重する。國法の許す範圍内に於て主義の實現を圖るの可能にして又得策なることを認める。而して彼が現在の國法的秩序の下に於て社會主義の理想の實現を可能なりと信じた根據は二つある。第一は社會主義が專ら眼中に置く所の勞働者なるものは國民の大部分を占むるといふ事實である。第二は一八四九年佛蘭西が始めて之を採用して以來普通選擧要求の聲が獨逸にも高く、從つて此制の確立は必ずしも近く望みなきに非ずと認めた事である。若し普通選擧の制度が施かれ、而して勞働者が眞面目に自分の代表者に其與へられたる一票を投ずるならば、議員の大半を社會主義者で占むる事が出來る。然らば憲法上與へられたる議院の權能に基きて、合法的に社會主義の理想を實現する事が出來るではないか。斯くして彼は一八六〇年前後、挺身天下に呼號して勞働者の須らく結束して普通選擧を要求し、又同時に政黨を組織す可きの急務を說き廻つた。獨逸が一八六三年初めて社會主義の政黨組織を見たのも、專ら彼の盡力に由る。之れより普通選擧は第三階級の權利利益を主張し、由つて以つて國家をして其最も主要なる任務を盡くさしむる所以、最も肝要なる方法であるといふ思想が生れたのである。今日でも斯ういふ考に基いて選擧權の普及を主張する者が世上に尠くない。

併し乍ら此說は、第一に選擧權を以て或る他の目的を達する爲めの手段と觀る點に於て、又第二には第三階級の權利利益の伸張を圖る所から階級的差別を激成し以て國家の統一觀に悖るといふ點に於て大なる理論上の弱點がある。最大多數の最大幸福說が最近の新しい國家觀と相容れざる限り、此說の第一の根據は崩れたものと言はねばならず、然らざるも、第三階級は國內の量的優勢を代表するに止り、必ずしも質的優勢を代表するものでないと言ふ點に於て、今日は大に排斥さるゝ事になつた。此說が少數特權階級の權利壟斷の蒙を啓き、參政權を弘く天下に普及せしむるの事業に多大の功績を示した事だけは、之を認めなければならないが、只選擧權の根據を說明するの理論としては、今日は最早昔しながらの權威を要求する事は出來なくなつた。

其處で昨今に至り新に第三の論據が說かるゝことになつた。夫れは何かと言へば社會協働說である。此方面を最も能く明にしたものは、佛蘭西に起つた夫のソリダリテ・ソシアールの學說であらう。尤も今日選擧權の論據として取る所は

必ずしも所謂ソリダリテ・ソシアールの說に其儘囚へらるゝ必要はない。彼に依りて著しく啓發された最近の國家理論を主として着眼すべきである。其考の大要は斯うである。吾々人類は今日國家といふ團體生活に於て共生存の目的を果して居る。この團體生活を離れて吾々の生活は考へられない。從つて吾々が吾々の生活を充實するといふことは其前提として又は同時に團體其物を充實することである。こゝに國家と個人との微妙なる有機的關係が成立する。此有機的關係を根基として個人は十分に國家の充實に努力せなければならず、國家はまた十分に個人の發達を助長せなければならぬ。斯くして一方には吾々國民は各其積極的の責任として進んで國家を經營すべき直接の分擔を有すとの見解も起り、また吾々はこの國家經營の積極的持ち分を十分果たし得る樣な地位を與へられんことを要求すべしとの見解も生ずるのである。この事は君主國に於けると民主國に於けるとに由つて異る所はない。少くとも近代國家に在つては總てに共通する理論と言つていゝ。果して然らば吾々は一方に於ては國家の經營に關する積極的責任を完うする爲めの物質上精神上の保障を要求するの權利あると共に、又國家が自ら其運命を決せんとするに方り、其意志決定に參加するの固有の權利を主張する事が出來ねばならぬ。又國家の方から言つても、國家を組織する各員を物質的に且つ精神的に充實せしむるのみならず、更に彼等をして國家の爲めに意識的に行動せしむるといふ事が得策であり、又必要である。此點が實に民本主義の政治の據て立つ所でもあり、又同時に選擧權の據て以て生ずる所の淵源である。

以上述ぶるが如く選擧權の理論的根據に關する說明は三大變遷を遂げた。其第一期に於ては共和主義に伴ひ、第二期に於ては社會主義に伴つた。其の結果として、少くとも其變遷の歷史的過程に於ては選擧權論が或は共和主義或は社會主義と密接の關係を有つて居つたことは疑ない。然し今日一般に承認せらるゝ理論から云へば、選擧權は國家の本質に基く當然の歸結にして、如何なる國家も必ず之を認めねばならぬものとなつて居る。殊に選擧權の國民的普及即ち普通選擧の論になると、世上往々之を以て共和國にのみ行はるゝものと誤る者あるも、之は嗤ふ可き謬見である。唯從來共和主義者社會主義者が最も多く之を唱へ、且今日でも此種の傾向を帶びた者が特に著るしく此論を高調し、爲めに穩健なる政治家の顰蹙に値する樣な過激の議論も時々交へらるゝことがないではない。從つて世人が普通選擧說に對して動

もすれば誤解を懐くにも無理はないと思ふけれども、然し坊主が憎いからとて袈裟まで呪ふのは餘りに理に外れたる見解である。而して普通選擧に關する誤解からして、引いて選擧權そのものゝ論據まで累を蒙るが如きあらば、吾人は只之を一遺憾事として放任して置くことが出來ない。

第三　制限選擧か普通選擧か

選擧權の根據が以上述べたるが如きものとする以上、之は原則として凡ての國民に與へらる可きものなる事は言ふを俟たない。併し乍ら國民を一人々々取つて見ると、中には到底選擧權の行使に與らしめ得ない樣な者も鮮くはない。又私法上の權利とは違つて、他人をして代理行使せしむ可き筋合のものでもない。仍で實際上の問題としては、文字通り無制限に凡ての人に選擧權を與ふる事は出來ないといふ事になる。是に於て、多少の制限を設けなければならぬ事になるが、唯此際吾々の注意せねばならぬのは、(一)選擧權を與ふ可からざる特殊の理由ある者を列擧して之を除外するといふ主義に據るか、又は(二)選擧權を與ふ可しとする特殊の理由ある者に限り之を認むとするの主義に據るかの點である。之は恰度、一方は鼻の下に口ありと云ひ、他方は口の上に鼻ありと云ふが如く、結局同じ事を意味する樣に思はるるけれども、實際上に於ては中々さうではない。其の何れの主義を採るかに因つて實は選擧權の範圍に重大な差を生ずるのである。普通選擧並に制限選擧の兩制度の分るる所以も、其基く所は畢竟こゝの考如何に在る。我國の選擧法上の主義は、言ふまでも無く、後者である。而して選擧權が納稅とか兵役とか云ふ如き特殊の義務に對する報償の性質を有せし時代には、無論此主義に據らねばならなかつたのであるが、國民一般の固有の權利として認めらるゝ樣になつた今日に於ては、何うしても第一の主義に據らなければならぬ事は、多言を要せずして明白であらう。

第一の主義を採るにしても第二の主義を採るにしても、今日では一般に當然選擧權外に除かる可きものと定まつて居る若干の種類がある。是等は「政治上其他の理由により特に選擧權を剝奪す可しとせらるゝ者」か、若くは「初めから參政能力の缺乏を豫想せらるゝ者」であるが、其中前者に屬する者は犯罪人、禁治産者、破産者、又は特殊の官吏並に特殊の

業務に從事する者等である。是等の點は我國の選擧法にも詳細の規定がある。次に後者に屬する者はといふに第一は未成年者であり、第二には浮浪人である。年齢並に定住期間の制限は卽ち此の爲めに設けられたものである。但し年齢の制限が餘りに高きに失する時は、之れ亦一種の變裝的制限選擧に外ならない事になる。然らば何處に標準を定むべきやといふに、單純なる理論としては民法上の成年を以て同じく公法上の成年と爲す可きであると思ふ。何故なれば智慮分別の獨立を認むるに公私の關係に因つて差等を設くるの道理が無いからである。唯實際問題として、我國では少青年期に於て社會が餘りに兒童を實際生活から隔離して居るのみならず、敎育期間が槪して頗る長くなつて居るから、當分の間或は公法上の成年を少し位高くして置く必要があるかも知れない。併し理想としてはどこまでも全然同一である可き筈のものと謂はなければならない。西洋では三十歳・二十五歳として居る所も無いではないが大抵の國は二十歳前後である。日本は今の處より少し高くても差支あるまい。之と同じやうな事は住所の制限に就ても言へる。我國では他の一般要件を具備してから更に同一選擧區内に一年乃至二年以上定住するを要することになつて居るが、之は餘りに長過ぎて不當に選擧權を制限するの嫌は無いだらうか。無職無住の浮浪人を除外するといふ目的から言へば、西洋の多くの國の採つて居るが如く、六ケ月としても事は足らう。況んや財産上の要件に於て既に頗る高き制限を設けしに於てをや。普通選擧の國に於てこそ多少の意味はあれ、我國などに於ては選擧人名簿調製上の便宜といふ以外に、定住期間の制限は格別の意味はないと云つてよい。尙此外精神に異狀ある者、自ら自己の姓名を書き能はざる者等を除く等の類は一々此處に列擧する必要はあるまい。

以上の種類が選擧權から除外せられて居る事は、殆ど凡ての國に共通の現象であるが、偖之れ以上に更に特別の大制限を設く可きや否やといふ問題が起つて、玆に普通選擧と制限選擧との別が生ずる。元來此兩制度の岐るる所以の根本は、以上の種類の者を除外しても尙選擧權行使の能力を缺く者が外に澤山あるか否やの見解如何にある。普通選擧論者はあれ丈けを除けば他は大抵有能力者と見て可なりとの前提に立つ。此前提を承認せざる者が制限選擧制に奔るのは、また已むを得ない。其處で問題は無能力者は尙他に澤山あるか否かといふ事になり、一轉して玆に所謂能力といふのは

何れ位の程度を意味するかに移り、更に轉じて何の時代的標準に依つて之が能力の有無を定む可きやといふに歸着する。

選擧權は制限すべきものとするの說が正しいとしても、其制限の理由と標準とは「能力の有無」といふ事以外に求むべからざることは疑を容れない。此點から觀て今日我國の採つて居る納稅資格を以て制限の標準とするの制度は、斷じて適當の立法では無い。何となれば直接國稅十圓以上を拂ふ者が之を拂はざる者よりも概して有能であるとは限らないからである。昔のやうに財産の有無が大體に於て教養の有無であつた時代ならばいざ知らず、强制教育制度が普く採用されて居る今日、而かも精神的交通の極めて旺んなる今日、教養の有無を分つ可きの標準を財産の多少に限るは、之を無意義と言はんよりは、寧ろ太だらしき不合理と言はねばならぬではあるまいか。

然らば他に能力の有無を適當に分つ可き具體的の標準が有るかと言ふにどう考へても無い。稍もちらしい標準は、一定の學校の卒業といふ事であるけれども、然し所謂社會的教育機關（新聞雜誌若くは各種の講演等）の極めて發達せる今日では、最早學校のみを國民訓養の機關と見ることは出來ない。斯く考へると結局適當の具體的標準は容易に見當らないといふ事になるが、夫れでも、せめて國民としての義務教育の終了如何を標準とすると云ふのなら、財産の多少と採るよりも遙かにより合理的なりと言ふ事は出來る。

然し更に遡つて吾々の考へて見ねばならぬ點は、制限選擧論者が無能力者の多數の存在を豫想するに當り、其念頭に置く所の「能力」とは果して如何なるものを意味するのか、換言すれば、彼等が認て以て選擧權の行使に必要なりとする「能力」とはどの程度のものを指すかの問題である。若し之が一方に於ては現代の政治組織を正確に理解し、又他方に於ては時々刻々に起る各種の政治問題に就いて相當の意見を積極的に立て得る程度の高い能力を意味するものならば、そかる能力を有する者は國民中極めて少數の部分である事は疑も無い。否高等の教育を受けた者でも、政治の專門家以外には、この能力を完全に備へた者は極めて少いと言はなければならない。斯の如き能力を要求するものならば、今日の代議制度は根本から之を否認し、政治は宜しく少數の哲人に委すべきである。併し乍ら現代立憲政治の運用に於ては、寧

は斯の如き高度の能力を選擧權者に求むるものでは無い。然らば何れ丈けの能力を必要とするかと言ふに、出來る丈け高いに越した事はないが、其最低限度としては、彼等が立憲政治の運用に方つて、彼等の具體的職能とする所を大體過りなく判斷處置し得るの能力が有れば足りる。言葉を換へて言へば選擧權者が、其權利を行使するに際し、各候補者の言論を聽いて其何れが多くの眞理を含むやの判斷を爲し、又豫ねての見聞に基き其各候補者の人格を比較し、其のいづれかより多く信賴するに足るか判斷を誤らなければ可い。積極的に政治上の意見を立つるの必要は無い。即ち極めて平凡なる常識で足りるのである。受働的に候補者の人格と政見との比較を適當に爲し得れば可いのである。之れ位の事なら、今日の國民には誰にも出來ると思ふ。且つ選擧の際には新聞等にも色々の事を書き立てるから選擧民に取つて判斷の材料は幾らもある。高い能力は之れ有るに增した事はないが、そは必ずしも必要ではない。教育の盛んな現代の文明國民の普通に有つて居る最低度の常識的能力で十分なのである。謂る普制限論者は「能力」といふ事を餘り高く見過ぎて居る。若し此點に彼等が一度反省するならば、彼等に求め難き標準を求めんとして苦み、又無意義にして不合理なる從來の制限を固執して幾多の弊害に困みし事の如何に馬鹿氣たものであつたかを悟るであらう。斯く考ふれは、選擧制度は原則として必ず普通選擧たらざる可らざるの理は、一目瞭然であらう。

尙最後に之と關聯して付け加ふ可きは婦人參政權の問題である。吾人が普通選擧を主張するの論據は、亦同時に婦人にも選擧權を與ふ可きの論據となる。婦人の政治に對して有する利害關係は、男子をして之を代表せしむ可しといふ說は、下層階級の利害は之を少數賢明なる中產階級の處置に委任するを得策とすといふ說と同じく、今日に於ては最早や其主張の承認が强い難くなつた。尤も事實の問題としては、婦人が男子と共に社會組織の綜合的一單位を爲して居つたといふ狀態は段々に崩れ、即ち婦人も亦獨立して男子と同樣なる社會の一分子となりつゝありといふ、歐洲最近の社會的新形勢を背景として、婦人參政權の要求は叫ばるゝに至つたものであるから、斯かる社會的背景を缺く我日本に於て近き將來に、婦人參政權要求の熱烈なる國民的運動が起らうとは思はれない。然し機運未だ熟せざるが故に此運動を起す可からずと言ふ者あらば、之に對して予輩は敢て「否」と答ふるに躊躇しない。予輩は婦人にも參政權を與ふ可きを主張

する者であるけれども、我國當面の實際的政治問題たる普通選擧論は、未だ之れまでを含めて主張せられて居ないから、此點に今暫く別問題として置く。

第四　漸進か急進か

選擧權擴張の方法に關し、我國の實際政界に於て一番有力な說は疑も無く漸進論である。擴張するにしても、一足飛びに急激な變化を見るのは不可い、階段を踏んで徐々に進む可しと謂ふのである。此の尤もらしい論據に立つて普通選擧の實施を態好く遁らんとする狡猾な政治家の少からぬは言ふを俟たないが、眞實普通選擧論を確信して居る者の中より、往々にして漸進論を聞くのは予輩の常に怪訝に堪へずとする所である。

それでも兎も角漸進論まで漕ぎ着けたのは、我國に於て非常の進步と言はなければならぬ。今より十年二十年の昔には、漸進論どころか、選擧權の些しでもの擴張は、恰も日本の國本を危ふするものなかの如くに考へられて居つた。聞く所に據れば、明治三十二三年の頃山縣內閣が伊藤內閣の遺策を繼ぎ、納稅制限を低下して地租にあつては五圓、所得稅營業稅にあつては三圓とするの案を提出した時、貴族院では殆ど全院擧つて反對といふ有樣であつたので、伊藤公は珍しくも自ら議席に着き長時間の辯護演說を試みたが、谷干城子を始め所謂忠君愛國連の反對は甚だ猛烈を極め、伊藤公の聲望を以てして尙ほ手の着けやうも無かつたといふ事である。其後明治四十三年政友會方面の提出に係る普通選擧法案が貴族院に廻された時も、時の議員穗積八束博士が我國の國體と相容れざる斯の如き不都合な法案は、再び貴族院の門に踏み込ましむ可からずと放言した事は、讀者の耳目に今尙鮮かな事であらう。是れ皆普通選擧を目して天賦人權論に根據すとするの謬見に出づるものに外ならない。加之我國でも、西洋諸國と同じく、最も早く又最も熱心に普通選擧を主張した者が社會主義者であつた事實からして、人又多く兩者を混同し、社會主義に反對するの理由を移して卽ち又普通選擧に反對した者が多かつた。是等は其志に聊か諒とす可きものありと雖も、畢竟無智の致す所たるの譏を免れない。併しそれ丈けならばいゝ。彼等が一面に於て實は忠誠國を思ふの情に篤きものであるから、それ丈け彼等は頭

眞底し難い性向を有する。從つてまた彼等には識らず〳〵自ら誤り人を誤り又實に國を誤るの恐れがないでない。此種の頑冥思想が、今日に於ても上流階級の一部に行つて居るのは、吾々の甚だ遺憾とする所である。若し夫れ學界に於て此種の議論を今日尙臆面も無く主張する者あるに至つては、吾等は只呆然として驚くの外はない。

是程極端ではないが、他に尙二種の普通選擧反對論がある。(第一)は、我國法上に於ける選擧の意義は、國民代表といふ事でないから、國民代表の意味から起つた普通選擧論は始めから問題とならないと言ふ論である。然し此論に據れば、選擧は即ち議會を構成するに最も適當なる人を擧ぐるの方法に過ぎないといふのであつて、それ丈けでは普通選擧を斥くるの理由とは成らない。何故なれば適任者選任の方法として普通選擧は適當なりや否やの問題が未だ決せられないからである。併し此點が孰れに決つても、右の意味の反對論の根本的に謬つて居ることは深く論ずるまでもあるまい。次に第二の反對論は普通選擧の理論は兎も角として、之が實行は常に多大の弊害を作ふといふ論である。惟ふに現在の選擧界に於ける幾多の弊害に苦しんだ者が、普通選擧になつたならば尙一層弊害が多からうと心配するのは無理も無い。併し乍ら選擧權の擴張は、同時にそれ丈け弊害の增大を意味すると見るのは、實は淺薄なる皮相の見であるのみならず、又實際の歷史的事實にも反くことを注意しておきたい。此事は尙後に說かう。要するに斯ういふやうな論點から普通選擧の實施に反對するの議論は、昔は實に多かつたが今日に於ても全く無いではない。而して其說の全然謬りであることは、前述の通りであり、又全然事實上の根據の無い事も、やがて述ぶる所に依つて明白となるであらう。(第五、普通選擧と政治道德參照)。

斯くして今日は、十分なる理論上の確信に基くものにしろ、又然らざるものにしろ、兎に角選擧權は擴張す可きもの、少くとも一日の儘に放任す可らざるものといふ事に略ぼ我國の國論は一定したと謂つてよい。只擴張といつても何處まで擴張す可きであるか。之も理論上の確信は別問題として、先づ大多數の者は最後の目標は普通選擧ならざる可らずと常識的に決めて居る事も爭ない。そこで玆に實際問題として殘るのは、此の最後の目標まで一足飛びに突進す可きか否やといふ點である。而して我國の今日に於て此點に關する一番有力な說が漸進論なる事は既に前にも述べた通りで

ある。之が一體正しい考であるか何うかが予輩の之より主として吟味せんとする問題である。

一體物には順序がある。今日一尺進み明日二尺進むといふ風に宜しく段階を刻んで行く可きであるといふやうな說は、極めて俗耳に入り易い。併し乍ら物事には、一時に思ふ存分の處まで行くでなければ、結局是までの努力も悉く水泡に歸するといふやうなものも無いではない。例へば是まで日本の各地方官廳が蒼蠅い程繰返したやうに、百萬圓で完成す可き築港を、今年三十萬圓入れ明年又三十萬圓入れやうとして居る間に、一夜の大波濤に淩はれて一年間の努力が全く空に歸したといふやうな事は他にも決して稀ではない。選擧權の擴張に就ても、此邊を精密に考ふる事が必要である。

予輩の考に據れば、而して又多數學者の一致する說明に據れば、選擧界の腐敗、而して又選擧の目的の實際に達成せられざる最大原因の一は、選擧權の著しき制限にある。そが極度に擴張せらるるまでは、腐敗は容易に絕滅するものではない。而して此道理は大抵選擧權を極度に擴張してから後初めて分つたので、西洋でも概ね初めは兎や角文句をいふて擴張には猛烈に反對したものである。如何に民間の要求があつても、何となく擴張を嫌がり、假令擴張するにしても、腹の小い成金が餘儀なく手代番頭に特別賞與をやる時のやうに、恩惠的にポツリ〳〵與へて一寸出し惜しみをするといふのが通有の現象であつた。例へば佛蘭西革命の頃自由民權論があれ程盛んに唱へられた時代でも、選擧權は國內の最も高等なる階級にのみ與ふ可きものといふ思想が一般に行はれ、實際一二の例外を除いては、相應に狹く選擧權を限つて居つたのである。佛蘭西に於て既に然り。況んや他の歐洲諸國に於てをや。之れ一つには只何となく遣り度くないといふ感情論に出るのであるが、又一つには遣つた所で何うせ巧く之を利用しないだらうなどといふ幻想にも原因する。餘り賃銀を高くしてやると無駄費ひをするからといつて、勞働者の賃銀値上げに反對する親切な資本家もある世の中だから、此位の考を選擧權に就て有つ者あつても、敢て訝しむ可きでないかも知れない。然しそれよりももう少し筋道の立つた反對論は、選擧權を擴張すれば弊害が多くなるといふ考であらう。此考も昔から西洋にあつた。さうして中々烈しく擴張に反對したものである。選擧權擴張の要求に極力反抗して遂に二月革命の犧牲となつた佛蘭西の首相ギゾーも、あれ程の英才でありながら、選擧權は今日の狀態で澤山だ、此上擴張するのは却て弊害である、若しそれでも選擧

權が欲しいといふなら勤勉產を作り以て選擧權を獲得したら宜からうなどと放言した事がある。併し選擧權の無限の擴張がそれ丈け弊害を増大するといふは何等事實上に根據せざる一片の臆說たる事は、特に玆に注意して置きたい。見よ世界の何れの處に選擧權の擴張の爲めに惱まされて居る國があるか。否、却つて今日までの歷史は選擧權を極度に擴張する事に因つて始めて選擧界の廓淸を期し得可く、之を制限する事が寧ろ腐敗の源因であるのみならず、又好い加減の微溫的擴張も決して弊痕を根治するものでない事を明示して居るではないか。要するに、權利の擴張はそれ丈け多くの弊害を伴ふといふは、忘想に過ぎない。西洋では皆之が爲めに困つたなど丶言ひ振らす者あらば、そは全然事實を曲解せるものである。

選擧權擴張に對する我國多數識者の今日の態度は、譯もなく擴張したならば弊害に堪へないだらう、それでも民間の要求を何時までも抑ふる事が出來ないから、擴張はするが好い加減の所に止めて置けといふやうな、極めて曖昧なものである。之れ一つには選擧權擴張の理論に徹底的了解を缺くが爲めであり、又一つには西洋諸國に於ける選擧權擴張の實績に就て誤解を有するが爲めであらう。若し夫れ、今日の議員並に政客が、表面擴張の必要を唱へて人氣に阿りながら、他方自己の選擧上の利害打算から內心擴張の實現を阻止せんとする者に至つては、固より玆に論ずるの限りではない。兎に角、今日尙出來る丈け擴張の程度を低きに止めんとする說を各方面に見るのは、予輩の甚だ遺憾とする所である。予輩の見地からすれば、納稅額十圓を五圓とし三圓とするが如きは、初めから問題にならない。かの中等以上の學校の卒業者、若くは之と同等の學力を有すと認定せられたる者にして獨立の生計を營む者には、納稅の如何に拘らず選擧權を與ふべしとする所謂知識階級包容說の如きすら、普通選擧を主張する吾人の立場からすれば、全然無意義である。然るに財產的制限をば、假令其程度を幾分低めるとしても、依然之を殘して置き、而かも其上知識階級の包容にすら反對せんとする者あるに至つては以て如何に所謂出し惜しみ者流の多いかに驚くの外ないのである。財產上の制限を存する以上は、知識階級包容の箇條を作はねばならぬ事は、既に匈牙利の制度の明白に示す通り、論を待たない所である。只この點は予輩の今日强く主張せんとする所ではない。何となれば予輩は今日一擧に普通選擧の域に達せしめん事を切望して熄ま

さう云ふものであるからである。

西洋諸國が殆んど總べて今日普通選舉制を採用して居ると云ふ事は、必ずしも我國に於ても亦之に倣ふべしと云ふ理由にはならない。けれども、普通選舉と云ふものは共和國に限つたものであるとか、又は社會主義や或は之に類する危險思想を抱くものゝ專ら唱ふる所であるなどゝいふ謬論の行はるゝ幼稚なる我國の政界に向つては、此事を説くも強ち無益の事業ではなからう。

先づ概して云へば、今日歐米諸國に於て普通選舉を採つて居ない國は殆んど無いと云つていゝ。戰前に於て和蘭と英國とは極めて輕微なる制限を設けて居つたけれども、英國が去年思ひ切つた擴張を斷行した事は已に人の知る所である。君主國の好代表者たる獨逸帝國も夙に普通選舉であつた。只普魯西丈けが一種變態の選舉法を有つて居つたけれども、革命の波にさらはれた今日となつては之も最早問題ではない。露西亞も今日になつては普通選舉の國と思はねばならぬ。從つて若し強いて普通選舉ならざる國を探せば先づ匈牙利位のものであらう。而かも匈牙利が制限選舉制を採つて居つたには特別の理由がある。同國にては、生粹の匈牙利人は全人口の三分の一に過ぎず、他は皆異種族である。而して異種族には概して貧乏人が多く、匈牙利人には富裕の者が多いので、匈牙利人の掌中に國政の實權を握らしめんが爲めに、特に制限選舉制度を固執するの必要があつたのである。匈牙利人が永く同國の中心勢力たるを必要とする以上、又之を希望する以上選舉權の擴張は容易に實行し難い。夫にも拘らず、世界の大勢に押されて、戰前已に普通選舉要求の聲は全國に於て、而かも匈牙利種族中にも、相當に高かつた。さう云ふ特別の理由で高い制限を置かれて居る匈牙利でも、有權者の數は百人中約六人の割合であるから、日本に比して尚ほ二倍以上になる。之を以て見ても、日本今日の制限は、世界の立憲國中驚くべき高度にあるものと云はなければならない。

更に他の一方から考へると、選舉權の制限は實に選舉界腐敗の最大原因であるから、之が廓清は極度の擴張を斷行する外に途はない。選舉界の腐敗が、有權者の數の少い時に最も猛烈を極むる事は今日多額納稅議員の選舉等に依つて一見ても分るではないが。普通選舉を採つて居る歐米諸國の實況に照して見ると、有權者の數は概ね全人口の四分の一乃至

三分の一に當る。然るに我國に於ける有權者の割合は、百分の三に達せないと云ふから、今日の十倍に増加して恰度釣合が取れる譯になる。今日有權者の總數は百五十萬に達しないが、納税額の制限を五圓にした所が、増加數は僅に七十五萬、三圓に低下しても二百萬そこ〱と云ふから、つまり五圓三圓の論は畢竟五十歩百歩の爭に過ぎない。否斯く小刻みに擴張する事は、却つて今日の弊害を一層多くするに止つて、爲めに反動的に選擧權と云ふものは滅多に擴張するものでないと云ふやうな妄想を生ずるに止まるかも知れない。之れ漸進論の如何にも尤もらしく聞えて迂濶に之に乘るべからざる所以である。

最後に、も一つ考の中に入れねばならぬ事は、今日の國民は最早選擧權の漸進的擴張を以て滿足しては居ない事である。假令今日の國民は之に滿足したとしても、明日の國民に同じ滿足を期待する事は出來ないことを考へねばならぬ。何となれば普通選擧要求の聲は、其理に徹底して居ると居ないとに拘らず、日に〱强くなり增さる一方であるからである。然るに世上往々にして普通選擧は尚未だ國民の要求する所に非ずと說くを聞くに至つては、吾人は實に其の時勢に盲目なるの甚しきに一驚を喫するのである。加之選擧權の制限に基ゐする所の幾多の不公平なる社會的立法は、更に國民一般の生活問題と牽聯して、之れ亦日に〱擴張の實際的必要を數へて已まざるが故に、民衆は總て如何なる犧牲を拂つても此點に成功せねばならぬと意氣込むやうになるや必せりである。而して政界の樞機に與る者が、飽く迄頑冥な態度を採つて讓步を肯んぜないと、遂に不祥なる動亂の勃發を見ないとも限らない事は、西洋最近の歷史の上に顯著なる事實である。前にも述べた如く、普通選擧は實行して見て初めて其無害有益な事が分つたけれども、實行する迄は兎角爲政者から有害無益のものと思はれて居つた。從つて當局者初め議員政客の大部分は、當初極力民衆の要求に反抗したものである。何處の國でも、普通選擧制は民衆の暴力的示威運動の結果としてもぎ取られたものたるは畢竟その結果である。最近に於ては一九〇七年の墺太利の出來事が其最も適切なる例であらう。機に先つて政府自ら率先して之を與へたのは一九一二年の伊太利を以て殆んど唯一の例外とする。伊太利は民間の要求十分に熟せざるに政府進んで之を與へたる丈け、民衆又十分之を利用するに至らずなどと難ずる者もあるけれども、選擧權の擴張が、大勢當然の歸嚮で

あり、之を實行して格別の弊害なく、否之に依つて從々國民を政治的に教育し民衆を緊張するの效果ありとせば　民衆暴動の不祥事を見るに先つて之を與へるのは、寧ろ賢明なる所置といふべきではあるまいか。

第五　普通選擧と政治道德

獨り選擧の事のみならず、凡そ政治上の事は、只純理で許り物事が決められない。外の事柄のやうに試みにやつて見ると云ふ譯にも行かないし、やつた結果が面白くないから直ぐにやり直しをするといふ事もさう容易く出來るものではない。一遍何事かをやれば夫より生ずる所のあらゆる結果に就ては十分責任を負はねばならぬ所のものであるから、何事を爲すに付けても、純粹なる理義を正した上、又實際の效果如何を常に考察の外に置く事は出來ない。是れ政治に在ては純理的方面と功利的方面と兼ね考へさるべからずと云はるゝ所以である。從つて政治家は、主觀的には飽迄理義を明にし、所信に忠實なるを要するけれど、他の一面に於て、自分の主義方針は果して誤り無きや、又之に由つて社會に思はさる損害を與ふる無きやを狐疑すると云ふ客觀的立場をも忘れてはならない。政治家は同時に思想家たらさるべからずして、而かも純然たる思想家と亦多少其類を異にせさる可らさる所以である。

斯う云ふ譯で、あらゆる政治問題は、一旦理論の鏡に懸けて其正否を正した上、更に實際の效果如何の點を考察して初めて之を採用すべきものなりや否やが定まる。我が普通選擧制も亦以めて此點から其利害得失を究むることが必要である。

然らば普通選擧論の功利的判斷は先づ怎う云ふ點から向けらる可きかと云ふに、選擧制度本來の目的を達するに適當なりや否やと云ふ點から觀察せらるべきである。選擧制本來の目的は、選擧民をして本當に其自由意志を曲げらる事なく其有する權利を行使せしむるに在るは言ふを俟たない。物質上並に精神上の壓迫が行はれ、即ち選擧民が其自由意志に出でさる不德の行動を敢てするを許すやうな結果を作ふならば、夫は選擧制本來の目的に合せさるものと言はなければならない。今日の選擧界には言ふ迄も無く幾多の弊害がある。而して此等の弊害の中には、或は取締規則の本末を顚倒

して居るに因るものもあり、不都合なる選擧區制度に因るものもあり、其他いろ〳〵の原因に出づるものあり、從つて此等別個の方面から廓淸を圖らねばならぬものもあるが、然し此外選擧權の範圍の廣狹と云ふことに因つて來るものが無いか怎うかが吾々の當面の問題である。

選擧權の範圍の廣狹と政治道德との關係に就いては、二つの相容れざる說が行はれて居る。一つは選擧權擴張は自ら無資無產の下等社會を有權者たらしめ、其結果選擧界の腐敗は一層甚だしくなると云ふのであり、他の一は選擧界の腐敗は有權者の少い時に甚しく、有權者が非常に多くなれば到底腐敗手段は行はれなくなると見るの說である。此等の說の何れが正しいかは愼重なる考慮を要する問題である。

此問題を考ふるに方つて先づ念頭に置かねばならぬ事は、選擧界の幾多の腐敗の元々の責任者は「提供する者」に在るか、又は「之を受くる者乃至求むる者」に在るかと云ふ事である。求むる者があつたからこそ、利益の提供など丶云ふ事が起つたと觀るのが正しいなら、選擧界の腐敗は選擧權の擴張に依つて益々增加するのみであらう。併し乍ら、よく考へて見ると、事實は全く之に反し、選擧界の腐敗は、何時でも提供する者があつたからこそ起ると云ふのが、獨り我國許りではない、西洋諸國に在つても通行の現象ではないか。我國の事例にとつて之を觀ても、買收せんとする者あればこそ之に應ずる者もあれ、又甚しきは進んで之を求むる者もあれ。此點に於ては選擧民よりも運動者に罪があり、運動者よりも候補者により多くの罪があり、否、候補者よりも政界の先輩並びに多數の與黨を作らんとする政府當局の罪が一番深い。與ふる者が無ければ、求むる者は自ら無くなる。故に今日の實際に於て、選擧民の德義を疑ひ呪ふのは、寧ろ無用の懸念であつて、何よりも大事なことは、腐敗手段の實際に行はれ難いやうな風潮を作ればいゝのである。道德論としては成程如何なる誘惑にも負けるなと論じ、些少の利益の提供を受けて公權の曖昧なる行使をした者を叱責するに妨げなきも、制度論としては、選擧民が易々陷られるやうな狀態を出來るものなら始めから作らない方が宜しい。此點からいふと、選擧權を極度に擴張した方が實に選擧界の腐敗を一掃する所以である。

然らば選擧權を極度に擴張する事が何故に選擧界の腐敗を一掃する所以なるか。之は從來屢々いろ〳〵の機會に於て

予輩の述べた所だから茲に再び之を繰り返すまい。只其要点の一二を言はんに、第一には候補者が非常に少くなるから結果として請托が行はれなくなる事である。所謂訪問などは絶對に出來なくなるに相違ない。次には同じ理由に依つて買收が行はれなくなる事である。之は英吉利などの制度の如く、各候補者に就き各其の使ひ得る運動費の高を定めると云ふやうな事にすれば、尚一層有效であらう。尚英吉利の事は後に少しく之を說く機會がある。要するに請托買收等が行はれる餘地が無くなると云ふ事になれば、候補者は即ち言論と人格とを以て戰ふより外に途がない事になる。其結果は即ち各候補者は其政見と人格とを以て民衆の良心の上に公平な生存競爭をすると云ふ事になり、從つて民衆も亦全然自由公正の判斷を以て其去就を決すると云ふ事になる。斯く考へて見ると、選擧制本來の目的から云つて、略ぼ理想に近い制度は普通選擧の外にないと謂はなければならない。

斯く言ふと、人或は言ふだらう「普通選擧になれば成る程民衆が其自由意志に依つて選擧權を行使するかも知れない。けれども、民衆其物は元來極めて思想の淺薄幼稚なものであるから、自由意志で獨立獨行した所が大したものではない。況んや彼等は教養が低く思想も幼稚であるから、動もすれば煽動政治家に乘ぜられ易い。故に彼等は煽動政治家に乘ぜらるゝに非ずんば、即ち民衆の愚論に阿る低級の政治家を出す位が關の山であらう。されば假令選擧本來の目的には合するとしても、少くとも國家の目的には遠ざかる」と。此說は一應尤ものやうに聞へるけれども、第一に今日の社會に於ける所謂煽動政治家の實際的勢力を過重した點に於て、第二に普通選擧制の教育的效果を無視せる點に於て誤つて居る。昔の蒙昧時代はいざ知らず、今日の時勢に於て、如何なる英雄でも天下全般を瞞着すると云ふ事は出來るものでない。殊に選擧の場合に於ては、各黨派が各々候補者を出して互に競爭せしむるのであるから、其器に非ざる煽動政治家が概して成功すると云ふ事は、到底考ふべからざる事である。瞞着は却つて選擧權の制限されて居る場合に起り易いと謂はねばならぬ。次に一般民衆は教育も低く思想も幼稚だと言ふけれども、其淺薄幼稚なる民衆が、其淺薄幼稚の儘で選擧界に活躍するものと考ふるは誤りである。普通選擧制となつた結果、買收請托等が行はれなくなつた所からして、選擧民も獨立の判斷を鋭敏ならしめて居るし、又候補者も自分の人格と政見とを以て選擧民の公正なる同情を經

んことに緊張して居る。かゝる兩者の精神的態度は、必ずや選擧民の心理に一種の教育的效果を及ぼさずして已むものではない。況んや普通選擧制となれば、各政治家は不正の手段を以て突嗟に奇功を奏する能はざるを思ひ、平常から自家の人格と政見とを選擧民に紹介して置くの必要を認め、又政黨は機關新聞等に依つて同じ努力を爲すべきに於ておや。斯くして平素から民衆は大いに教育せらるる事になる。之れ今日の政治組織の下に於て普通選擧制は其間接の効果として民衆開發の上に多大の貢献をなしつゝあると唱はるる所以である。我國の政治家が、平素國民の開發の爲めには殆ど何等努力する所なく、各政黨に在つても碌な機關新聞か一つあるでなし、時々刻々の政治問題に就ても一向國民嚮導の任を盡くして居ないのは、之れ主として制限選擧制の結果ではないか。蓋し制限選擧制に於ては、買收其他の不正なる方法によることが、政爭に勝利を占むる捷徑であるからである。

是に於て予輩は普通選擧制の道德的効果に就て次の二點を力說して置きたい。第一は普通選擧制に在つては民衆を教育的に開發するにあらざれば到底政爭に成功しない所からして各政治家をして嫌でも應でも民衆の開發に努力せざるを得ざらしむるといふことである。之に反して制限選擧に在ては腐敗手段を用ゆる事が寧ろ成功の捷徑なるが故に、各政治家をして、進んで、或は少くとも不本意ながら、道德を蹂躙し社會の風紀を紊して耻ちる所なからしむるに至る。此點が普通選擧を論ずるに方つて最も注意せねばならぬ所である。政治はもと目前の出來事を處置するのが本來の職分でありとは言へ、目前の解決に急いで國家百年の大計を謬る事は最も愼しむ可き事である。目前當面の問題を無事に解決せんが爲めに、議員の買收其他の腐敗手段を行ひ、以て平然として國家の危難を救ひたりと誇稱するが如き政治家を時として現代我國の政界に見るのは、我々の甚だ苦々しく思ふ所である。第二には普通選擧制によつて政治家と民衆との間に精神的疏通の途が開け、斯くして先覺者と一般國民との關係が有機的になるといふ點である。今日の實際政界に於ては何と言つても民衆は爭ふ可からざる最大の政治的勢力である。之が輕擧盲動すれば國家の禍であるが、さればとて之を絕對に抑へる事は即ち國力の萎縮頹廢である。然らば之を合理的に指導する事が、國力の發展に取つて何よりの必要事ではないか。此點に於て、民衆と少數先覺者との間に微妙なる有機的精神關係の成り立つて居るといふことは

極めて奬勵すべきことである。又他の一方から云へば、一國の運命を支配するものは、何處でも少數賢明の思想でなければならぬ。而して此少數賢明の思想をして、事實上國家を支配するの勢力たらしむるものは、又彼と民衆との有機的精神關係を基礎とせずしては出來ぬ事である。

少しく政界の實情に通ずる人は、動もすると民衆政治を以て衆愚政治となし、普通選擧は輕薄なる多數をして少數の賢明を壓迫せしむるものと言ふ。威権一國を指導す可き優良なる智識能力は多數民衆にはない。寧ろ多數民衆は、少數の哲人に絕對に服役す可きものである。此點に於て我々は無論英雄政治を謳歌するものである。併し乍ら玆に問題となるのは、實際論として民衆を指揮す可き英雄の何人たるかを、如何にして之を決定するである。此人こそ我々の運命を托す可き英雄なりと極つた以上は、甘んじて之に絕對の服從を捧ぐるに躊躇しない。併しどうして之を決めるかが先決問題である。而して之を極めるの一番合理的な一番實際的な方法は矢張り多數決の外に無いではないか。亞米利加の大統領選擧は卽ち其例である。又他の一方から觀るに、玆に自ら天下經綸の才を抱くと自任する者があるとして、彼は如何にして之を實行することが出來るか。昔ならば其經綸をどん〱實行すればいゝ。反對する者があればドシ〱之を抑へ付けるまでの事である。併し乍ら今日はさう簡單には行かない。先ず第一に之を十分に天下に說き、自己の見解を民間輿論の內容とするまでに大に努力する所なければならない。之れ丈けの努力を惜むと惜まざるとが、卽ち立憲政治家と然らざるものとの岐るる所ではないか。日本の政治家は、兎角、俺の云ふ事を國民が聞いて與れさへすれば天下が治まるのに、生仲何や彼や文句を言ふから問題が紛糾するのだと言ふて、居ながらにして自家の經綸の天下に承認せられんことを求むるの色あるは、獨り自惚れの甚だしきのみならず、又立憲政治家としては甚だ横着な態度と謂はなければならない。

少數賢明の人に天下の政治を任かす可しとしても、誰が其人であるかを決める最も合理的な實際的方法の多數決であるといふ事は、先にも述べた。若し此場合に多數決を否認するならばどういふ結果になるか。卽ち自ら其人なりと稱し又任ずる者が數名現はれて其間に爭が起り、其結果本當の堅實な人が極端な競爭を厭ふの餘りイカサマな者の跋扈に位

を誤るといふ事になるか、又は已むなく極端な手段で何處までも權勢を爭ふといふ事にならざるを得ない。言葉を換へて云へば、惡貨良貨を驅逐するの結果を見ざる限り、不幸なる政爭の行はれて無關係の一般人を塗炭の苦みに陷らしむるを防ぐ事は出來ない。何れにしても斯の如きは、眞の適任者をして安々と天下を經營せしむる所以ではない。故に眞の適任者を擧げて天下の經營を一任す可しといふ議論は、其最後の判定を多數決に求めざる限り、實際空論に終らざるを得ないものである。此點に於て普通選擧制を或意味に於て古來の政爭を倫理化するものといふ事が出來る。

斯く考へて見れば、政治道德の着眼點から、否、もつと廣くしては一國の精神的文化の進歩の上から、是非共普通選擧制を採用せざる可からざるは、最早一點の疑を容れない。唯玆に一言附け加へて置かねばならぬのは、普通選擧になつたからと云つて、直ぐに理想的の政治社會が實現すると期待してはならぬ事である。少くとも今日の選擧界の腐敗は其出つて來たる所複雜であつて、唯選擧權の制限のみに由るのではない。後にも述ぶるが如く、制度の不完全といふ事も重大な原因である。其外もう一つ見逃してならぬ事は、國民教育と政治との疎隔、從つて國民は殆ど無訓練な儘で學校から社會に抛り出さるることである。凡そ公民として必要なる根本の資格は、國民教育に於て作られねばならぬ。國民教育が此點を等閑に附して而して獨り國民の無訓練を叫ぶのは、徒に難きを民衆に責むるものである。今日立憲國の公民として最も必要な資格は、自己の運命を托す可き代表者の選擇に眞實の態度を缺かぬ事である。一旦依托した以上は、十分の信賴を之に捧げて疑はぬことである。又依托を受けた以上は其責任を十分に盡すを忘れざる事である。斯かる訓練は、曾て我國の國民教育に於て與へられて居るか。外國では、教育家が宗教家と協力して、學生を監督して此邊の訓練を十分に與へて居る。此の點に就ては他日本誌時評欄に於ても少し論じて見やうと考へて居る。亞米利加などでは、大統領の選擧などといふ場合に、學校の教師が指導者となつて子供にまで投票をさせる。此投票は無論何等の實際的效果あるものにあらざれども、斯くして子供は何人を大統領に選ぶ可きかを直率に考ふる訓練を與へられる。日本の學生が擬國會をやる場合のやうな不眞面目極るものでない。斯くして西洋では、小學校時代に於て已に相當の公民的訓練を授けられてあるのであるが、我國には全く之が無い。學校を出て間もなくいきなり選擧をやるといふのであるか

ら、其間に往々活用の途を誤るものあるは怪むに足りない。況んや先覺の政治家は、何の思ふ所あつてか、由來教育界と政治界とを極端に疎隔して來た。教育家が政治に關與するは有るまじき事、學生の分際として政治を說くのは以ての外の曲事と云ふ風に取扱つて來たのであるから、公民的訓練を受く可き大切な教育期に於て、彼等は極端に政治の事に耳目を蔽はれたのみならず、場合に於ては政治に對する反感をさへ有つやうに養はれて來た。斯くして學校を出ていきなり政治の事に與らしめるのであるから、效果の十分に擧らざるは當然である。此點に於ても予輩は幾多改革の必要を認むるものである。

第六　普通選擧の實施に伴ふ各種の問題

普通選擧になつたからとも、それ丈けで直に選擧本來の目的が達せらるゝと限らない事は前項にも述べた通りである。從つて選擧の目的を十分に達するが爲めには、先づ第一に選擧權を擴張し、次で更に幾多の方面に於ていろ〳〵改革を爲すを要するのであるが、其中特に選擧制度に直接の關係を有するものを擧げて玆に少しく研究を試みよう。

第一に來るのは普通選擧主義の徹底といふ事である。抑も普通選擧は唯總ての國民に投票權を與ふるといふ事丈けではない。總ての人に投票權を與へたからとて、更に玆にいろ〳〵の小刀細工を施すと、事實制限選擧と同一の效果を擧ぐる事も出來るし、又さうした例も珍らしくはない。そこで普通選擧主義者は、更に普通選擧主義の徹底を叫んで是等の小刀細工に反對せんとした。佛蘭西や、白耳義で所謂單純にして純粹なる普通選擧（Suffrage universel simple et pur）を叫び、又獨逸で所謂普通・平等・直接・秘密の投票權（allgemeines, gleiches, direktes und geheimes Stimmrecht）を叫ぶのは此謂に外ならない。詳しく言へば、普通選擧になつた外に、更に平等主義・直接主義・無記名主義を主張するのが即ち彼等の要求である。之が果して普通選擧の意味を徹底せしむる所以であるかどうかを、予は次に少しく考へて見ようと思ふ。

普通選擧主義の徹底として先づ第一に來るものは直接選擧主義である。之は間接選擧主義又は重複選擧主義に反對す

るものたるは言ふを俟たない。最近まで間接主義を執つて居つた國は、大國中僅かに普魯西を數ふるのみであつたから、一般の他の國では殆んど實際問題となつて居なかつたと言つて可い。而して普魯西に於ても從來此制の著しく非難せられ居りしの事實に鑑みれば、其の採用す可らざる所以は、察するに難くあるまい。蓋し一般の人民が選擧委員を選ぶに止り、其の選擧委員が更めて代議士を選ぶといふのでは、人民と候補者との精神的疎通が旨く行かず、又夫れが旨く行つたとすれば、中間に選擧委員を認むるの制は有名無實になるから、例へば亞米利加の大統領選擧のやうな特殊の歷史的因縁あるものゝ外には、今日何國でも之を行ふものゝないのは當然の話である。普魯西でも無論此制度は今度の革命と共に廢さるゝに相違ない。

次に秘密選擧主義であるが、之は記名無記名の問題として爭はれて居る。普魯西では口頭でやるといふ事になつて居つたが、我國では現在の無記名式を改めて記名式にしようといふのが、曾て政友會邊から主張されて居つた。選擧は一面に於て公務である。之によつて國家の公に奉ずるを得る所以の貴重なる仕事であるから堂々と署名するがいゝ、無記名でやるといふが如きは國民をして自ら不德を行はしむるものであるなどと、尤もらしい理窟を附くるのもあるが、然し、今日世界の選擧法中、記名式を執つて居るものは殆ど無い。何故なれば、記名式は選擧人の全然曲ぐる所なき自由意思の發動を大に妨ぐるの事實あるからである。無記名なれば、陽に甲に投票するといつて平氣で乙に投票するといふ事はあらう。併し乍ら、之は腹では乙に投票す可きを國家の爲めと信じ乍ら、情實に絡まれ記名式の制度の爲めに心にも無き甲を投票するの不德と、何の選ぶ所はないではないか。德義問題を云々するなら、彼と此との間に區別をつける理由は無い。然らば出來る丈け選擧民をして自由の判斷を爲さしめ得る方法を執るのが得策であると云はねばならぬ。加之、實際の結果から云つても、選擧法上一番選擧民の自由意思の發動を妨ぐるものは疑もなく記名主義である。されば現に世界に於て一番後れて居る普魯西の選擧法の下に於ても、同國の多數國民は、其凡ての點に亙る改正の要求が一時に容れられないなら、間接選擧主義よりも、階級選擧主義(後に云ふ)よりも、先づ以て第一に口頭選擧主義を無記名主義に改めて貰ひたいと主張して居つた。以て如何に此點の實際に重きを爲すかゞ明白であらう。政友會が此點を考へ

た上で記名主義を主張するのか何うかは分らないが、目前の黨略を離れて眞に國家の大局を思ふならば、斷じて今日の無記名主義の維持を計る可きである。

我國の現行選擧法は幸に無記名主義を原則として居る。のみならず、此主義を徹底する爲めには更にいろ〳〵苦心して居る跡が見えるのは予の滿足に思ふ所である。例へば投票用紙には自己の擧げんとする候補者の氏名のみを書き、其他餘計の文字を書く可からずとして居るが如きは即ち之である。候補者の氏名の下に敬稱を附しても可いか惡るいかといふ 見愚にも着かぬ問題の起つた事が屢々あるか、之も選擧法の精神から云へば實は重大な事である。先年福島縣下に於て柴四郎殿閣下と敬稱を二つ重ねたのが有效か無效かと云ふ問題が起つた事があるが、常識から考へれば無論之を無效とす可き理由は無い様だが、併し選擧民の自由意思を尊重するといふ、即ち無記名主義の精神を徹底するといふ考からいへば、少くとも一の疑問たるを失はない。其故は、茲に甲なる態度曖昧なる選擧民があるとする、柴派の運動員が極力之に強迫を加へ、確實に彼をして一票を自派に投ぜしめんが爲めに「殿閣下」といふ他に比類なき特色ある書き方を約束したとする、斯ういふ事は全然有り得ない事ではない。ここで普通一般の投票と著しく區別し得るやうな書き方をしたものは凡て之を無效にするといふ にでも なければ、右の様な強迫は防ぐことが出來ない。選擧の自由を飽くまで保たうといふ精神から云へば、あれなどは無效と判決すべきものではなかつたらうか。裁判の結果柴氏の勝利に決まつたのは、現行選擧法の精神から觀て予 に多少の遺憾なきを得ない。

之とは多少別の問題であるが、少しく牽聯する所があるから序に強制投票の制度に就て序に一言して置かう。約束した人の投票を確實ならしむる爲めに記名主義を主張すると同じ精神で、約束した人の權を制する爲めに投票を強制す可しと云ふものがある。確か此前の議會に憲政會が之を提案したやうに記憶して居る。即ち「正當の理由無くして投票をなさざる者は五圓以下の科料に處す」と定めようと云ふのであつた。選擧權は公權の一種であると同時に、又國家に盡す道德的義務の一つである 國家は總ての選擧人が洩れなく選擧權を行使せん事を希望し且つ要求するものであるから、強制投票の制度には全然理由が無いではない。選擧法學者の間にも之に就てはいろ〳〵の說がある。併し乍ら具體

の大勢は今日の所之を無用とするに略ぼ一致して居るやうだ。中には之を有害と主張する者すらある。少くとも此制度は之を設けても實際に勵行する事が困難であり、又強いて勵行すれば無用に罪人を多くするの弊があると認められて居る。猶又斯ういふ制度でも設けなければ棄權する者が我國に於て特に多いかといふに、事實は必ずしもさうでない様だ。我國に於ける棄權者の割合は、一割五分から二割の間にあると聞いて居るが、最も棄權者の少い亞米利加合衆國を除いては、英吉利にしても獨逸にしても此位の棄權者は矢張りある。と云つて一割や二割の棄權者はあつてもいゝと安心するのではない。選擧權の洩れなく行使せらるゝ事は固より希望すべき事であるけれども、併し此事は投票の強制によつて直ちに達せらる可き問題ではないと思ふ。法を以て強制するの制を設けても、正當の理由があれば棄權も罪に成らない。何を以て正當の理由と云ふかは結局裁判官の手心にある。裁判官の態度が緩に失すれば折角の制度も有名無實になり、嚴に失すれば徒らに罪人を多くして結局法の威嚴を損する事に了る。法を以てかゝる拘束を設くるは、未成年者に禁酒禁煙を迫るのと同じく、立法政策上決して得策でない。後者が専ら社會道德の力を以て始末すべき問題なるが如く、前者は當分のところ政治教育上の努力に全然委す可き問題であらうと思ふ。

終りに來るものは平等主義である。平等主義の主張する所は、一人は必ず一票に限る可く、其各一票の價は必ず同一ならざる可らずといふにある。所謂一人一票一票一價（one man, one vote; one vote, one value）の主張である。

普通選擧論者は一票一價の主義よりして先づ選擧區の不當なる分配と階級選擧主義とに峻酷なる批評を向ける。或る選擧區では千人で一代議士を出し、他の選擧區では三千人で一代議士を出すとすれば、此兩選擧區に於ける一票の價値は三と一との比例になる。人口の稠集する急進的工業都市は、常に此點に於て保守的農業地方に比し著しく不利益の狀態にありとて、選擧區分配の改革が要求されるのである。其弊の最も著しき例は戰前の獨逸帝國である。殊に今日、我國の市町村に行はれて居る様な階級選擧にあつては、數名の一級選擧人の一團と數千の三級選擧人の一團とが、各同數の代表者を出すのであるから、金持の一票は普通市民の一票に比して何十百倍の價を有つ。此意味に於て階級主義は頗る不都合なものであるが、併し國會議員の選擧に之を行つて居る所は普魯西の外には無い。是れ普國の選擧法が甚しく

平等主義を無視して居ると云はるゝ所以である。何れにしても、右の選擧權の不公平なる分配と階級選擧主義とは、平等主義に反するの見地からいたく攻擊されて居るが、併し實際問題として此點の强く主張されて居る國は二三に限られて居るので、平等主義の問題としては寧ろ次に述ぶるものゝ方が八釜しいのである。

平等主義の見地から今日盛に主張さるゝのは所謂一人一票主義の貫徹である 換言すれば複數投票制の撤廢である。複數投票の行はれて居る主なる國に英吉利と白耳義であつた。白耳義では特別の條件を具備するものに二票若くは三票の投票權を與へて居る。英國に至つては、選擧法上所要の資格要件を具備する限り、同一人がすべての選擧區に於て投票する事が出來るとなつて居る。又此爲めの便宜を計つて英國の選擧は同じ日にやらない、日を異にして一週間乃至十日も懸かるやうにして居るから、一人にして十ヶ所若くは廿ヶ所に於て投票し得るものも少くはない。之等の制に對して此兩國に於ては頗る激烈な反對が唱へられて居るのである。

複數投票に對して猛烈な反對が唱へられて居るといふ事は、渦々實際的効果の良好ならざるを語るものと謂つてよい。英白兩國に於て現に此制が甚しく保守的勢力の發展に便し、自由的勢力は爲めに大いに壓迫されて居るは紛れもない事實である。併し乍ら此制度の實際上の結果如何は、直ちに取つて以て其採用すべからざる所以の理由とすることは出來ない。組み立て方の如何によつては、それ程の弊害を現はさないやうにする事が出來ぬでもなかるべきを以てゞある。そこで複數投票の利害得失は、別に純然たる理論を以て之を極めて行くの必要がある。

所が世上には隨分複數投票の採用すべきを說くものが少く無い。特に普通選擧論者中に、普通選擧に必然伴ふ已むを得ざる缺點の矯正法として此制を用ふべしと論ずるものが少からずある。我國でも大場茂馬博士の如きは何處かで斯かる意見を發表されたやうに記憶する。此派の論者は曰ふ、選擧權は總ての國民に之を與へなければならない。財産の多少、教育の高低によつて分つのは不都合である。併し乍ら財産、教育の如何に拘らず、一概に一票づゝの投票權を與ふるのも亦正當でない。何故なれば國民の間にはいろ／＼の點に於て上下の區別あるが如く、其間々に對する關係に於ても之を全然平等に取扱ふのは公平でないからであると。併し乍ら此考には二つの誤謬が含まれて居る。(一)つは普通選

擧になれば民衆の愚論が其儘少數者を壓倒するの弊害を生ずべしとする事で、(但)は今日の政治組織に於ける民衆の政治的活動は、其本來の低い狀態のまゝで働くと觀る點である。所謂愚民が愚民のまゝで乘出して來るものなら、彼を愚民扱にして優良な分子と區別するのが固より適當であらう。けれども、今日の政治組織に於ては、所謂愚民がいよ〳〵選擧權を行使するといふまでには、少數賢明なるものゝ非常なる努力が愚民に加へられて居る事を考へなければならない。此努力の結果、少數賢明の意見が略ぼ愚民の思想の內容となつた頃に、愚民が始めて其選擧權を行使するといふのが、今日の政治組織の自ら期待する所ではないか。故に普通選擧の下に於て、多數が少數を壓するといふは、少くとも思想上の關係に於ては全然誤解である。寧ろ選擧權行使の際に於ける一般民衆の活動は、少數賢明者の永き努力の目的物であつた結果として、其暗々の指導の許に爲さるゝと見るべきである。從つて彼等多數者の活動は其政治上の價値から見ても此等少數者のそれと同一のものと見て差支ないのである。夫の政治上の平等論の如きは實に此點に據つて以て立つ所の基礎を有するものである。

尤も少數賢明のものが働きかけなかつたら、多數は矢張り愚民ではないかと言ふ人があるかも知れないが、併し今日の政治組織に於て、少數賢明者が全然民衆に働きかけぬといふ事は絕對に有り得ないことを注意しなければならぬ。そこに平等主義を主張する理由があるが、又平等主義を執れば少數者を促して多數の心を得る爲めに尙一層努力せざるを得ざらしむるものでもある。何となれば無資無產の一票も他の高等なる人の一票も、自家の政治的勝敗に取つては全然同一の値打ちを有つて居るからである。複數投票であれば、貧民の二人三人を說得するよりも、金持一人を口說落した方が得策だ。そこで事實上の上下の區別は何日までも取り去られない。斯んな次第で政治上の平等主義は、今日の政治組織に於ては相當の理由あるのみならず、又少數優等の思想を國內に擴充し、以てすべての國民の政治的人格を完成し國家の價値を充實發揚する上にも、深き關係を有するものと言はなければならない。我々は一面に於て甚だ尤もらしく聞える丈け、それ丈け用心してこの複數投票の愚說に迷はされてはならない。

以上の外に選擧權の問題に關聯して、比例代表の事と、區制問題と取締問題とに論及して置くの必要がある。

今日我國の選擧法が比例代表主義を取つて居ない事は言ふまでもない。併し乍ら專門の學者中既に之を鼓吹するものあり、且つ又我國現行法上の大選擧區制を維持せんと欲する政治家にして、往々口實を之に藉るものなきに非ず、爲めに往々比例代表を以て如何にも相當の眞理あるものなるかの如く考ふるものもある樣だから、玆に此點に關して一言摘じて置くの必要を認める。

比例代表は元來少數者にも其勢力に比例する丈けの相當の地位を與へたいといふ、夫の少數代表說から起つて居る。而して少數代表といふ考の基く所は、多數決の制度に對する疑に在ることは云ふまでもない。然らば玆に問題となるのは、多數決といふことが一體不都合なものか何うとか云ふ事である。

人はよく曰ふ、百人中五十一人の意見が何故に四十九人を壓倒するの權利を有するかと。之は如何にも尤もらしい議論である。併し乍ら予輩は之に反問したい。五十一人が四十九人を壓倒すべからずとせば、如何にして百人の團體に分裂する所なく適從する所を定めしむることが出來るかと。五十一人が四十九人を壓倒すべからずとせば、四十九人は尙更ら五十一人を壓倒してはいけない。然らば結局二つに分裂するの外は無いではないか。强いて分裂を　けんとすれば、是非共多數決に據るの外に途は無いではないか。

人又或は曰ふ、多數の意見必ずしも正當ではない、少數者の意見に却て正しきものあること稀でないと。併し乍ら其正しいと正しからざるとを如何にして決めるか。主觀的に正しいと思つても、それが客觀的に承認せられない以上は、多數を率ゆる力とは爲らない。然らば實際界に於ては矢張り多數決による外に途は無いではないか。

且つ又多數の意見は必ずしも正しくないといふ說は、客觀的に成り立ち得るものか何うか、之が一つの問題である。今日の多數決の制度に於ては、一票でも二票でも多く味方を作れば自分の說が勝つ。そこで各種の說が盛んに生存競爭をやる事になる。若し五十票取つても他の四十九人を率ゆることが出來ないと決つて居つたら、誰か一生懸命一票二票を集むるに努力する者があらう。多數決であればこそ、努力もするなれ。從つて多數決の制度を認むる國にあつては、各種の意見に競爭が行はれ、競爭は努力を作つて、一方には民衆を開發し、他方には開發せられたる民衆をして生存競爭

の優勝劣敗を決すべき公平なる地盤たるを得しめる。故に個々の場合に於て、或は過つて正しからざる意見が勝を占むることあり、或は今日勝利を占めた意見は或る特別の一個人の主觀的判斷より見れば、決して最善のものでないと見らるる事もあらう。けれども全體を達觀して抽象的に之を考ふる時は、多數決の制度は實に最も優秀なる思想をして常に生存競爭に勝たしむる制度であると謂つて可い。從つて假令一票二票の差でも多數は常に多數の權威を主張して少數者の意見は姑く之を顧みなくてもいゝ。之に不滿あらば少數者は更に努力奮鬪して他日の勝利を計るべきである。努力奮鬪の結果勝敗の數を顚覆するの希望あると、又大體に於て客觀的に優秀なりと認められたものが結局の勝利者たるを得るの點に於て、少數者も一時の屈伏に甘んずるの理由も立つ。五十一人が四十九人を壓迫するのが不都合だなどゝ云ふ淺薄なる考に基いて、現代の社會に於ける「多數決」と云ふ最も微妙なる制度の效用を疑つてはならない。

然らば少數代表說の認むべからざること、從つて比例代表說の採るに足らざることは明白であらう。併し玆に誤解してならぬ事は、比例代表主義は絕對に之を排斥すべからざる事である。少くとも次に述ぶるが如き特別の場合には、之を認むるに相當の理由がある。そは如何なる場合かといふに即ち少數者の利益なるものが先天的に固定せる場合是れである。例へば宗教の別、民族の別等に由つて多數少數の關係が初めから固定し、政治上如何に努力しても其間に融通の途が絕對に無い場合である。此場合には比例代表は大いに意味を爲すのである。從つて西洋諸國には、此點から比例代表說が多少省みられて居る。然し我日本には固より斯かる固定利益を有する特別團體は無い。強ひて數へれば士族平民と云ふ生れ乍らの差別はあるけれども、之れとて政治上には全然意味を有たない。從つて我國に於ては、比例代表說を主張すべき何等の具體的根據は無いのである。

西洋では特に小黨分立の國に於て比例代表主義を採用すべしとの說がある。各選擧毎に各政黨をして、其得たる得票全數に應ずる丈の議員を出さしめんとするのである。つまり各政黨の民間に於ける實際勢力と、議會に於ける夫れとを全然同じ比例に在らしめんとすることが、其專ら期する所であらう、併し此等は、ミラボーの言と稱せらるる「議會は即ち社會の縮圖なり」と云ふやうな、俗耳に入り易い言說に惑はされたものに過ぎないと思ふ。成る程議會は或意味に於

て社會の縮圖で無ければならない。併し乍ら議會に於ける相互勢力關係の基礎として取らるゝ所の民間に於ける各政黨間の實際勢力は、決して社會的に固定して居るものではない。之は各政黨の努力如何に因つて如何樣にも動搖するものである。民間に於ける各政黨の勢力關係が斯く流動的のものであるならば、之を固定したものとして議會に表はすのは、甚だ不合理ではないか。且つ又政黨といふものは、本來大に競爭して益々其政治的價値を磨くといふ所に、文化的意義を有するものである。此爲めから云つても比例代表主義などは認めない方がいゝ。尤も一旦大勢力を占めた政黨が、其地位を利用して不當に其勢力の維持を圖り、少數黨の自由公平なる競爭を故らに阻害するやうな事があつてはならぬが、之は他の方法によつて防ぐべきであつて、夫だからと云つて比例代表主義を主張する自由とはならない。要するに比例代表主義は、小黨分立の國に於ても、單に小黨分立であるといふことだけでは之を主張するの理由とはならない。且つ之を認むると、却つて小黨分立の形勢を助長し、從つて政黨の發達を阻害し、憲政の運用を混濁する。故に今日憲政の發達して居る國に於ては、斯かる説はテンデ問題にならないのである。或る學者は、英國などでも最近此説は段々有力に主張せらるゝやうになつたと云ふけれども、夫は事實を誤つて居る。成る程一部の人の間には此主義の宣傳の爲めに熱心に運動し、特別の會合を作り、いろ／＼出版物などを出して民間に頒布して居るものがあるが、實際政治家の間には夫は殆んと省られて居ない。憲政會中に今日尚此主義に依つて大選擧區制の維持を主張するものあるは洵に怪むべきである。然し憲政會が之を説くのは、政友會の小選擧區制に反對せんことに熱中するの餘り、深く理由を擇ばず漫然として現行の大選擧區制の維持を主張したものかも知れない。

次に區制問題であるが、此點に關する我國の現行制度は、驚くべき不合理不都合なものである事を最初に明言して置きたい。區制問題としては元來大選擧區小選擧區の利害得失の爭がある。單純に選擧區の大小の問題としては西洋でも隨分議論があつたが、併し爭點は比較的簡單である。然るに我國に於て殊に此點の矢釜しい問題になるのは、大選擧區にして而かも單記制を採つて居るからである。一體選擧法上の問題としては、小選擧區には單記、大選擧區には連記と問題は極つて居る。勿論少數代表の意味で多少の斟酌は加へるにしても、大選擧區に單記式を採ると云ふ事は、今日何處の國に

も其例を見ざるのみならず、過去に於ても先づ斯んな例は無い。從つて西洋の選擧區大小の問題は、小選擧區單記と大選擧區連記との爭に外ならなかつたのである。然るに日本では大選擧區單記と云ふ途方もない制度を設けたので、此處に我々は西洋の先進國でも曾て考へた事のない新たなる問題に打つ突かつたのである。尤も大選擧區單記制は佛蘭西で一度行つた事はあるが、併し之は或る特別の條件の下に於てせるものにして、日本今日の制度とは全然その意味を異にする。日本今日の制度の如きは實際に曾て其例無かつたのみならず、閑な學者が書齋の中で斯んな方法もあり得るなどと考へた事すらない。而して之が實に我國選擧界の風氣を混濁し弊害を助長する最も重大な原因なるが故に、予輩は何よりも先づ此點の改正を希望して已まない。

さて昨今我國で區制問題がまた現に世論の的となつて居るが、之は大選擧區制を改めて小選擧區制にすると云ふ政友會の案に就いてゞある。單記連記の問題に就ては餘り深く論ぜられて居ない。尤も政友會の提案通り小選擧區制になれば、單記連記の問題は自然消滅する。然し大選擧區制維持論は今日猶相當に有力なやうであるから、單記連記の利害得失を說くも強ち無用の論ではあるまい。而して今日小選擧區制反對論者の中には、現在の單記制の儘で大選擧區制を維持せんと說く者あるは、我等の甚だ怪訝に堪へざる所である。此點に就て今日まで最も明白なる敬服すべき議論を發表せる唯一の例は、此前の議會に於ける東武氏の議論であつた。同氏の結論には多少の異議なきに非ざるも、同氏が大選擧區單記制を非難して、議院政治を薄弱ならしめ、政黨の發達を惑亂するの好武器となし、斯かる制度は一日も早く廢せざる可らずと絕叫したのは、頗る問題の肯綮に中つて居るものと謂はざるを得ない。

單に選擧區を大きくした方がいゝか、小さくした方がいゝかと云ふ丈けの問題ならば、予輩は無論小選擧區を贊成するものである。何となれば、選擧は候補者と選擧民との精神的信任を基礎として行はるるを理想とし、而して斯かる精神的信任の關係は小選擧區に於て最もよく發揮せられ得るを以てである。且つ又小選擧區制に於ては、競爭は辛辣になるけれども、選擧に伴ふ各種の弊害は少くなる。競爭の激烈になると云ふ事も、漸次訓練を積むに從つて之を合理的且つ倫理的に導く事が困難でない。故に他に特別の事情なき限り、小選擧區制を以て大選擧區制に優るとすべきであるが、

然し今度の政友會案の如き専ら黨略を基礎としたものは、直ちに賛成すべきや否やは別問題である。況んや小選擧區制は、選擧權の極度に擴張せられたる後に初めて言ふべきものなるに於てをや。

其處で當分大選擧區制の儘に放任すると云ふ樣な事にならば、單記制丈けは是非共之を廢したい。單記制では選擧民が只一人の候補者に投票するものなるが故に、如何なる人が果して當選するや分らない。各政黨に於ても自分の黨派からどれ丈けの人が擧げらるゝか計算が立たない。出來る丈け多くを當選せしめんとすれば投票が分裂して却つて失敗を招くかも知れない。又特に或る數名を安全に當選せしめんことに骨折れば、得票數の割合に當選者が少く、却つて少數黨に多數の席を占めらるゝの怖が無いでない。何れにしても計算が立たない。各政黨共に無我夢中に運動するの外はない。此處に少數黨なり又は無所屬の有象無象に乘ずるの隙を與へる。其結果時の政府などが既成政黨以外に純然たる御用議員を擧ぐるに最も便利なることになる。現に大隈内閣は後援會の名を以て、又寺内内閣は中立派の名を以て、各々純然たる御用議員六七十名を擧げ得たではないか。故に現行制度に一つの著しき特色ありとせば、時の政府をして常に最も安全に六七十名の御用議員を擧げしめ得ると云ふ點に在ると言つていゝ。斯くの如き制度が果して憲政の進歩發達の上に好ましいものであらうか。

も一つ此制度に伴ふ著しき弊害は、同一黨派に屬する政友をして已むなく陰險な同志打を行はねばならぬやうにする事である。是れ政黨に於ても候補者に於ても又選擧民に於ても、選擧の結果に就き豫想のつかぬといふ事の當然の結果である。而して之は單に選擧の時丈けの德義問題に終らない。即ち政黨の内部に道義的融合を缺かしめ、政黨結合の精神的基礎を根本的に破壞するものである。之が爲めに如何に政治道德の頽廢が激成せらるゝかは、心ある者の見遁してはならぬ點である。

之を要するに、大選擧區單記の制度は、どの點から觀ても無主義無理想の甚だしきものである。殊更に政黨の發達を

妨害する爲めに、深き企みを以て採用されたとでも考ふる外に、存在の理由を見出すことが出來ない。之れ程有害無益な制度を案外平氣で放任して居るのは、予輩の實に不思議に堪へない所である。選擧權の擴張も必要だ。取締規則の改正も急を要する。然し現行選擧法中に最先に改正を要すべきものありとすれば、そは大選擧區單記制の打破でなければならない。徹底的擴張の一擧に實現せらるゝを望むべからずとせば、何よりも先に此點に深刻なる批判を加ふるのが當面の急務であると思ふのに、今日の政黨政治家が、此問題に比較的冷淡なのは、爲めにする所あつて然るか、又は問題の輕重を分つの聰明を缺くに因るか、何れにしても我等の怪訝に堪へずとする所である。

終りに選擧取締の問題であるが、之は選擧權の擴張と相俟つて選擧界の廓清を期すべき最重要の問題である。而して此點に關しては、我國の選擧法は世界中最も精密なる規定を有するものゝ一つであるが、併し乍ら惜しい哉、肝心の眼目を離れて居るの遺憾がある。先きにも述べた如く、選擧本來の目的は、選擧民をして其自由意志を曲げらるゝ事なく權利を行使せしむるに在る。取締は即ち此趣旨を妨ぐるものに向けられねばならない。然らば此趣旨を妨げ即ち選擧界の風氣を紊す所の本源は何處に在るか。候補者に在るか。選擧民に在るか。將又政府に在るか。而して此點に關する予輩の見解、否多數學者の一致する見解は、選擧腐敗の本源は受動的地位に立つものに在らずして寧ろ主動的地位に立つ者に在りとするのである。此點に於て我國の現行選擧法は、本來を顚倒するの嫌はないだらうか。

前にも述べた如く、我が選擧法の取締の規定は甚だ煩瑣を極めて居る。併し乍ら本源を究めずして徒らに末流を漁るものなるが故に、違反者のみ徒らに多くして腐敗の事實は毫も減じない。最近の選擧に於て違反件數實に二萬六千に上つたと云ふ事であるが、吾人の見解に依れば、之を専ら選擧民の罪に歸するは全然誤つて居る。若し我國の選擧法が專ら與ふる者を罰し、少くとも之に受くる者よりもより強き制裁を加ふると云ふ主義を取つて居つたならば、選擧界の腐敗は容易に之を始末する事が出來たらうと思ふ。只此主義を貫かん乎、最先に法網に罹る者は恐らく内閣諸大臣並に其主なる屬僚であらう。次には各政黨の首領並に候補者でなければならぬ。斯くの如きは實際問題としては或は勵行し難き

の憾みはあらうが、併し乍ら法の精神は何處までも主として與ふる者を抑へると云ふ事で一貫せなければならない。尚細目の點に就ていろ／＼論ずべき事はあるが、右の大方針さへ定まれば、他は夫れ程肝要な事柄ではない。

尚ほ之に關聯して、英吉利の制度のやうに、各候補者の使ひ得る運動費の高を法律で定めるのも一策である。英吉利では、選擧區内の有權者數に比例して少きは三千五六百圓、多きも七八千圓を超えざる範圍内に運動費の制限を設けてある。而して此金は總べて會計士に提供して出納を司らしめねばならぬから、コツソリ不當の金を使はうとしても使ひやうがない。尤も候補者丈けは身の廻りの用として千圓丈け自分の懐から使へ得るけれども、之もウツカリ餘計使ふと鵜の目鷹の目で監視して居る敵黨の摘發に逢つて選擧を無效にされる怖れがある。選擧終了後早速支出計算を公表せねばならぬので、此點の取締は相當について居る。然し會計士の制度も未だ行はれない我國に於ては、俄に之に倣ふ事も出來まい。然し英吉利では此制度に依つて選擧界の腐敗が根本的に一掃された事は特に之を注意するの必要がある。

又之は取締規則と直接の關係はないやうであるが、有象無象の候補宣言を制し、選擧運動をもう少し經濟的に行はしむるが爲めに、英國新選擧法が規定して居るが如く、選擧競爭を爲さんとする者に相當の金額（英國では一千五百圓と定む）を供託せしめ、其得票が一定の數（英國では全投票數の八分の一と定む）まで達せざる時は、之を國庫に沒收すると云ふ制度も面白い。總べて選擧が經濟的に行はるゝと云ふ事は腐敗を減ずる一つの手段にもなる。

第七　被選擧權について

選擧權に關する問題は、以上を以て略ぼ說き終つた。然るに最近の我國の選擧法改正案は被選擧權の要件にも亙つて居るから、序に此點に關する論評をも附け加へて置かう。

被選擧權の資格に關する改正案の眼目は三點ある。第一は年齡の資格を低下する事である。三十歲以上になつて居るのを廿五歲とするのが多數の希望であるらしい。此點は略ぼ各政黨の一致する所のやうであるが、然し斯く改めても實際の結果は大して變ることはあるまい。第二は政府と特別の關係あるものを除外するの規定である。從來の選擧法は、「政府の請負を爲すもの」、又は「主として政府の請負を爲す法人の役人」には被選擧權を與へないといふのであつたが、主として憲政會が去年提案せしものに據れば、此點を改めて「政府の特別なる保護若くは監督を受くる銀行又は會社の無限責任社員、重役及び支配人、政府の請負を爲すもの及び其支配人、又は主として政府の請負を爲す法人の無限責任社員、重役及び支配人」とするにある。政府が議員を操縱するを妨ぐ一手段としては極めて必要な改革であらう。第三は官吏は原則として被選擧權を有せずと規定しようとする案である。從來の選擧法は、官吏でも特別の種類を除いては一般に選擧被選擧の權利を有すといふのであつたが、最近の改正案では其反對に、勅令を以て特に指定したものを除き、官吏は一般に被選擧權も無く選擧運動を爲す事も許されないといふ事にしようと云ふのである。此點は少しく愼重に考ふるの必要がある。

元來此問題に關する西洋諸國の實例を見るに二つの主義がある。一つは官吏に被選擧權を認むるを原則とし、唯特殊の官吏を列擧して之を認めずとする、即ち我國現行選擧法の如き主義である。他は官吏には一般に被選擧權を認めず、唯特に列擧する若干の官吏に限りて之を與へようとする主義である。何れの主義を取つても實際上は略ぼ同一に歸するだらうと思ふが、唯理論上から云へば、選擧被選擧の權は本來國民たるの身分に伴ふ重大の權利であるから、原則としては普く之を賦與すべく、之を剝奪するは特別の理由ある場合に限るべきである。未成年者や或は法律上の能力欠缺者に之を與へざるは、つまり是等の者に自律の能力なしと認めたからである。而して官吏は元と高等の教育的素養を前提と

する職業なるが故に、固より彼等に自律の能力なしといふ事は出來ない。寧ろ普通の國民以上に稱んずるものと言はなければならない。けれども他の一面から考へれば、官吏はもと〳〵上官の訓令の下に仕事を爲るものである。この監督訓令を受くる地位に立つものが、行政作用其物を監督し批評するの地位に立つといふ事は、稍不穩當の嫌があると云へる。此見地から云へば、官吏といふ身分は國會議員たる職務と兩立し得ざるものとして、一般に被選舉權を與へないといふ主義を立つるにも、一應の理窟はある。斯う考へると原則として被選舉權を官吏に認むるの主義も、又其反對の主義も、共に各其據る所の適當な根據はあるのである。

但し一般に被選舉權を官吏に認むるの主義を取るものにあつても、職務上全然選舉といふ事から超越して居なければならぬもの、例へば裁判官とか警察官とか云ふ者は、特に之を除外するの必要はある。又假令法律上の除外なしとするも、事實に於て各省の高官だとか縣廳の役人だとかいふやうな、專ら上官の指揮監督の下に立つものは事實上議員となる事は出來まい。官吏服務規律の點から云つても、本屬長官の許可なくして他の職務に就く事は出來ないから、假定一般に官吏の被選舉權を認むるの原則を取つても、事實上官吏にして議員となるものは所謂政務官と俗稱せらるゝもの、若くは大學教授の如きに止るであらう。大學教授が官吏にして議員を兼ぬるを妨げざる所以は、其職務の性質が自由討究を本旨とし、上官の指揮監督によるものにあらず、從つて彼等は政府の政策を批評するの絶對的自由を有するからである。從つて彼等並びに所謂政務官は、一般に官吏の被選舉權を認めざるを原則とする場合に於ても、必ず其除外例の中に列舉せらるべきものである。斯くして官吏の被選舉權に關する主義が何方になつても、如何なる種類の官吏が事實議員となるかは略ぼ同一である。故に實際上の問題としては、何れに決つても差支はないが、唯若し我國に於て、今日迄採用し來れる主義を顚倒し、一般に官吏の被選舉權を認めざる主義に改めようと云ふなら、之れ國民の身分に伴ふ重大

なる權利の剝奪を意味するものなるが故に、出來る丈け無用の制限を加ふるを避け、除外例は出來る丈け廣く之を定むるに注意する事が肝要である。是れまでの主義が官吏に被選擧權を認むるにあつた、從つて除外例として之を禁ずるものも出來る丈け狹きに限つた。之を誤解して除外例は何時でも狹く限るべきものとするならば大いなる誤りである。

勞働問題の解決に官僚的社會政策及び主從論的俗說を排す

法學博士　堀江歸一

交戰諸國の勞働問題

近來外國より到着する新聞雜誌を閲讀するに、戰後の復員に關聯して、勞働問題の論議せらるゝこと甚だ盛なるが、我國に於ても亦近來頓に此問題の喧しきを聞くが如し。抑も洋の東西に於て、時を同じうして同一問題の湧起したるは、何故なりやと云へば、吾輩は其根本の原因を以て、歐洲戰爭の影響に歸せんとす。蓋し歐洲戰爭勃發し、年と共に其範圍の擴大するや、交戰諸國の經濟社會に影響を及ぼしたるもの少なからず、其勞働市場、勞働者生活狀態に及ぼしたるものゝ如き、亦影響の大なるものにして、開戰の當初、外國貿易杜絕し、外國爲替亦斷絕し、種々の產業に破綻を現はさんとするや、一時勞働市場を攪亂し、勞働者の生活を壓迫したりと雖も、其後勞働者の一部は兵卒に召集せられて、戰場に赴き、內地に殘留する勞働者は盛に軍需品製造工場に招かれて、常に供給に不足を訴へ、婦人小兒の勞働を促して、漸く其缺陷を充すの有樣なりしを以て、賃銀の上進する勢甚だ急にして、勞働者の收入を大ならしむるに至れり。而して家長たる勞働者の收入獨り增加したるに止まらず、婦人小兒の勞働は彼等に相當の收入を與ふるが故に、家族全體の所得の增加したる程度に至つては、頗る大なるを見たるものゝ如し。

然るに今や休戰條約は成立し、近き將來に講和條約の締結に接せんとす。交戰諸國が休戰條約の成立と相前後して、早く復員の計畫を實行して怠らざるは、要するに講和成立期の前後に於ける經濟社會の變動を寡小ならしむるの趣意に出づるものなる可しと雖も、交戰諸國に於て此復員計畫の如何に巧妙に實行せらるゝと否とを問はず、勞働問題の解決に困難を生ず可き事實の歷然たるものあり。第一歐洲大陸其他の戰線より兵卒の本國に歸來するは、當然の成行なるが、斯る歸休兵が、除隊後直に

勞働市場に赴きて、職業を求めんとするに當り、果して勞働供給の過剰を告げざるを得るや否や、第二歸休兵に彼等の滿足す可き、又其勞働能力に適應する職業を與ふるは戰後の生產力を旺盛にし、又社會上の治安を維持する所以なりと雖も、彼等に職業を與ふる爲めに、戰時彼等の缺を補ふの必要より、各種の職業に從事しつゝある婦人小兒を排除して、其所得を奪取するは、却て社會の動搖を招くの所以たる可く、斯る矛盾は如何にして之を除却す可きや、第三戰時各國共に職工組合は國家の急に殉するの覺悟を以て、平生の主義主張を放棄し、一意生產の增殖に當れりと雖も、戰後に於て斯る態度の持續せらるゝことは到底之を望む能はず、職工組合が戰後の復員計畫と相俟つて戰前に於けると同一の條件の下に、職業に就くことを要求し、例へば組合員外の勞働者と共に、勞働することを拒絕し、超過時間の勞働を排斥するが如き所置に出でたる場合に傭者は之を承認す可きや、承認せざる場合は職工組合は戰時同盟罷業の寡少なりし爲めに、增大したる組合の資金に依賴して、資本家に向つて紛議を構ふることなきや否や、第四戰時交戰諸國に於て繁昌したる軍需品製造業其他戰爭關係の諸事業が戰後に於て衰微するは免がれ難き所にして、諸國が復員計畫の下に、是等の事業を改造して、將來の繁昌を存積するの方針に出づ可きも、或る程度まで勞働者が職を失ふは到底之を避くる能はず、現に英國の如き陸海軍兵卒の除隊せらるゝもの五百萬人、軍需品工場より解雇せらるゝ男女職工の數亦三百萬人に上ると稱せらる。是等の輩に相當の職業を與ふる能はずして、失業の狀態に置くが如き、社會の平和を維持する所以に非ざるなり。

我國戰後の勞働問題

交戰諸國に於て、勞働問題の喧傳せられつゝある事情右の如くなるが、一方に我國に於て近時勞働問題の勃興したる原因は之を何に歸す可きか。我國は歐洲戰爭の當初より之に參加し、或は膠州灣を攻略し、地中海に一部の艦隊を派遣し、又最近西比利亞に出兵したりと雖も、是等軍事上の行動の範圍は甚だ狹小にして、隨て軍事上の復員に依て特に勞働問題の發生する掛念は絕無なりと稱するを得べし。唯今後、我國に於て勞働問題に發展を來す可き原因ありとすれば、其は戰爭の終熄に伴ふ經濟社會の反動的趨勢に外ならざるなり。戰後に於て我國の經濟社會に何等反動の襲來するものなしとすれば、勞働者階級の利害に就ても亦憂ふるを要せず、世間或は戰時商工業に於ける好景氣が戰後に於て繼續する勢の依然たることを信ずる樂觀論者なきに非ずと雖も、吾輩は到底之に與する能はず。第一戰時好景氣の一原因たりし軍需品製造業は今後製品に對する需要の減縮す

る爲めに、規模の縮小するを免かれず。第一戰時外國競爭品の供給杜絶したる爲めに、內地に勃興したる諸種の事業中、戰後に於て外國競爭品の輸入の開始せらるゝに及んで、能く之に堪へて、其存立を全うするを得るものは、果して多きを期するを得べきや否や。休戰條約の成立と相前後して、獨染料の市價に低落を來すや、直に是等新事業に恐慌を惹起したるの事實に鑑みるときは、新事業の基礎必ずしも鞏固なりとする能はず。今後諸外國が國內に於ける生產力を恢復する他の一方に、輸出の禁止其他戰時貿易に加へ來れる制限を撤廢し、却て輸出を獎勵するの手段に出づるときは、新事業にして閉鎖せらるゝもの少なしとせざる可し。第二戰時我國の輸出貿易が急速に增進したるは、內國に於ける商工業の好景氣を促す原因たりしや、論を俟たずと雖も、今後諸外國が軍需品として我國物資を需要せず、又內國に於ける生產力の恢復するに隨ひ、軍需品以外の我國物資をも需要せず、寧ろ第三國の市場に於て我國の輸出品に競爭を試みんか、我國の輸出貿易は戰時の盛況を維持するに難く、此點に於ても反動的趨勢の到來を免がれざるなり。

斯る趨勢の下に戰後我國の經濟社會が戰時の數年間に比較して、其趣を異にし、商工業に沈衰を來さんか、資本家も勞働者も共に大なる打擊を蒙らさるを得ずと雖も、後者の蒙る打擊は前者の蒙るものに對して、更に大なる可きの道理あり。蓋し資本家は戰時數年間を通じて、其經營する事業に暴利を收め、其運用する資本金に對して、莫大の收益を擧げたるを以て、株式會社に就て云へば其利益の一部分を以て或は固定資本を回收し、或は積立金を增殖し、以て今後の反動に處するの謀を爲せるものあり、又之を個人事業に就て云へば、戰時の增收を以て、早く資本金を銷却し了し、今や戰後の反動來と共に、事業を閉鎖するも、資本家として何等の損失を覺へさるの地位に居る者すらあるが如し。之に反して勞働者の地位は決して斯の如く爲る能はず。戰時彼等が賃銀は暴騰したりと雖も、能く其一部を貯蓄して、前途の安全を期したるものは幾何を數ふ可きか、多くは一時の必要に應じて、之を消費したるか、然らずんば近年の物價騰貴、生活費膨脹の爲めに、所得の多くを消費するの已むを得さるに至らしめたりと認む可し。斯の如くにして戰後商工業の沈衰に伴ひ、經濟社會に反動を來さんか、第一に社會上の一問題たる可きは、上記の如き身に充分の貯蓄を有せさる勞働者が失業者として生活難の狀況に陷るの一事に外ならさるなり。諸外國に於ける如く、職工組合の有力なるものあり、又失業保險法の整然たるものあらんか、斯る失業者は組合より失業救與金を領收す可く、又失業保險金の交付を受く可きを以て、是等の收入

に依賴して、徐に後圖に就くを得べしと雖も、我國の如き、職工組合なく、又失業保險法なき國の失業者は恰も武器甲冑を裝はずして、武士の戰場に出でたるものと異ならず、忽にして生活難の襲ふ所と爲る可きのみ。內務省の官吏等が平生國民に勸奬しつゝある勤儉貯蓄論の如き、經濟上の變動の起らんとする今日の場合に何等の效果を生ずるに至らざるは、吾輩の斷言するに憚らざる所なり。

勞働者の自覺

諸外國に於て近年勞働問題の喧しきに至れるは、勞働者が其社會上に保持する地位に就て、將た又其生產上に致す效績に就て自覺したる結果なることは世人の一般に認むる所なり。而して今回の戰爭に就て之を見るに、國家の要求する兵員の徵募に應じて、最も多數の士卒を供給したるものも、軍需品の製造に力を致して、其供給に遺漏なからしめたるものも、盡く勞働者階級の努力に基き、此階級に屬する多數の國民が擧國一致の精神を發揮したればこそ、各國共に彼の如き長期の戰爭に堪へ得たるの事實は頗る明瞭と爲れり。然らば戰後に於て勞働者が自己の地位に對する自覺を强うし、更に其社會上の地步を上進するに就て要請し、又努力す可きには、當然の數なりと云はざる可からず。

從來我國に於て勞働問題を論ずる人士は、我國勞働者に外國勞働者に於けると同樣の自覺を存せざるの事實を擧げたり。蓋し我國の勞働者が常に勞働者たる現在の地位に滿足して、之を向上するを念とせず、一意資本家に奉仕して、其命令に服するを厭はざるの事實を指したるものなる可しと雖も、我國の勞働者が何時までも斯る狀態に居ることを想像するが如きは、時代錯誤の最も甚だしきものに非ざるか。蓋し我國が國民教育の制度を布きたるは明治初年にして、爾來數十年の久しきに亙つて實施せられ、今日に於ては如何なる寒村僻邑の兒童と雖も、小學教育を受けざるものなく、一方に新聞紙の普及、圖書館の設立は斯る國民教育を終了したる國民に處世上の知識を與ふるの便宜を供しつゝあり。勞働者にして無學文盲者流ならんか、之を遇するに奴隷を以てするを得べしと雖も、既に相當の知見を備へ、時勢を理解する場合に、彼等を扱ふに一個の人を以てせざる可からざるは當然の數にして、一部の論者が今日の我國勞働者を目して、自覺なき國民とするが如き、啻に勞働者を輕侮するのみならず、國民教育制度の效果を蔑視するの甚だしきものとす可し。

既に我國に於て國民教育の制度普及し、一般國民の有する知識は小學校教育を以て、其最小限度とし、總て世間に出で、或

る職業に就く者は必ず此最小限度以上の知識を有せざるものなしとすれば、彼等が勞働に對して、報酬を要求するに當り、自ら其金額の大なるに至る可きは論を俟たず。我國が國民敎育の制度を國民に强制しつゝある以上は、一方に國民をして各自の有する知識に伴ふ報酬を得るに、障害なからしむるを必要とす。換言すれば國民敎育の制度は知識分配の方面に於て、社會政策を行へるものなり。然らば之と同時に富の分配に於て社會政策を行ふに非ざれば、國民の有する知識と其收むる所得と均衡を保つに難く、知識のみ高くして、所得に乏しき國民の階級を生じて、社會の治安を維持する能はざるなり。我國に於て昨年夏全國に米騷動の勃發するや、其原因に就ては、或は單純なる米價の暴騰を擧げ、或は貧民に對する煽動的行爲を指す等今日に至るまで種々の說あるが如しと雖も、勞働者と云はず、貧民と云はず、總て戰時商工業の好景氣に際して應分の利益を收むる能はさりし階級の者が富豪殊に戰時の暴富者に反感を懷き、又此輩が無謀の消費を爲したるに對して刺戟せられたることの重大なる原因たるは、蔽ふ可からざる事實にして、我國勞働者の自覺は今や階級的反感を惹起するまでに、向上したることを認めざる可からず。此時に處して、我國の勞働者を以て、自覺せざるものとし、之を前提として、勞働問題の解決を議するが如き、妄も亦甚だしからずや。

官僚的社會政策を排す

從來我國に於て勞働者救濟又は勞働者保護政策の行はるゝや、恰も政府が勞働者の生活狀態を憫れみ、之に或る救助を施すの意義を附會する場合多し。固より勞働者中、其勞働能力劣等にして、且つ規律ある職業に就く能はざる勞働者の如きに對しては、國家に於て特に其生活を援助するか、又は國家の助力に依て、其生活を豐富ならしむるの必要ある可しと雖も、身體健全、能力平均以上の勞働者に對しても、尙ほ其勞働者たるの故を以て、國家に於て救助す可しと云ふは、國家自ら求めて社會に寄生蟲的生活を爲す階級の發生を促すものにして、却て社會の堅實る發達を害するの嫌なき能はず。由來我國に於ては國家其他公共團體の救恤たると、私人又は私人團體の自治的救助たるとの別を問はず、事の聊かにても社會公衆又は社會上弱者と認めらるる階級に有利なる政策は之を社會政策と稱し、而して近時の流行として社會政策と云はんか、其緩急の如きは、之を顧みず、盡く有利なりとするの觀あり。然も吾輩を以て之を論ぜしめんか、社會の健全なる發達を求むるには、個人の獨立自治を重しとせざる可からず。獨力を以て生活を全うする能はず、生活するも、文明國民の維持す可き生活を全うし難き一部の國民

に對しては、國家自ら援助を與ふるの必要ありと雖も、然らざる者に對しては其獨自の能力に依て生活せしむるの計を講ず可く、個人の孤立に依て不可なる場合には、個人間に於ける團體の力に依て、生活上の目的を達せしむるを必要とす。

然らば我國に於て勞働者が不安の地位に居り、經濟社會の變動に依て、忽にして其平生の業務を失ひ、失業者として路頭に彷徨する危險に接するは國家に於て特に救濟するに値せざる所なるか。我國の如き從來勞働者間に何等團體結社の存在せざりし國に於て、今後經濟社會の反動的趨勢に依て、大規模に失業の生ずることあらんか、勢國家の施設を必要とするものなれども、之を一般の問題として考ふるに、失業の如き、當然勞働者の團體たる職工組合に於て、失業したる組合員に失業惠與金を交付するの方法を以て、解決するを至當とす。我國に於て當面に或る勞働問題を生ずるや、其問題の性質如何を問はず、直に國家の施設を要するが如くに、政府の速斷するは勿論國民の多數亦斯く想像するは、要するに勞働者の自治的救助を行ふ可き團體存在せず、斯る團體の爲す可き職分をも政府に於て之を爲さんとするが故に外ならず。我國の社會政策が官僚式の臭味を脫する能はざるもの亦已むを得ざるなり。

職工組合の必要と其職分

ノが仁と團結して、個人の微力を以て爲す能はざる所を團體の力に依て果すの必要なるや、論を俟たず。勞働者にして團結するときは、一人の微力を以てする場合と異なり、資本家に對抗して、有利なる勞働條件を締結するに至るは、疑を容れざる所なり。吾輩の見る所を以てせんか、我國に於て濫に官僚的社會政策を實行し、勞働者に慈善を施し、救濟を與ふるに先だち、勞働者自身をして各自の團結に依て、社會上經濟上の地位を上進せしむるを急務とするものにして、而して此目的を達するには、勞働者を勸誘指導して、其職業を同じうし、其職業上の利害を一にする者の間に、職工組合を組織せしめざる可からず。職工組合の成立したる曉に於ては、組合は其威力を發揮する爲めに、一方に相當の技能を有する勞働者に限つて組合員とすると共に、他の一方に於ては、傭者に向つて、組合に屬する勞働者のみを使傭することを強要し、而して組合員には必ず一定の標準賃銀の支拂はる可きことを要請し、是等の要求の傭者に認容せられざる場合には、同盟罷業に訴ふるに至る可し。茲に於てか、勞働者が職工組合を組織するときは、同盟罷業を頻繁ならしむ可く、又一旦同盟罷業の起るや、罷業者は職工組合の資金より、紛議惠與金の支給を受くるを以て、自ら罷業に伴ふ失業の損失に堪へ、其結果として罷業期間を延長せしむるの非難

を生ずるを常とす。我國の吏僚、一部の實業家、學者的思想家が擬して職工組合の組織に反對するが如き、畢竟斯る見解に基くものとす。然も職工組合は斯の如く有害なる團體を以て、目す可きものなるか、一考を要する所なり。

職工組合の組織せられたる場合に、同盟罷業の頻發し、又其期間の延長せらるるは、一面より觀察すれば、正に道理に適へるが如しと雖も必ずしも然らざるものあり。第一職工組合には適當なる指導者あり、隨て其同盟罷業を起すや、起す可き正當の理由あり、又傭者の之を承認し、輿論の之を援助す可き場合を選んで爲すが故に、組合の組織せられざる今日に於て起る罷業の如く無謀ならず。第二傭者亦職工組合を中心とする同盟罷業の有力なることを知るが故に、組合の提議にして甚だしく不合理ならざる限り、之を承認して、同盟罷業を惹起さゞるに勉むる一方に、勞働者も亦不合理なる要求を敢てして、自ら罷業を誘發し、各自の醵出したる組合の資金を空費するを欲せざるの事情あるを以て、組合組織の後に於ても、罷業は必ずしも反對論者の恐るゝが如き程度に至らず。第三或る事業に同盟罷業起りて、結局當事者間の妥協に依て、條件の成立を告げたりとせんか、此事は他の事業に於ける勞働條件を改訂するの標準と爲る可く、偶々其事業に於て起らんとしたる同盟罷業も他に準じて勞働條件の改訂せらるゝ爲めに、自ら之を[illegible]を生ず可きなり。吾輩は同盟罷業を誘發することを理由として、職工組合の設立に反對するが如き、議論に贊成する能はず。否上記の理由に依て、今日の如き勞働者の行動を規律なく、統制なき狀態に置くよりも、職工組合の下に團體的行動に出でしむるを以て、却て資本家と勞働者との關係を良好ならしむる所以なりと信ずるものなり。現に之を米騷動に就て見よ。此騷動に於て全國多數の勞働者が不秩序、無節制の行爲を敢てしたるは、何故なりしか。當時米價の奔騰極まる所なく、一部の勞働者中、好景氣の反映として、賃銀上進の利益に浴せざる者、之に浴したるも、程度の寡小なる者の如きは、生活の困難に堪へずして、彼の如き暴擧を試みたるものと解す可し。若しも、我國に平生職工組合の組織せらるゝものあり、又其組合員にして、相當の訓練を經たる者ならんか、斯る場合には組合の常設委員會をして、先づ組合員の賃銀と生活費との關係、事業家の收得する利益金の多寡を調査せしめ、賃銀增進の理由あり、又事業家に於て之を爲すの餘裕あるときは、同盟罷業を決行す可しと雖も、當初より暴動を敢てするが如きは、勉めて之を避けたるや論を俟たず。勞働者の團體的運動なくして、暴動のあるは、我國に於て職工組合の缺如せる爲めに生ずる弊害の一とす可きな

り。

或は職工組合が組合本然の性質を離れて、政治上の運動に參加し、或は社會主義者や、サンディカリストと氣脈を通じて、社會の組織を一變せんとするが如きに至つては、遂に事の可なるを見出す能はず。又斯る狀態に達せざるも、合衆國のアイ、ダブリュー、ダブリューの如く、常に危激の手段に依て、勞働運動に從ひ、爲めに社會の秩序を破壞するの危險あるか、若しくは英國職工組合界に歐洲開戰前端緒を發したる鐵道現業員、炭坑夫並に運搬夫の三組合が三角同盟を組織し、一齊に總同盟罷業を企てゝ、資本家階級を威嚇せんとするの事實ありとせんか、職工組合主義に對して、一大制限を加へざる可からずと雖も、我國に職工組合起りて、直に斯る惡風潮に感化せらるゝは之を期する能はざるのみならず、實際に此掛念あらんか、吾人は全力を擧げて、之を矯制するの任に當らんのみ。斯る將來の事に憂を繫ひで、職工組合に反對するは、吾輩の與せざる所なり。

主從關係を重んずる舊思想

或は我國に於て職工組合を排斥する一の理由として、我國の資本家と勞働者との關係の歐米諸國と趣を異にするものあることを擧ぐるの論者あり。即ち曰く歐洲諸國に於ける資本家と勞働者とは純然たる雇傭關係の下に權利義務の遂行に重きを置きて、殆ど他を顧みず、然るに我國に於ては資本家と勞働者との間に主從間に於けると同樣の情誼恩愛の掬す可きものあり、此場合に濫に職工組合を設立して、勞働者に權利思想を注入するは、却て在來の美風を破壞す可く、隨て斯る組合を設立するも、其職分は之を組合員の共濟を眼目とするものに限る可しと。論者が今日の社會に於て、資本家を主とし、勞働者を從とするが如き、何等の論據に基くものなるや、之を知らずと雖も、勞働者に對して暴言を放つものと云はざる可からず。資本家と云ひ、勞働者と云ふも、之を生産の行はるゝ廣大なる關係より見れば、各自生産に關する職分の一部を分擔するものにして、其孰れを從とし、孰れを主とす可きや、判別する能はざるのみならず、株式會社の如き、事業經營者の外に、株主として資本家の存在する場合には、益々主從の關係曖昧ならざるを得ず。假に論者の誇張する如く、我國の資本家は勞働者に對して、主人が從者に對すると同一の恩愛を垂るゝものなりとせんか、例へば不景氣の起りて、事業を縮小する場合に於ても、資本家は妄に勞働者を解傭せず、自ら奉ずる所を節して、尙ほ勞働者の爲めに衣食の資を豐ならしむる筈なり。又一朝商工業好景氣に際して、資本家の利益の增加したる場合には、自ら此利益を收む

るに先だち、之を勞働者に與へ、少くとも主從共に慶福に浴す可き道理なり。又勞働者が老境に向ひて、身心衰耗するも、資本家にして主人の從者に對する情誼を以てせんか、斯る老人は宜しく之を優遇して、餘生を安んぜしむること恰も封建君主の老臣を待つが如くせざる可からず。然も今日の實際に於て資本家と勞働者との關係を見れば、果して如何。是等主從間に發露す可き情誼恩愛の如きは、一として之を求むる能はず、互に酷烈なる自由競爭の關係に居らんとす。斯る場合に情誼に基く主從關係に依頼せんとするが如き、時代錯誤の甚だしきものとせざる可からず。

我國政府の吏僚は常に、我國勞働問題に特殊の解決法あることを稱して已まず。然も其言ふ所を聽けば、我國勞働者の自覺未だ著しからずと云ひ、或は我國には主從關係の重ず可きものありと云ふが如き、世迷言に類する愚論なるのみ。斯る舊思想に拘泥しつゝある輩をして勞働問題解決の衝に當らしめて、果して之を其正しきに就かしむるを得るか。勞働問題は勞働者の問題なり。然る以上は勞働者の自覺、團結、行動に依らずして最後の解決を下すの難きは勿論なり。政府が之を以て一に官憲を以て處理し得る問題の如く考ふるは、大間違の沙汰にして、先づ斯る思想を排斥するに非されば、吾人の目的とする所は遂

に之を達する能はざるなり。

指導者の出現を要す

斯の如く職工組合は我國勞働者の地位を向上せしむるに就て、必要なりと雖も、我國に於ては職工組合殊に鬪爭的職分を有する職工組合の組織は全然新規の事業に屬し、假令ひ治安警察法第十七條の規定が廢止せられ、又は緩和せられたる後に於ても、勞働者間の知識のみを以て、組合を組織し、且つ組合をして常に適當の行動に出でしむるは、聊か事の困難なるもの非ざるか。茲に於てか、吾輩は我國に於ても知識階級より誠意を以て、勞働者の爲めに、或は勞働運動を指導して、之を其正しきに就かしめ、或は勞働者の智徳を增進し、或は勞働者に健全なる娯樂慰安を與ふる等各種方面の事業を擔當する人士の輩出するを必要とす。從來二三人士の時に勞働問題に斡旋すると稱して、團體を組織し、有志を糾合し、寄附金を他に勸誘したる等の事例なきに非ずと雖も、果して勞働者の爲めにするものなるや、將た又自家衣食の爲めにするものなるや、心事の明なるを得ざる嫌あり。若し夫れ成金者流の列に居り、入りては玉樓に住ひ、出でては街上に自動車を驅るの輩が閑餘の事業として、勞働問題の解決に當らんとするに至つては、徒に勞働者の反感を強うするの嫌こそあれ、他に何等の資するものなしとせざる

を得ず。我國に於て高等教育を受けて、年々校門を辭する青年は千を以て數ふ可しと雖も、其趣く所は銀行會社官廳にして、其爲す所は刀筆の俗務に過ぎず、一人の身を挺して、勞働者教育に、貧民生活改善に力を致す者なきは何故なるか。アーノルド、トインビーの永眠したるは三十二歲の壯年なりき。然も半生を費して、倫敦貧民の爲めに盡したる効績は永く後世に傳はり、氏を記念する爲めに、設立せられたるトインビー館は社會改良運動の用に供せられ、氏の志を繼ぎて、所謂大學殖民事業なる名稱の下に、貧民の智德を增進するの計畫は益々盛ならんとす。チャールス、ブース亦富豪の出にして、現に多年ブース汽船會社の社長たりと雖も、其名聲の世間に著聞するに至れるは、「倫敦人の生活並に勞働」と題し、數冊に亘る著作を公にして、社會政策の歸嚮す可き針路を示したるの一事に外ならず。我國に於ても亦勞働者の爲めに努力すること斯の如き人を輩出するに非ざれば、勞働問題の解決亦一空に歸せんのみ。吾輩は此點に就て特に現代の青年を激勵せんとするものなり。

水野大佐の論評について

―中央公論主筆へ―

文學博士　姉崎正治

中央公論正月號の一文で、水野大佐は軍國主義に對する僕の意見に對して批評を公にせられた。其の賜として僕自ら一層考慮すべき點をも發見し得た事を感謝する。然し水野大佐の論點には、適用不能論法と見ゆる事が大分ある。例へば、僕がドイツ軍國主義の結果として階級思想が生ずると述べたる對してい

ドイツ以外、特にイギリスにも階級制度があるじやないかといふ如きは、異なる原因からでも同じ或は似通つた結果が出るといふ一事を考へて見れば、僕の論點に對して全く適用不能 irrelevent の論難であつて、此の如き論點を提げたとて、軍國主義の結果階級思想が生ずるといふ僕の觀察を覆すには足ら

す、又ドイツに於ける階級思想の事實を打消す力は何更ない譯である。

此の種の事で水野大佐の論點に一々お答をすれば、いくらも云ふべき事はあるが、其の様の論難は概念論に終つて、眞理の闡明には益のない事になる憂がある。僕自らの力說したのは、ドイツの軍國主義といふ概念の論でなく、軍國主義の行はれたドイツの實相を明にしたい爲であつた。但し僕の論述は消極的（或は破壞的）批評であつた爲に、賛否何れにしても誤解を惹起す憂があるといふ事は、大佐の論評からも學び得た。そこで先に述べた如き概念上の論難をするよりも、寧ろ一層積極的に、武備（單に軍事といひたくない）精神の人生に於ける位置や、軍事以外人生の活動と武備精神との關係聯絡若くは轉遷交替について僕の考を述べた方が適切だといふ考を得た次第である。其れ故、直接水野大佐に答へて論難するよりも、ジェームスが Moral Equivalents of Military Virtuesを書いたと同じ精神で Social and Intellectual Equivalents of Military Virtuesとでもいふべき一文を草して見たいと思ひ、之を題して「武備精神と人生の活動」とでも云つて見ようかと考へて居る次第である。然後の餘暇を伺つて一二ケ月の中には其稿を完うしたい所存故、其折には中央公論の一部を利用させていたゞきたい。又中央公論を通じて、此事を識る者たる［illegible］僕の幸とする所である。

然し右豫告の一篇を公にするまでもなく、一つだけ水野大佐の論評中、僕の思想を全然見違へて居られる點について申述べておく。其は即ち、僕の軍國主義評論（或は又其他の論點）に於て、僕が人性は善なりと假定してかゝつて居ると云はれる一事である。人性論に於ては、僕は決して性善といふ様な考を抱きもせず、又之を述べた事もなく、人の天性には善もあり惡もありとする。此點で、僕の思想は、第一は人性の心理的觀察から出て居て、第二には佛教の說明に負ふ所多いので、僕の平生の言論を知る人は皆知つて居られる事である。卑近な道歌で云はば「傀儡子、頸にかけたる人形箱、佛を出さうと鬼を出さうと」であつて、僕の他の著書（例へば、根本佛教、新時代の宗教等）を引用するまでもなく、中央公論に載せた「人本主義の實行」や「人生の新展望」は皆此の根本から出發して居るのである。且又人性には善惡共にあるといふのみならず、善惡の區別といふ事も、通常人の考へる如く明白の事でなく、同じ性向性情乃至本能でも、向け様によつては善にも惡にもなると觀て居るから、右の二論文に於ても、本能生活に基いて之を利導し、之を社會的に醇化する方法如何といふ事を主にし、而して「十九世紀文明

の總勘定」に於ては、特に本能の惡傾向を超越して、之を善傾向(即ち社會的結合性を圓滿に發達させる)に導かうといふ動機を主にしたものである。水野大佐の考が單に論難を目的とせられるのでなく、僕の思想を理會して、而して是を是とし非を非とするといふにあるならば、願くは右の點を考へていたゞきたい。

人性には、人生全體としても、個人の性情の中にも、善もあれば惡もある。それ故、惡は成るべく避けて、善を發揚したいといふのが僕の趣意である。一二の論文だけで其の趣意が十分に明でないと云はれるなら、其は致方ないが、右に擧げた二論文だけでも其根柢を見ていたゞけば、論點範圍の許す限り可なり述べたつもりである。若し其で足りないならば、僕の著書を提供する外ないが、一々其を讀んでいたゞからうと注文するのでは勿論ない。只趣意は趣意として之を明にしておきたいのである。若しそれでもいけない、善惡ある中で善の方を發達させたいといふのは愚だといはれるならば、其は現實主義乃至自然主義が理想主義に對して、東西共に三千年來加へて來た論難であつて、今一々玆に之を論議する餘地のない事は明である。

此點に觸れる處があるから、序でながら福田博士が曾て僕の外遊中、ホッブスとグロチウスとに關する僕の言を批評せられたのに對して一言しておく。(其後機會を失つたから、今日序でながらにするのは失禮の樣ではあるが)。福田博士は、僕の言を解して、ホッブスは惡鬼でグロチウスは天使だと斷ずる者だとして、特にホッブスの國家學上の功績について述べたられたのである。僕も勿論ホッブスの功績を沒するものでないが、其が本題でない場合故、敢て之を論及せず、而して同じく三十年戰爭の中から(又後に)兩極相對照すべき見解、即ち人性を主として善の方面から見たグロチウスと、主として惡の方面から見たホッブスとが出たといふ事を、現代說明の端緒に置いたのである。然るに、福田博士は、其を以て直に二者の評價斷定をしたもの又立言の根柢としたものとして、僕の言を難ぜられたのである。(福田博士は、其外、ホッブスがイギリス人たる事を指摘し、其で僕のイギリスびいきを破摧し、得々として居られる樣であるが、其は、僕の言論を以てイギリスの爲に辯護するものと誤解せられての事としか考へられない。其故、其點については僕の論點をはづれた論難として、之に答へる義務はないと信ずる)。

水野大佐並に福田博士に向つて、僕は厚い注意を以て論評せられたのを謝すると共に、僕自らの意味を界說しながら重說して、それでお答に代へる。而して性善惡又は二傾向の對照について一々反復說明を重ねるよりも、昨年六月に公にした「時代の

病」の中から、社會人心の Polarization に關する僕の見解を此に重説しておく。其文は次の如くである。

『人生は多方面で、時代は複雜である。而かも其間に起る紛擾爭點が截然二つに分れて相爭ふ場合も少くない。人間の生活に執るべき方針も、其の根柢となる思想も、必しも左と右と百八十度の角度で相對する二極とのみ限るものでもない。然るに人間は随分、他が左と云へば自分は右といひ、人が右すればこちらは特に左し、此の如くにして、元來は僅少な角度であつた二傾向、二主義が全然反對の方向に走つて、相反激し相爭ふ事も、珍しからぬ現象である。

此の現象は、特に戰爭の場合に著しく、干戈を執る以前ならば、お互に交讓の路もあり、疏通の方法がなかつたでもないのに、一旦戰場で敵對すれば、雙方共に反抗の精神を昂めて、極端まで行かなければ元の角度に立ち戻るを肯じない。但し戰爭といつても國と國との干戈に限らず、利害感情の衝突から出る階級戰爭でも、又意見主義の差から生ずる論戰でも、消息は異なる事はなく、社會の事物は其の複雜極まる紛々擾々の間に、何かの機會で兩分し始めると、あらゆる原動力がその兩分の一方に附着して、全體が兩分相對するに至る。之を評して社會的勢力の Polarization 兩極決定乃至分裂と稱し得る。即ち社會にはどちらにも附かずに居る人間も勢力も種々交はつて、平素は雜然同居して居ても、何か重大な爭點が生じ、分野を二つにし、相爭はざるを得ない場合に立ち到ると、全體が今までの如く安閑たるを得ず、どちらかへ取捨去就を決せざるを得ざるに至る。』

要するに、水野大佐が僕の考を性善説だとせられるのも、福田博士が、僕の端緒として言及した點を僕の論據だとせられるのも、polarization の現象と見るべきではなからうか。僕の「武備精神」が出たならば、水野大佐と僕との距離角度が百八十度になるか、九十度になるか、或は三十度になるか其は豫測し得ない。

記者組合組織の促進

大庭柯公

一　記者組合制度の論據

現代の新聞紙は疑もなく民衆化しつゝある。併しながら一歩を轉ずる時に於ては、民衆的機關より一轉して、金權的機關と成り行かんとする傾向も亦著しい。或者は近時の新聞紙が營業本位に陷ることを頻りに非難する。而かも所謂營業本位は畢竟するに讀者本位であつて、結局は新聞紙を民衆的機關に近づける所以とも見られる、一端の弊はあるにしても尙ほ恕すべきものがある。獨り金權の機關、資本家の擅有物たるに至つては、其害毒や眞に怖るべきものがある。爰に金權と云ひ資本家と云ふのは、新聞紙の持主又は社主と稱する一切の經營者を指すものである。故に謂ふ所の民衆的機關と金權的機關と云ふことは、即ち新聞紙をして民論輿論の代表機關たらしむるか、一經營者の代辯機關たらしむるかの謂である。

以上の二者その孰れにしても、新聞紙の力が能く社會的に世を動かすものたるは同一である。只金權の機關――更らに他の語を以てすれば、或る一權力の機關――たるに於ては、新聞紙は單に私的性質のものと爲り了る。エドモンド・バークが言つた『第四の憲法的威力』と云ふ新聞紙の性質は、全く失せて了ふ。そして總ての私的行動と同じく、此の金權若くは或權力の擅有的狀態が極端に赴く時に、新聞紙の橫暴が實現される。而して此時に際して最も苦しき立場に逢遭するものが、記者其者である。現に斯かる極端な場合でないにしても、新聞紙が營業本位に傾き、專ら營業主義と爲り興味本位に陷りつゝあるに會へば、一部の社會は、新聞の墮落若くは新聞の商品化として直ちに之を記者の責任視して記者を責める。記者も亦同時に不快を感じ責任を感ずる。何ぞ知らん是等は多くの場合に於て、資本家の位置に在る經營者其人の意思に、意識的に若くは無意識的に、記者なるものが支配せられ若くは強制せらるゝ結果で

ある。是に於てか記者の胸底には矛盾が感ぜられる。即ち彼等は新聞記者は社會の公僕であり、新聞紙は民衆の機關であると覺知しながら、眼前の事實は、記者自身が資本家の私僕であり、新聞紙そのものが營利的商品であると云ふことである。そして這の矛盾を感じた時に、記者其人が斯かる資本家（經營者）に對して、何等かの方法に依て抗爭し得るや否やと云へば、それは今日の記者には絶對に不可能である。何となれば彼等には何物の力だも無いからである。即ち經營者に對して爭へば位置を失ふ、之に對して何等の保障もない。勢ひ沈默を守つて經營者の爲すがまゝに從ひ、經營者の支配に甘んぜざるを得ぬ。記者の立場の苦境苦衷は即ち是れである。

併しながら新聞紙本來の性質は、民衆的言論機關としての社會の公器であることである。随て新聞記者其人は飽まで社會の公人であらねばならぬ。それ故に新聞記者は社會の公益と民衆の幸福を圖ることに於て、多大にして最善の思慮と努力を捧げねばならぬ。随て記者に取つては其職務上に於て、一新聞社の利益を目的とするとは、如何なる場合に在ても全く第二義に屬する。即ち其身は一新聞社の一員には相違なきも、而かも同時に社會の一公人であつて、その社會的公人であることに因てのみ、記者の職任が意義附けられる。故に公人たる新聞記者は、常に（一）社會的に責任を自覺して（二）公益本位に終始することを、第一の要義とせねばならぬ。然るに若し社長社主と名づくる經營者なるものが、自から爲めにする所あつて、若くは自家の必要から、随時擅まゝに變節改論して之を記者に強い、若くは政府者と妥協して記者を率ゐて官僚に降伏する場合の如きに際會しては、新聞記者たるものは、其本來の面目上、飽までも公益本位に終始し、社會に對して責任を感じ、社會的公人たる面目を保持する上に於て、斷じて經營者の爲めに記者の人格を賣つてはならぬ。是に於てか亦撞着が起る、即ち主張の上に活きんとすれば、生活上に死する覺悟が必要になる、生活的に死することを苦痛とすれば、已むなく主張の上に死せねばならぬ。言ひ換れば社會の公僕となるか、資本家の奴隷となるか、二者其一を撰ばねばならぬ場合に迫る。そして何等の獨立的保障を有せぬ今日我が國の新聞記者としては、多くの場合已むなくも資本家（經營者）の奴隷たるを甘んぜぬ譯に行かぬ。

然らば則ち記者の爲めに、其主張の上にも生活の上にも力強き保障を與ふる所の制度方法こそ、新聞記者をしてその名譽と位置とを保持せしめ、之をして向上の途を得せしむる所以である。而して記者の上に這の保障のない限り、實は新聞紙をして

民衆的機關に終始せしむる保障はない譯である。現代新聞紙の民衆化か金權化かの岐るゝ所は、記者の社會的公僕か金權的奴隷かの分岐點に發端する。所謂新聞記者組合組織の議論の根據は、資本家に對立する記者の上に、其主張其生活の兩面に獨立的保障を與ふることに存せねばならぬ。

二　經營者對記者

新聞事業のトラストは、米國及び英國に於て愈々隆盛なる狀勢である。米に在てはハースト、英に在てはノースクリフ、而して更らにハーストのトラストに對抗するプリッザー、ノースクリフに對するカットバリーのそれの如きである。斯かる新聞トラストの狀態は、未だ我國にては實見されぬ所であるが、斯かる狀態を誘致するに近き資本々位の傾向は、年一年と我新聞紙の上にも著しく成り行きつゝある。勿論新聞紙の發達が機械の發明に伴ふ以上、新聞紙が資本々位の生産法に支配さるゝこと、換言すれば資本を除外して、如何なる新聞紙上の勞力も有効ならざるべきは言を待たざるも、新聞事業を擧げて資本家の獨占に歸せしむるの恐れは、固く相戒めねばならぬ。現に新聞トラストの優勢なる米國のごときに在ては、その一部の新聞紙は、實に資本家たる富豪の全權に左右せられある現狀である。

然らば則ち新聞トラストの實現を見ぬ我國に在ては、新聞紙の上に資本家の支配力が微弱であるかと云ふに、決してさうでない。持主、社長若くは株主なる名に依ての、記者に對する資本家的支配、擅斷、強壓は、却々に微弱ではない。特に又所謂幹部と稱する新聞社内の一部階級が、或る場合經營者の意思を迎合し、當然記者に味方すべき本來の性質にてありながら、經營者側に黨して、資本家的支配に味方し援助することがある。此時に於て記者に對する資本家の力は、動もすれば橫暴に陷る。

夫れのみならず、近時獨佛の新聞界に在ては、著名の記者が漸次社主階級に轉ずる傾向がある。然るに我國に於ても亦同樣の制度が現存する、現に一例を擧ぐれば、『大阪毎日』の如き『中外商業』の如きは、其社現在の記者を、前者に在ては合資者に、後者に在ては理事者に加へる。此の制度は宜き思想者流から見ると、益々社業に忠實になると結論される譯であるが、總ての經濟的原則上、資本と勞力の對立すべき點から見れば、記者にして同時に資本家たり、又記者より經營者階級に轉ずる此の制度は、如何にしても非合理的たるを免かれぬ。

更らに現今我國の多くの新聞社には、幹部會議なるものが組織されてある、即ち編輯局各部の主任者のみによつて組織されたる會議である。此の會議は本來を言へば、資本家即ち經營者

に對する記者の擁護會であるべき筈であるが、實際は多くの場合に於て、資本家側に味方して資本家の便宜を圖る機關と爲つてをる。則ち名は幹部と言ふも彼等も亦記者であつて、資本家に對して何等獨立的保障を有して居らぬ彼等としては、不本意ながらも資本家に味方すべく、幹部會議なる機關を、非幹部たる記者に對して惡用することゝなる。斯くて記者の上には二重三重の支配と强壓とが加はる。則ち經營者の權威は絕對のものとなり、記者は之に對して無條件的に、服從隷屬を餘儀なくせらるゝに至る。

以上の事實を說明するためには、一二の實例を擧示する必要がある。最も極端なるものとしては、營業本位を露骨に標榜する關西の一新聞社である。同社々長の標語の一としては『記者は新聞社なる營利會社の傭人である、傭人は總ての場合に於て、會社の方針に絕對的に服從すべきものである』と、更らに第二の標語には『世間は所謂盲千人、編輯局で新聞を作るには、小學卒業程度を讀者の標準とすべきである』と。更らに他の性質の極端なる實例は、他の關西の一新聞社に於て實現された。即ち或る事件を機として、從來不羈獨立の新聞紙を擧げて一朝にして極めて無造作に、官僚に降伏し官僚と妥協し、軈てそが事實上の機關紙とまで成行いた。以上の相異りたる二事實に遭遇して、此の兩新聞社の記者の多數は已むなくも社の經營方針即ち社長の意思に盲從したりしことは言ふまでもない。併しながら此の盲從には忍ふべからさる苦痛がある、耐ふべからさる侮辱がある、容すべからざる責任がある。而して其の苦痛、侮辱、責任を衷心に感ぜぬ記者とては殆んどあるまい。只之を感じながらも、何等獨立の保障を得て居らぬ彼等としては、絕對的服從以外に他に途がないのである。

以上は各新聞社に於ける一社内の資本家階級對記者の狀態であるが、之を外にして更らに或場合、記者の上に加へらるべき强大な壓力が別にある。即ち各新聞社資本家階級の聯合である。之に就ては最近に於て最も有名なりし霞俱樂部事件なるものを擧例するが捷徑であらう。此事件は外務省出入記者團たる霞俱樂部と、當時の外相後藤男との衝突に起因して、やがては各省出入記者團體の霞俱樂部應援となつて、外相對東京記者團の抗爭事件となつた。其時兩者の間に立入つて仲裁的努力を試みんとしたのが、東京各新聞社の社長及幹部級であつた。彼等は新聞社としての立場上、當然記者側の味方たるべきであるのに、記者側の意向さへ確かむることなしに、對手たる外相と一種の妥協を進めて、結局無理無體に資本家的權威を以て、記者團を壓したのであつた。而かも此の霞俱樂部事件は、後進記

者を驅つて、その經營者階級に對する自覺を、著しく促進せしめた。而して彼等の胸中に、經營者階級に對抗する記者組合組織の必要を、甚だ强く印象せしめた。

三　記者優遇問題

資本家が勞働者の不平を鎭壓せんとする時に、彼等の用ふる常套手段は、些少なる賃銀の値上げである。それと同様の事情に於て、我國新聞經營者が居常記者を隷屬的に籠絡する手段としては、所謂記者優遇の掛聲である。曰く二期の配當、曰く特別昇級、曰く十年賞與、曰く非職給制度、曰く恩給制度、是等は給與の點に於て、他社に比して優秀なりとせらるゝ大阪なる『朝日』『毎日』兩社の、所謂記者優遇制度である。これのみならず、其或ものゝ如きは兩三年前までは、所謂撰拔洋行の特典を以て、頻りに記者優遇を世間に標榜した、而かも今は忘れたる如くである。併しながら公平に見て、此の兩社は恐らくは社員に對する給與の點に於て、我が全國新聞社に冠たるであらう。

されど給與の優良なることは、毫も記者の獨立的保障を爲す所以ではない。否、或場合に於ては、單に給與の比較的優良といふことを以て、擅まゝに記者の思想上の獨立を蹂躙することがある。更らに甚しきに至つては平生の給與の優良が、他に記者組合制度の如き保障機關のなきために、生活不安上の脅威の念を多大ならしむることさへある。思ふに今日新聞記者の職業的及個人的缺陷としては、（一）地位の不安定（二）思想上及生活上獨立の保障の絶無（三）報酬の少額（四）知識的並道德的缺陷即ち是れである。然るに所謂給與の優良と云ふことは、竟に第一第二の缺陷を救ひ得ず、第四の點に於て僅かに研究上の餘裕を得て知識的缺陷を補ひ得るに過ぎぬ。而かも彼等の所謂記者優遇若くは給與の優良と云ふ事實も、若し之を歐米の實例に比し來るに於ては、殆んど比較にならぬ程の優劣多寡の差がある。倫敦『タイムス』主筆の本俸のみにて年三萬圓、同論說記者の一萬二千圓乃至二萬圓なる、突飛的米國に在つてハースト氏が主筆ブリズベーン君に十四萬圓の年俸を支給する、此點に於て數步を讓ると稱せらるる獨逸に在ても、『ロカール・アンツアイゲル』主筆の年俸二萬五千圓などに比較して見ると、我國新聞界の所謂記者優遇などは殆んど言ふに足らぬものである。

勿論優遇と云ひ、給與の優良と云ふことは、記者に取つて好ましき事には相違ない、否、益々その然らんことを望まねばならぬ。併し其處に記者として尚一事の考ふべきことがある。外でもない、現今の制度に於ては所謂優遇と云ひ所謂優良の給與と云ふも皆是れ經營者の自發的行爲、換言すれば自由意思の發現に過ぎぬ。既に經營者の自由意思であるとすれば、給與の程度

も、其增進率も、乃至は優遇の程度も、皆經營者の任意に依りて增減される。經營者は其都合上、任意に其優遇の停止を行ひ得る、任用も勝手であり、支給標準も自由であり、增給の默殺も任意であり、而して解傭も勝手である。之れが卽ち今我國新聞經營者の記者の上に振ひ得る暴力である。それ故に所謂記者優遇と云ふことも、實は經營者の利益と相一致した場合に於てのみ、經營者に依りて任意的に行はるゝ現象であつて、決して記者自身に取つて感受すべきものではない、何となれば殺活自在の特權が、昔の暴君の手裡に收められてあつたやうに、今の新聞經營者は所謂優遇の與奪を、何時にても任意に行ひ得るからである。

吾人が提唱する記者組合の制度は、其處に則ち强味がある。任用をして、給與をして、優遇をして、實權ある保障の下に、經營者に對して確保せしむるの途である。卽ち經營者の任意的任用、給與、優遇を排認して、之を保障的のものたらしむる途である。則ち記者に取りて地位の安定も、給與の安定も、之に依りて始めて確保せらるゝ譯である。

四　記者組合と其の組織

若し記者組合なるものに就て、簡約なる定義を下す必要があるとすれば、吾人は下の如く言ひ得る、曰く『記者組合とは新聞經營者をして記者の人格的價値を認めしむる保障的組織である』と。

記者組合は大體に於て、歐洲諸國に現存する著作者組合に類似の組織ではあるが、其團結力協同力及對抗力に於て、著作者組合に比して一段堅實なるものであらねばならぬ。前記のごとく我國今日の新聞記者の上に急を要する處のものは、意思の獨立と生活の保障とである。而して此の二者の缺陷を充實するためには、先づ記者の協同團結が必要である。協同團結は言ふまでもなく力である、則ち此の力を以て、此の力に依つて、經營者なる資本家に對立するのである。現在の記者社會には此の力が存してをらぬ、夫故に常に經營者に對して隷屬狀態である。甚だしきは無條件の絕對服從である。社主社長及び多くの場合に於て其手足たり同腹たる幹部は、常に絕對の命令權を堤げて記者に臨む。此時に於て經營者の命令は、直ちに記者の筆であり、經營者の意向は直ちに記者の記事と爲る。卽ち記者は沒意思沒人格である。

記事の沒收と云ふことは、現在各新聞社の記者が往々遭遇する經驗である。そして沒收記事の重要なるものに限つて、多くは新聞社の都合、卽ち經營者の意思と利益とに反するの所以に原因する。併しながら沒意思沒人格の記者としては、此場合之

を爭ふに方便も威力もない。經營者の意思卽ち記者の筆として、機械的に働くの外はない。故に詮じつめて見れば、其處に經營者の新聞はあつても、記者の新聞はない。營利本位の新聞はあつても、民衆本位の新聞はない。新聞紙の商品化に急であつて、之が社會化は第二義に落ちる。斯くて社會的公機關たるべき新聞紙は、營利を目的とする經營者の私的機關たるに終る。されど新聞紙を斯くまでに墮落せしむることは、文明社會に在て容すべからざる罪惡である。而して之を救ふべき唯一の方法は、先づ新聞記者の人格的獨立に在る。換言すれば記者の現狀を釐革することに依てのみ、新聞紙墮落の危機を救ひ得る。

然らば則ち記者組合は、如何に組織せられ、如何なる要務を有するか。吾人は爰に細目に亘つて記述することを避けるが、記者組合の組織に關しては、第一、記者組合は經營者階級を交へざる準記者の同業組合たること、第二、中央記者組合及び地方記者組合を組織し、兩者聯絡協同すること、第三、一切の經費は組合員の醵金分擔に依ること等が、其要義である。次に組合の要務として、その主なるものを列擧すれば概ね左の如くである。

第一　記者生活上の獨立的保障

(甲)勞務契約の保障　卽ち經營者と記者との間に締結せらるべき、勞務契約の準則を設定すること。例せば(い)契約解除告知期間(ろ)短期の勞務中止に對する或期間の一定俸給の支拂の如きもの。

(乙)記者の俸給最低額の設定　卽ち記者俸給の初任給及び最低給を設定すること。更らに勤務年限に應じて、一定の增給率等を設定することも亦必要である。

第二　恩給及遺族救濟方法

(甲)恩給制度　これには二方法がある、一は經營者に對して權利として要求する方法であり、他は獨逸の著作家組合に於ける恩給制度の如く、組合員より一定の掛金を徵集し、老衰時に達するに及びて、恩給として一定の補償金を組合より支給するもの。

(乙)遺族救濟法　これには常時より一定の掛金を要するが故に、之が加入は組合員各自の任意に因ること。

第三　幹部の排斥權

此の權利は記者組合に取りて、極めて重要なる權利である。爰に幹部といふは、新聞社編輯局内の各部の主任を指す。本來幹部なるものは、記者の味方として、若くは代表者として、經營者に對立すべきものであるが、實際は自家

地位の安全のために、多くの場合却て經營者側に與する。記者組合は此の場合斯かる幹部に對して、組合の決議にて排斥權の實行を期すること。

第四　記者の補充、推薦、紹介

第五　記者に對する適當なる奬勵及表彰

第六　制裁

記者たる名譽を汚瀆したる者に對しては、嚴重なる制裁が必要である。(い)戒飭、(ろ)組合員資格停止、(は)除名等を其一端とする。

即ち大體に於て記者組合の要務は以上の如きものである。勿論上掲の項目にては未だ盡さぬ所もあり、遺漏の點も尠からざることであらうが、畢竟するに記者組合の主たる眼目は、(一)記者各自の道義的觀念を高むること(二)經營者に對して隷屬的關係を絕つことに存するが故に、此の主眼の目的を標準として、團的體に其の權威を發揮することとである。

或種の論者——今日各新聞社の多くの幹部連は、恐らく此の論者に屬するであらう——は、今尚ほ記者組合の實現を絕對に困難なりとする。そして彼等は該組織と之が實效とを不可能なりとする。曰く、第一資金が集まらぬではないか、第二團結的實效を期する力がない、第三組合加盟の記者を經營者側にて採用せざる場合、組合員は自然脫退する云々と。併しながら是等は通常、一般資本家の言ふ所であつて、皮相の見である。則ち組合として一旦鞏固なる團體の成立した以上、其處に協同聯合して抗爭する力が生れる。協同聯合して勤勞を中止する武器も出來る。社會民衆に訴へて之を味方とする勢援も出來る。經營者たる資本家ばかりが、決して權力者ではない。

又或る論者——此の場合に於ても亦多くの幹部連が加算する——は神經過敏的に、記者組合の組織を極端に危險視する。併しながらそは經營者は利益の爲めに盲し、幹部連は多くは地位に戀々たるため、自然に陳腐なる思想に捉はれ、爲めに新事物の眞相を理會する能力を缺いた結果、陷つたる誤解である。記者組合は新聞記者の人格的權威を保維するが、本來の目的である。隨て組合所屬の記者は、名譽と秩序を重んずる點に於ては、之に加盟せぬ記者に比して、著しく優逸したものたるべき筈である。其處に若し經營者側に取つて、不便な點があるとすれば、彼等が經營者の不條理な命令や方針に聽從せぬと云ふことのみである。尙ほ又組合としては、多くの場合に於て、經營者と記者との仲間に立つて、仲裁々判の役目に任ずるものである。畢竟するに經營者側に、强壓や不條理や冷酷などがない限り、記者組合として經營者側と對抗すべき必要はない。只記者

の爲めに組合組織の常設は、經營者が其力として資本を所有してをるのに相當するのみであつて、何等怖るべき性質のものではない。

記者組合は斯く協同的に、記者の利益を保護し、其地位の安定を保障し、其の社會的名譽を發揚する以上、組合所屬記者と非所屬記者との區別を明確にすることが緊要である。勿論組合の精神から言へば、苟くも新聞記者たる以上、その總てが組合員たるべきである。併し辯護士が法規上からして、辯護士協會に屬すべきものとしてあるやうな譯には行かぬ。畢竟同業者として新聞記者の權威と獨立と名譽とを、完全に保持せんと欲する者のみに依つて組織されべき組合である。隨て記者の權威、獨立、名譽を左程に念とせざる者は、非組合員として遺るであらう。夫故に組合記者に自から特權が生じ、名譽が歸するやうになるのには、組合記者の自重が大切である。そして名聲と信用とが組合の上に來たる時、總ての記者は組合員となるであらう。

五　青年記者の結束

記者組合の事業は、獨り青年記者の自覺結束に依つてのみ成立つ。現在に新聞社の幹部と稱する記者、幷に中老記者の多くは、遺憾ながら時代精神と多大な懸隔がある。彼等は最早理想に自殺してゐる。家が建てたい、產を造りたい、官僚又は政黨の有力者と握手したい。これが彼等の希望である。その爲めには一社內で見苦しい排擠をやる、記者たるの修養などは彼方除けである。斯かる連中に何の言論尊重があらうぞ、記者の權威が望めようぞ。我等は此の理想から死んだ今の所謂先輩記者諸氏を眼中に置いてはならぬ。時代は既に青年の手に移つてゐる以上、我國新聞紙も最早青年記者の所有に移るべき機運に際してをる。そして此の機運を促進させるものが、即ち記者組合の組織である。

我國新聞紙を擧げて民衆的機關とするか、金權的機關たらしむるか、今が其の分岐點である。所謂先輩記者は私念に驅られて、桿を金權の彼岸に向けてをる。之を救ふものは獨り青年記者の力であつて、其力を實現するの途は、記者組合の組織を第一歩とする。

勞働問題と工業教育

工學博士 大河内正敏

近時勞働問題を論議する聲が漸く高くなり來つて、眞面目に是が研究を企つる學會團體等の現はれて來た事は誠に慶賀す可き現象である。從來は殆學者間のみの問題として顧られなかつた事柄が、特に歐洲戰の終結と共に、嘗て戰時中我國に起つた諸工業の受くる打撃によりて失業者が續出するであらうと云ふ想像の刺戟から其の聲が一層高められた感がある。

併し平素でも我國に何人の職工が存在し、其何割が常に失業者と認められるか更に精確な統計が出來し居ないのであるから昨年十一月に休戰が成立して以來、急に何人の失業が出來たのやら或は未出來ぬのであるやら更に見當の就かぬと云ふ滑稽の狀態であるに係はらず、新聞紙や官廳で失業問題が宣傳されて居る。自分の見聞し接觸して居るのは、狹い工業界ではあるが依然として勞働者の大不足職工の大缺乏を訴へて居るのは今も尙昨年の此頃と更に變りがない、是れは所謂勞働の移動が行き渡らない爲であるか、或は日本に未完全な職業紹介所（レーボアー・エキスチエンヂ）の出來て居ない爲めであるか、抑亦想像の産んだ早計に過ぎた騷ぎであるか、吾人の大に不思議とする處である。

元來現今の樣な日本の工業狀態では勞働問題で謂ふ眞の失業問題熟練職工の失職より生ずる技能の低下の如き事は、果して有り得べきや否や頗る疑問である。何となれば現在日本に於て熟練職工と命名し得べき者、極端に謂へば眞に職工の資格ある者は實際に於ては驚く可き少數であつて、實は戰前の工業界ですら尙是等の職工數を三倍若しくは五倍としても尙且不足を訴ふると謂ふ狀況であつたのである。故に今日如何に工業界が急に收縮されたからと謂つて、熟練職工の失業問題の如きは殆有り得可からざる事と自分は信じて居る。勿論此際不熟練職工卽一言にして謂へば素人職工の失業問題は無論或程度迄起り得る。併し是等は戰時に際し我工業界が急激の發展無理な擴張を爲した結果工業に何等の經驗も修養もなき、人夫、農夫、或は樵夫、炭燒きの如き者までも地方から雜し來つた者であつて、一

時的便宜上の職工である。眞の職工ではない。是等の大部分が若し其職を失ふ様な事があつても、夫れは一つの社會問題ではあろう慈善事業の取扱ふ可き問題ではあるが勞働問題の所謂失業問題ではない。是は明かに區別されなければならぬ。さなきだに復雜にして解決困難なる勞働問題に以て來て、此種の社會問題迄も一所に搗き混ぜられる事は絶對に避けねばならぬ。今日に於てすら稍ともすると勞働問題を慈善事業によつて解決し得ると信じて居る事業家、企業家の存在が認められるから、吾人は特に此事を斷つて置くと同時に、今回の休戰によつてよし不熟練職工の失業問題が起らうとも夫れは工業勞働問題と沒交渉である。職工に非る夫れ等の人々が以前の業務に立ち歸れば夫れで宜しい。農夫が一時的職工になつたからと謂つて何故夫れを強いて何時迄も職工にして置く必要があろう、元の業務に立ち歸る事が其人々に取りても安全であり又至當である。同時に今日の如き地方の勞力缺乏に對して最良の調和となる。熟練職工の側から謂つても多數の不熟練職工の入り交る事は遺憾でもあり自己の技能を十分に發揮する上に於ても不都合である。工業界の方面から考へても素人職工の多いと謂ふ事は、決して工業を發達改良せしむる所以でない。一國工業の隆盛は熟練職工の多數に待つ事を忘れてはならないのである。

此點に於ては現今歐洲に於て起らんとし、又現に一部起りつつある戰時工業に從事した職工の失業問題とは大なる相違のある事を注意せなければならぬ。歐洲に於ける工業動員は極めて組織的秩序的に行はれたのであるから、開戰當初に於てこそ素人職工の多數若くは未經驗の婦人勞働者が召集されたのであるが、暫時にして是等の者は必ず一定の職工養成機關によりて一人前の熟練職工たる可き教養を或期間受けて後工場の勞働に從事したのである。而も已に三年以上も一の專門的業務に服したのであるから、戰時工業が立派に多數の男女熟練職工を生んで居る。是等が解雇される段になれば眞の失業問題が起つて來る。現在の日本に於ては上述の如く素人が組織的の養成方法に依つたものでもなければ、又戰亂の影響によりて工業の隆盛を極めた期間も頗る短かいのであるから事實に於て熟練職工が出來て居ない、而も不熟練職工の常として化學工業が勞力を要求すれば其方面の職工となり、若し又機械工業により高給の就職口があれば其方に走ると云ふ風に、職工の移動は殆全く給料によりてのみ支配されて居て自己の技能を發揮して相當の勞銀を得んとする勞働の移動は、其間に認められ得ないから素養を缺くのみならず職工となつて後の修養も出來て居ない。要するに全くの素人である。故に今日の歐米の失業問題を直譯的に日本

に持來つて失業問題を論じ其聲を高めつゝあるのは、日本の工業界を理解せざる者の言であると自分は信じて居る。

要するに今後日本の工業界に起り得べき勞働問題としての失業問題は比較的輕微のものと思はれる。少くも歐米の夫れと比しては職工數が極めて少いから失業者の數も少く、問題の解決は容易であると判斷して大なる誤りがないと考へられる。併し戰時中の工業が殷盛を極めた結果、熟練職工の勞銀が戰前の數倍に達して居るが夫れが戰後に於ても持續し得るや否や、恐らく或時期に於て低下は免れまいと考へられる。其爲めに一時從來よりは多くの失業者が生じ得る傾向は認めなければならぬ。併し勞働の過剩によるの失業ではなくて唯大缺乏が一時緩和された爲めと雇傭者間の意志の疏通を缺いた爲め或は勞銀の低下に對する不平等の原因であつて熟練職工の缺乏は戰前と雖可なり甚しい程度であつたから、決して勞働の過剩を引き起す憂はない。從つて勞働の移動職業紹介等の手段を適宜に講ずる事によりて解決し得可き性質のものである。歐米の如き恐る可き失業問題は有り得べきでないと思はれるのである。

然らば即今後日本に於て起り得可き勞働問題は主として如何なる方面であるかと謂へば、矢張り常に其骨子たる資本家と勞働者との二階級間の利害衝突問題、即階級間の爭鬪が其主たるものと考へなければならない。而して是が解決は最困難な問題である。幸にして從來日本に於ては歐米に於けるが如き甚しい衝突が認められなかつたのであるが、夫れは前にも述べた様に日本には熟練職工の數が少かつた事が其一原因である。何となれば此種の衝突は主として先勞働者が自己の技能に相當した勞銀なり待遇なりを受けざる事を自覺するに及んで起る不平が素因を爲すのであるが、熟練職工の不足は一般に職工が比較的好過され優遇されて居る。即ち工業發展に最必要な素養ある職工の數が少かつたのが其一原因である。故に今後工業の發展に連れ熟練職工の數を增すに從ひ、此種の問題は遺憾ながら解決困難になる傾向がある。一言にして謂へば利害衝突問題の比較的少かつた事は日本の工業界が幼稚であつた賜である。若し其原因を從來日本の社會に存在して居つた主從間の溫情にあり等と考へたならば今後の勞働問題の解決は出來ない。何となれば問を解かんとするに當り其出發點に於て已に大なる誤りがあるからである。

由來我國の勞働問題の解決方法は國體の精美を基礎とし、古來社會に永く傳はり來れる特種の溫き主從間の情誼を一層鼓吹するにありと稱へる者がある。其言や美なり。然らば其實行方法如何と謂ふ事になれば、恐らく宗教家教育家を煩はして其主

義を宣傳させるより外に策がない。是によりて其目的を達し得れば最妙である。問題の解決是より容易なるはなしであるが、同時に工業は今日の大工業廢て昔時の家内工業手工業に復歸せなければならぬ運命となる。封建時代の美しき主從關係と今日の大工業多量生產主義とは、其の根元に於て遺憾ながら兩立し得ない性質のものである。何んとなれば前者は生存競爭以外に超然たるものであるが後者は生存競爭の極致に達した產物である。

日本に於ける古來の主從關係は特種のものである。其間の溫き情誼は今日吾人の憧憬を禁じ能はざる處のものである。併し溫いには溫かる可き理由がある。溫情の涌き出る原因がなくてはならぬ。父祖代々、子々孫々社會上の地位と生活の安定とが保證されて居る主從關係に於て、如何なる冷血漢と雖溫き情誼の起り得ない者があらうか。社會上の無能力者と雖父祖代々の變りなき優遇を受けて居て其情誼に感ぜずに居られるであらうか。一部の農業勞働者が父祖代々甲家の小作人であつて更に生活の不安に襲はれざる事自己の子孫亦然りと謂ふに當つて、何を苦しんで乙家に走る必要あらんや。主從間の溫情掬す可き所以のもの誠に其謂はれありてである。即譜代の主從に於ては偶ま能力劣等の被傭者があつても、其子孫に技能優秀の者現はれて效過相殺する迄主人の側に於て氣を永く待つ度量が必要であると同時に、被傭者は自己の受くる待遇以上の能力、技能を以て父祖若しくは子孫の無能を賠償する犧牲的精神が必要である。此兩者が相ひ合して始めて從來の主從間の溫情が認められるのである。故に生活に餘裕ありて更に不安を感ぜざる、即生存競爭の烈しからざる時代に於てこそ始めて主從間の溫情主義を發揮し得るのであるが、今日の大工業の如き世界の市場を相手として、日進月歩の發明改良を應用し價格低廉にして而も品質優等のものを多量に生產して他を壓倒せんと焦らなければ、自己の滅亡を招く樣な競爭の激甚を極めつゝある際に、資本家に向つて其使用する職工の技能に相當以上の勞銀を與へる待遇を改善せよと迫る事は無理であると同時に、職工に向て古來の主從關係を語り犧牲的行爲の必要を說く事は更に無理である。已に主人の側に於て例へ度量はあつても氣を永く待つて居れば自己の滅亡を招くのであるから止むを得ず不適者を捨てゝ最適者を撰びつゝある際に、被傭者に對してのみ犧牲的行爲を强ゆる事が可能であらうか。

是れ吾人が主從間の溫情主義と大工業多量生產主義とは根本に於て相反する點ありとなす所以である。然らば此兩々互に相反する主義が互讓によりて何等かの一致點を見出し或程度迄兩

者を融和結合し得べきやと謂ふ事になる。

科學を基礎とし、人智の限りを盡し、而して機械力を極度應用したる今日の大工業其物が已に競爭の固りである。新發見、新發明や新學說の創造に日夜苦惱煩悶しつゝある無數の科學者の完成した仕事を、一日も早く生産工業に應用せんと焦慮しつゝある多數の工業家が專門の衆智によりて築き上げられたる今日の大工業は常に一日の安逸を許さないのである。何日何時世界の一角に自己の生産しつゝある物品よりも優秀にして生産費廉價なる工業が現はれないとも限らない。不斷の用意研究改良が必要である。實に大工業其物は人類の生存せんとする淺ましき爭鬪の産んだ一つの畸形である。今度の歐洲戰亂が科學の粹人智の限りを盡して人々相ひ殺したと同樣に、大工業多産生産主義は科學の粹人智の限りを盡くして他を壓倒し、己と競爭し得ざる程度に常に自己を進歩せしめんと焦りつゝあるものである。今日の科學的工業戰に餘裕のある可き筈がない。強いて餘裕を求めた者は失敗の憂き目を見なければならぬ。一歩躊躇した者は生存競爭の落伍者となるのである。此の如き激甚を極むる競爭場裡に溫情主義を注入せんと欲せば、先工業其者の性質を變化させなければならぬ。卽世界を市場とする今日の大工業多量生産主義を捨てゝ、小規模なる往時の家內工業、手工業に復歸せなければならぬ。然らざる限りは溫情主義を以て勞働問題の解決は不可能である。從來の農業勞働問題の經驗を以て我國に比較的新しい工業勞働問題を律せんとする事は無理である。溫情主義を以て勞働問題を解決せんとする者は漸く我國に興り來りたる大工業を萎靡せしむる者である。角を矯めんとして牛を殺す者である。

勞働問題解決の一手段として新たに一つの慈善團體の出現を望む者がある。驚嘆に堪へたる謬見であつて工業の發展に對し危險極まる思想と謂はなければならぬ。吾人は工業發展の一要素として熟練職工の數を增加すると同時に、其實質に於ても向上改良する事の急務を稱道する者である。科學の素養があつて而して自己の職責を十分自覺せる優良なる職工の多數を養成するに非れば日本の工業は世界の市場を相手として發達する事は出來ないと深く信ずる者である。其第一步として職工の地位を向上させなければならぬ。遇するに道を以つてせなければ人才を蒐める事は出來ない、人夫車力駕籠舁の如き低級勞働者が一時素人職工と早替りしたる輩と、熟練職工とを同一視するが如きは工業發展に對し大なる危險である。慈善事業によりて救濟せられる可きは此種の落伍者であつて何時迄も日本の職工が素人職工のみであると考へたならば大なる誤りである。吾人は此種

の職工を極力排斥せなければならないのと同時に、此種の勞働者と熟練職工との判別すらも理解し得ずして工業上の勞働問題を等しく慈善事業の内に包含せしめんとする者は工業を更に理解せざる門外漢であつて、同時に工業の發展を阻害する者であると自分は信じて居る。

工業の幼稚なる時代、換言すれば小工業、手工業の時代にありては、温情主義を以て勞働問題の一解決手段とする事が出來るが、今日の大工業多量生産主義に向つては到底其效力を認め得ざるのみならず、反つて工業を退歩せしむる性質のものである事前述の如しとすれば、我國今後の勞働問題は工業が發展すればする程、其隆盛の一暗影として解決困難になる傾向がある。若し是を未發に防止し得れば最結構の事であつて、此目的に向て各方面よりの研究が必要である。從來經濟學者、社會學者等にのみ取り扱はれて居つた問題であるが、今日の工業の性質其物を根柢から理解し居る人士の研究も大に必要である。此點に於て工業家技術家の團體なる工政會が其調査を開始した事は大に人意を強ふするものである。同時に工業の資本家團體たる工業倶樂部も又其調査研究に着手しつゝあるのは慶賀す可き現象である。併しながら是等人士の職工觀は夫れ〴〵自己の經驗のみを基礎とする事によりて異り得る慮れがある。即機械工業と纖維工業に從事した事業家の職工觀には其間に大なる相違があり、更に又化學工業、鑛業、造船工業を經營した人士の職工に對する觀念は、其間に大なる相違があらねばならぬ。略言すれば工業の種類によりて熟練職工を要求する程度に大なる差がある。一般に機械工業は最盛んに熟練職工を必要とする工業であつて、一人の良職工は十人の素人職工よりも更に大切であるが鑛業の如きは夫れ程の差異が認められないのである。故に今後の勞働問題を攻究論議するに當りては稍複雜になる嫌ひはあるが職工組合問題の如きは專門によりて區別する必要があると思ふ。

職工組合の設立の如きは今日急務であると自分は信じて居る。職工組合は決して勞働者の爭鬪手段にのみ供するのでないから如何に少數でも宜しい、各專門に分れたる健全なる組合を組織して一日も早く熟練職工の團體を作らなければならぬ。其の地位を向上せしむる點に於ても、勞働の移動職業紹介を迅速にする點に於ても、或は又一旦有事の日に於ける工業動員を完成する點に於ても職工組合の出現は大なる必要に迫られて居るのである。

是等の問題は他日に讓りて自分の言はんと欲する處は勞働問題解決の一助としての工業教育制度である。否解決の一法に止らず工業を隆盛ならしむる點に於ても工業教育制度は此くあらね

ばならぬと信じて居る處を披瀝して世の敎示を仰ぎ度いのである。

現在の日本の工業教育機關には大約五階級がある。其程度の最低いのは主に大工場内に設けられて居る徒弟學校の類であつて、多くは自己の工場に使用す可き職工の養成を目的として小學校卒業程度の徒弟を收容して居る。故に其設備課程等も各工場若しくは會社によりて區々であつて其間何等の統一がない。學校によりては可なり程度の高いのがある。次には學校によりて種々の名稱はあるが要するに小學卒業後三年位の修業年限を有する工業學校であつて、是等の者は何れも熟練職工の若くは工手の養成を主眼として居る。此外更に中學程度を標榜する工業學校がある。其目的とする處は技手階級の技術家の養成である。次に高等工業學校若しくは專門學校があつて中學卒業後三年或は四年の修業年限によりて技手、技師等の高級技術家を養成して居る。更に其上の程度として帝國大學の工科大學がある。

以上の如く我國の工業教育制度の複雜なる事は寧ろ驚く可きものであつて、要するに過渡時代の亂雜なる狀態にあると見なければならぬ。其結果として吾人の常に弊害として指摘するのは技術者間に多種多樣なる階級が出現して一の階級から他の高級なる階級に進級する事が容易でなくなるのみならず、或場合には絕體に不可能となるのである。即今日の工業界にありては各個人の技能、人格、學術等によりて地位が作られるに非して學校時代の修業年限の長短に支配される事が多い爲めに、適材が適所に置かれずにある場合が多くなるのである。今日の大工業多量生産主義は一日の安逸を許さない、不斷の努力が必要であつて絕へず改良進歩を計らなければ工業の衰微を來すのが常である事前述の如しである以上、職工から高級技術者に至る迄各其技能に應じて適材を適處に置き出來得る限りの能力を發揮せしめなければならぬ。同時に各自が自己の職分に滿足し而して向上の希望を以て自己の從事する事業の改良發展に努力するに非れば工業の繁榮は望まれないのである。

然るに事實は是と相反する工業上の發明改良が一つの工場に於て成功した場合にも、其發明者或は改良者が職工であるのと工場の主腦者であるのとに於て其表賞に大なる相違がある。特に此弊は陸海軍の工場に於て甚しい。發明改良の實質よりは先其人の階級如何が問題となると云ふ馬鹿々々しい事實は日本の工業界の常である。是は一例に過ぎないが此種の觀念が工業界に存在して居て如何にして工業の發展隆盛が期せらるべきや。學術上の發見には人種もなく、國境もなく、階級もなく年齢もなく、唯其發見其物の實質によりて價値が定る如く、工業上の發

明改良も亦此くあらねばならぬ。それが發明改良を奬勵し工業を進歩發達せしむる途である。若し工業界に職工階級、工手階級、技師階級、重役階級の如きものが嚴存して、互に相容れざる様になれば其進歩發達は止んで世界の競爭裡に廢殘の憂き目を見るものと覺悟しなければならない。故に熟練職工中の優秀のものは、易に職工長或は工手となり得る途が好く開けて居らなければならぬ。技手階級から技師に昇級する場合に於ても更に高級技術者が其人の技能其他によりて工場の主腦者にも工業の經營者資本家の側にも其好む處望む處に入り得る途は開けて置かねばならぬ。適材が適所に著き得る途が容易であると否とは工業の進歩發展に大なる影響がある。吾人は工業界の各種の階級を打破せよと叫ぶのではないが學校教育によりて階級を造り出す事は大なる罪惡であると自分は信じて居る。

勞働問題の骨子は常に階級間の利害衝突である。階級間の爭鬪が勞働問題の主因であると謂ふ事も出來る位であるから豫め利害の衝突を避け爭鬪の起らない様にするには階級間の意志の疏通が必要である。而して各階級間に嚴然たる區劃を設くる事なく個人の技能其他によりては常に一の階級から他の階級に進み得る途を十分に開き置く事によりて一層意志の疏通を良好にし、各個人の不平を少くする所以である。階級間の爭鬪は多くは自己の屬する階級より到底脱却する事を得ざる不平に歸因する事が多い。相當の技能實力を有しながら唯其經歷、出身によりて社會が強いて或種の階級に押し込め置く事から起る不平は遂に其階級の他の者を誘ふて階級戰を引き起すに到るのである。而して此の如き自覺は今後職工教養の程度が高まる程明かになつて來る。即前にも述べた通り工業繁榮に伴ふ一の暗影である。故に優良なる熟練職工に向上の途を開く事は一の奬勵法であつて、同時に階級間の意志の疏通となり工業を發展せしむる所以である。此意味に於て高級技術者の教育も今日の如く高等工業學校若しくは專門學校と、帝國大學との二種にする事は大なる不利益である。同種同型の人物を二重に養成して強いて人爲的の階級を作りつゝあるに過ぎない。

日本に於ける大學程度の工學教育課程が如何に高等工業學校の夫れと重複しつゝありやと謂ふ點と、其方針に於て從來兩者共相誤り來りたる事とは、已に多くの機會に於て述べた處であつて拙稿「工業教育私見」中にも委く說いたから今爰に再び論ずる事は避けるとして、此兩者は一團と爲し得る性質である。又一階級とせなければならぬと信ずる者である。唯近來の大工業の要求する研究技術者（リサーチ、エンヂニアー）の養成は別の機關を必要とすると考へて居る。

現在の工業教育制度にありては要するに職工職工長工手技手と云ふ樣な階級の技術者をも夫れ々々學校教育によりて作り出しつゝある。唯學校に於ける修業年限の一二年の差によりて强いて人爲的に是等の階級を造り出さんとしつゝあるのである。是は實に今後の勞働問題解決に對して非常なる障害を爲すのみならず、先きにも述べた如く優秀の技能を有する者と雖其學校に於ける經歷によりて進級が不知の間に阻害され、從つて工業の改良發展に大なる妨害をなしつゝある。元來日本の學校敎育其物が何も彼も學校時代に注入し盡さんとする傾向があつて社會に出て後の自發的研究修養の點に重きを置かない。即基礎學課に重きを置かずして直ぐに間に合ふ人間を作らんと焦る傾向がある爲めに、工業で謂へば技手階級の養成を目的とする學校を出た者は終世技手階級に終らざるを得ざる缺點がある。個人の卒業後に於ける向上發展の基礎を造る事を怠つて居る。

嚴密なる科學を基礎とし、精密複雜なる機械力に依る現在の大工業は素養あり學問ある熟練職工に非れば十分の能率を發揮し得ないのである。今後我工業界の要求する熟練職工は其素養に於て中學程度の工業學校を修業したる者でなければならぬ。現在に於て此種の職工は其數甚少い爲めに止むを得ずして徒弟若しくは不熟練職工によりて補はれて居る。故に敎育ある熟練職工の多數を得ん爲めには職工の地位を向上せしむる事も第一に必要であるが同時に熟練職工中の優秀なるものは大なる困難なくして職工長となり工手となり技手となり得る途を開けて置く事が必要である。實際に於ても中學程度の敎育を受けた職工が數年の經驗を積む時は已に立派なる中等技術家即技手としての實力が養成せられて居る。又此種の技手が工業界の中堅となるに非れば不可であつて今日の樣に二三年の學校敎育で間に合せの技手、學校出たての技手は、寧ろ有害である。故に工業敎育制度に於て中等技術家養成機關を廢止せよと叫ぶのである。其必要がないのみならず有害であると信じて居る。即工業敎育は二つの程度に整理せなければならぬと考へる。一は高級技術家、工業經營者等の養成を主眼とする大學程度の工業學校であつて全國の高等工業學校若しくは專門學校工科大學として七年中學卒業生を收容する。此の如くなれば帝國大學の工科大學は全く同程度のものとなる。從つて殊更らに帝國大學内に工科大學を置く必要はない、現在の工科大學は全然廢止するか若しくは全く別の目的のものとする事が必要である。全然別箇のものとは工業技術家の養成に非ずして研究家學者の養成に當るのである。即理科大學の一部としても或は應用理科大學と稱へるも宜しいが何れにしても理化學の進歩に從ひ日々現はれる新發見

新學說或は學術上の發明等を、如何に今日の大工業に應用す可かを研究する純研究家の養成機關たらしめよと謂ふのである。

以上の如く從來比較的閑却されて居た熟練職工の養成に力を盡して教育あり素養ある職工の多數を日本の工業界に送り出す事に努力する事は工業發展の急務であると同時に勞働問題解決の一法として職工の地位を高め向上の餘地を作つて其優秀なるものを容易に進級せしむる途を開かなければならぬ。と自分は信じて居る。勿論是を以て今後の勞働問題を解決し得たりと謂ふには非ず少くも其一歩である。此の如くして初めて健全なる職工組合の設立も可能となるし各種の勞働保險例へば疾病保險災害保險失業保險老廢保險の如き制度を設けて其解決の一助となすが如き、或は資本家と勞働者との爭鬪の和解仲裁制度有理なる賃銀制度を設くる事も出來るのである。要するに理解なく自覺なく素養なき素人職工を相手にしては如何なる設備制度を設けても勞働者の利益、幸福の增進を計る事も出來ず、さりとて工業は何時迄も幼稚にして發展の餘地がない。偶問題を醸すともそは單に附和雷同に過ぎずして徒らに社會の時變を繁くするに過ぎず、其結果は勞働者も資本家も何れも何等得る處なくして終るのである。併しながら若し教育ある職工の多數を作つて夫れを何時迄も勞働者階級に押し込め無教育勞働者と同等に待遇せんとせば必ずや不平の勃發は免れない。是は反つて勞働問題を紛糾させる所以である。

工業界が未幼稚にして小工業の時代には職工個人の向上發展が自然比較的容易に行はれ來つたのである。例へば鍛冶屋の親方が二三の徒弟とか年期工を使用して居ても、是等の者が相當の技能を修得し多少の貯蓄を爲し得れば更に獨立したる一個の鍛冶屋を經營し得るが如き、常に希望を以て自己の業務、勞働に服して居る事が出來、夫れが一つの大なる奬勵となり又不平をも生ぜずに居る。機械工場の如きも今日東京に無數に散在する所謂町工場の如きは、殆其凡てが熟練工中の向上發展の精神盛んな徒が始めは僅一二臺の足踏み旋盤を以て獨立して業務を開始したものである。夫れが漸々隆盛になつて十數萬若しくは數十萬の資本を有する機械工場となつた。職工から資本家階級になつた人士が甚少くなく是等は皆夫れ〃〃日本の工業に大なる貢献を爲して居る。故に從來技術者間に學校教育、修業年限による人爲的の階級が存在して居ても、發展し得る職工は何處迄も自己の運命地位を開拓して行く事が出來た樣な觀があるが、こ夫れは少數の成功者のみを見た事と尙一つには今後工業の規模が大きくなり益大工業多量生產主義が盛んになるにつれて前記の樣な事實は益困難になる。即勞働問題の自然的調節が六ケ敷

なる事を忘れてはならない。故に自分は日本の工業教育の根本主義としては教育ある職工を多數に養成し同時に技術家も職工も優秀なるものは何處迄も自己の腕一つで進み得る途を開け置く事にありと信じて居る。

憲法發布後正に三十年

文學博士 三宅雪嶺

明治二十二年紀元節に帝國憲法が國民歡呼の中に發布せられたのは、頗る芽出度しとすべきと同時に幾分の遺憾無いとせぬ。利ある處何等かの害が伴ふ。大抵憲法は上下紛爭の後に發布せられ、憲法は血を以て得られるとするに、我國は大御心を以て早く發布され、無事平穩に過ぎて來た。明治六年廟堂が分離し、辭職者の多くが民選議院設立を建議してから多少の騷擾あつたが、十四年に二十三年を期し國會開設の豫約があり、次いで憲法制定事業も進行し、官制も改革せられたので、騷ぎがあつても大な騷ぎにならず、詰り十六七年の自由民權運動で事が定つた譯になる。明治二十年保安條例執行など實はなくもがなの事であつて、政府で騷いだ程の騷ぎでなかつた。歐洲に於ける憲法發布と同列に看做す事が出來ず、夫だけ溫室咲きの花に似た所がある。形が整ひ、色も佳けれど、野生で風雨に堪へるのと違ふ。

憲法發布前憲法に就て相應に議論があり、主權は何處に在るか、議院は一院にするか二院にするか、可成に議論沸騰したが、一般民衆は別段に準備なく、其内に憲法發布と云ふ事になり、夫で何事も落着した。欽定憲法で誰も異存が無く、異存あつても、致し方ないとして諦める。如何に天降り憲法で事が決定したかは、當時各書林で待構へて出版した憲法註釋書類が、一二を除いて悉く損失に了つたのでも察せられる。肝要なる法律、肝要なる條例の註釋書は書林の儲け口となつて居るのに、憲法註釋は斯の如き有樣であつた。一二を除くと云ふのも利益と云ふ程の事あつたのでなく、損にならなんだのに過ぎぬ。さる例は餘り無からう。實に世間で註釋書を讀まうと思はず、憲法發布で澤山としたのである。

幾何もなく伊藤伯著の名で「帝國憲法義解」が發賣になり、之を讀みさへせばよいといふやうな有樣である。今から考へれば他愛もない次第であつた。今ならば欽定憲法でもいろ〳〵と取調委員を選定するであらう。眞に欽定憲法として臣民の喙を容るべからざるものとするには、教育勅語と同じく何人が起草したかを明にせぬのが普通の順序である。教育勅語を何人が起草したかを明白にすれば、人の之に對する觀念が今日と同じであらうか。憲法は之と違ひ、紀念館もあり、何人が如何に擔當したかは、夫れ〳〵知るべき事になつて居る。親裁を仰いたのであるけれども、起草者が分つて居る。夫れで文句なしに濟み、文句を言ふべきでないと思ひ込んだのは、求めるよりも與へられたからである。與へられたのは洵に結構であり、夫で平穩に國運の發展を見るを得たが、與へられたのは受身である。我に自由を與へよと奮起するのと違ひ、意氣込が足らぬ。どうとでも宜しくと云ふやうな所がある。憲法は伊藤伯著の名で義解を公にされても、解釋は人々の自由であり、異なる解釋を下すに難しくない。其義解をさへ爭ふべからざるものなるかに認めたのは、よく〳〵受身の態度である。今から見れば「憲法義解」は解釋も文字も缺點が多く、中に甚だしい所がある。夫で濟んだとは皮肉のお芽出たさである。

而して學理上に註釋するは帝國大學憲法學教授の擔任する所となり、其解釋は主として獨逸思想に基き、剩へウイルヘルム一世の下にビスマルクが大宰相として希望せるが如き思想の系統に於てして居る。獨逸聯邦二十幾個大學の教授中政治に關する種々の意見があり、中に氷炭相容れぬやうなものもある。けれどもビスマルク及び其後繼者の意に叶ふ通りにするのもある。之れ亦當時の獨逸にあつて必要な事であり、强ち旨を承けたとして咎むべきでない。新に勃興した帝國を維持し且つ發展するに、夫れ相應の教育を要する。旨を承けずして旨を受けたと同樣になる事もあらう。況して旨を承くるの利益あるに於ては、利に拔目ない獨逸人の看過すべき所でなく、殆んどカイゼルの神權に說き及んだりする。何にせよ日の出の勢なる獨逸帝國は爲る事成す事皆成程と感心させる。佛國は最早や衰へる一方であり、英國も下り坂たるを免れぬ、政黨内閣だの輿論政治だの列國競爭の時代に無用の事と思はれる。米國の如き、別世界で夢見るものとせられる。何でも獨逸の通りにせば間違ないとし、之に適する政治論によつて我帝國憲法を解釋するのは、元老及び准元老に於て覺え芽出度いのである。我國帝大教授中にも異論ないではなけれども、官吏となるもの丶多くは其思想系統で養成されて居り、之と異つた解釋は力に乏しい。

而して獨逸と政治的行動を異にし、政黨內閣を企てる者も、憲法の解釋に於て所謂官僚なる者と爭はうとせぬ。議論に於て敗ける様な氣がするらしい。御用學者と云ふか何と云ふか、憲法の解釋は其爲すが儘にする外ないとする。大權の發動を振り翳さるれば、不平の色を露にしつゝ默して終ふ。議論となつては敵はぬと思ふ。政黨內に憲法の解釋に長ずる者の無いが上、政權に近付くに元老の不快を買つてならぬとか、官僚と妥協するのが捷徑であるとか、觸らぬ神に祟なしと云ふやうな事をも考へる。反對黨として何でも反對し得る側でさへ、憲法論となつて十分に太刀打する自信がない。世界に最も勢力を伸しつゝある獨逸帝國の大學で仕込んだ腕前に敵はぬと思ひ、下手な事云ふて嗤はれぬ方が利益であるとする。衆議院が其調子であり、貴族院は獨逸以上に獨逸的にならうと望む者が多く、其儀自由民權の語が全く消滅する姿になつた。

自由民權と云へば時代遅れの甚だしいものと聽へる。從て憲法發布後三十年を經、議會は四十一回をも重ねたけれど自由の認識が極めて乏しく、自由を口にする者が有るか無しかである。之を口にすると嗤はれる恐れがある。立憲政治の下に自由を口にして嗤はれるとは、奇と云へば奇、然し目のあたりに見る事實である。斯くて自由は果して過去の空想であるか。歐米で自由の爲めに血を流したのは無益の業であるか。佛英米が獨逸と戰ふに臨み自由の爲めと叫び、殊に米が自由一點張りと見えたのは何であるか。彼等が自由を認むる事、我日本人の考ふるに苦しむやうな事もある。日本でも自由の爲めに戰ふの必要あつたならば戰つたであらうが、其處は大御心の有難さ、戰ふの必要が無かつた。必要が無かつた丈け今も自由の何たるやを了解せぬ嫌がある。然し其爲に求めずして與へらるゝものと思ひ込んで居る。選擧權が人口の四十分一に足らず、英國の女性選擧人の四分一であつて、尙擴張するに冷淡である。法律の下に自由を得るとて法律の如何なるものなるかを顧みぬ。今の律は司法大臣の命を聽くべき檢事の爲すが儘であつて、檢事が許さうと思へば許し、捕へやうと思へば捕へる。檢事の威嚇が恐しいといふのは、殆ど何事をも爲し得るからである。其處で陪審制度にせねばならぬ。陪審は缺點があり、參審にすべきであるといふが、容易に行はれさうもない。行はれさうもないのは、一般民衆が自由を認識しないのに由る。

自由を認識しなければ、何人が如何に壓迫し來つても、御無理御尤もと頭を下げる事になる。實際頭を下げれば事が濟む。事が濟めば簡便である。餘計な爭するに及ばぬと思はれやう。けれどもかゝる調子で過ぎ行つてよいか如何か。御無理御尤もで

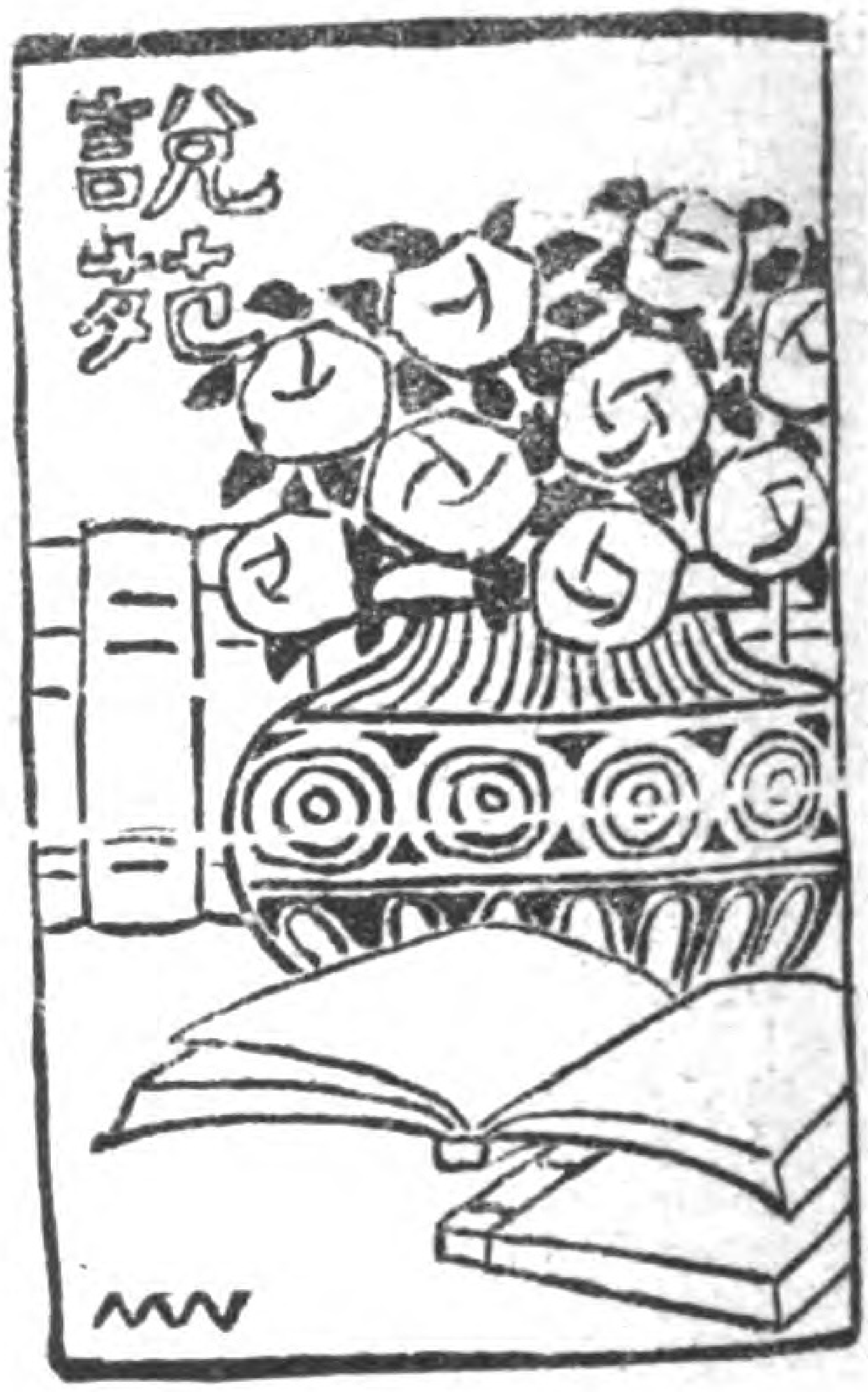
服從する羊の群で、虎狼と爭ふ事が出來るか。羊も奮發すれば牛に匹敵する力が出る。我日本人が柔順なのは惡くない。服從すべきに服從するは一の美德である。けれども權利を解せぬ者は眞の義務を解せぬ。奴隷的服從と任意的服從とを區別することが出來ぬ。自由の精神あるものならで十分に己れの能力を伸ばし得るのがない。己れの能力を伸さぬ者が幾千萬人集つたとて國力の大いに擴大すべき筈がない。

アングロ・サクソンの自由の聲を以て空想に憧れるとしては間違ふ。之れ自ら自由の精神を具へず、自由を體得し得ぬからである。アングロ・サクソンにも自由を體得せぬのがあり、自由の無意義なるを說く者も居るけれど、之を無意義とするのは、何事を有意義とするか。之を無意義とするのを受け賣りする者は更にとくと考ふるがよい。アングロ・サクソン國では時として自由の弊に堪へぬ跡がある。一層節制を加へるを必要とする事がある。然し自由の弊どころか、自由の何たるを解せぬ民族に在つては、之を解し之を體得するやうに導いて然るべきでないか。過ぎたるは良くなく、及ばざるも良くない。及ばさるの甚だしいのは愈々良くない。我日本は憲法發布以來三十年、相應に經驗を積み、五大强國の一として講和會議に列し、政治に於ても、文化に於ても、大に他に劣るとせぬが、獨り自由の精神は何うであるか。自由の聲を聞いて奮起する者が何處にあるか。自由を叫べば時代遲れの狂人と思はるゝではないか。

我日本人は割合に解りがよく、必要と知れば其の具へをする。今の憲法政治は形整ひ魂薄いと見れば、其魂を濃くするに努めよう。畫龍點睛の肝要なる事を知つて居る。憲法發布三十年紀念を祝賀するに臨み、自由を體得し、各自の能力を發揮し、國家及び民族の力を伸ばし、世界人類に貢献するやうにすべきである。

葛飾の百姓八右衛門北齋

野口米次郎



彼は時の将軍家齊の前へ一羽の鶏を持ち出した。横に長く擴げられた唐紙に刷毛で藍をなが〳〵引いた、而して持つて來た鶏の趾に朱肉を付けてその唐紙の上に放つた、——見よ、鶏の趾痕は立田川の紅葉で候とて拜一拜してまかり退いた。……

彼は名古屋西掛所本堂の前へ疊百二十疊敷大の紙を擴げた。面書の筆は藁の一把。月代や髭を描く毛書の筆は蕎麥一とからげ。又衣紋を描くには俵を崩した薦五筒をよせた程の藁筆。而して大な桶になみ〳〵と入れた墨。襷を掛け袴の裾を高く取りあげた彼は晝過ぎから目的の繪を描き初めた。鼻から眼夫れから口、耳、頭と順々にかいて墨曲を取つたり又彩色をするに彼は櫻櫚箒を用ゐた。そして餘りに濡れて紙が濕りすぎた時、彼は門弟等に命じてそれを雜巾で抑へさせた。夕方になつて大達摩の繪は出來上つた。彼は杉丸太の上に仕掛けた小車でその繪を七間ばかり引上げさせたが、まだその半分は地面を離れなかつた。翌日この前代未聞の大達摩を見んとて打寄せた貴賤の群集は蟻のやうであつた。……

彼はまた米へ一粒雀二羽といふ恐ろしい細かい小な繪も描いた。彼は普通にかいた外、逆にも又横にも又指頭でも繪を描いた。更に又彼は筆でばかりで無く、鶏卵や升や德利や何んなものでゞも意想外な繪を描いた。僕はこの大道藝人的な人を馬鹿にする charlatanism の彼を愛する。(彼は北齋である)

俳優梅幸(三代目菊五郎)がある日輿に乘つて來て彼の家を訪

ふた。彼に煙草盆や茶の用意は無く掃除したことが無かつたので部屋は芥溜同様であつた。梅幸は輿中の毛氈を持つて來て彼の座る所へ敷いた、――この無禮者めと瞰んで一語も發せず梅幸を振向ふともしなかつた。……

梅幸はその後彼と交際することが出來た。一世一題の芝居東海道五十三次を舞臺に上した時、彼の一覽をうや／＼しく請つた。時は夏の最中。彼は貳朱の金を得る爲め毎晩用ゐる蚊帳を賣拂つた。その貳朱を懷中して劇場へ赴き芝居を見てから、ほんの寸志だといつてそれを紙に包んで梅幸へ與へた。而して彼は悠々といゝ氣分になつて蚊帳の無い本所石原の家へ引上げた。僕はこの氣高い誇りで滿ちた『百姓八右衛門』と門に名刺を貼つた彼を愛する。(彼は北齋である。)

馬琴は彼に同情を持つた(挿畫の問題から彼等兩人は遂に絶交するに至つたといふことであるが)、何年何月のことだか知らないが、馬琴は彼の母の年回に佛事費用の足にとて香奠許千金を紙に包んで與へた。その晩彼は馬琴の面前で紙で鼻をかんで側に捨てた。これを見た馬琴は怒つていつた、『それは今朝僕が君にやつた香奠包の紙ぢやないか、てつきり君は金を無駄づかいして仕舞つたらう、――不孝の奴め!』彼は笑つていつた、『僕は君が呉れた金で旨い物を食つた。生臭さ坊主にわざ／＼經を讀ましたとてそれが必竟何になる、――世俗の虚禮以上で無い。身體を養つてせい／＼長命するのが父母の遺體を受けた人間の義務ぢや無いか。』……

幕府の御用達鶴の屋某ある日人に連れられて畫帖の揮毫を乞ふため彼を訪問した。彼は其時南向きの廊下へ出て虱を捫つて居る際中であつた。彼はいつた、『目下さし迫つた急用があるから繪は描けない。』而して彼は頻りに着物の裏をひつくり返へして虱を詮議した。兩人のものは彼の家を出て顏を顰めて振返つた。彼は叱鳴つた、『人が僕の家のことを聞いたなら、素敵に綺麗なもんだと答へ給へ。』……

彼は一生赤貧であつた、特に年若い時分には一脚の机すら無く飯櫃をそれに替へて板下を描いた。その當時の畫料普通は繪本類一丁金二朱(十二錢五厘)以上でなかつたが、彼は一丁金一分(二十五錢)を貰らつて居たのでそう衣食に事缺く筈は無い、それだのに彼はいつも貧乏であつた。彼は貧乏を少しも苦にしなかつた。彼の金錢に淡白なこと實以て驚くべきであつた、――彼は畫料など中味さへ見ずに袋の儘ほうり出して置いた。米屋や薪屋の催促に遇ふとその袋の金を手當り次第、なかに何程入つて居るかも知らずに投げだしたものであつたそうな。……

彼は部屋のなかに『おじぎ無用』『土産物無用』の大な文字を貼

けて置いたそうだ。僕はこの下らない風俗習慣に軽蔑の唾を吐掛けた自由思想家の彼を愛する。僕はこの磊落不羈な瑣細主義を離脱した如何にも偉い彼を愛する。(彼は北齋である。)

『己六歳より物の形狀を寫すの癖ありて、半百の頃よりしばしば畫圖を顯はすと雖も七十年畫く所は實に取るに足るものなし。七十三歳にして稍禽獸蟲魚の骨格、草木の出生を悟り得たり、故に八十歳にしてますます進み、九十歳にして猶其奧意を極め、一百歳にして正に神妙ならんか、百有十歳にしては一點一格にして生るが如くならん。願くは長壽の君子、予が言の妄ならざるを見給ふべし畫狂老人卍述』と彼は富嶽百景の跋に書いた。この言葉が英語になつて "From the age of six I had a mania for drawing the forms of things. By the time I was fifty I had published an infinity of designs; but all I have produced before the age of seventy is not worth taking into account. At seventy-three I have learned a little about the seal structure of nature, of animals, plants, trees, birds, fishes, and insects. In consequence, when I am eighty, I shall have made still more progress; at ninety I shall penetrate the mystery of things; at a hundred I shall certainly have reached a marvellous stage; and when I am a hundred and ten, every thing I do, be it but a dot or a line, will be alive. I beg those who live as long as I to see if I do not keep any word. Written at the age of seventy-five by me, once Hokusai, to-day Gwakyo Rojin, the old man mad about drawing." 堂々と、歐羅巴へ乘出すと彼地の畫家の心を嚴粛の感で戰慄させた。……生眞面目な英語で盛られて來ると日本語にくつ付いて居る滑稽的誇張が不思議に浮付いて來る。

彼が歳九十で死に瀕した時、『僕はもう十年生きたい』といつた。それが到底駄目だと成つた時、彼は『もう五年の命でいゝ、——本當の畫家となつて見せるだがな！』と深い嘆息を洩らした。僕はこの渾身悉く繪畫の彼を愛する、——否な畏敬する。

彼は葛飾北齋である。

僕が北齋のことを考へると、寐靜つた巴里のどん眞中で大な眼を開いて今や煮へ返らうとして居る珈琲壺をじつと見詰める市民バルザック（彼は坊主のやうな白いフロックを着て自信ある參事會員よろしくといふ態度で座つて居る）が眼前に顯はれて來る。バルザックのことを考へると、今度は臺の上に座つた大な大理石の塊や臺の下にころがつた粘土の塊の間を深い根がある大木でゝもあるかのやうに歩いて居る、廣い額の眞中で中程に

節がある粗野な太い鼻のロダンが顯はれて來る。この三人が顯はれると僕の書齋は直に嚴粛な空氣の修道院のやうに靜まり返つて、今まで狹苦しかつた八疊間がいつの間にか果てしも無い程な大廣間と變つて來る。僕はこの三人が相識の間柄であるか何うかは知らぬが、彼等の沈黙は決して餘所〲しいもので無く鍊磨された強烈な動いた心の響で互に話しやつて居るかも知れぬと感じた。然し面前にこの三人を控かへて僕は一種の壓迫を感じて、一寸顏を側らにそらした。而して再びもとの場所を見返へると三人は最早や居なくて、其處に三箇の大な山が殘つて居るのを發見した。

バルザックも山。ロダンも山。又北齋も山である、——山のやうな人間である。北齋は天保二三年の頃、信州高井郡小布施村で高井某の家に厄介になつて繪を描き、一年の滯在からいよ〲發足する時彼は、『八の字のふんばり強し夏の富士』の一句を吐いて壯者を凌ぐ自分の壯大な意氣を示した。彼等三人位勢力ある意志の人間は無い。僕はゴチエーから『力強い顏の表情はラブレー式哄笑の一種である』と聞いた。彼等三人に實際的なラブレー式哄笑があつたか何うかは知らぬが、少くも人格の上で北齋はその哄笑を持つて居た、——弘化年間に兩國邊で催された、三代目豐國の書畫會は雨天であつた、彼は蓑笠に草鞋をはいて葛飾の百姓が參り候といつて遣つて來たそうだが、その行爲のうちに何んなに痛切な人生と藝術に對する哄笑が匿くれて居るであらう！

僕はどこかでバルザックを『鐵道工夫の筋力を持つた樂しい野猪（ボーア）の人間だ』と評した言葉を讀んだことがあつた。僕はこの評言をその儘北齋に適用されると思ふ、——實に北齋は『樂しい野猪の人間』であつた。此種の巨人は『完成』といふ外面的迷信を望むのは無理だ。此種の巨人から精緻な仕上げの完成を恐ろしく嫌つて、未成的暗示に對する不思議な愛人（ラバー）である。北齋は艶に淡いお伽噺の春信で無く、又酒肉の理想境を司つた情調の詩人歌麿でも無く、彼は宇宙を睥睨する代赭色の塊『凱風快晴の富士山の北齋である。彼はキーツ一派の甘やかな愛戀に對する米國のウヰトマンの如く、日本の浮世繪界へ過剩な好奇心を地金の儘撒きちらしたと評することが出來る。バルザックは頁や章や句で書いた愚圖〲した文學者で無く、本全體を一度にうち出した『製造機關』であつた。フエノロサが北齋を評して『スケッチの淫蕩者』だといつた時、正しく北齋を繪の製造機關と見て居たに相違無い。森羅萬象描いて居らぬものが無い繪の百科全書『北齋漫畫』を見給へ、如何に現實的生活の豐饒な生まな材料が性急な激烈な方法で鑄出されて居るであらう。何んな

北齋が纎細優美な伎工を用ゐた場合でも、僕はぬつと後ろに見へる太い嚴丈な毛だらけの腕を注意しない譯にいかない。彼の壯麗のなかには短氣な氣分が蟠つて居る。その爲め彼の繪の大部分は野卑だ、無反省だ、我儘だといつて退けられる。又彼の經驗も無趣味な貪欲に過ぎないともいふことが出來る。然し又バルザックやロダンに於ける如く、彼に無邪氣な顫動した力があつたのも其點にある。彼は單に藝術的現象でない。彼は瞬間的、と永久的とを無意識に結付けた表象である。若し彼を人生の藝術といふことが出來るとすると、それは日本及び日本人の自覺といふ意味で了解せねばならぬ。實際彼は德川末期時代に見た物象の總目錄又經驗の總勘定である。

よく藝術の批評家は原始的といふ言葉を用ゐる。今この言葉を北齋に適用して見るに、――原始的藝術は是認するか否定するかその何れにか屬すべきものとすると、確に北齋の藝術は原始的である。又批評家は藝術の原理といふ言葉もよく用ゐる。北齋は彼獨特の原理から藝術を眺めたけれども、その爲め旺盛な生氣を不自然に不毛なしめる程しかく彼の藝術的人格は小なるもので無かつた。彼は單に紙の上の藝術家となつて仕舞ふには、彼は餘りに生きた人間であつた。ある人はバルザックを論じて「眞實な詳細をかき集めて莊嚴な虛僞を書いた」といつた、――僕はこの評言を愉快な言葉だと思ふ。而して北齋の住んだ藝術の世界も"An august lie, true in its details"の世界であつた。彼はこの「詳細的に眞實で全體的に虛僞な見世物」として彼の時代の世相人生を見て、その結果を餘り性急に表現しやうとしたので、完全な調節を正すことが出來なかつた。

彼はArt for Art's sakeに墮するには餘りに眞實な人生に接近して居た。今日彼の收入の程度を測る資料が無いが、一生赤貧であつたものと見て間違ひがない。彼が出版者蔦山房小林に贈つたある手紙のなかにこういふ文字がある、『誠に今日は囊中一文も無御座候。引越後大不工面故、何卒少々に御座候得共、こ△一丁半畫料十八匁、△日光名所の扉の畫料七匁五分、〆而十八匁と南一片。但し本所は兩替むづかしく候間不殘鳥目にて御貸し可被下候。婆娑に住む弱なき鍋のつる切れて救ふ菩薩もあらじと思へば。右の體たらく御一笑可被下候。』又僕が想像で、あらい手織木綿紺絣か何かの着物の上に柿色の袖無し半天を引掛けて、手に六尺有餘の長い天秤棒然たる杖を持ち、法華經普賢品の呪文阿檀地(アダンダイ)を唱へ乍ら大道を歩いて行く年取つた北齋を眼前に浮べて見ると、如何に彼が痛ましい現實に生きて居たかゞ容易に推察せられる。何んな大畫家で彼があつたとしても、彼に對する人生は銅錢以上の多くの意味を持つて居たに相

違無い。

又彼はこういふ挿話を殘して居る、いつの頃であつたか江戸へ來た和蘭の船長から彼はその當時の世相一班を二卷に納めて金百五十圓の謝禮を得た。彼はまた船長附屬の醫師からも同じ注文に接してその二卷を描き終つて早速その醫師の許へ持つて行つた所、醫師のいふのに『僕は船長と異つて薄給の身だから半金の七十五圓にまけて貰へまいか。』北齋は怒つた、そしていつた。『そうならそうと最初に其事を何ぜ云はぬ。畫題は同じでも彩色等を省けば七十五圓でも描上げられる。今この二卷を君に七十五圓で賣ると、船長はきつと僕が法外な價を貪つたと思ふに相違あるまい。まけることは出來ないから持つて歸へる。』醫師がまたいふのに、『それでは二卷の中一冊を七十五圓で置いて行つて與れ。』『北齋はそれも成らぬと憤つてすご／＼家へ依賴で描いた繪本を持つて歸つた。彼の女房がいふのに、『成程あなたの怒るのは尤もだが、この繪は別に珍らしくも無いから江戸で賣らうとしても買手はあるまい。何故あなたは七十五圓に負けて遣らなかつた。こんなに貧乏するのもあなたの片意地からです』この言葉を聞いた北齋はいつた、『外國人の違約をそのまゝ閉口して許すと、自分に損失は無いとしても、日本人は人を見て掛値をいふと批評は免がれない。其處を自分は考へて金に困つて居るのを知り乍ら二卷の繪を持ち歸つたのだ。』……それからこういふ話も殘つて居る、——津輕の城主津輕越中守が使者を幾度も北齋にたてゝ來邸するやうに希望した。彼は首を横にふつて行かなかつた。するとその次に津輕家の臣某が金五兩を紙に包んで彼の面前に置いていつた、『この金子は些細だが、何卒私と同道して直ぐ藩邸へ來ていたゞきたい、——若し出來た繪が主人の意に適つた時は、更に澤山の報酬を進じます。』この澤山の報酬といふ言葉が北齋の癪に障つたから、彼は梃でも動くまいとした。彼は事に托してその日の參邸を斷つた。そうすると數日後重ねて同じ藩臣が遣つて來て、刀に掛けても北齋を連れて行こうといふ決心を示した。こちらでは殺されても動かぬと決心した。藩臣は北齋を斬つて自分も自殺するといひ出したが、結局其邊に居合せた人々が仲裁して其日はその儘歸邸することに成つた。所が數箇月經て北齋は別に招待が無いのに自分進んで津輕邸へ出掛け、喜んで群馬野遊の圖を屏風一雙に描いたといふことである。……とうゆう生一本な眞實の響が出る挿話から推しても、彼は實際的貧苦の爲め彼の藝術的人生の完全は少しも傷付けなかつた偉大な人格である。故に彼の繪畫（假令それが街上で安く賣る繪本でも乃至は貴人の邸宅に入る掛物でも）は紙の上だけの存在で無い。この重大な點をよく理解し

て彼の描いた江戸末期時代の世相や人生を眺めると、其處に人に迫らざるを得ない嚴肅な意義があることを感ずる。彼の人生との交渉は直接で積極的であつた。彼の世界は單に模様化した想像や夢の世界でなく、彼は藝術的感興の誘知するまゝに奮闘した彼の時代で一番偉い現實派であつた。

彼の所謂繪そら事は詳細の上で眞實なる現實に根を据えて居る。『七十三歳にして稍禽獸蟲魚の骨格草木の出生を悟り得た』といふ彼は、人物を描くに人體の骨格を知らねば眞を得ないといつて、彼は接骨家名倉彌次兵衛の門に入つて接骨の術や筋骨の究理をしたといふとである。この事は彼の時代としては非常な事件と云はねばならぬ。實に彼は驚嘆に價する大藝術家である。今日藝術上の現實主義は普通な人間に適當な道具立と考へられる場合が多いが、北齋はこの現實主義を宛もバルザックやロダンが佛蘭西で取扱つたやうに、極めて英雄的に使用した。北齋が振翳した藝術的鐵槌は Thor's hammer（火打斧）で大工や建具屋の使ふ小なさ金槌でない。從つて彼が見た自然や人生は我我普通の人間が見る自然や人生より十層倍も急速力で動いて居る。彼の描いた山や川や樹木は靈鬼の火でどよめき立つて居る。又彼の描いた男でも女でもその血管には超人的生氣が流れて居る。實に北齋はロダンやバルザックがあつたやうに越人であつた。而して北齋に野卑なと思はれる所が見える時は、彼の超人主義が露骨になり過ぎた時である。こうゆう場合に彼はいつも自然や人生に對する嚴肅な尊敬を失つて、無暗に彼等を翻弄せんとする惡戯が見えすいて居る。今僕はその實例を彼の作品から出して示す煩に堪へるもので無い。

僕は嘗て一篇の英詩を書いた。今それを譯すると、

『自然の力說——危機一發の表現に對する何等の愛！
汝は新らしい美の創造者、
汝は世界と人生を改造する巨腕、
汝は水、山、樹木や人間の何んたる整理者だらう！
汝の藝術には虹の大膽さ、
又何んたる韻律、
何んたる動行、
又また何んたる狂喜！
僕が今汝の繪を眺めて居るとその繪のうしろから汝の顏が
宛も創世の週間を終へ疲れた腕をぐつと伸ばした神様の
　やうに輝き、
そして微笑み乍ら僕にいふかも知れぬ、

「こゝに大な波をうねらして山を覗かせる、又其處に大雨をざつと降らせる、——
僕の繪はこういつた調子で出來る、君はこれに對して何といふかね？」

何んたる魔法者、
何んたる浪漫主義者、
自然の熱と偏心性に對する何んたる反逆的藝術の所有者、
汝は不知識の境地への突貫者だ。
汝は再び僕にいふかも知れぬ、
「さあ僕等は現實の絶頂に立つて、
もう一度想像の羽翼をのばし、
高い藝術の飛躍をやつて見やうかね！』」

北齋は寶暦十年九月甲子(千七百六十年)江戸本所割下水で生れて、嘉永二年四月十八日(千八百四十九年)淺草聖天町遍照院境内で死んだ。この生れ場所と死んだ場所との間、彼は驚く勿れ九十三回も轉居して居る。ある人が彼に、『轉居三百文といふ諺がある。この言葉が本當ならば、先生の轉居癖はきつと先生を貧乏にして仕舞ふに相違ない』と皮肉くつた。北齋は笑ひ乍ら彼にいつた、『幕府の表坊主に寺町百庵といふ男がある。この男一生涯に百度轉居するといつて自ら百庵と名乘つた。僕もまた百庵にならつて百回の轉居をしてから自分の死所を定めやうと思つて居る。所で僕も今ひといきだ、——せい〲勉強して轉居する。』」土瓶一つに茶碗三つのみといふ身輕るの北齋であるから、彼の轉居癖は別に何等の重税で無つた。彼は斯く轉々と引越しばかりして居たに係らず、たつた一度の外火災に遇はなかつたので人によく自ら鎭火の守札を書いて與へたそうだ。然し彼が本所達磨横町で遇つた一生一度の火事で、車に一杯も持つて居た和漢西洋古今に渡つた繪畫の縮寫を全部失つて仕舞つた。それから以後彼は縮寫もせず又自分の下畫さへも保守して置かなかつた。而して人間本來は無一物の眞理に徹し天地を家とする要諦に生きた。

彼が一生中筆を染めた繪本や繪草紙の挿繪の目錄を飯島虚心の葛飾北齋傳から轉載すると、

『繪本狂歌山滿多山(三冊)、東都勝景一覽(二冊)、畫本東都遊(三冊)、繪本隅田川兩岸一覽、富嶽百景(三冊)、北齋漫畫(十三編)、三體畫譜(一冊)、傳心畫鏡(一冊)、和漢繪本魁、繪本武藏鐙、葛飾新雛形、櫛筵雛形(二冊)、繪本早引(二編)、一筆畫譜(一冊)、略畫早指南(三編)、源平各頭繪本武者部類(一冊)、

草筆畫譜(一冊)、繪本彩色通(二編)、繪本和漢譽、百八星誕肖像、繪本東海道五十三次(一冊)、和漢陰隲傳(一冊)、忠孝潮來府志(五冊)、潮來絕句(一冊)、忠臣藏役割狂歌(二冊)、淨瑠璃絕句(一冊)、繪本唐詩選、繪本孝經(二冊)、繪本千字文(一冊)、秀雅百人一首(一冊)、踊獨稽古(一冊)、北齋寫眞畫譜(一冊)、北齋畫鑑(三冊)、畫說(一冊)、北齋麁畫(一冊)、北齋臨畫(一冊)、北齋圖考(一冊)、繪本兩筆(一冊)、地文雛形、爲一畫譜、商人鑑(三冊)、名山勝景眞圖、江戶八景眞圖(一冊)、北齋畫譜(三冊)、美智酒志遠里(一冊)、吾妻百人一首玉章(一冊)、萬代百人一首操文章(一冊)、大成百人智惠鑑(一冊)、畫本女今川(一冊)、兩山道一覽(三冊)、忠臣藏十二段(一冊)、北齋畫式(一冊)、繪本勝鹿振、爲一秀醒鷄肋畫譜、富嶽八體、畫圖風雨霜雪編、一覽百室(一枚摺)、房總一覽圖(一枚摺)、百橋一覽(一枚摺)、繪本親子草、骨格通理葛飾畫星梅、繪本智惠の板、畫本いろは藏、畫本國盡、繪本花四季誌、異首百花撰、百家奇術、狂畫草錐百眼、百壽百福、溫泉百景、月下百景、一百自然圖繪、百馬百牛、復讐繪本東嶽錦(小枝繁作)、隅田川梅卿新書(馬琴作)、園の雪(馬琴作)、新田義統功臣錄(小枝繁作)、新累解脫物語(馬琴作)、敵討裏見葛葉(馬琴作)、千代襲姬七變化物語、新編水滸畫傳(九編九十冊)、山利稚野居鷹(萬亭叟馬編)、國字鵺物語(芍藥亭

長根作)、三七全傳南柯夢(馬琴作)、賴豪怪鼠傳(馬琴作)、假名手本後日之文章(焉馬作)、霜夜星(種彥作)、戀夢艦(葉々庵桃英作)、北越奇談(橘崑崙茂世作)、雙蛺蝶白糸冊子(芍藥亭作)、飫餘妹脊山(振鷺亭作)、椿說弓張月(二十九冊)、南柯後記、勢田橋龍女本地(種彥作)、靑砥藤模稜案(馬琴作)、松王物語(小枝繁作)、皿々鄉談(八冊)、橋供養(烽山翁戲編)、畫本漢楚軍談、二十四孝圖會(一冊)、小栗外傳(小枝繁作)、阿波鳴門(種彥作)、濡衣草紙(芍藥亭作)、釋尊御一代記圖會(六冊)、飛驒匠物語(六樹園作)、山庄太夫(梅堀介峨作)、還魂紙料(種彥作)、本性略者有難遍一字(自畫作)、鎌倉通畫傳(自畫作)、四天王大通仕立(自畫作)、蓮開扇花香(二冊)、覗伽羅久里義經追(二冊)、怨念宇治螢火(二冊)、親讓鼎の高名(三冊)、二一天作二進一十(三冊)、前々太平記(四冊)、我家樂之鎌倉山(一冊)、蛇腹紋原之仲町(三冊)、塵劫記二邊睦月、福來留笑顏門松(二冊)、臭氣雕旋倉榮(二冊)、六歌仙旅會添削(三冊)、龍宮洗濯噺(二冊)、鵺賴政歌芝之(二冊)、昔々桃太郎發端話說(三冊)、貧福兩道中之記傳(京作)、智惠次第箱根詰、畫大佛楓名所、福壽海無量品玉(馬琴作)、覗見嘘節穴(二冊)、朝比奈御髭之塵、化物和本草(二冊)、箱將軍勘略之卷(三冊)、兒童文珠稚教訓(三冊)、不厨庖卽料理、三國和漢雜話(二冊)、共具十念鳴呼螢氣樓(三冊)、胸

算用嚕店卸、恩愛猿仇討、浮氣雙紙(三冊)、遊君操連理餅花(馬琴作)敵討身代利名號(馬琴作)、勇略女教訓(一九作)、敵討報之蛇柳(六冊)、新編月の熊坂話、玉櫛笥石童丸物語(馬琴作)。』

この目錄を見たゞけでも北齋が如何に巨大な藝術の製造機關であつたかゞ知れる。彼は無比の大入道だ、驚くべき藝術の河馬だ。彼は兩手で筆を握つて十人前の仕事をした、宛も振子の無い時計のやうに疾風雷雨的速力で繪を描いたと想像せねばならぬ。彼は繪をかいたばかりで無く、その分量は勿論多くないが文章も書いて居る。彼が自分の繪本に入れた彼の文章を讀むと、略畫早指南の二編の自序に、『のしこし山の山水天狗はヘマムショ入道が慢心を愛し不思議の畫法を傳ふ。我又ヘマムショ入道に隨身して此法を學ぶこと數百年、いまだ其意を詳にせずといへども、人物、禽獸、蟲魚に至るまで悉く紙中を放れ飛行なすこと奇といふべし。書肆はやくも是を知りて其畫を乞ふこと頻りなれば、辭すること能はずこのあらましを畫きて與ふ。小泉何某亦彫刻の妙手にして刀をもて畫の筋骨をたつ。故に飛行自在の事は止ぬ。あゝ此小冊子後世の至法といふべし。みる人信を以て學はずんばあるべからず。文化十一戌の中秋山水天狗末弟天狗堂熱鐵述』又繪本武藏鐙の奥附の所にこういふ文字が書いてある、『眞にして立ち行にして歩み草にして走る。道に入りやすきとて草筆より學ぶ時は、人物器財等寫するに心のまゝならず。眞を得て行草をまさば都て其骨格を失ふの愚なからん。此編は初學の人に示さん事を欲してむづかしきを省く。三編に至りては屢々甲冑屈伸の自在を筆す。智と業とは別なり勇猛武扁の像を畫かんとならば風流文雅の論を捨つべし。畫する品によりて心も亦轉すべき者か、好人専意を用ゐ給ふべし。』それから葛飾新雛形の卷末神馬の圖の上に書いてある文章を見ると、『客來りて叱して曰く、足下の細畫委きに過ぎたり。故に畫にあらずと譏る人多し。改るにしかじ。答へて智者は其智に誇る。業等閑にして文雅を旨とし、あるは流行を常として智を以て世に鳴る。業鈍きは老て下たること速なり。幸に天我をして愚ならしむ。剰文盲にして古法に縄せられず。去年を悔ひ昨日を耻ぢ獨り塞翁が馬に鞭つて、此道に至ることをほしいまゝにす。齡八旬にちかしと雖も眼氣筆力、壯者にかはらず、百歳の命を保ちて獨立の志を成就せん事を思ふ。貴客も命あらば老人の言の違はざるを見給ふべし。客怒つて歸へる。不學者の論一笑に備ふ而已。』その何れを讀んでも北齋の剛膽で奇怪な面目が躍如として出て居る。

彼は十九歳の時勝川春章の門に弟子入りして勝川春朗又は勝春朗と名乘つた。この名前で今日殘つて居る彼の版畫は重もに

その影響を春章から受けて居るが、又重政の感化も發見せられる。而して天明時代から寛政初期に掛けた彼の作品には清長の影響がある。天明六年頃彼が狩野融川廣信に教を受けたことが知れて春章から破門された。又融川に連れられて日光廟修繕に赴く途中、彼が師匠の畫風を痛く批評したので融川からも破門されるに至つた。

寛政半頃から彼は春朗の名前を止めて北齋宗理と名乘り、狂歌集四方の巴流(寛政八年)狂歌集百囀(寛政八年)狂歌集柳の糸(寛政九年)春のみやび(寛政十年頃)狂歌集三だらがすみ(寛政十年)男踏歌又春興帖(寛政十年頃)等に、歌麿や榮之の影響を受けた女の挿繪を描いて居る。然し彼が描線調和と構圖配整の上に所謂北齋式を發揮しかけたのは此頃の時代からである。又寛政末から文化時代に掛けての彼の作品即ち東都勝景一覽、繪本潮來絶句、繪本忠臣藏、山滿多山並に隅田川兩岸一覽等を見ると、彼の特調が一層明瞭に發達して來て居る。文化時代は彼が葛飾北齋の名前で活動した讀本の挿繪時代である。從つて彼は錦繪を自然に離れるに至つた。而して彼は文政時代に大畫集富嶽三十六景四十六枚揃を以て再び錦繪に復活した。

彼が文政後半期から天保前半期に掛けて彼が出版した錦繪のなかに、十枚位の千繪の海、八枚揃の諸國飛巡り、十一枚揃の諸國名橋奇覽、八枚揃の琉球八景、雪月花三枚揃、詩歌寫眞鏡十枚揃又百人一首數十枚が含まれて居る。

概して西洋の自然觀は不徹底だ、――西洋人は時には無慈悲で冷酷な自然の本質に觸れることを恐れる、而して彼等は陽氣で喜ばしい聯想から自然を見やうとする。ゲンスバロウやコローの愁思傷心的自然美やチ、アンやレムブラント或はターナーが時偶人に與へる壯大な自然の瞥見が西洋人一班の嗜好から遠ざかつて居るのもその理由からだ。風景を取扱ふ西洋の流行畫家が如何に外面的聯想から眺めた自然美だけで滿足して居るかは容易に了解することが出來る。然るに我が日本の北齋や廣重は何うか。概括された人類で無く人間の種類(丁度動物に虎や鼠と相違があるやうに)を科學的に見たバルザックの如く、彼等は自然の本質的獨特に觸れた、――然も同じ自信を以て彼等兩人は出發したものだが、彼等の希望と態度は自ら多少異つて居る。廣重の冬の空は冷く彼の雪には靜止的森嚴がある。ある西洋人は『彼は愉快なクリスマス時の冬景色を愛した』といつたが、この言葉には批評的暗示がある。然るに壯大な冬の活動を見たのは北齋である――北齋は鐵のやうに嚴しい霜を見た、又

彼は人情を全く忘れた堆雪中の荒涼と壓迫を見た。彼の見た多くも漫畫に載つて居る二三の例から見ると、彼は暴雨横さまに撃つて樹木を訶む圖(例を出すと上毛榛名の圖)や强風旅人の笠を奪ふ圖や又降りしきる雨の間から輝く富嶽の尖頭の圖などに於けるやうに大成功を納めて居ない、彼の靈腕も層雲を描寫するに當つて躊躇めいて居る、亂れて居る。彼が傳統的描寫に柔順で太い横の線を平行的に描いて低い雲を顯はした場合は寧ろ無難でもあり又相當に繪の效果を納めて居る。その證據は富嶽三十六景の武州玉川の圖や深川萬年橋下の圖や其他諸國名橋奇覽中にも又『百人一首』の中にも澤山ある。然したつた一つの特殊の場合を除くと、彼は空中の層雲描寫では彼の魔訶不思議の伎工も何んともすることが出來なかつた。その特殊の一例といふのは外で無い、――富嶽三十六景の山下白雨の圖をいふ。見よこの巨大な富嶽の山腹は暴風雨の黒い雲で匿くれて居る、そして其處に輝くものは赤い雷光一つ。富嶽の頂上には夕照の美に反映して居る、又渦巻いた蝸牛のやうな澤山な雲が山を守護するやうに並列して居る。西洋にも雷光の景をもつと現實的に描いた畫家はあるが、北齋の如く配色の上又構圖の上、斯くの如く素晴らしく壯調な藝術的結果を表現したものは一つもあるまい。嗚呼偉大なる畫家よ、汝の名は北齋だ!

彼はまた河水を題材としても成功せる畫家であつた、――實

は人間を威嚇する暴君である、恐ろしき均齊美(シンメトリー)に震動した野獸である。北齋漫畫の九卷に『桓公老馬に隨ひ國に歸へる圖』があるが、この雪中の景を眺めると、如何に人間が冷やかな茫漠たる大自然に對して無力な蟲以上で無いかを感ぜさせられる。又漫畫二卷に納められて居る引張の圖を見ると、如何に自然の靜止的動作は恐るべく又壯嚴なものであるかを知ることが出來る。

更に翻つて富嶽三十六景中『神奈川沸浪裡』の一枚を見よ、――高く孕み又低く窪んだ大浪には恐ろしい大蛇の腹のやうな生きた呼吸がある、又將に飛散せんとする泡には空に怒る龍のやうな爪がある。北齋がこの繪で追つた傳統的描法は奇怪には相違ないが、人に熱烈な動作といふ感を與へる點からいふと實に成功した製作と云はねばならぬ。だれがこの沸浪の圖を見て怒る波濤に對する恐怖を感じないものがあらう。ターナーでも又ルベンスでも又レムブラントでも怒つた浪を描いて居るが決して人に眞實溺れるといふ感じを與へない。又水氣の現實的表現をコンステーブルは描いて居るが、彼は人に恐怖の念を齎らさない。そこを見ると北齋は偉大だ。

ある評者に云はせると彼は雲では寧ろ不成功である、――少

びろと流れる厚重な波に小い渡船が揺れて居る圖（富嶽三十六景玉川の圖）や將に登らんとする月の下、大な岩石の間、半は霧に蔽はれて流れる谿水の圖（猿橋の圖）の如きは分けても彼が取扱つた河水の繪で最も優秀な作品である。然し彼が一番熱烈に好んだ題目は瀑布である。諸國瀧巡りの中『美濃の養老の瀧』を見よ、垂直に太く上から落つる水は岩にあたつて珠玉を散らして居る。この氣高い純白な水の表情は殆どエピカルである。又『和州吉野義經馬洗瀧』を見よ、黒青い力のある水は二三廻つて谿谷を上から落ちて居る。これに配するに二人の男がせつせと洗つて居る代赭色の馬一匹と同じ代赭色の岩。又繪を周圍から取圍む黄色の草原、——如何にも彩色上の整調を得て居る。

而して北齋は嚴粛壯大な大自然の本質をその物として描寫したと同時に、彼は人情化した自然、——言ひ替へると人間の努力で整理變化された自然の一面も題材として居る。この自然と人間の融和を見やうとするならば、『諸國名橋奇覽』が其適例である。これは二十枚揃て、山城嵐山渡月橋、上野佐野の舟橋、下野雲のかけはし、飛驒越中つるはし、周防錦帯橋、岡崎矢矧橋、龜井戸天神太鼓橋、安治川口天保山、攝州天滿橋、越前福井橋並に三河八ツ橋の繪である。北齋漫畫などでも彼が建築趣味を豐饒に出して居ることを隨所に發見することが出來る。如何に彼は複雜な殿堂の屋根を正確に描寫しやうと勉めたであらう。如何に彼は赤裸な船頭が働いて居る千石船から小河を人を乘せてよち／＼渡る粗末なる小舟を描いて居るであらう。彼の藝術には幾何學的推理の半面がある。彼には正確な科學に對する愛がある。彼が自然の情趣と形式的建築美と調和させたのがこの揃物である。僕不幸にしてその全部の繪を見て居らぬが、僕が見たものゝ中にある『深川萬年橋下』の一枚は平靜優美な作品たるを失はない。畫面を横切る大膽な大鼓型の橋、——下から橋を見ると如何にそれが建築的威嚴を供へて居るであらう。橋の下遙かに見へる小な富嶽、——人は果して富嶽がこの橋の下から實際に見へるや否を議論する必要が無い。北齋は前にいつたやうに、眞實なる詳細をかき集めて大な虚僞を創造した藝術家である。この大藝術家に對すると實際の自然でも彼の意の儘に喜んで出たり引込んだりするであらう。

僕に何處で初めて僕が彼の風景畫に接したかに關して愉快な追憶がある。それは十五年の昔話。其時僕は倫敦に居て詩人の友人としては僕にロウルエンス・ビンヨン一人を得た。彼の爭鬪時代であつた。僕の最初の經驗としてビンヨンに連れられ、僕は詩人スタージ・ムーアの夜の接見（レセプション）に出掛けた。僕がムーアの應接間に入つた時は最早や客で一杯であつた。僕は其頃まだ

社交の禮儀に慣れて居らず自然に不器用な恰好をし乍ら部屋の間を徘徊ついた。僕はふと燃え立つた火の前に起つて居た二人の美女の頭の間から覗いて居る一枚の繪に注意した。それが北齋の『凱風快晴』であつた、――如何に代赭色した富嶽の雄姿が部屋に集つた澤山の西洋人を睥睨して見へたであらう。恥し乍らその時代の僕は北齋に關する何等の智識を持つて居無つた。僕はムーアの質問に對して滿足な返答を與へることが出來なかつた。――實際この繪さへ見たのが初めての僕だもの、北齋の藝術なんて知つて居る筈が無つた。僕は一代の恥辱を感じて歸路についた。

僕は自分の下宿屋に歸つて寢臺に横はつて居ると、僕の眼前に起つ巨山があつた、――曰く富士山、代赭色の『凱風快晴』の富嶽であつた。僕は其晩は勿論、その翌日も又その翌日もこの印象的な強烈な一枚の繪から藝術的壓迫を感じて實際身動きも出來なかつた。

僕は一詩を歌つて倫敦での最初の英詩集を富嶽の靈に捧呈した。

『汝の神聖な呼吸に觸れて、
我我は神の形に歸へる。
汝の沈默は歌、
汝の歌は天國の歌だ。
熱病や心配の我我の陸土は
澄める眼した平和の家宅と變はる。――
人間はたゞ死すべく生れる陸土から遥か離れた家宅と
變はる。
我我日本の男女は
汝の麗はしい壯嚴、
神の誇りを歌ひつゝ
我我の影を汝の胸に封ずる、――
永遠の香しい場所なる汝の胸、
白い額した驚異、
あゝ無比の光景、
あゝ壯嚴、あゝ美！
千の河水は額の上に
汝の神聖な姿を載せて走る、
有らゆる山はさし來る潮水の如く
汝にまで彼等の頭を擧げる、――
宛も汝の最後の命を待つやうに。
見よ、日本を圍繞する海は

汝の影を見て、
宛も詩を夢見るものの如く、
催眠歌を奏する平和に接吻せられ
彼等の饑えた曲した歌や野狼の慾を失つて仕舞ふ。
我我は汝をめぐつて禮することを忘れる。——死は甘い。
生は死より更に甘い、
我我は人間であると共に神だ、
汝の無邪氣な伴友だ、
あゝ永遠の富嶽よ！』

千九百〇三年の秋、僕は多少北齋の智識を携へて再渡英することが出來たのを喜んだ。僕は畫家チャールス・シャノン氏に獻上する爲め飯島虚心の葛飾北齋傳をもトランクの隅に入れて出發した。シャノンは曾てブリンクリーに屬して居た北齋の水滸傳の繪の原稿を手に入れて居る人である。

渡英後程無く僕はシャノンを彼のホーランド公園近くの畫室に訪問した。この著名な畫家に藝術的兄弟が一人あつてその名をリケッツ(Charles Ricketts)といふ。リケッツはシャノンと畫室こそ分けて居るがその他の生活を一切一所にして居る。リケッツが曾て書いた日本美術の評論中、北齋に關してこう短評を下して居る、北齋は歐羅巴を驚かした、ミレーもウホスラーも等しく彼を嘆美した。北齋は公衆に向つて描いた、そして彼の時代のものは北齋より寧ろ應擧と岸駒を撰んだ。僕はレンブラント時代の和蘭人がだれを撰んだかを記憶して居無い。沙翁は文章を修正せず又餘りに澤山書きすぎた、——北齋も多作家だ。彼の描いた所のもの何れを見ても缺點と長所が過剰に出て居る。彼は餘りに多くの藝術を持つて居てそれを匿くすことが出來無かつたが、彼に充分な雅致が無かつた。彼の藝術が衝動的で深い場合には、フランセスカやホルバインと等しく魔法的神性を得て居る。

シャノンは僕の面前にブリンクリーから買つたといふ水滸傳の畫帖を持出して來てそれを擴げた。そして彼は語つた。

『レンブラントと北齋——僕はこの兩畫家の名前を並べる。北齋はこの和蘭人がよう遣らなかつた所のものを容易に實行して居るが、こういふ潑溂たる生氣の力強い描寫を見ると直にレンブラントの現實的直截と殆ど善良な機械に比較することが出來る充實さとを思はせる。北齋は世界に無比な draughtsmen の一人だ。一般的にいふと浮世繪師の作は版畫の方が肉筆に勝つて居る、然し北齋には例外の場合が多い。——是等の原稿を見ると薄墨色で極めてデリケートだ。それが出版された彼の繪本

の上では眞黑な描線の集合となつて居る。是等の人物は背理的因襲の點から批評され易いものだが、北齋の壯大な構圖と彼の完全な遂行の力は斯くも新鮮で斯くも異常な活動を君に與へて居る。彼は模樣化した美を尊敬した時代に生きた繪を描いた。』

生きた繪の北齋、君は天人を描いても我我下界の人間味の美を入れて居る。故に君の取扱つた天上の靈も我我に極めて接近して居る、我我は我我の感情でそれを眺めることが出來る。君はまた天人や佛を描くと同態度で、鬼や化物の繪を描いて居る、――勿論それ等は超人間的であるが、在來の繪のやうに漠然たる別の世界の住者で無い、漫畫十卷のなかにある『祐天和尚と累の怨塊』(圖は一眼の大な口したる化物に無責任な殘忍な雄辯がある)を見て、ある西洋人はレヲナルドでもブルユゲルでも又ゴヤでも未だ嘗て考へることが出來なかつた藝術的出來心であると評した言葉は如何にも尤もだと點頭れる。生きた繪の北齋、君は序文のあるもので自慢して居るやうに禽獸蟲魚の繪に確固たる信念があつた。決して君の繪は普通の學校に並べて居る標本的剝製で無い。蕃椒を嚙んで居る鼠から瀧のなかへ引摺られる怒つた虎(漫畫十三卷)や大な象に至るまで、君は『野豬のやうな人間の北齋氣分』で描いて居る。確に君には『鐵道工夫の筋力のやうな野性』が漲つて居る。君は實に動物を描くにもつて來いの畫家だ。君は人間の虎だ、狼だ、――又時には鼠だ、猿だ。ある西洋の詩人は君を歌つて『猿の心をもつた大家』"The master with the monkey's heart" だといつた。君はまた人生を横に濶歩した蟹だ。實際君は蟹が好きだと見へて畫譜などの中に二枚續けて描いて居る。君は跳る馬をかいた、人にぢやれそうな兒狗をかいた。鳴きさうな鳥を描いた、又鷲や鷹を描いた。然し彼等は皆な皮肉に開いた大な眼を持つて居る。そうだ、君自身の眼も彼等の眼と同樣であつたであらう。

生きた繪の北齋、君はまた草花の繪も澤山作つた。草花に對する君の愛は光琳や宗達や歌麿の草花に對する愛とは異つて居る、――君はデリケートな描法を以てそれに接しない、君は全體として一纒めにそれを取扱つた。從つて君の草花には暗示的な平靜を缺いて居る、そして其處に藝術の噴味がある。然しそれは君が如何なる場合でも赤裸に出す獨自性だ。如何ともしがたい性癖だ。又その爲め、暴風で苦しむ路傍の草花などを描く場合の如く君の優々しい活動好みが君の繪を成功せしめて居ることも多い。然し北齋よ、君の岩石の描法に關しては、中々西洋の批評家間で議論がある。『眞實な詳細』を好む君として岩石を描く場合、君は東洋の傳統的描法に無條件で歸つて居る。君の岩石は形體として已にインポシブルだと人はいつて居る。然し

日本人として僕は君の描く岩石に人を脅迫する威嚇があるのを認めるものである。西洋の批評家は君の『和州吉野義經馬洗瀧』にある岩石の色に對して異議を持つて居るやうである。然しそれは君の寫實かも知れぬ、――實際日本火山性の岩石はかかる色彩を帶びて居るかも知れぬ。

生きた繪の北齋、僕は君が畫譜中に描いた『盲人の川越』の圖を見る毎に、君は人生を必ずしも悲劇的に了解しなかつた哄笑的徳川末期時代の産物だと思はざるを得無い。君は暗い世間の裏面をいつも滑稽的に眺めたが、それは決して君の無慈悲な殘忍性からで無い。君は如何なる場合でも事物の現象を本質的に見ることを忘れ無つた、感傷的聯想に君は決して墮しなかつた。藝術家として君が不死である理由は其處にある。今君を滑稽繪の畫家として見るに、――君位滑稽其物に捕はれ無つた滑稽畫家は無い。かく君が滑稽を主とせずしてその滑稽が意想外に明瞭に浮いて見へる結果を成した理由は何處にあるか。それは君が忘れ無つた眞實な藝術性が偶然に人事の滑稽的半面にその力說の場合を發見したのに止まつて居るからであらう。君は偉い藝術家だ、――自然描寫に於けると等しく世相人事の描寫の上に偉大だ。君が下層社會の生活を見た態度は佛蘭西のミレーのそれとは異つて居る。今日の日本人は果して哄笑を喜ぶ愉快な人民であるか何うかは知らぬが、君が描いた人間は悉く日常生活を面白く營んで居る。その點から見ると君の畫家としての態度はルベンスに似て居る。ある批評家は君にまたドミエーとワトウの藝術觀が織りこまれて居るといつて居る、――それは實際である、君のある作品にはドミエーの哄笑がある、又ある作品にワトウの婦人的洞察あることを注意せざる譯にいかない。

生きた繪の北齋、君は解剖的畫家であつたといふよりは寧ろ態度の畫家であつた。さういつたからとて君の現在に對する尊重心を輕視するので無い。君が巧妙に現實を直截簡單化した藝術たらしめることが出來たのは君の態度の偉大からである。いゝふるして若さへ生へて居る言葉だが、君は北齋といふ人格の藝術だ。

生きた繪の北齋、君の人格はその藝術の上で、角張つて無作法で露骨な野性を匿くす程小さいもので無つた。君と河鍋曉齋には所謂君子の顏を顰めさせるスタイル(少くも certain aspects of style)の無い繪が澤山ある、――然しそれもよい。君の人格はその實際生活の上で、尋常普通の禮儀習慣に束縛せられる程小さいもので無つた。君は人に遇つてもついぞ時候の挨拶など述べたことが無つたさうだ、――然しそれもよい。君は人か

ら食物を貰らうと、人の前で竹の皮や重箱からいつも手摑みでむしやく〳〵食つたそうだ、――然しそれもよい。君は自分の娘阿榮、――人から相當に尊重されて居た畫家の阿榮をとらへていつも本當の名前を云はず、彼女の腮が出張つて居た所から『あご、あご』と怒鳴つたそうだ、――然しそれもよい。僕は君みたやうな男を親として何うか知らぬが、隣人としてなら喜んで君に堪へる。實際君の赤裸な野性は僕の本質的人間性を維持させる有力な防腐劑である。君から僕は何うして人間の生地のまゝな原始性に歸へる力を得るかを學ぶ。

實に君が生きた繪の北齋たることが出來たのは生きた人間の北齋であつたからである。僕が君位人生の現實を握り得たものは無いといふ時、僕は君位藝術に生きた畫家は無いといふ意味である。君の一生は藝術に向つての進軍の歌であつた。僕が君の娘阿榮が誰かに、君が八十有餘になつても猫一疋も滿足に描くことが出來ぬといつて、ある日腕をじつと組んで落淚して居たことがあつたと語つた一小話を聞いた時、僕の心は戰慄した、――その戰慄は僕が君の藝術に對する眞摯な態度に擊たれたからである。僕は前に君やバルザツクやロダンは『完成』といふ外面的迷信を恐ろしく嫌つたといつたが、もつと本當な所をいふと君は必ずしも『完成』を嫌つたので無く、君自身から見ると君の描いた作品は悉く未成品であつたであらう。あゝ不出來だ今度こそは……と云ふ君の態度に生氣がある眞實の藝術的希望がある。君は『完成』を嫌つたので無く『完成』に向つて突進した畫家だといつた方が正確であらう。

生きた繪の北齋、君の繪本彩色通の二編に豐芥子（俗稱重兵衞淺草藏前に住んだ乾物屋の爺）が書いた序文にこうある、『そも前北齋翁は明和と改りし申の年畫德を以て此世界になり出で、いときなき頃よりこの道に深く心をいたましめ、今や八そぢあまり八といふ春秋を重ね、丹青妙手の神通を得らる。實に卍翁神仙と稱すべし。且枝葉諸國に生茂り机下にあつまるもの甘に蟻のよるが如し。亦至らざるもの此畫風に靡きしたふ事嬰兒の母を慕ふが如し。故に漫畫數編をあらはし畫道好子の助とし、こたび彩色の極祕をあげ、一とたび開いて其妙手を得、再三閲して其極意にいたらんこと翁の手をもて導きたまふに等し。是ぞ畫道の虎の卷開きて奧儀を悟りたまへ。』それから名古屋の半州散人が君の漫畫に書いた序文を英譯して出して見るとこうゆうことが書いてある、“Art alone can perpetuate the living reality of the things of this world, and the only art capable of such well-doing is the true art that abides in the kingdom of genius. The rare talent of the master Hoku-

sai is well known throughout the country. This autumn, by chance, in his journey westward, he visited our town and made the acquaintance of Bokusen......under whose roof he dreamed and drew some three hundred compositions. The things of heaven and of Buddha, the life of men and women, even birds and beasts, plants and trees, he has included them all; and under his brush every phase and form of existence has arisen. For some time past the talent of our artists seemed to be on the wave; life and movement were lacking in their work; their hand seemed powerless to render their thought. But in the varied sketches here presented, how admirable are the sincerity and force! The master has tried to give life to every thing he has painted the joy and happiness so faithfully expressed in his work are a plain proof of his victory." こうゆう英語の言葉となると原文の戯作的誇張が無くなつて仕舞ふ。北斎君、君はこの生眞面目な言葉の北斎として今日西洋で取扱はれて居る。考へると北斎君、君の時代は變な時代であつた、——君の時代の文章をひつくるめていつて退けると、戯作と漢詩といふ二つより無かつた。一方は世間を茶化し又他方は無理鑄に四角張つた態度に出た。兩方共に不自然であつた。この半分以上虚僞なもの〻間に狭まつて君は生きた繪を描いた。

生きた繪の北斎君、僕は君を葛飾の百姓八右衛門として祝福する。

弔芳魂

土井晩翠

ゆふべ傷心のおとづれを聞く。

陰雲凝りて寒光しづむ
東北の天地雪に埋れて

嗚呼須磨の浦
波や凍らむ
千鳥や鳴かむ
松や咽ばむ

生きては褒貶あらしと騒ぎ
逝きては幽明霧と隔たる
一代の善才、錦繍の粧
孔雀のほこり、珠玉のひらめき
海棠の榮、牡丹の富貴
花か紅に紫に、生ける文章生ける詩歌
風月いくたび舞殿の袂
かへせば湧きくる無韻の哀思。

一代の視聽かくして集め
嬌名あまねく梨園を壓して
青春の血を湧かしめし
それも夢なり——雲こぼる。

「批評」よ、しばらく目を閉ぢよ、
無底の幽淵花魂を吸ひて
永遠不可知の神祕の前に
うつむく姿——紅血を
染むるが如き一條の(恨も長き)末にかゝれる。

おほいなるかな「死」の力、
海の内また海の外
おほいなる事繁き時
「天下の耳目」一齊に
競ひて魂のあと弔ひて
埋め盡せし幾段の欄ぞ。

おほいなる年、大正の
八年——西暦數へきて
一千九百十九年
歐亞の天地震はしめ
一千萬の屍を築き
三千億の財を蕩し
ホーヘンツオレン、ロマノフと

ハプスブルグの權能を
あらしに亂るる枯葉の如く
大地のおもより拂ひ去りし
大戰亂のあとひそめ
更に新たにおほいなる
建設の基おかるべき年。

百の民族精を拔き
粹を選びて送り來し
一代の巨星光きほひて
滿城の春霞むべきエルサイユ城充たす時。

威容あらたに整ひしかれ大英の大宰相
北米無冠の王と共に、
更に矍鑠のクレマンソウ
三寸の舌風雲を猶ほ捲くに堪ふ老雄と
共に世界の經綸の基おくべく語る時
一言一句千萬の民の運命制すべき
飛電のたより紛として東海の空によする時。

明鏡、寶劍、珠玉の理想
抱きて幾秋二千年
東亞のすみに影潛め
しらず〳〵に天職のいたるを待てる此邦の
英靈長き眠を破り
黎明の光あらたに仰ぎ
桎梏の束縛たち切りて
世界思潮のおほいなる流に投じ進む時。
パンドウラの匣ならず
傾け來る光明と希望の寶拾ふべく
樂觀の目の見張る時。
更に懷疑の目より見て
晴かあらしか霧か雨か
七彩いろどる虹霓か
霹靂孕む陰雲か
邦の運命皇天の愛か詛か冷眼か
いづれと思ひ惱む時。

そのおほいなる年新た
屠蘇の芳醪紅潮の頰にある時忽として

曉寒く碎けし香魂
(環珮むなしく歸りきて
そのあけぼのの鐘や聞く)
關山の雪梅を封じて
恨も深き人の世の
哀れ弔ふとや一代の
覩聽ひとしく渉たりし女優のあとに曳かるるよ。

三萬の鐵騎朔北に夜半のねむり成らぬ時
南溟の月冷かに猶艨艟を照す時
廟堂の中平民の宰相勉めて治をはかり
飢と寒は邦の本民に無かれと勵む時
さはれ瑞穗の邦にして(黃金の波滿ちながら)
糧は乏しと訴ふる聲のますます上る時
時世の運をさかさまに刑餘の奸邪回る時
慢か忌憚か冷淡か輿論こゝには默す時
黴と陳腐と蒙昧と「過去」の亡靈一堂に
頭集めて九泉に秦の始皇を起すべく
東亞の民の「人面の統一」の法計る時。

それとは見へで天上に嘯きひかる月球の
力に起る干滿の潮の流寄る如く
世は紛として事繁くおほいなる業群がりて
東西ひとしく目を見張り耳飛ばすべき今の時。

おほいなるかな「死」の力
くしくも偉なり「情」の聲
廣き八州の中にして
須磨の浦波咽べりの
たよりひゞかぬ郷も無し。

一雙の明眸秋の水
恨堪へしいやはての
寫影――はたまた慇懃の
思をこめし文を見よ
鉛華粧ひて明鏡に
とめしいまはの身だしなみ
粧はぬものは愛の聲

『海より深き悲ある

師に背きてもすがりきし
人さきだてゝながらへじ、
塚を共に』と綿々の
願を殘す筆のあと。

(其師に永く譽あれ、
藝園とこしへに香を吐きて
名花にほはむ有象の歌樂
その本深く培へる
辛酸のあと神は知る、
梨園の弟子散じ行き
なかば開きし花ちれど
恩にそむくを猶愧ふ
情藍田の珠に似つ、
黄沙白草朔漠の
月に老將の歌ふ如き
なほ萬斛の熱涙を
無形の絃にそゝぐべく
斯文の庭に逍遙の
勳業長し四十年
天爵高く光照り
青史不朽の名を載せむ。)

「批評」しばらく目を閉ぢよ
情海の波瀾底知らず
(その人ならで何ものか
潜りてあとを窮めしや)
幽を穿ちて微をわかち
理性するどき一代の
才人長く學を棄て
目を極れば風塵暗く
誹謗のあらし耳にして
師を棄て名を棄て恩愛の
妻子を棄てゝ一塊の
むくろゆだねし『戀の宮』
二十四番の春の花
盛りはよしや夢といへ
一盞の天地甘きを湛へ
月明梨園花落つる時
秋風旅館雁渡る時

愛と藝術渇仰の
的と眺めて過ぎ來しや。

五年にわたり世をゆりし
大戰亂の總れるに
さきだつ日數六にして
病の床に一瞥の
最後の別告げも得ず
毀譽の重きを負へるまゝ
忽然として愛人の
逝けるその夜半断腸の
叫び何等の無韻の詩
別れし鴛離れし鴦
悲風怨雨の吟にして
石を打つべく手を擧げし
「道學」しばし目を閉ぢぬ。
ヘスチングスの戰場に
王ハロードのなきがらを
探りあてしは何人か
愛はすべての謎を解き
愛はあらゆる罪詫びむ。

女蘿纏はりし百尺の
松倒るとき秋は盡く、
千鳥に深くる須磨の浦
あらしもたよる術なけむ
きのふは蘭麝君のため
脂粉これより誰粧ふ
今悽慘の目に寫る
世は荒凉の大沙漠
目を閉ぢ暗にきける時
遠くかすけく魂招く。

世の僞に汚されし
『死なば共に』のかねごとを
果さでやまじ情に生き
情にたほれてやみぬべき。
舞殿の夜半霜寒く
愁に曇る電燈の
光り陰火の青き見む

幽蘭かくて碎かれて
香を曉の風に寄す。

世間の「道」を破りたる罪か斷腸夜半の叫
愛の理想に殉したる惠か情海不滅の名、
報か惠か誰か斷ぜむ。
あゝあゝ World-wearied flesh（ワールド　ウエアリイド　フレツシ）
絆を解きて寒光の
すごきあしたの風に飛ぶ
芳魂しらずいづくにか去る。

嗚呼明眸と豐頰と娥眉と碎けて地にまみれ
灰と殘りて萬有の巨大の胸に歸るとき
かれも褪め行く虹霓の絶え絶えの橋空に見る

「信」の光は薄うして
「否定」の眼（まみ）は冷かに
三尺の嘲笑ふとも
起ちて夜半に光芒の
震ふ北斗を仰ぐとき

人籟やみて咆哮の
あらしに翔くる靈の影
膝つく魂に何を說く。
しばらく堅き幻影の
壁貫きて浮びくる
幽淵の影ほのみする
おほいなるかな「死」の力。

世は黃金の力滿ち
人は虛榮の夢深く
虛僞と姑息と形式と
阿諛と輕浮と顚倒と
寄りて赤裸の純眞の
相を光をかくす時
其まのあたり鬪を
挑むが如き心血の
凝り成す誠こゝに見よ。
『脆し』女性の名なりせば
『強し』『いみじ』は其異名
裙釵いまさら顧みて

天の微妙の寵知らむ。
金鐵碎く堅剛の
情の威力に名を救ひ
罪を償ひ、さきだちし
情人の名をまた救ふ
おほいなるかな「死」の力。
今逝く魂のあとたどり
もの一切の疑を
拂ひて幽冥測りなき
神秘の門にたちとまり
身をひれふしてへりくだる。
涙と共に祈るとき
時間空間一切を
貫き渡る大靈の
聖のいぶきに扇がれむ。　（終り）

土俵を透して見たる人世の興味

健堂生

一

政治家も、學者も、角力を観るが可い。土俵の上に人物、世相の變遷の理法が象徴されてある。

大角力の十日の間、九段の坂上から、遊就館の前あたりに、群集して居る人々は、角力を観るのでも無く、力士を見て居るのである。恰も役者の顔見世を見る如くに。……力士を見る丈

でも興味がある。横綱、大關とか、花形力士とかいふものが來れば、群集の目は輝く。

是等の群集は、必ずしも入場の金とか時とかを有たないといふわけでは無い。その人の角力趣味が、力士を見る丈けの熱しか無いのも少くは無い。或人々には、活動の映畫の方が實際よりも美しいと同じく、新聞の角力記事を見る方の興味に親んで居る。それ等の人の爲には、力士を一度見ると、新聞の記事に生命を吹込むことになる。勝負の記事を讀む時に、力士の活躍が、目に見える。想像が活き〳〵して來る。また、それ程の興味を有たない人にしても、角力の季節に、角力取を見れば、最新時代の氣分に觸れるのである。

聞レ名不レ如レ見レ面、見レ面不レ如レ聞レ名といふ語が無門關にある。穿つた辭である。二度喫驚といふのは、後姿を見てから前姿を見た時の感想ばかりでは無い。風采を想望して居た人物に逢つて見て、意外の感に打たれることがある。意外といふは、意外に、よいのとわるいのとある。力士を見て失望するといふことは無い。力士ばかりは、強い者は皆、立派な體格の所有者である。見るから、強そうである。栃木山が小柄だといふ事もあるが、土俵に現はれた彼の筋骨の發達を見ると、如何にも天下無敵である。

群集の中には、偶然、通り掛つて見て居る者もある。譬へば西園寺侯の出發と聞けば、見送る可く來た者で無くとも、通り掛つた人々は足を留めて見るように。

二

力士熱にも種々ありて、賭をする人々が、一番、緊切なる角力熱を有するので、それ等の人々は、吾等に對して、「賭もしないで、角力見る氣が知れぬ」といふ。しかし其等の人々は勝負興味の熱で、賭もせずに角力見る吾等が眞の角力熱であろう。

土俵を見るよりも棧敷を見て居る方が面白いと言つた人もある。此人は、觀察興味の人ではあるが、角力には必らず初心である。棧敷も固より面白い。角力場に於ては、出現し來るヒーローも、その背景も、つねに複雜に動いて居るのが面白い。しかし角力場の興味の中心は何處までも土俵である。

見る爲に來る人ばかりでは無く、見られる爲に來る人がある。藪入の滿員の棧敷に、眞白の幅廣いショールを懸けた二人連の若い女が、控力士の大錦、栃木山のように、肩を並べて居たのが目立つた。女優であろうといふ評判であつた。顏も名も分らぬが、白いショールが目立つた。見られる爲に來る人も、長い中には、見る爲に來るようになり、これに反して、見る爲に

來た人も、長い中には、見られる爲に來る人になる。角力場に存在を確めた人は、行かないと、存在を失ふように思ふ人もあるらしい。

角力好の中には、理窟のある人と無い人とある。劇を見ても、畫を見ても、唯だ無暗に好きなので、說明の出來無い人がある。角力好といふのが、烟草中毒、酒中毒と同じように、角力が始まれば、唯だモウ見ずには居られぬ人といふ人が澤山ある。ヤハリ角力中毒である。劇は、一興行に一度見れば滿足が出來るが、角力は一日見ると、翌日の熱を煽る。次の日、行かずに濟むか、濟まないかが、角力熱の高低の分れるところで、角力好ならば、結局、毎日、行くことになる。酒飲が一二杯飲んだばかりでは濟まないと同じように、角力好は一日では濟まない。一口飲むだけならば、飲まない方が增しといふ事になる。私の友人には、斷然禁酒といふ覺悟を以て、角力を見に行かない角力好の忙がしい人がある。

三

昔の角力取は百姓が多かつたが、都會から大力士が出現す。ようになつたのは、近來の新現象である。此の意味に於て、水戶から出た常陸山は新力士の先驅者であつた。大錦が大阪の島ノ內、伊勢ノ濱が東京の本所、大鳴門が京都の四條、それから新花形の常ノ花が岡山市の大雲寺町、いづれも繁華の町の中から出て來た。今の角力には、士族も平民も無く、學生の出身も珍らしくは無い。貴族の家庭からも出て來るようになるかも知れぬ。今の角力が智的に進化しつゝあると共に、著るしく都會化し、世間化しつゝある。智的化するから、町からも角力が出て、町からも出るから、ますます智的化する。力士の衣裝にしても、特色があつたのが、今では結髮して居るのと、體が大きいといふ丈けで、力士好みの特色の衣裳に見られ無いようになつた。

角力は、土俵の內外ともに、此の如く、智的化し、世間化して來たのに、勝負の立合ばかりは依然として舊式である。細密な條件には變遷もあろうが、大體に於ては昔の儘である。仕切り直しといふ事は、今の私共、所謂角力好きの連中には興味が有るけれども、これが則ち角力興味といはゞいはれようが、一般的興味の推移に反對してまでも、果して此の勝負法が遠き將來にまで殘ることが出來ようか。

海外の勝負法は暫らく措き、現代の日本に於ける幾多の競技中、擊劍、柔道、野球、テニスその外、何たるにせよ、仕切り直しといふ事の行はれて居るのは角力ばかりである。私は仕切直

しといふ事が、段々、世間の一般的興味から離れて行くであろうと思ふ。先年、矢野文雄氏と、角力を觀た時、彼は勝負ごとに、兩力士を、東西の二字口に置き、或合圖の方法を以て、立上つて土俵の中で採合ふ事にしたら可かろうと言つた。彼は昔て「新社會」を著はしたと同じく、此意見は隨分、先きばして居る。彼は、角力には初心であるが、併し、その改革說は、將來に實現されるかも知れぬ。

すべての競技は、立合ふ前に、頭の中に、作戰計畫は定まつて居る、居らねばならぬのである。角力ばかりは、土俵の中に出てから、役者ならば、樂屋の中でするような事をして見せる。譬へば、料理ならば、御膳の上に出すまでの庖刀の魂膽までして見せるわけである。立合の仕切直しが面白いといふのは、畫が面白いばかりで無く、席上揮毫を見るのが、面白いといふ事になる。今の私共は、まだ立合に興味を持つて居るが、此の勝負法は、將來に改革さる可きものであると思ひ、また併せて、改革が實行された曉には、新勝負法の上に、新興味を發見するであろうと信じて居る。

今の角力は、古文學的の趣味に於て殘つて居る。現行の種々の競技の中で、百人一首のカルタと角力とが、古く傳はつた趣味である。カルタの競技法は隨分改良されて來たが、角力ばかりが昔の儘である。

四

土俵に呼び上げる角力取の名を聞くと、人國記が展開される感がある。幕内になると、古力士を襲名するのもあるから、それは除きて、郷國を標榜するのは、常陸山、太刀山は固よりの事、今の栃木山、宇都宮、八甲山、小牛田山、長門洋、紀の川、神通川、射水川など、それ〲の出身地を現はして居る。今までのところでは、昔から知られた角力の國から多く力士が出て來て居る。千葉、土佐、秋田、越中、肥後、薩摩などの人が多い。地方的特色も稍、土俵の上に見られる。長州からは古來幕内力士を出さなかつた。横綱の阿武松、梅ケ谷などは、長州藩の抱力士であつた。若し長門洋が出世することになつたら、長州では空前の力士である。

角力上手に小さい力士が多いのは、一般の趨勢である、大の里、紅葉川、土州山などは其であるが、これを地方別にして見るに、東北角力は鈍い傾向があるといはれて居た。錦島、八甲山などは、その代表的であつた。然るに、近來、秋田角力から、敏感な角力が出るようになつた。兩國を始め、清瀨川、楯錦などもそれである。三杉磯も本來、秋田人であるともいふ。進んで行く世の中に、地方的特色が段々、消磨して、普遍的に

なるように、土俵の上に、地方粹が追々、見られなくなるであろう。

大阪角力に對して、古來、力を入れた人も、時代もあつたようであるが、若島の全盛時代の外、角力に於て大阪が東京に對抗の實を擧げ得たことは無い。しかし大阪から東京に來て名力士になつた者は多い。此の意味は、大阪と東京との大錦を對照すれば明瞭である。關西の新聞でも、大阪角力の記事は疎畧で、東京角力の記事は、東京の新聞同樣に詳かに報道する。議會と國技館との記事は、關東、關西を通じて、一樣の興味を以て讀まれる。

力士の發達は、其の名稱の變遷に現はれるとも言ひ得る。必ずしも一概に、そうでは無いが、大體に於ては、その傾向がある。最初に角力になつた時には、手輕く鄕里の名でも付ける。利根河畔から來たのは、大利根、能登から來たのに輪島山、越後から來たのに彌彦山といふ調子である。その角力が發達すると段々、美名を擇ぶ。錦洋が西の海となるように。錦洋は鹿兒島の錦江灣であろう。それが西海といふ大きな名になる。各方面の人物の發達が地方的から、普遍的に進むように、力士に於ては、その發達が改名に依つて表現される傾がある。小角力を見ると、多くは、その出身地が分るが、大きくなると、出身地が分らなくなるのが多い。

五

角力に、まだ外に、考古趣味を殘して居るのは、番附の字である。角力と芝居との大番附は舊式の特色のある書體で、それを見るとすぐに力士と土俵とが、眼前に見えるようであるが、此頃のように力士が多くなつては、實に讀み難いものになつた。これも、やがて活字に改まるであろう。藝術座の前身、文藝協會の最初の番附は、やはり昔の儘の歌舞伎文字であつたが、間も無く活字に改まつた。角力の大番附が、活字に改まつても、角力の興味に影響することは無い。

勝負附の紙面は、近來、著るしく小さくなつた。活字が改正されたのである。紙は半分になつて、價は之に反して二倍になつた。舊活字を用ひて居るのは、國技館の中で發行する當日の取組の番附である。ポイント型以前の舊活字を用ひてあるから、今の新聞に馴れた眼には目立つて見える。新聞の活字は著るしく小さくなつて、そして鮮明になつた。試みに大阪每日新聞を以て言ふと、昔の一頁六段が十二段になり、一段に三十行殖えて、昔の廿八ページが今の十ページに匹敵するといふ。取組の番附も、最新活字を用ゆると、約三分一に納まることになるであろう。

取組の番附に、實行の見込の無い中入後の若干の取組を載せて居るのも、舊慣とはいへ、餘りに形式的である。

階級的精神の旺盛なものは、軍人と僧侶と角力取とである。軍人は位地の下がることは無い。併し、追越される事はある。階級のあるまじき僧侶に階級制度の盛んな事は非常なもので、禪宗の如きは寺格に十二級もあり、一體に、僧服などにも、嚴格なる階級的精神が表現されて居る。赤裸々な力士の間でも、自然に、化粧褌が位地を現はす。それから角力は一階級違うと待遇が頗る差別が付く。彼等が土俵の上で智勇を傾倒して、この番附面の一行を爭ふわけである。かくの如く土俵外で差別の著るしい角力が、土俵の上では無差別である事が角力の興味である。實力次第、運次第で、勝利の神は何人の頭上にも宿る。横綱も大關も無い。のみならず、横綱、大關を倒した點は金星といふことになる。世の中に、これほどの無階級、無差別な理想鄕は土俵より外には無い。

角力には追越しもある、下がることもある。上がるものと下がるものとで、揩違つた大急行列車のように、相互の距離が隔だつて行く。無差別の土俵の上で、土俵外の差別を作り、そして土俵の上で、また土俵外の差別を打破して行く、それも、これも皆、土俵の上の一勝一敗に由つて決するのであるから、土俵に現はされた人心の緊張味は非常なもので、見物の興味も、これに伴つて緊張する。

土俵は階級主義の製造者であり、同時に打破者である。そして勿論、自らは手を下さず、人間の手を借りて、その理法を行はしめて居る。土俵は神の業を敢てする。趣味より見たる土俵は神聖なるものである。

六

取組の番附の紙面が、活字の改良に依つて、約半分以下に緊縮するを得るのみならず、取組の時間も、立合法の改革に依つて、是亦た半分以下、寧ろ三分一の時間に緊縮するを得るであらう。角力は早朝から夜まで、全一日を要し、興行の時間が長過ぎる。今では劇の時間も次第に短縮せられつゝある。淺草の活動の時間もモ少し短かくしたら可かろう。今では角力を見る丈けで一日の仕事になつて仕舞う。尤も幕内だけを見れば善いといふ人もあるが、興味の上からは、そういふわけにいかぬ。現在のように角力の時間が長くては、立合、仕切直しに見物が疲れて、如何に角力好の私共までも、夕方には欠伸をするようになる。立合法を改革したら、二百番の取組は、その間に休憩時を巧みに散布するとして、半日も掛らずして全部を終るであろう。

現在、將來の競技は、すべて充實、緊張したる短時間の中に行はれねばならぬ。今の角力に對して、私は、特に此感を有するのである。それから勝負の物言が、角力の一名物であるが、これは全廢して仕舞つて、檢査役と行司とに一任したら如何。若し一任が急に出來ぬならば、陪審制を採用して、好角家の中から陪審官を作るようにでもしては如何。

近來の大物言の中には、一時間半も掛つたのがあつた。幕内取組の十番に匹敵する位の時間である。支那の南北妥協の長々しさを思出す。物言を付ける以上、何か一理窟はある。結局、妥協は成立するが、双方の控力士に、一通り理窟を言はせて、それから納得させねばならぬところに興味がある。

七

大關の候補者と評判されるは、幾人もあるが、それで眞に大關になり得る者は、其の中、幾干も無い。順風に帆を揚げたように進むのもあれば、迂餘曲折するのもある。中挫して晩成するのもある。大關にはなつたが、早速衰へるのもある。大關たらずと雖、長く聲價を維持するのもある。大關たり得ると否とは、運勢に叶はなくてはならぬ、然し、大關候補といはれた角力には、何處か妙味を備へて居る。捨てられないものである。

宇都宮は稀有の大力士たる可く期待されたが、徒らに螢君の勇名を博した。盛りも過ぎたと思はれた今になつて、角力振が佳くなつて、三杉磯を投げた一番の鮮やかさは、此場所の花たるのみならず、彼に取つても、恐らくは角力取になつて以來の傑作であつたろう。此時、私は裏正面の四段の棧敷で本山彦一氏と觀て居た。友綱が來て居る。棧敷は土俵まで大分遠い。私は此の極り手を撓め倒しと思ひ、友綱に尋ねて見ると、蹴手繰りであるといふ。そして委曲に説明した。恰も林の先生が勝負後に、局面を打直ほして説明するようであつた。私も全く諒解して、餅は餅屋だと思つた。翌朝、新聞を見ると、私の信用して居る角力記事にも、私と同じく撓め倒しと書いてあつた。

私共の棧敷が遠くて、此の勝負の刹那、宇都宮の脊中を正面に見るようになつて居たから、手繰る手が見へなかつた。蹴つた足も分明でなかつた。友綱は、蹴手繰は、蹴る足が十分に敵の脚に當ると、却つて奏功せざるもので、當るか、當らぬかくらゐの呼吸のところが、鮮やかに極まるものであると言ふ。そして勝負の付いた時、彼は、善い角力を取つたと、繰返し讃嘆して居た。

土俵の勝負は、評者の立場に依つて、觀察が違ふ。打棄りの時などは、反對の方面から見る二人の批評が、正反對の結果を來たすことがある。私は、角力には素人である、手捌は能くは

分らぬが、此の勝負を話したのは、「人世の觀察」の興味及び其の困難なる事を思合はせたのである。

八

私が此冬に、山口に旅行して、山田屋に投宿した時、恰も大錦栃木山の一行が乘込んで來た。此晩、九州山を採んだといふ按摩がおそく來て、私を採んで呉れたが、九州山と私も、肉の堅さが餘り違はぬといふ。私は、かねて筋肉の堅實なるを自負して居たから、按摩のお世辭だろうと思ひながらも嬉しくない事は無かつた。此事を棧敷で話すと、意外の結果であつた。按摩から見る角力取の體は、割合に軟かいそうである。又綱は現在でも廿九貫餘の大兵であるが、彼を採むよりも細い細君を採む方が骨が折れるそうだ。按摩には、力士よりも役者が遙に難物である。大阪の中村梅玉の如きは有名な難物であると聞いた。これに依つて見ると、私の體を採むのが、九州山を採むより易いといふ事は、聊か、自ら慰むるに足りないわけでも無いが、又た自ら誇るに足るほどでも無いといふ事になつた。

大正八年一月十七日、大角力六日目を觀て、歸つて記す。

梅花の賦

田中貢太郎

梅が咲いた。純白なその花瓣に自然は怡然として微笑した。その樹は東洋の特産であると共に、その花は東洋が持つた清楚高雅な氣品を象徴したものである。從つて花の濃艶富麗を愛する泰西の人士には、その香韻の詩趣は分らない。

風は料峭として吹き、雪は斑々として殘り、自然の風物蕭殺としたる中に、春の曙光を齎すものは、この花である。梅花は百花の魁であると共に、花の王である。大和本草に、「烏丸光廣卿の百椿圖序に、凡そ日本に花と云ふは櫻になん、それすら中頃のことにて、昔は梅をぞ申したるなりと云へり。又唐にて牡丹を花王と云へども、宋楊誠齋が詩には、梅花に群花の北面すべき

ことを作れり。梅は誠に花中の第一品とすべきものなり。』と云つてある。

梅は支那から朝鮮日本にかけて分布してゐるが、熱帶植物でないから、琉球などでは、樹が在つても花が咲かない。それがたまに一つ位咲くことでもあると大に珍重がられる。そして、梅はもとから日本に在つたかと云ふに、加茂眞淵などは、『梅てふ木の花は、空みつ大和の國のものならずして、ことさやくから國より、根こし來れりしを、飛鳥の明日香荒妙の藤原の宮人ぞ、歌にもつらねはじめたりける』と云つて渡來の物としてゐるが、この頃では、豐前宇佐郡西シイグニ村の山中、豐後玖珠郡森領の梅谷と稱する山中、甲州の富士川に沿へる岩石の間などには、自然生と思はれる梅樹があるから、日本に自然生の物がなかつたと斷定することは出來ないと云ふ者がある。これは茶の樹と同じやうに、日本にも自然生の物はあるにはあつたが、支那や朝鮮と交通するやうになつて、その觀賞方や果實の效用などを知り、はじめて栽培するやうになつた物と思はれる。

梅が薔薇科の植物であることは人の知る所である。この梅は古くから栽培せられてゐるから、その品種は非常に多い。和漢三才圖會には、難波梅、淺香山、一入梅、花香實梅、鞍馬梅、叡山白、見歸梅、身延梅、冬梅、甲州梅、鶯宿梅、細川梅、金梅、玉井梅、飛鳥川、中妻梅、花布梅、江南梅、豐後梅、大梅、一越中梅、楊貴妃、求來願、簾梅、鑰梅、關東紅梅、唐紅梅、濃紅梅、香紅梅、叡山紅梅、未開紅、行幸、奥乃紅梅、本立寺、虎尾、軒端梅、單葉冬至梅、八重冬至梅、座論梅、褐梅、源氏紅梅などの名をあげ、事林廣記には、時英梅、抗△梅、圓成梅、二紅紋梅、算黄梅、楊梅、紫花梅、同心梅、麗枝梅、臙脂梅、猴梅、朱梅、紫葉梅、早梅の名があり、羣書拾唾には、江梅、早梅、消梅、古梅、重葉梅、綠萼梅、百葉細梅、紅梅、鴛鴦梅、杏梅、蠟梅の十一品をあげてあるが、その樹容花形によつて細別すると、三百餘種にのぼるとのことである。そして、その品類の中には、山梅桃、多葉郁李など云ふ異種類の物も交つて居り小梅信濃梅など云ふ果實が小さくて異種と見えるやうな物もある。八つ房の梅とて、多蘂蕋で一花より數個の果實を生ずる物、冬至梅とて冬至に花をつけ、八朔梅とて秋に花をつける物もある。梅には又數多の異名がある。支那では、瓊枝、玉肌、玉瑞、花魁、氷姿、靈骨、瓊姿、止渴、逸民、淸容、本母、石田、綴珠、眞珠、水晶、素羅、寒英、伯爽、綸旨、氷魂、玉蘂紫、花儒者、好文木などと云ひ、日本では、はな、このはな、一匂草、香散見草、初名草、風待草、香取草、かはへ草、春告草、

六ひなしの花、告げ草などである。漢詩としては林和靖の『衆芳揺落獨り暄妍、風情を占め盡して小園に向ふ。疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏、霜禽下らんと欲して先ず偸眼、粉蝶如し知らば合に斷魂すべし。幸に微吟相狎るべきあり、須ゐず檀板金尊を共にするを』などが有名であり、和歌では百濟の王仁が作つたと云ひ傳へられてゐる『なにはづに咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花』などが人口に膾炙してゐる。

早くから梅を愛玩した東洋では、梅に關する故事逸話が頗る多い。支那では林和靖をはじめとして高隱の士の話が殘り、日本では菅公の飛梅の話、橘直幹の話、阿陪宗任の『我國の梅の花』の話、梶原景時の箙の梅の話など、それは數へるとはてしもない程である。

羅浮の夢

開機活法には龍城錄の話とし、故事熟語大辭典には錦字箋の話としてあるから、二つの記錄に就て調べたなら、その出所もはつきりするだらうが、孫引の辭書によつて一かどの物知り顔をするのが當世だから、私も遠慮なくその故智を學んで話をすすめる。

隋の開皇年中のことである。趙師雄と云ふ者が廣州の羅浮に遷つた。羅浮は梅の多い所で、趙は風流の男であつたらしい。

ある時、それは寒い日であつた趙は家を出て梅から梅と探り歩いた。梅は白く的皪として咲いてゐた。そして、夕方になつて歸つてゐると、路が松林にかゝつた所で、日が暮れてしまつた、冷たい月の光が射した。林の間には、其所此所に殘雪が光つてゐた。

と、門口に火の明るい家が路の向ふに見えた。一歩一歩近寄りながら見ると、軒口に立てた一つの旆が月の光に晒されてゐたが、どうも酒旆らしかつた。趙は喜んで足を早めて行つた。

旆の家は確に酒肆であつた。酒肆の手前にも一軒の小家があつたが、趙がその前に通りかゝると、門口の戸が音もなく開いて背のしんなりした女が顔を出した。それは白い衣を着て、下に青い裳を穿けた綺麗な女であつた。

それを見ると、趙は足をとめて女に聲をかけた。女も恥ぢらひもせずに話をした。その聲は嬉しい濁のない聲であつた。話してゐると、女の體からほんのりした香が漏れて來た。

やがて趙は女を連れて酒肆へと行つた。女は趙の卓の傍へ腰をかけて相手になつてくれた。

緑の夜を着た子供が、何時の間にか傍へ來て、歌を歌つたり踊つたりして、酒の興を添へた。

趙は愉快で愉快でたまらないので、酒を過した爲めに、その儘其所へ醉ひ倒れたが、寒くてぐつすりと睡れない。夢心地に寒い寒いと思ひながら、うとうとしてゐた。そして何かの拍子に眼を覺してみると、自分の寢てゐる所は、酒肆の內ではなくて、寒い風の吹く樹の下であつた。驚いて起きあがつてみると、頭の上に花をつけた梅の枝があつた。彼は老梅の根元に睡つてゐたのである。故事の筆は『相顧みれば、月落ち參橫はつて、誰だ惆悵するのみ』と云つて結んであるが、思ふに彼は、驚きと寒さで欠伸をすることも忘れて、忘然として老梅の樹下に起ちつくしたことであらう。

梅花の粧

宋の武帝の女の壽陽公主が、人日に當る日に、後宮の窓に近い室に眠つてゐた。人日とは正月七日の事である。孫引の智識をふりまはしてみると、事物紀原に東方朔の占書と云ふのを引いて『歲の正月一日に雞を占ひ、二日に狗を占ひ、三日に羊を占ひ、四日に猪を占ひ、五日に牛を占ひ、六日に馬を占ひ、七日に人を占ひ、八日に穀を占ふ。その日晴明溫和なれば、その物蕃息安泰の候と爲し、陰寒慘烈なれば、疾病衰耗の兆と爲す』と云つてある。これは各その日の陰晴を以て、その一年中に於ける蕃息と安泰とをトすることになつてゐる。で、人日よ尤も大事な日であるが、公主はこんなことは無頓著であるから、平生のやうに朝遲くまで快よい夢を見てゐた。

その室へ母皇后が入つて來た。それは公主を起しに來たかどうかは分らないが、皇后は珠玉を鏤めた鞜で輕い足音をさしながら、牀の上にのびのびと寢てゐる公主の枕もとに近寄つた。と、多分窓から入つて來たであらう、四つ五つの梅の花瓣がひらひらと飛んで來て、公主の白い額に落ちたが、その花瓣は一つの花のやうに綺麗に並んだ。

公主は夢心地にそれを拂ひ除けやうとして、細そりした右の手を額に持つて行つたが、落ちなかつた。皇后は默つてその容を見てゐた。

その後、公主は皇后の命で、額に梅花の形を色どるやうになつた。

梅妻鶴子

支那で梅を愛した人と云へば、第一に指を屈するのは林和靖の林逋であらう。宋史には『林逋字は君復、宋の錢塘の人、少くして孤なり。志を刻して學を爲す。性恬淡、古を好み、榮利に趨らず。終に臨み詩を爲り、茂陵他日遺稿を求めば、猶ほ喜

[illegible]嘗て[illegible]なり。仁宗[illegible]を[illegible]と賜ひ、賜するに粟帛を以てす。西湖に居ること二十年、足未だ嘗て城市を履まず、娶らず、子なし』と書いてある。恬淡寡慾、勢利の外に超脱した隱者で、詩が出來ても稿を存しなかつたと云はれてゐる。その殘つてゐない詩の中で、『吟懷長に恨む芳時に負くを。梅花を見るが爲めに輙ち詩に入る。雪後園林纔に半樹。水邊の籬落忽ち横斜。人は紅艶を憐む多くは應に俗なるべし。天は清香と私あるに似たり。笑ふに堪へたり胡雛も亦風味、聲調を解し將て角中に吹く』の詩は、暗香浮動の詩と共に梅を詠じた詩として、古今の絶吟とせられてゐる。

林逋の住んでゐたのは、西湖の小孤山と云ふ所で、家の周圍には三百の梅樹を植えてあつた。今、その容貌を想像してみると、痩せて脊のひよろ長い、胡麻鹽の神主髯の生へた老爺であつたやうに思はれる。この薄汚い老爺は、ひよろ長い胴を屈めて、禿びた筆で詩を書いてゐた。時とすると、草書や行書を書いてゐた。又時とすると、眼を瞑るやうにつむつて詩を考へてゐた。そして、書き物に飽いて來ると、庭におりて、二羽の鶴を飼つてある籠の傍へ寄つて行く。鶴には飼主の心が分つてゐるので、嬉しさうに鳴き立てる。と、老爺の手がかゝつて籠が啓けられる。鶴は羽ばたきをして斜に空へ飛んで行く。空は青青と晴れてゐる。二羽の鶴の姿が見る見るその青空の中へ消えて行く。老爺は呵々と笑ひながらその行方を見送つてゐたが、腰骨が痛いので縁側に腰をかけて待つてゐる。と、一時ばかりして鶴は歸つて來て籠の傍におりる。老爺は又籠を取つてそれを伏せる。

翠雨軒詩話には、梅と鶴との話がある。『宋の林和靖、西湖の孤山に住す。梅花を植え鶴を畜ふ。常に曰ふ、鶴を子と爲し、梅を妻と爲すと』。

氷姿玉骨

裴晉の家の背後に梅が六株あつたが、ある年、花の咲く時分に、隣家に火災があつて、猛火がその樹を焦さうとしたので、泥土を積みあげてこれを圍ひ、まだそれに幕を張つて風を蔽ふた。桂林記には、その事を記して『而して曰く、氷姿玉骨世外の佳人、但だ恨むくは傾城の笑なきのみ』と、裴晉の云つた事まで載せてある。

揚州の法曹

梁の何遜は、揚州の法曹となつたが、州廨の廨端に一株の梅があつたので、花時には何時もその下で吟詠して日を暮らし

た。

後、官を罷めて洛陽に歸つてゐたが、州廳の梅のことが思ひ出されて懐かしくて仕方がない。で、再任を請ふて復た楊州に行つた所が、丁度花時であつたから、何はさて置いて、その下に彷徨して懐をやつた。

昨日や鶴を盗まれし

貞享二年二月、芭蕉は京都鳴瀧の山莊を訪ふた。其所には『盧栗』の編者三井秋風がゐた。秋風は京都の富豪で、閑居して詩歌に無聊をやつてゐる者であつた。

山莊には梅が咲いてゐた。芭蕉は閑寂な幽居の様に眼をやつて、『梅白し昨日や鶴を盗まれし』と云ふの句をものした。これは秋風を林和靖に擬したものであつた。芭蕉に好意を持たない者は、これを佞諂の吟として嘲つたので、芭蕉の門人が憤慨した。芭蕉はこれに對して辯明する所があつたが、これに氣を惡くしたのか二度と山莊を訪はなかつた。

この句に就いては芭蕉の腹の底を割つて見ないと分らない事だが、頬に疱瘡痕のある、痩せた色の白い若老人の宗匠、その當時、夜半人定まつた時には、『ちと藥がつよかつたな、』と思つたに違ひない。

風狂

芭蕉の門人の惟然は、美濃の關の人で、もとは富家であつた。ある日、庭前に立つてゐると、風も無いのに梅の花がちらちらと散つたので、染々と人生の便りなさを感じて、風狂に一生を過すやうになつたと云はれてゐる。

今、近世畸人傳、蕉門頭陀物語などに據つて、その性行の一班を云つてみやう。

ある時、芭蕉の供をして旅に出たが、枕にした木の切れ端が痛くて睡られないので、帶を解いてそれを枕に卷いて寢ると、芭蕉に『惟然は頭の奢りに家を失へりや』と云つた笑はれた。

惟然の爲めには芭蕉は佛であつた。芭蕉が亡くなると、それを慕ふあまりに、芭蕉の發句を綴り合せて和讃を作り、瓢を叩いて拍子取り取り謡ひ歩いた。『まづ頼むまづ頼む、椎の木もあり、夏木立、音はあられか、檜笠、南無あみだ南無あみだ。』彼はこれを風羅念佛と稱した。風羅とは芭蕉の別號である。

播磨をさまよい歩いてゐる時、ある人が衣服の汚れ垢付いてゐるのを見て、一疋の布を與へた。惟然は己の宿としてゐる家へ歸つて、其所の女房に、『一枚縫つてくれるなら、餘りは縫賃にあげやう、』と云つて頼んだ。女房が早速縫ふてやると、惟然は

は喜んで新衣を著更へて出かけたが、翌日になつて歸つて來て、『新らしいのは著心地が惡い。』と云つて、元の衣服に著更へて行つた。

故郷の篠田と云ふ家に逗留してゐる時の事であつた。急に旅がしたくなつたので、家人にも告げずに飄然と家を出たが、出かける時に風が寒いので、そこいらにあつた女の小袖を手當り次第に引かけて行つた。家人は惟然が持つて行つたと思はないから盜人でも持つて行つたのではあるまいかと云つて探してゐると、數日して惟然がそれを返しに來た。

惟然には女の子があつたが、それが成長して名古屋の豪家へ嫁いでゐた。ある時その女が、下女と下男を供に連れて、町を歩いてゐると、乞丐のやうな容をした父の惟然が、子供の群に取り圍まれながら風羅念佛をやつてゐた。女は懐かしさのあまり、人目も耻ぢずに走つて行つて、その袖に縋り付いて泣いた。惟然もそれと知つて、眼に涙を湛へてその顔を見てみたが、ふと考へて、『兩袖にたゞ何となく時雨かな』と云ひながら、やらじとする女の手を振り拂つて、何處ともなく走つて行つた。

惟念には同門の許六が撰した天狗巣と云ふ句集がある。彼の句として有名なのは、『時雨けり走り入りけり晴にけり』『彦山の鼻はひこひこ小春かな』『小鳥やむかふの畔につういつい云長いぞや曾根の松風寒いぞや』『水さつと立てばふはふはふはふはうふは』『梅の花赤いは赤いは赤いはの』

鉢の梅

耳嚢の後編には、梅の樹の靈をあらはした話が載つてゐる。それは江戸の駿河臺に住んでゐた人に關する話で、耳嚢には其の事は書いてないが、話の中に『同役を勤むる』相手がある所を見ると、一寸した旗本で何か暇潰し同樣な役を勤めてゐた者と見える。その旗本の名は山中平吉としてある。

その平吉は、いたつて梅の樹が好きで、梅屋敷と云はるゝ程、鉢植の梅を持つてゐた。これが爲めに平吉は、何時もその手入に忙殺せられてゐた。平吉に用事があつて尋ねて行く者は、何時も庭前の鉢植の前に蹲んで、せつせと手入をしてゐる姿を見せられて、『いつでもだ、鳥の鳴かない日があつても、梅の樹を弄つてゐない日はないな』と云ふやうな不快な感じを抱かせられた。

その平吉がふと病氣になつた。病氣は何病であつたか分らないが、段々に重くなつて來て、出入の醫師も匙を持つたなりに小首を傾けるやうになつた。

その夜も平吉は、病に苦しみながら、見續けの惡夢を見てゐるやうな心持ちで、うつらうつらとしてゐた。枕許の薄くぼんやり灯つた行燈の傍には、女房が坐つて看病してゐた。

と、お稚兒に結うた子供が一人、何處から來るともなしに來て、平吉の枕許に立つた。平吉にはその姿がはつきりと見えた。どうした子供であらうと思つてゐると、その子供は平吉の顔を見ながら、『我は數年厚恩の養を請けたるものなり。然るに此度御身の病、定業にて、死を待つに近しといへども、我れ數年の厚恩を思ひて、御身の命に代るべし。去りながら、今用ひ玉ふ醫師の藥にてはよろしからず、同役を勸むる篠山吉之助の知る人を頼み、その藥服用し給ふに於ては癒ゆべし。』と云つた。

それは怪しい夢であつた。平吉は朝になつて未だ忘れずに覺えてゐる夢の事を考へて見ると、何か物の靈が現はれたやうな氣がしたが、別に心當りもないし、又、夢に見た事を直ぐ用ひる譯にも行かないので、その儘にして置かうと、一度は打ちやらうとしたが、どうも病がはかばかしくなくてぢれてゐる時であつたから、夢の告げは兎も角、出入の醫師に相談して、も一人他の醫師に見てもらひたいと思ひ出した。で、醫師の許へ使をやらうとしてゐると、同役の篠山吉之助が見舞に來た。

平吉は篠山と聞くと、夢の事があるから、妙に不思議な氣がして、早速枕許に通つてもらつた。

篠山は平吉の顔を見ると、『病氣久々の事故、我等も相談の爲め來りぬ。その譯は、前夜夢に誰れともなく、御身の病を除く藥用の相談申候やうにと、申すもの有れば』來たと云つた。

平吉はますます驚いて、前夜已の見た夢の話をした上で、篠山へ出入の醫師を呼ぶ事にして、早速それを實行して見ると、不思議に病氣は癒りかけた。

所が不思議な事には平吉が一番大事にしてゐた鉢植の梅の樹が枯れかけた。家内の者はこれを枯らしては、平吉が病氣が癒つても力を落すだらうと思つたので、種々に手入れをしてみたが、平吉の病勢が衰へて行くと反對に、梅の樹はじりじりと枯れて行つて、平吉の病氣が全快すると共に、その梅は枯れてしまつた。

樂翁の風流

松平定信が樂翁と名乘つてゐる時であつたから、文化七年以後のことであらう。西丸の新番組頭を勤めてゐる者に春田四郎五郎と云ふ小身者があつたが、これも非常に梅が好きで、數百種の梅の樹を集め、花の時には同好の士を集めて、それを觀せるのが樂みであつた。

四郎五郎の梅の珍品を持つてゐることは、次第次第に高まつて、權勢の者でそれを求める者も出來て來た。游藝園隨筆抄の著者は『その事上の御聞きに達し、その内勝れたるもの兩三種を、内々奉りしに、いと珍らしきの御沙汰にて、それを仙洞へ御進獻に成りしに、夫れより又當禁へ被レ進と成り、叡感不レ斜趣なりとの事なり』と云つてゐるが、どうもこの仙洞と云ひ當禁と逆ふのは、順逆を辨へない當時の文人輩が、將軍にもつたいをつけた詞のやうに思はれる。

樂翁もこの評判を耳にしたので、四郎五郎の方へ梅を觀に行きたいと思つて、番頭をやつてゐる松平志摩守から、配下の四郎五郎までその旨を傳へさした。で、志摩守は使をやつたが、四郎五郎の家は貧しい小身者の上に、主人の四郎五郎が物に構はない性質で、雨戸が破れても、疊が穢くなつてもそのまゝにしてあるので、使の傳手に『樂翁殿の參らるゝ前、これを少しく繕ひ候方可然歟、尤も貧窮のこと故、その入費の料は、素より拙者より參らすべし』と注意さした。

これを聞くと四郎五郎は、『樂翁殿は某の宅を見んとのことにあらじ、然るに斯る煩はしきことに候はば、梅をも御見せ申まじく辭し奉る』と云つて怒つた。

志摩守は仕方がないので、それなら家はそのまゝでも好いと云ふ事で承諾さして、樂翁の許へ通知すると、五六日して樂翁は供を一人伴れて、四郎五郎の家へやつて來た。四郎五郎はこれを迎へて、庭の梅を見せて廻はつた。

その後で四郎五郎は、樂翁を汚い室にあげて、臺所の茶釜から樺色をした澁茶を汲んで來て進めた。樂翁はそれを手に取りながら軒の方に眼をやると、折れた鴨居を藁繩で縛つてあつた。疊は所々破れてゐた。樂翁はその茶を喫んでしまふと、又一杯かはりを注文した。四郎五郎は云ふまゝに汲んで來た。

その日樂翁は家に歸つて、四郎五郎の人となりをほめて、その上で『予、生れて茶釜の茶を呑みたること初めてなり、あまりに珍しさに、勸めて二ふくまで呑みたり、彼は天下の風流人なるべし』と云つたが、茶の味の事は云はなかつた。多分甘い茶であつたらう。

抱月須磨子合祀の記

或る夜の記述

—島村先生と須磨子に關する—

中山晋平

中山氏は嘗て八年間島村抱月氏の家庭に起臥して、抱月氏に師事した人で藝術座が出來てからは松井須磨子のために數々劇中の小唄を作曲した關係其の他で仝氏とは昵近の間柄であつた。彼のカチユーシヤを始めとして「さすらひ」「沈鐘」及び最近の「カルメン」等の小唄は悉く氏の作曲に成なつたものである。（記者）

松井氏自殺の電報を岡本歸一氏のお宅で始めて見た瞬間、私は非常に悲痛な、嚴肅な驚きに打たれると同時に、心のどこやらで松井氏のために云ひ知れぬ一種の悦びを感じない譯には行かなかつた。

といふのは比較的松井氏に接近して、松井氏の日常、殊に最近の生活をよく知つてゐた私には、松井氏として眞に魂の安住を得る道は「死んで島村先生のお側へ行く」といふことを措いて他に求めやうがないと思つてゐたからである。

島村先生が逝かれて六十日、其の間川上貞奴の身の上などと引き較べて何かしら浮いた噂を立てたい立てたいにかゝつてゐた世間は、脚本部の某氏との、ほんの何でもない關係にも尾鰭をつけて仰々しく囃し立てた。而も松井氏自身は毎も淋しい心を抱いて床の間に飾つた先生の大寫眞に、さながら生ける人に對する如く朝夕の食事を供へたり、霜解けの激しい雜司ケ谷の墓地へ日參を續けたりしてひたすらにありし日の先生をなつかしんでゐた。そしてある時は「先生の子供」を澤山有つた先生の奥さんの身の上を羨みもしたし、ある時は生き甲斐のない身をながらへてゐる自分の心弱さを喞ちもした。それ程先生と松井氏との間は濃やかであつたのである。

變つたことを考ると思はれるかも知れないが、假りに若し順序をかへて松井氏が先生より先きに此の世を去つたとしたなら

ば、其の時はおそらく先生が、島村先生が矢張り松井氏のしたのと同じやうにして松井氏のあとを追はれはしなかつたらうか。其れは「死ぬ時は必らず一緒とあれ程云ひ交はして置きながら、なぜ先生は自分だけ先きに死んで行つたのでせう」といふ松井氏の、あの喉を泣き腫らしての歎聲を多く聞くまでもなく、先生と松井氏との間柄を眞に知つてゐるものは誰しも容易く想像の出來ることであるが、特に私にはそんなやうに思はれれてゐない一の事實が、七八年以前の先生のお身の上に目擊さてならたのである。

私は今茲に其の頃の記述を試みやうとするのであるが、それを決心するに當つて實は尠なからざる躊躇を禁じ得なかつた。といふのは其の事件の內容が頗る先生の內生活に立ち入つてゐるので、先生御自身は勿論、それに關係した他の人々と雖も皆各自の胸に底深く秘めて置かれるのに、茲でそれを公にするといふことが若しや先生のお德を傷ける所以になりはしないかといふ責任感からである。

然しながら一面から考へてみると、それが眞に忠實な記述でさへあるならば、結晶した一個の藝術であるところの先生の御生活の一端を、その隱れたる鋭い一角を、眞に先生を理解しやうと欲する人々の前に紹介することは強ち先生を傷ける所以とは思はれないやうである。私が此の記述を敢へてするのは如上の理由によるのである。たゞ二三他へ差し障りになる個所だけには、筆に多少の檢束を加へざるを得ないのを遺憾とする。

島村先生といふ人は元來が非常に地味な謹直無比な人であつた。それ故御自分が酒好きであるにも似ず、據んどころのないおつき合ひの外茶屋酒を飲まれると云ふやうなことは皆無で、隨つて他所の女に戲談口をきかれるといふやうなことは絕對に無かつたと云つてよい。だから觀照の上でこそ愛の戀のといふ問題にも深い理解や同情を以て隨分むづかしいことを云はれもしたが、其の愛や戀が直接に自分の問題となると、誰しも味はう青春の時代といふものを物質生活や學問に追はれて殆ど素通り同樣にすぎて來られたといふやうな關係もあつてか、先生はもう四十の坂を越してゐられ乍ら廿歲前後の青年のやうな純なところ、初々しいところが多分におありになつたやうに思はれる。例をあげて具體的に說明することは差し控へるが、兎に角先生が晩年のやうな生活にお這入りになつたのには、他にも勿論いろ〳〵複雜な事情があつてそれが先生を驅り立てたのではあるけれども、此の初々しい純なお心持ちといふやうものが論理の力で先生に働きかけてゐた事は爭はれない事實であ

つたと思ふ。

ともすればかたくなゝりし我が心
四十二にして微塵となりしか

といふ先生のお歌が「早稲田文學」に出たのは大正元年の秋と覺えてゐるが、こんなお歌や「競爭」といふやうな小品を大びらに世間へ發表される前、卽大正元年の六七月頃は、先生が新しい生活にお這入りにならうとする過渡期で、非常に深い煩悶がおありになつた樣子である。

そしてそれの殊更目立つて來たのは七月下旬、文藝協會が名古屋で「マグダ」を演つて歸京してからで、いつもの先生ならば書齋に籠つてゐられる時間よりは茶の間で奧樣やお子さん方にお相手の時間の方が寧ろ長かつた位なのに、名古屋から歸られてからは、ほんの食事の時下へ降りて用事の口を二三きかれる外は大抵二階に閉ぢ籠つて、絶えずそわ〳〵した落ちつかない御樣子で部屋の内をあるき廻つたり、窓際に立つて深く何か考へ込んだりしてゐられる時が多かつた。

先生は又其頃よく外出された。夏休で學校も無いのに日盛りでも何でも關はず日に一遍は缺かさず時としては二遍も三遍も家を出られた。そして非常に不機嫌な顏つきで歸られるかと思ふと、時には非常に晴れやかな顏つきで土產を買つて歸られたりする事もあつた。

日を追つて先生の御樣子が奧樣の御目に餘るやうになつて來たと思ふ中に、とう〳〵八月二日といふ日が來た。

大正元年の八月二日、此の日は實に私が空前絶後の驚異を經驗した日で有る許りでなく、私の知つてゐる限りでは恐らく先生の御生涯に於てもこれ以上悲痛な御經驗は他に決して決しておありにならなかつたと思はれる。と言ふのは其夜先生が極秘にして居られた松井氏との關係が奧樣やお孃樣の前に曝露されて、悲劇のクライマックスのやうな痛々しい事件がお有りになつたからである。

そのいきさつを細かに記す事はいろ〳〵の事情が到底ゆるさないけれども、兎に角其の事件のために先生は殆んど一と晩中狂氣のやうに聲をあげてあたりかまはず慟哭された。それは先生の命にも換へがたく思つて居れた松井氏が其の晩其の事件のために必らず自殺してしまつたものと先生は思ひ込んで居られたからである。で奧樣がつき添つてわざ〳〵夜なかに大久保の松井氏の宿まで樣子を見に出向かれたが、宿に灯の氣が見えなかつたといふので全かり絶望して歸つて來られた。そして二階に上られるが早いか仰に寢ころんで、子供が駄々をこねる時のやうに兩脚で疊といはず、床の間といはず、襖や障子まですさ

まじい勢ひでドタバタと叩き鳴らされる樣は全く身も世もないと云つた御樣子であつた。

夜中の一時ごろ、「死ぬ死ぬと云ひ續けてゐるからあれでは二階から飛び下りるやうなことがあるかも知れない、暫く行つて附いてゝくれ」と奧樣に云はれて、月明りは差しこんでゐるが灯の氣のない二階の先生のお側へ私が上つて行くと、先づ「酒を持つて來い」と仰有る。一合入りの小瓶に冷酒を八分目位持つて行くと、喇叭飲みにそれを飲み干して「もう一杯」と仰有る。非常に興奮しておいでになるやうですし、若し又心臟でもお病るくなつては」といつて私が止めても「大丈夫さ」と云つてきかれないので、今度はわざと六分目位入れて貰つて「內にはもう之れだけより酒はないさうです」と云つて持つて行くと、それをも一度に飲み干して、さてそれをキツカケと言つたやうに、「僕は君に話をする、手を出したまへ」

といきなり私の兩手を握りしめながら興奮し切つた調子で色々なことを話された。其のお言葉の中をその頃の日記によつて順序もなく次に書き列ねてみる。

「僕は君、非常な大事件に出つくわしたのだ、さうだこれ以上の大事件が又とあらうとは思はれない、僕は君ラブをしたのだ。それが今夜……」（と堪えがたさうに泣いて）

「死なしてくれ、死なしてくれ、僕は死ぬ、何うしても死ぬ。若し死なければ全で變つた生活に這入る。四十二にして始めて僕は醒めた。」

「今までの僕には僞りを云ふことは全で出來なかつたものだ、それが此の三四ケ月以來たしかに僕の生活には僞りの分子が這入つて來た。戀は僞りを强いる。」

「妻にもすまない、坪內さんにもすまない、學校にもすまない。」

「僕は今にして始めて岩野泡鳴をえらいと思ふ」

「妻も可愛い、子供も可愛い、然し女も可愛い。僕は妻と女と兩方を愛する積りでゐた。女にはそれは出來ないが男には出來る。」

「妻は今夜女の前で僕を罵つた。あれだけの驚愕に逢つたのだから女はもう今夜生きてゐる筈がない。死なしてくれ、意味のある事ではないか、一つはラブのために、一つは義理のために死ぬ、死ぬ、何うしても僕は死ぬ、僕は今夜死ぬのを何とも思はんよ。」

「まんさら之れが僕の初戀ではない、前にも一週戀をしたことがある、今の妻を持つてからだ。妻もまだ知らずにゐるのだから君にだけ話す。尤も僕は今夜死ぬのだから誰れに話した

つて椿はん。前のは紅葉館の女中だ、まだ僕が學校を出たばかしの頃で僕も若かつたし、女も廿歳前で兩方隨分思ひ合つた。けれども僕はあまり金をつかふことが出來なかつたのでいつかそれなりになつた。」

「松井といふ女は非常に同情してやらねばならぬ女だ、彼れは生理的に一の缺陷を有つてゐる。先の亭主に別れたのも其の爲めだ。三月大阪へノラを演りに行つて以來、彼れは僕にある危險(其内容を可成り詳しく話された)から救はれてゐたのだが、それでありながら今では却つて僕に陷つた譯なんだ。」

「ノラにしてもマグダにしても僕の芝居で彼は成功したのだ。彼れも僕に惡い感情は有たなかつたらうし、僕も彼れが可愛かつた。あの女の藝術は僕があの女になり代つて演つたやうなものだ。全く僕のノラで僕のマグダであつたのだ。で僕は松井のためにもつと文學の素養をつけてやる積りで骨を折ることになつてゐたのだ。女優として今の名聲を續けられなくなつた場合には文學者としてでも立つて行かれるやうにしてやる積りでゐたのだ。」

話しながらも先生は時々聲を放つて泣かれた。私が先生のお頭を冷やして上げやうと水を取りに下へ降りると、やがて先生も降りて來て蚊帳の中へ這入られた。がそれはホンの一寸の間で、直ぐ樣撥ね起きて物に憑かれたやうに「死んでしまふ」と叫びながら表へ出て行かれた。あとを追つて直ぐに私も出かけたが、先生の御酒のせいも有つてか大分足許がお危いので先生の右の腕と自分の左の腕とを組み合せて月の明るい戸山の原をあてもなく三十分程も歩いた。

先生は幾度も幾度も足を止めては、

「女が乾度今夜は死んでしまつたから、僕をも死なしてくれ。でないと女にすまない。」

といふこと、又、

「女が死んだとすれば坪内先生や學校へ對しても義理が惡くて生きてゐられない」

といふことを繰り返し繰り返し仰有つては大きな溜息をつかれた。そして幾たびか私の手を振りちぎつては山の手線の方へ逃げやうとされた。で兎に角「明朝未明に松井氏の宿へ私が行つてもう一度樣子を見て來るまで靜にお寢みになるやうに」と云つて先生にはやつとのことで家へ歸つて頂いた。

するとちやうど折も折、其の夜中に戸山の原で女の縊首があつたので、先生には云なかつたが一時は悸とした。が幸にも所轄署へ問ひ合せて人違ひと判たので漸く安心して一と先づ蚊帳へ這入つた。そして翌る朝夜の引き明けに私は大久保の松井氏

の宿の邊へ行つてみたが、仕合せにあたりには何事の起つた氣配もないので、歸つて其の事を報告すると、それで先生は内心餘程御安心の樣子であつた。それでも幾らかてれ隱しの氣味でか、「僕は生きてるのぢやなかつたつけ、なぜ昨夜死なゝかつたらう」などゝ云ひながら二階に上つて、折々床の間の板を足で叩き鳴らしてゐられたが、其の朝松井氏自身が先生を訪ねて來てうやく先生のお心は休つた。

此の事件以來先生は急轉直下のいきほひでお變りになつた。そして先生の彼の大和めぐりや京阪の巡遊は此の事件のほとぼりをさますために企てられたものであつた。私には此の事件は先生の御生活に新舊の區切りをつける分水嶺のやうに思はれてゐる。

藝術座の幕の閉るまで

中村吉藏

（一）

抱月氏が突然の死は、氏が自ら身を以て描ける悲劇「藝術座」のクライマックスであつた。かくて二ケ月の後、須磨子の痛ましい自殺のシーンがその破局となつた、悲劇の幕は永久に閉ぢられて了つた。男主人公と、女主人公との、辿るべき運命の一卷は、その末端まで披ろげ盡されて了つた。「藝術座」は今や我國の文化史上乃至演劇史上の、一の古典となつた、是迄法外に高く評價せられるよりも、寧ろ法外に低く値踏されて來た「藝術座」の事業は、最早、所謂ジヤアナリズムの目的物ではなくなつて了つて、やがて嚴正な批評の對象として立つべき時機が始まつたのである、元來あらゆる物像は、適宜な距離を隔てた時代の遠景に退き去ると共に漸くその全相が眞の配合を以て人々の正しい視野に入つて來る、創立以來、前後六年に亘つた悲劇的な「藝術座」の事業が、時代の文化に對する或使命も、今迄隱されてゐたものが次第に明るみへ持來され、看過されてゐたものが更に凝視せられて、狂ひのない秤り皿にかけられる時節が到來するに相違ない、少くとも自分は然う信ずる事に依つてのみ、抱月氏が慘ましくもその血肉を賭け、その魂の財布の底をはたき盡してまで悔ゐなかつた此の事業の經過と目錄とを正視するに堪へ得るものである、又、或意味では「藝術座」と異語同義であつた一座のスター、松井須磨子が、その生前は名譽と、不名譽との兩面から、喧騷せる世間の人氣の不安定な波浪の中に漂はされてゐたとは云へ、自ら棺を蓋つて死の黑

幕の裏に消えて行つた今日では、如何に割引されても彼女に、新代の最大の——少くとも最初の女優としての永遠な墓碑銘を拒む權利者はないと、自分は確信する者の一人であるが、その須磨子の天分の閃きを早くも粗礦の中から發見した抱月氏が、自ら一の工人に身を下して、手を傷け、指を爛らせた許りでなく、その貴重な生命をも抛つ事を辭せない程の、熱意と熱愛を以て切磋琢磨の勞苦を續けて行つたお庇で、須磨子は始めて女優として、あれ程の市價に上る一應の光つた玉と成り得たのだといふ事を回想し得なかつたら、自分は「藝術座」の過去を語る男氣をすら持たなかつたも知らない、要するに「藝術座」は抱月氏の全人格の力で活きて居た、又松井須磨子は抱月氏の全人格の力で包容されて、育つ事も出來たし、活きる事も出來たのである、かくて「藝術座」そのものが、所謂、我國の新劇運動の隅の首石であつた事は、如何なジヤアナリズムも亦認めなければならぬ、厳然たる一の事實であつた。

「藝術座」の事業の歴史、若くはその外面史はやがて編んで置く必要がある、併しその内面史を語るのも亦強ち無用の事ではあるまい、否無用といふ以上、却つて多くの人生的な價値と意義とがその中から發見されて來やう、だが自分は今玆で所謂、創作的氣分にはなれない、さし當り唯自分の見た、若くは聞いた事實の眞を書留めるといふ程度で、一の備忘錄を作るに止めたいと思ふ、自分が是迄「藝術座」との關係上、立つてゐた或特殊の地位の、視野の中に入り來つたいろんな事件の曲折や、いろんな心理の經過を覺え書にして見やうとする丈である、從つて内面史といふよりも、寧ろその一の資料だと云つた方がより適當であろう、人生の文書の一斷片たる用を足せば、それで滿足である、自分は先づ抱月氏の死後の事から、記憶を辿つて筆を着け始めやう、この場合そこを中心とする外には、餘裕も餘地も與へられないからである。

（二）

去年の十一月五日の朝であつた、「シマムラシス、スグコイ」の電報に驚かされて、横寺町の藝術倶樂部へ駈け附けた時はもう十一時を廻つてゐた、抱月氏の急に小くなつたやうな遺骸は、白い蒲團をかけて、二階の六疊の室の一隅に横たへてあつた、自分はあまりの事に涙も出なかつた、「こんなに悪かつたのなら、病氣の通知位はして貰ひ度かつた」自分は須磨子に愚痴を云つた、須磨子は留度のない涙を拭き／＼して「私もマサカ、こんな事になろうとは思ひません……私さへ臨終の間に逢はなかつたんですから……」然う聞いては自分はもう一句も出ない、抱月氏の寂しい臨終のありさまが眼前に浮び上つた、一

切を捧げて愛し切つてゐた情人の手にも抱かれないで、「ア、
死ぬ……死ぬ……」と看護婦に獨語ぎながら、息を引取つた刹
那の惨めな光景が歴々と見えて來た、その天分は萬人に秀れて
豐かに惠まれたこの人が、又その環境は萬人に劣つて常に痛ま
しく作られつゞけたのは、何んといふ運命のアイロニーであら
う、何んといふ造化の惡戯であらう、抱月氏は自ら作つた活きた
悲劇の主人公として、到頭臥つて斃れて了たのだ、……自分の頭
にはむやみに感傷の流れが渦卷いた、併し、抱月氏なればこそ、
身を以てその悲劇の幕切れまで勇敢に打衝つて行けたのだ、萬
人に秀れた天分の人なればこそ、萬人の逃げたり避けたりし
やうとするあらゆる悲惨な環境のドン底にまで美しい幻影を見
つめて突進して行けたのだ、然う思へば、この寂しい死態も傍
から見て悲嘆する程、當人の爲めには悲嘆するに當らないかも
知れぬ、抱月氏は高い血税を拂つた代りに、自己滿足の生活を
買ひ得たのだ、不幸でもあつたが又幸福な生を生活した人でも
あるのだ……自分の理智は、さういふ風にも考へ直させてくれ
た。

　自分が生前の抱月氏に逢つた最後の日は、恰も一週間前の十
月廿九日の早稻田文學編輯會議を俱樂部の樓上で開いた夜であ
つた、その時「明治座の『緑の朝』の立稽古を近日やる筈だか
ら、茶屋まで行つて少し見てくれ給へ」とも話された、それか
ら「少し風邪氣だから、今夜はお先へ失敬して休む」といふ言葉
を殘して、奥へ入つて了つた、而もそれが自分への最後の告別
となつたのだ、唯つた一週間の中に、こんな急變が起ろうと
は、あまりに意外であつたが、後から聞けば恰も須磨子が流行性
感冒に罹つて發熱してゐたのを、抱月氏が親切に看護してやつ
て、それから感染したのだといふ、病勢が急に昂進して血が痰
に混るやうになつてからも「緑の朝」の稽古に勵んでゐる須磨子
に氣落させぬやうに、チツと自制して病苦を隱さうと努めたも
のらしい、一時は病院へ入る談も出たが「でも病院の方は、大
久保の方では、親戚の人等がしげ／＼出入されるでせうから、
私は中を堰かれて逢ふ事も出來なくなりませう」と、さう云つて
須磨子が泣いたのを見て、抱月氏はその心情を思ひ遣つて、入
院を斷念したのだといふ、さうして四日の、明治座の舞臺稽古
の夜が來た、病苦の募つた抱月氏は、床の上でしきりに須磨子
の歸宅を待ち焦れてゐたらしかつたが、十二時を過ぎてもまだ
歸つて來ない、張りつめた氣力は弛んで行くその中に昏睡狀態
に陷つて入つた、生憎後廻しにされた舞臺稽古が漸く片附い
て、三時頃に馳戻つた須磨子は、もう冷え切つてゐた抱月氏の
屍に手を觸れて見て慟哭した、「これではあまり殘酷た、も一

度活かして下さい」とも叫んだ、醫師が再び喚ばれたが死人を蘇らせる術はなかつた。

自分が、遺骸の横へてある室から退いて、階段の上り際の小部屋へ入つた後から大久保の島村家の遺族や親戚の人々は駈け附けた、自分の口にしたやうな愚痴が、一層鋭い感情の輪をかけて、箭羽のやうに須磨子の一身に投げられた、須磨子は歔欷（すゝりな）しながら「私が行屆きませんで……自分でも先生の臨終に遭へなかつたのが、殘念で〳〵堪りません……」身を遜（へりく）だつて、唯詫言を云つてゐたらしい、一つ罵られたら、二つ罵り返さないでは蟲の治まらぬ、何處までも負けぬ氣象に出來てゐる、或は然（さ）うしたマニアとも思はれる須磨子の平常を知つてゐるものは、打つて變つたその殊勝さに感心した、「先生の葬儀は出來る丈立派にして、出して上げて下さい、いくら費用が入つても構ひませんから」と云つてくれる須磨子のしほらしい態度にも、皆は眼を見合せて悦んだ、それは須磨子の强い所有慾――或場合にはそれが極端に發揮される平常を知つてゐるものには、一の「解脫」が來たやうに思はれたからである、皆の同情は一時に彼女の方へ傾いて行つた、今まで可也の反感を抱いてゐた者までが、忽ち同角度の同感で緊張させられた、「島村先生の死は松井君を精神的に復活させたのだ」然（さ）ういふ言葉が互ひに囁き交はされた、併し自分は此まであまり永く須磨子を見つめて來た、抱月氏が内からも外からも虐（しいた）げられつゝ苦しい笑を洩らして、チツとその生活に耐へてゐた長い歷史を見通してゐた、諸行の樂天的な「甦生說」を容易に受納れる心にはなれなかつたが唯「涙が人を淨化する」力は疑はなかつた、最も感傷性に富んでゐた須磨子が、その極點にまで身も心も放し切つて居り、溺らせ切つてゐる態度を眼前（まのあたり）に見ては、如何にも氣の毒でならなかつた、そしてそれが抱月氏の死を悼んでゐる自分の感傷的な氣分に溶（と）け入つた。

五月初日の明治座の舞臺を休んだ須磨子はその翌日の夜から「綠の朝」の幕を開けさせた、舞臺で生き、又舞臺で死ぬのが、俳優の道のヒロイズムであるが、抱月氏の棺に背を向けて俱樂部を出で行く彼女の後姿は淋しかつた、「今夜は何んな半疊が出るかも知れぬ、併しそんなものは壓倒してやる氣で、確かりやり給へ、」自分はさう云つて力を附けて、介添役に附いて行く脚本部の諸君にも「見物に氣壓（けお）されぬやうに、勵ましてやつて下さい」と駄目を押した。

その夜、靑々園氏の行屆いた配慮から、島村家の遺族との間にいろんな蟠つた問題を此際美しく解決する爲めに委員會組織の提案があつた、やがて明治座の役を無事に演了（しおほ）せて歸つて來

た須磨子に、此話をすると「何卒よろしく願ひます」と、快い承諾の返事があつた、明治座の見物にもさすが人情はある、須磨子が舞臺に立つと、滿場は喝采を以て鳴り響いたさうである。「緑の朝」の戀人の屍體に觸れて悲しい挽歌を歌ふ一節には、棧敷にすゝり泣きの聲が耳立つたさうである、自分の秘かに憂へた見物の「半疊」の醜い想像は、却つて同情の拍手と涙との美しい幻像に代へられて歸つて來た、死は嚴粛である、人類を貫く大きな同感の流れが常にそこから湧上つて來る、自分は然う思つて一種の感激にさへ打たれた。

棺前に通夜の人々の席から離れて、脚本部員は二階の一室に藝術座の善後策を協議した、島村氏に代つて、自分にその主幹の空位を滿たせたが善いといふ説も出た、幹事長と名乘れとも勸められた、併し自分はそんな提言を氣輕に受け納れる程の向不見の勇者ではなかつた、藝術座の内外の歴史を知り、又、その正體を見てゐる者に、抱月氏が血塗まぶれになつたり、泥まみれになつたりして懸命に踏堪へてゐた主幹乃至幹事長の地位を、又その地位に伴ふ實權を懷手やズリッパを履いたまゝで呑氣に把握せられると思ふやうな馬鹿な空想を描かれる筈はないからである、又抱月氏には、あれ以外に活きる途がなかつたのかも知れぬ、又更にあそこにのみ生きる事の喜びを感じ得たのでもあらう、併し自分は自分だ、自分の呼吸し得る空氣の容積は假令稀薄でももつと廣大な筈だ、少くともあゝした赤く爛れた灼熱の地帶には自分は到底永く住み得ないものだ、又住む事を欲しないものだ、勿論、そんな地位に自分を祀り込まうといふ企ては、惡意から出たものではない、寧ろ座の維持上の止み難い窮策からの思附でもあつたろう、それにしても薔薇の花冠だと云つて、荊の冠を他人の頭に加へるにも當る、一の不注意な惡戯だつたのだ。

「でも、島村先生と私とは、關係が違ひますから」と傍から須磨子が口を切つた、彼女も矢張唯制度や組織の上丈の、主幹だの、幹事長だの支配若くは指揮を甘受する氣は始めから持つてゐなかつたのだ、須磨子は抱月氏に依つて創められた、——若くは創める事を餘儀なくされた專制政治に慣れ切つて來た一座の女王である、自分で支配はしても、自分を支配されやうとはせぬ、善惡兩樣の意味で、プライドの高い女性である、所謂、近代的な婦人のタイプ、殊に彼女が嘗て自ら扮して、世間から認められる階梯を作つた「ノラ」や「マグダ」が、彼女の心の一隅に活きてゐたとも云へる、併し此等の眞の近代的婦人は先づ智識の洗禮を受けて、魂の目ざめが來たのだ、須磨子の場合は唯、本能が本能のまゝに露出されたのである、深い教養で濾過されて、一

種の寂びの附いた近代味は彼女の心の隈からも肉體の周圍からも發見されなかつたのは遺憾である、彼女の有てる支配慾、專制慾は、彼女の本能的なイゴイズムの變形たるに過ぎなかつたのは今更に慘ましい事實である、彼女の深い感傷性から流された涙には傍で見る者を直に同情の中に溺らせて了ふ誘惑力があつたが、冷靜な觀察者は、本能的なイゴイズムと、本能的な感傷性とは、表裏した一物の兩面である事を洞見するであらう、須磨子が文藝協會時代の當り役の一つとして記憶されてゐる「ケテキー」には、イゴイストの感傷性が或見物には不快な印象を與へ、或見物には熱心な讃歎を受けた。

會議の席では、須磨子を座主に推す事が更にK君から發言されて、一同は贊成した、須磨子も素よりそれには異議を唱へなかつた、そこで自分は脚本部主任といふ役名を受ける事にした、それでもあまり乘氣にはなれなかつたのだ、今こそ須磨子はその感傷性を極度に放つて、涙の底に身を浸してはゐるが、これから先の空模樣は何う變轉するか豫見は出來ぬ、悲哀から搾られた油で、心の波の凪いでゐる中は、船艤の相談も結構だが、一朝彼女の感情の颶風が荒れ出したら、大海も覆る騷が出來せぬとも限らぬ、然う思ふと自分には不安な前途計りが見えて來た、それは自分が、さうした航路の長い經驗から敎へられたのだ。

一體この會議の始まる前に、自分は第一案として、潔く解散する事、第二案として、他の有力な男優、若くは舞臺監督を聘し入れて改造を試みる事、第三案として當分現狀維持で行くか！ 諸君は何れを選ばれるかと問うて見た、イヤ諸君の意向よりも、先づ須磨子の眞實の意志が聞かせて貰ひ度いと迫つた、途方に暮れてゐたらしかつた彼女も、さすが思切つて解散すると云出す勇氣は持たなかつた、少くとも脚本部の人々の力にすがつて島村先生の遺志を繼いで行きたいといふのが、その時の彼女の眞の感情であつたに違ひない、成る程、島村先生は亡くなつたが、島村先生の魂は今、我々の頭の上にさまようてゐるやうな感じがする、故人の魂が一同の心を貫流して、そこから統一の緒が網まれ、音律の諧調がひゞいて來さうであつた、何だか感傷的に魅せられてゐた諸君も自分も、故人の棺のまだそのまゝ安置されてゐる中に、故人の心血の塊りであつた藝術座の事業を卽坐に解散するといふ事は押切つていふ口を持たなかつた、集まつた頭數は恰も八人であつたので、草双紙式のロマンチツクではあるが八つ房の魂のそれのやうに、故人の靈が八人に宿つたのだなど、戯談めいた事も戯談とばかりは聞えないで、そこに一種の微衷を見出したやうな厳かな氣分が一座の中に漲り亙

つたのだ、かくて座主と主任と更に常任幹事を脚本部員から選出するといふやうな談まで進めて、その夜は散會した。

出棺の日となつた、戸籍の正妻でない須磨子は、公の齊場で眞先に燒香する權利を許されてゐない、此も彼女の境遇の一悲劇であつた、イヤ、この戸籍事件、更にその内容に幡まつた抱月氏の血族と、彼女の一種不安定な地位とから醸される煩悶や、葛藤が、彼女を苦め、随つて抱月氏を苦め、更に藝術座そのものを苦める危機(クライシス)の素因の一つであつた、それが遂に解決されぬまゝに彼女の運命の一つの呪となつて殘された、この場合、彼女の心情の底を酌んで、倶樂部員一同の最後の告別式を擧行する事は儀式以上の必要であつた、棺の蓋は取られた、舞臺主任のH君は蠟燭の火を高く擧げた、白無垢姿の須磨子はその白い手を伸べて抱月氏の靜かな冷めたい死顏の前額に指先を當てゝ撫り／＼しながら、眼緣(まぶち)からはボロ／＼涙の粒を沸き立たせて、暫らくはそこを動かうともしない、傍から見ると何んだか小娘が懷かしげに人形の頬を撫で廻はしてゞもゐるやうな、餘念のない態度には、次に進んだ自分も不思、眼鏡を曇らせて了つた、「死顏に涙をかけちやゐけない」嚴(きび)い調子で然(さ)う云つては見たが、自分の聲にも力は入つてゐなかつた、この時ばかりは自分は心から彼女に同感した。

青山の齊場で、倒れかけた彼女を、手取り足取りして、喪服を着替へさせ、自動車の中へお荷物のやうに積込んで、直ちに明治座へ走らせた時は「實に殘酷な感じがした」と脚本部員のA君が後で陰影の濃い聲で語つてゐたのを聞いた。

それから初七日が過ぎて、脚本部員の會議を開いた、その時、自分は脚本部の維持費の要求の豫算を立てゝ、それを事務のYから彼女に取次いで、打合せて貰ふ手筈にした、經濟の問題が是迄、常に藝術座の危機(クライシス)の一つの素因であつた事を經驗して來た自分は、至當な、乃至至當といふよりも、もつと輕微な要求ではあるがそれが果して滑らかに通過するか、何うか？ 一味の危惧を抱かないではなかつた、それに引つゞいて、例の委員會が開かれた、その時、藝術倶樂部の建物を島村家遺族から須磨子へ讓渡し、須磨子からは教育資金六千圓と、香典一切を遺族側へ提供する事に話が定(きま)りかけた、ふと電話の所有の名義人の詮議が出た、自分が以前、藝術座に關係してゐた時代に島村氏が座の經濟上の窮迫から須磨子の報酬の未拂ひの代償(かた)に、電話の名義を彼女に書替へて、一坿附けた事を記憶してゐる、それで矢張然(さ)うなつてゐるのだらうと思つてゐたら、何時(いつ)からか島村名義になつてゐる事が、電話帳から發見されて來た、自分は忽ち扉の外へ呼びだされた、事務のYは低聲で、實は電話は島村

氏の名義に書替へられてゐたのだが、あの不幸のあつた朝同居人のHが電話局へ駈付けて勝手に名前人を替へて來た、Hは須磨子の血族でもあるし、然ういふ事にあまり敏感な性分だから、藝術座の後の一切の財産が向ふの遺族の手へ渡るのだと思つて、周章て無謀な所置を取つたのであらうが、何うも困つた事だと云ふ、それから階下の事務室で、須磨子に逢つた、「何うも困つた事が出來ました、私が財産を隱匿したやうな嫌疑をかけられちやつまりません、何うしたら善いでせう？」と思案にあぐんでゐる樣子である、自分も一寸と處置に迷うたが、折角是まで圓滿に運んで來たものが、こゝでケチが附いて、先方の惡感情を挑發しては、いかにも殘念である、それこそ藝術座そのものゝ破滅にもなりかねない、何んとか手段を講ぜねばなるまいと云つて、慰めて置いて、再び階上の會議の席へ顏を出した、この時、青々園氏が電話の名義の件から、五百圓纏り上げて、それでその場の埒は明いた、青々園氏へは電話の秘密をもう打明けたのかと、自分は疑つたが、後で然うでなかつた事が知れた、

須磨子の專志はぐらついて許りゐた、休みたいと云つたり、二屆人になりたいと云つたり、相手になる者も困つてゐたが、現に角脚本部員は寄り合つて一月の本興行の計畫やら、十二月の研劇の下相談などを進めて行つた、その中、一應大久保の坪内先生の處へ、御挨拶旁々伺つたらよかろうといふやうな事が須磨子へ話された、須磨子も領いてゐた、「介添役はK君にお願ひしやうぢやないか？」と自分が發言した、その時はK君も大した異議は云はなかつた、その後、自分は久方振りに、坪内先生を訪ねて、暫らく樓上で會談して、やがて玄關先を出やうとすると、そこに黑い幌で蔽はれた俥の駐まつてゐるのを見かけた、「他出の御邪魔をしたのか知ら」然う思ひ、思ひ、拔辨天の電車の停留場へ行つて立つてゐる中に、先の幌かけの俥が近づいた、「坪内先生か知ら」と思つて、ふとその覗き窓を見ると、それは須磨子の顏であつた、須磨子は坪内夫人へ挨拶に行つたのだつた、自分がK君へ頼んで置いたのに、思ひ立つたら矢も楯も堪らない、廻り途をしないで、一直線に飛ばうとするのが、彼女の性格であつた、全感情の傾斜が忽ち實行意志となつて動き出すのが、須磨子の生活でもあり、又その藝術でもあつたのだ、

その中、彼女の意志も漸く定つたらしく、脚本部の新組織の事が更めて依頼された、それで常任幹事二名を自分が指名する段になると、「少し待つて下さい……事務の方はそれでも遣つて行けるでせうが、私の相談相手がゐてくれなけりや困る事があり

ますから」と須磨子は卽坐にその人選に同意する事を遮つた。彼女の求めてゐたものは矢張組織ではない、假令その組織が全然彼女自身を保護してくれやうとも、それ丈では彼女は不安であつた、何んだかそこに感情上の空虛があるやうに思つたのだ、胸に滿たされない或物があるやうに焦燥したのだ、そして自分でそこに氣が附いてゐたか何うだか知らぬが、それは死んだ抱月氏の全人格的の愛、一切を捧げ又一切を容れた愛を今更に追慕する心の切ない欲求でもあり、又再びそれに似た、若くはそれに代り得られるやうな熱愛の再現の憧憬でもあつたのだ、自分は彼女を憐れんだ、それは抱月氏の死去の當夜、彼女が醫師に「死者の蘇生」を求めたのと同じ不可能な要求である事を憐んだのだ、彼女に對する抱月氏は「唯一人」である、世界の男子の中の「唯一人」である事が、此時はまだ彼女の痛切な自覺にまで齎らされてゐなかつたのであらう。

坪内先生の邸へ、更めて須磨子が伺ふ事になつたその時も皆がK君を介添役に頼んだ、K君は何んだか尻込して氣輕に承知してくれない、その時須磨子は「Kさん、何卒願ひます」と、熱した聲で云つた、自分の耳には、何んだか異様に響いた、それから彼女はK君と一緒に大久保を訪ねて來た、行惱んでゐた常任幹事二名の指定はその後、須磨子から「何卒よろしく」の簡單な言葉で形が附いた。

帝劇の文藝座の二日目を自分が見物してゐる途中、齊々國氏から電話がかゝつて、自分は委員の金子氏邸へ呼還された、例の電話の秘密がとう／＼曝露されて來たのだ、先方では大分興奮して、場合に依つては公沙汰にもしかねない氣勢であるらしい、自分は須磨子のために辯解した、彼女の知つた事ではない、シヤイロツクの罪をジエシカが被る所以はなからうといふ意味的の事を云つた、委員諸氏も漸く頷いた、その翌日、須磨子は事務のYと金子氏邸へ行つた、自分も後から出かけた「島村さんの亡くなつた當日、一番悲んでゐた人は松井君です、その人に何うして、そんな企を思附く餘裕がありませうか？常識があれば推察される事です」、自分は信じてゐるまゝに然う云つた、須磨子はさめ／＼と泣いた、一坐の感情は解けて、ゆるやかに氣分が流れた。

併しこゝに一の問題が殘つた、それは電話を再び切換へる手續をする爲めに、彼のHの捺印が必要な事だ、Hがそれを承諾する代りに須磨子はHへの涙金――Hが倶樂部から離れて獨立の生活をする資本に、相當の涙金を支給してやらねばならぬ事である、須磨子は焦れ出した、彼女のヒステリー性は昂進した「寧そ死んで了ひたい、……私が死んだら、島村先生の骨と一緒にし

て抑めて下さい、お願ひしますから」然うも云つた、イヤ、彼女が死ぬとか、死度いとか云つたのは、此場合許りではなかつた、「島村先生と、私とは一緒に死ぬ約束がしてあつたんです、先生が死んだら、私が死ぬし、私が死んだら、先生が死ぬ事になつてたんだが、でも先生には子供があるから、とても自分で死ぬ事は出來なかつたでせう、斯うなつたら私も直ぐ死ばね善かつたんだが、意氣地がないもんだから……」と自烈つたさうに云つた事もあつた、家人に聞けば、抱月氏の所持してゐた筈の護身用の短銃を搜し廻つた事もあつたさうだ、カバンを抱へて、事務室へ入つて、自分で十露盤珠を彈いたりして、「先生が居なくなつたもんだから、自分でこんな事までやらなけやならない」と、すゝり泣をした事もあつたさうだ、イヤ、何につけ彼につけ、直ぐ泣いてゐる樣子は度々自分も見かけた、くさくさした事務なんか、他人に任せたら濟ささうなもんだと、自分は間接、直接、云つては見たが、矢張、自分でやらなければ氣が濟まぬ質であつた、他人を信用する事が出來ない人であつた、少くとも、自分で信用して、安心して任せられる他人が見附からない氣持がしたのであらう、彼女は自分の血族にすら、一種の敵を見出したと思つたのだから、さういふ性向が愈々鋭くせられたのは、一面、自然だとも云へるだらう、Hへの涙金は多い、少いで、暫らくもつれ合つたが、漸つと鬼が附いて、彼は倶樂部を出て行つた、

横濱座の「生ける屍」と「帽子ピン」の興行が始まつてゐる中に、抱月氏の最初の命日が來た、その時一同、倶樂部に集つて、燒香を濟ませ、それから須磨子を促き立て、脚本部のA君N君、それに經營顧問のK夫婦と、自分との一行は新橋驛へ向つた、その時、N君は先驅けて、滿員の電車へ飛乘つた、扉が直に後の一行を遮つた、「N君は屹度、途中で下車して、我々を待つだらう」「濱松町邊へ下りてるだらう」然う語り合ひながら、皆は後から來た電車へ乘つた、N君の姿は濱松町では見かけなかつた、その次の驛でも見え無かつた、「コリヤ、途中で待つてゐたのが後から來た電車を取違へて上野方面へ待つて行かれたのかも知れない」然うかも知れない、……イヤ、屹度然うだらう、「コリヤ喜劇だ」一同は面白がつて笑つた、須磨子も愉快さうに笑つた、皆は、この喜劇のシーンの進行を樂んだ。

櫻木町へ着くと、須磨子は一人、俥を劇場へ驅つた、後の一行はゆる／＼伊勢崎町を歩いて、樂屋へ入つた、須磨子の部屋へ行つて見ると、矢張、N君は來てゐない、果して喜劇は筋書通り進行したのだ、さう思つて皆は腹を押へて笑ひ轉げた、そこへ喜劇の主人公のN君がヒヨツコリ入つて來た、皆は又、手

を拍つて笑つた、須磨子が堪らぬやうに笑ひ出した、空惚けてゐたN君は、そこで皆に一杯喰はせてやつたのだと切り出した、一直線に横濱へ乗込んでゐたN君を見て、劇場へ先着した須磨子は一寸と失望した、そこで今度はN君と同謀になつて、喜劇作者の裏を掻いた、作者連一同が、まんまと喜劇役者にされて了つたのだ、須磨子とN君とが見物側へ廻つて、一同の馬鹿笑ひのシーンを見物したのだ、一同、拍子抜がして、グッタりした、何んだか引込みが附かなくて、大の男子連が一時は萎げ返つた。

須磨子には斯うした茶目式の一面があつた、イヤ一體子供らしいのが、彼女の本性だとも云へる、「幼い魂!」「幼い心!」それが彼女だと云つてもよい、唯、その「幼い心」が、他人の「幼い心」と嬉戯する場合には、唯一の笑劇のシーンである、若くは喜劇の一幕である、併し、その「幼い魂」が、他の「大人の魂」と眞面目に觸れ合ふ場合、否、それを抑へ付たり、押し除けたりせうとする時に、最早單純な喜劇ではなくて、一のシリアスな悲劇の幕が開くのである。

「島村先生より一足先へ歸つて、よく戸棚の中へ隱れてやつたの、先生がさがし廻つても、見つからないと、「オイ、もう出て來いッ」なんて、怒鳴つたのよ」、そんな話をしたのも聞いた、誰か抱月氏の、哲學者的な、沈鬱な表情をした寫眞を見て「先生は何時もこんな顔許りしてた人だ」と云ふと、須磨子は口元で笑つて「さう許りでもなかつたのよ、私はもつと他の顔色も見たの」と云つた、唯、二人切の時には、いろんな甘いシーンもあつたであらう、それでなければ抱月氏の生涯にあまり悲慘過るとしか思はれぬから。

その夜の喜劇の二番目に、忽ちシリアスな悲劇の序幕が開かれた、それは事務のYが、興行師側から請取つてゐる裏書の會計上に、或秘密があつた事が、須磨子の手に入つた手紙から曝露された事件である、須磨子の顔色は變つた、眼は險はしく光つた、「Kさんへ電報を打つて、直ぐ來て貰ひませう」と、叫び出した、常任幹事のA君もゐる、自分もゐる、幸、經營のK君も來てゐる、前後策は何んとか附く、さう周章てゝ騷ぐには及ばぬ事だと、思ひはしたが、彼女の氣象を知つてゐる自分は、別に逆ひもせず、電報を打たせた、K君はその翌朝京都行の豫定だつたので、遂に顔を見せなかつた、「冷淡だ!」と須磨子は獨語いてゐたらしい。

五七日の法要の營まれた夜である、事務のYの査問會が開かれた、Yの行爲にも勿論セルフヰシュの斑點はある、併し一面、所有慾の强過ぎる、又、容易に他人を信用し得ない性質に形作さ

れた彼女の支配人役として、經濟上の融通を滑らかにつけて四方、八方圓く治めて行く爲めには、そこに或止むを得ざる理外の理を認めてやらねばならぬ寛大な度量が要求された、少くとも相當に腕の利くこの人を突放したら、急に適當な代り役は見附け難いから、彼女は一層繁雜な、又一層危險な地位に身を曝さねばならぬつだのた、そこで、二人の間をうまく調停して、元通り、やらせるより外に、この際、より善き途は開かれない事が一同の胸に通ひ合つた、併しその會の開かれる前須磨子はK君を階下の室へ呼び出した、K君は長い間、席へ歸つて來なかつた、歸つて來ると、やがて「諸君は須磨子に親みを持つてゐない、もつと親しんだら何うだ」と云ひ出した、殊に自分が、その最も親みを持つべき筈の人でありながら、もつと親みを持たないのが、いけないといふ風に自分には聞えた、他の諸君はいろ〳〵辯解した、併し、自分にはその「親み」といふ事は、「一切を捧げ又一切を容れろ」といふ意味にしか飜譯されなかつたので默つてゐた、勿論、相互の理解から、若くは友情から生じた「親しみ」は共同生活の貴い膏油である、膠である、併しその爾の眞の「親しみ」の醱酵するまでには、相當の時間が要る、殊に對者が女性である場合、しかも全感情の傾斜に活きてゐる彼女である場合、時間を飛躍した「親しみ」は卽「一切を捧げ一切を容れる」熱愛――第二の抱月氏の足跡を辿る以外に、何等妥協餘裕はないのである、併し自分は自分だ、又非常に然うあり度いのだ。

K君が少し調子に乘り過したので、一同は反感を抱いて來た、「こんな組織なんか無用だ、松井君は自分の好きな人――信頼されると思ふ人の處へ行つて頼んだが善い、」「然うしたが善い」そんな事を云はれて彼女は唯、默つてゐた、酒が運ばれたので、皆の血は大分昂ぶつて來た。

それから程なく自分は大阪へ行つた、中座の自作上演を見物するのがその用向であつた、藝術座はその頃横須賀で興行中だつたので、歸り途に特急車を國府津で乘替へて、横須賀へ向つた、樂屋へ入ると、A君がゐた、須磨子は化粧鏡をのぞいてゐた、A君はその時、K君の事件が大分、問題になつてゐる事を靜に語り出した、それは須磨子が、その后、K君の宅を訪問した事、引つゞいて横須賀の初日か、雪降りのため一日延びると、彼女は急に東京へ歸つて行つて、夜の十二時頃、K君を迎へ車で呼びにやつて、三時過ぎまで一室で密談した事、K君は須磨子の態度に或る鬼胎を抱き始めて、藝術座辭任の意をA君へ打明けた事――今、宿に來てゐるN君や、事務のYは大分興奮してゐるから、自分までもその渦中に卷き込まれぬやう、冷靜

に批判してくれといふのが話が大體の筋途であつた。

自分には凡てが意外であつた、須磨子の感情がK君に向つて急角度で傾斜して來たのは事實であらう、併し彼女の心理上の、失はれた空隙を滿たさうとする焦燥な欲求には一面同情せなければならぬものがある、寧ろ憐むべきものがある、一概に彈呵するのは酷だとさへ思つた、併し「五七日も經たつか、經たぬ中に……」さう云ふ嚴格な聲も心の一隅から響いた。

宿へ歸つて、N君やA君や、俳優のN君、事務のYなどと徹宵協議をつゞけた、「皆を賣つた」然う云つて激昂するN君を自分は宥めたりした、處がその翌日、須磨子は劇壇を引退する氣だと云出した、然うなれば藝術倶樂部の建物も不用だから島村家遺族との契約は、流して了ひたいと附け加へた、自分は呆氣に取られた、劇壇引退も善かろうが、一方の契約ししかも一種の社會的公約を今更履行しないで、無事安穩で居られるものと落付いてゐるらしい、その思考力の單純さを情なくも感じた、自分はあまり口も利かないで、N君の處へ行つた、そして胸の塊を吐いた、N君を宥めた自分が、此度はN君以上に亢奮して了つた、二人は汽車へ同乘して、東京へ歸つた、もう夜である、留守宅では湯の用意もしてない、婢を叱つて、早速風呂桶へ水を運ばせた。

清風亭へK君を呼んで、一同が事實の眞相を調べて見る事になつた十七日の朝である、自分は須磨子の[illegible]を受けて[illegible]を離れた、その時には一月興行を限りに引退する事、遺族側との契約は矢張履行する事、これから松竹へ行つて精算上の話を附けるといふ云條であつた、自分は勿論それに贊成した、午後、清風亭へは一同が寄合つた、須磨子は再び自分に會ひに來た、「大谷さんがいろ〳〵云つて下さるから、矢ツ張、つゞけてやつて行く事にしました、事務の方は松竹で引受けてやるといふ事ですー」と云つた、「それもよかろう、まだ引退する程の歳でもあるまいから」自分はそんな事を云つた。

一方の會合では大分激昂した語氣も聞えたが、K君は眞面目に事件の經過を告白した、勿論K君の身は潔白である、彼女は泣いて訴へもし、願ひもしたらしい、併し、それは抱月氏の幻影をK君の上に描いて見た彼女の心のすさびから出た一の空しい憧憬に過ぎなかつたのであろう、少くとも彼女自身の意識作用は然うした動き方をしたのであらう、皆は寧ろK君を氣の毒がつた、K君は自ら石田三成の小い縮圖だと云つた、皆は默つて、唯氣の毒がつた。

兎に角、藝術座の一段落は閉いた、脚本部は最早無物である、自然解散と決定した、併し一月興行の準備は今進行中だから、それまで中止する事は不可能である、今日は實質上の解散

として、その公表は興行打上後にしたいと自分は云出した、それには別に異議も出なかつたが、唯、N君丈は、自分の仕事の都合上、今日限り辭職するといふ言明をした。

この事件が、輪に輪をかけて新聞社へ通信された内報があつた、電話の秘密の眞の責任者は矢張彼女だといふ噂まで傳へられたらしい、A君とH君とは自働車で飛び廻はつた、幸に大事にならないで濟んだ、須磨子も皆もホッとした。

かくして一月興行の「カルメン」と「肉店」の稽古は始まつた、須磨子は舞臺に上ると活々して來る、何も彼も忘れたやうに技藝に熱中する、併し今度は何うも善く臺辭を覺えない、頭、調子の亂れてゐるのが誰にも氣附かれた、その中、七七日が來て、遺族側との契約は漸く履行された、自分はホッと一息吐いた、その後、須磨子と松竹事務所で落合つて、自分は大谷氏に同人の今後の事を頼んだ、一足先へ歸らせた須磨子は、中途その俥でK君の宅へ寄つたと云ふ事を、後から聞いた、

有樂座の一月興行には人氣の波が寄つた、「カルメン」には慥に彼女の生活氣分の一面があつた、「夫婦になつたら、情人の時とは違ひます」然ういふカルメンの臺辭を稽古の時から、彼女は何んだか泌々氣に入つたやうに云ひ廻してゐた、自分は生前の抱月氏に對して、彼女が充分その熱愛に酬ゐてなかつたのを悔恨する心の閃きではないかとさへ聞いてゐた、イヤ、「緑の朝」の時にも亭主持の女優に向つて「生きてゐる中に大切にして上げる事となつた」と云ひ〳〵眼を曇らせてゐたさうだ、抱月氏の熱愛に馴れ切つて、自然、抱月氏を虐げ通して許りゐる事になつた過去の事件のかず〳〵が、今漸く彼女の心の底を刺戟し始めたのではないかと思つた、何時も連中の世話を燒いてゐた事務のYは、横須賀から歸つて後は少つとも姿を見せないので、須磨子は焦々しながら自分で俥を驅つて、方々へ切符を賴んで廻つた、舞臺主任のH君まで、そうした役を引受けねばならなかつた、そのH君が、彫刻家のA氏の許へ百枚の切符を持つて行つて、僅か五枚しか捌いて來なかつた、K君との事件の一端を或新聞で讀んだA氏はあまり好感を持つてゐないやうな口吻であつたとH君は須磨子へ話した、A氏の許に出入する或人が「須磨子も寧そ殉死でもしたら世界一の女優だ」と云ふやうな事を口にしたとも傳へた、「若し死損つたら、笑はれると思つて自分は死ねなかつた」須磨子はそんな事を云つたらしい。それは慥か三日の夜であつた、

四日の朝、須磨子は叱言を云ひながら物置部屋を覗いた、その時梁を見てゐたやうだと後から人々は云合つた、養女に揃の外套を買つてやるやうに、出がけに事務員に云附けた、又、先

生の命介だから、蠟燭の火を絶やさぬやうに氣を附けてくれとも云置いたらしい、有樂座では、幕間に松竹のＩ君と自分と須磨子の室へ入つて、地方巡業の替役の事を相談した、「肉店」のお吉の役は、地方では他の女優に代らせてくれと須磨子は云ひ出した、「無人な一座だから、矢ツ張、君が演らなけやいけなかろうと」自分は云つた、Ｉ君も「然う願ひた」と云つた、「島村先生が居なくなつたら、誰も思遣つてくれるものはない」如何にも茫然たやうな樣子で須磨子は獨語いた、Ｉ君は「ぢやアいづれ又事務所で相談して」とお茶を濁した。

自分が脚本部員の扣部屋で、火鉢へ手をかざしてゐると、樂屋の廊下の方で「けむり、けむり、みなけむり、一切合切、皆けむり」と須磨子がヒステリックな高調子でしきりに唄つてゐるのが耳に附いた、後から思へばそれがその刹那の彼女の氣分のリズムであつたのだらう、

かくて五日の朝の、須磨子縊死の報知を受けて自分は驚かされた、世間も驚かされた、死者は今更その心理を語つてくれやうはない、併し「死」に憧れる感傷性は抱月氏の死後、強く須磨子の心を突き動かしてゐたには相違ない、而もその深淵の誘惑から脱れて、生きやう／＼と悶いては見た、抱月氏の幻影を新たに活かして、そこに一度壞れた生活の基礎を結ひ直したいとも努めて見た、抱月氏と二人で手配してやつた仕事を、今度は自分一人でやり了せて見やうとも試みた、だが凡ては徒勞で、あつた、徒勞に了ろうとするのが見えかゝつた、あらゆる光明は消えた、全感情は、今激しく抱月氏の追慕に傾いて行つた、抱月氏の熱愛の全相がありありと心の像(イメージ)となつて燒き付けられて來た、この刹那、須磨子の全身、全靈は純粹にこの「啞(オンリー)一人(ワン)」の情人の愛の生命で充實された、彼女は新郎の許に急ぐ新婦のやうに、遺書を書く時間も惜しさうに、顏に化粧を施し、髮を整へ、靑い帶揚を解いて裾を纏す用意まで手ぬかりなく、何の躊躇もせずに緋縮緬の扱帶を物置の梁にかけたのであろう。その死態に何の臆した處もなかつたやうに見えるのは、矢張平常の須磨子の、一本氣な性格の、立派な結末だと頷かせる、かくて女優須磨子の死は美しい。

（三）

須磨子の眞の生活は舞臺の上に在つた、舞臺の上にのみ在つたと云つても善い、彼女の扮したさま／＼な性格には、烈しい力が溢れてゐた、強い光が放射された、一體に男性的な氣性で、それに陰影を附けたものは女性的な多量の感傷性であつた、近代的な理智に醒めた女主人公に扮して、相當に成功を叫ばれにはしたが寧ろジプシー型(タイプ)の女性が、やがて彼女の性格と最も適を

諧調を作つた、「サロメ」もそれである、今度の「カルメン」もそれである、「アニツシヤ」にも然うした血が通つてゐる、「クレオパトラ」は抱月氏が然うした解釋の上から上演させたのである、「あの血の熱い女王が何うしてさう殘忍な事をするのかなア、氣に入つたとなれば獅子の兒の鼻づらにでも接吻するが、一度その嫉妬にかゝると何んな近親な者でも短刀で胸を抉られる迄その憎しみを受ける、火の玉のやうに熱いかと思ふと、氷のやうに冷い、不思議な女王だなア」これが大ジプシーたるクレオパトラの性格であつた、そして須磨子の性格の中にその縮小した模型を發見した抱月氏は、彼女の「クレオパトラ」に強い自信を持ち得たのである、而もアントニーの後を追うて毒死したクレオパトラの運命が、遂に須磨子の運命の豫兆となつたのは、今更に不思議の因緣である。

かくて舞臺上で、常に自己を中心とし藝術の世界を作つてゐた須磨子は、それを現實生活の世界にまで擴充した、藝術座が常に危機（クライシス）から危機への連鎖を手繰つてゐたのは、彼女が藝術の世界と現實の世界との區劃を辨別せなかつた――若くは然うする事を欲せなかつた性格の突角に醸されて止まぬ葛藤から續生したものが多い、「自己に徹した」とも云へる、「非常識に過ぎた」とも云へる、或はマニアだと診斷したが正しいかも知れぬ、要するに、藝術家として、女優としての彼女の大きな強味は、人間として、若くは現實に生活きる人としての彼女の大きな弱點となつた、この意味では、美しい眞珠が、痛ましい貝の核肉の疵口から生れるのにも似てゐる、造化の慘酷なアイロニーの一つのやうにも思はれる。

斯うした性格の彼女を、――藝術の世界と現實の世界との兩者の區劃を意識する事を欲しない彼女を、安全に育て、又安全に活かし得る爲めに、抱月氏はその一切を捧げ又その一切を容れたのだ、藝術と現實との兩世界の熱冷の接衝地帶に抱月氏は現身を以て調擺機關となつたのだ、或は熱帶に咲く天才の美しい異り花を外圍の冷氣から遮斷する爲めに、自分の骨を鐵筋に代へ、自分の肉を玻璃壁に展して、生きた一大溫室を作つてやつたのだと云つても善い、須磨子は抱月氏で育ち、抱月氏で活かされてゐたのだ、その生きた溫室は壞滅した、それに代る新らしい溫室を作つてやる人は求めても得られない、一朝世間の風に觸れて、天才の美花は凋んだ、強くて而も弱い彼女は自己壞滅を遂げた、それは自然の鐵則（アイロンロー）だ、運命の嚴かさだ、唯自分が遺憾に思ふ事は、溫室の鉢でのみ咲かず、外氣の中、日光の下で立派に開くに堪へる丈けの根強い生活力が彼女の魂の底に植附けられてゐなかつた事である、少くともさうした積極的な性

の陥治方が少しも試みられなかつた事である、だが、それも彼女の狂げられぬ「自然」なら仕方がない、熱帯の植物なら温帯の土には根を卸さないのが當然だらう、「私が居るから藝術座もやつて行けるのだ」抱月氏はその生前、彼女に折々然う云つて、満足を感じてゐたといふ事だ「ですから、先生が亡くなつたら、止めて了つた方が、先生も満足でせう」須磨子も然う云つてゐた。

併し、抱月氏が、須磨子を活かし、又藝術座を活かす爲めに嘗め盡した苦みは、回想しても竦とする程、自分には慘ましい感がする、藝術座創立當時から、早くも須磨子と男優間との葛藤は持上つた、「何の、二期生等が」と一方は下眼に見てゐた、「女の癖に」男優連は負けてはゐかなつた、それが嵩じて大阪の近松座の開演の時、牡蠣船へ行き度がつてゐた一女優を男子連が庇ひ立てたのが須磨子の氣に喰はなかつた、その女優は足留をされた、血の氣の多い男優連は忽ち熱り立つて、夜半宿屋へ怒鳴込んで來た、須磨子が横暴だと罵つた、抱月氏は彼等を叱り附けねばならなかつた、一座は遂に歸京後解散と決して、兎に角約束地の神戸へ向つた、その汽車の中で、いかも心の底から疲れ果てたやうに、腰掛の上へ横はつて眠入り込んでゐた抱月氏の力の抜けた痩顔の印象はまだ自分の眼前にちらついてゐる。

そこから歸京して後、その女優を處分して須磨子の氣が晴れた、男優連も漸く冷靜に返つた、一座は再び結付されて「サロメ」の上演となつた、「サロメ」はローシーの監督の下に稽古に取かゝつた、須磨子のサロメ・ダンスは、その鋭敏な感受性の働き方をローシーの口から讃嘆させたが、つひ何うかした機に躓いて板の間に轉げた、男優連が笑ひ出した、それが又シリアスな問題になつて、經營主任の君は憤慨した、抱月氏とも論爭した、そして遂に辭表を投げ出してそれ限り座を去つて了つた。

その次の危機は「海の夫人」の經濟的失敗の後に襲つて來た、十五日間の彼女の努力に酬ゐるに抱月氏は三拾圓を割宛てた、實際金の工面が附かなかつたので、それで彼女を納得させようとした、せめてその倍額位は仕拂つたが善かろう、借りてでもさうしたらと自分は注意したが抱月氏は彼女を信じ切つてゐた、するとやがて、今後月手當百圓の支給を彼女から要求した、それは當時の藝術座に取つては隨分苦しい負擔だつた、抱月氏が方々から借錢して、月々の經費を繰出してゐたその頃の財政狀態を知つてゐる者には、義理にも切り出せない事だと、人々は呟き合つた、男優連は又怒り出した、「公衆劇團へ行き度がつてゐるんだ」「河合へ手紙をやつたさうだ、怪しからん女だ」喧騒の聲は高まつて來た、抱月氏もさすがに不安を感じ始めた、君

は何う思ふ？」と自分は問はれた「サア、何んだか、そんな形跡が萬更ないでもないやうた、少くとも背後からつゝく者はゐるやうだ」そうした密談の揚句、結局、大道具の費用を興行豫算の中へ組み入れると同じ筆法で、彼女の要求通り、承諾を與へる事になつた。

男優連の惡感と不平は爆發した、抱月氏に迫つて、「彼女一人と、自分等全體と、何れを取るか、選んでくれ」と手詰の談判をやつた、抱月氏は答に若んだが、彼女を捨てる氣はないと云つた、「私はヷンナを連れて流浪して、誰にも知れず、世間から忘れられて、大道の辻に袖乞をしても餘生を送ろう」とギドーの臺辭を引用して、深い覺悟を示した。

それで男優連一同は退座して須磨子の王座は不動のものとなつたが、次興行は方々から俳優を驅り集めて混成的の劇隊で蓋を開けねばならなかつた、而もその時の「復活」が一方藝術家側からは彼此批評を受けながら一般民衆に歡迎されて、藝術座の經濟的基礎は漸く作られ始めた、須磨子の名も世間的に大きく擴がつて行つた。

「クレオパトラ」と「剃刀」との上演を了つて後、研究所建築の設計圖は引かれた、旅興行に出てゐる中に、工事の骨組は出來上つた、それが一度、大風に覆つた頃九州を巡演してゐた一行が鹿兒島へ着いてから、又一の危機が持上つた、それはたわいもない事からである、併しそのたわいもない事が屢々藝術座の基礎をぐらつかせたのだ、その時抱月氏は或る文學藝者と一二度、酒席で逢つた、愈々明日、鹿兒島を出發するといふ前夜、彼の藝者は宿まで使を立てゝ羽織裏に紀念の染筆を求めた、須磨子に何か書いてやれと勸めて抱月氏はやがて自分で筆を取つて「……燃ゆる思ひの櫻島……」と云ふ文句を書いた、須磨子の顏色は見る〳〵變つて來た、抱月氏の食膳は蹴返される、鞄へ納つてあつた羽織や、衣物は、投げ出される、烈しい組打が始まる、罵り合が始まる、「汝が日本一の文士なら、私も日本一の女優だ」「この成上り者、誰のお蔭で然うなれたと思ふ」「汝こそ成り上り者だ、憚りながら私は武士の家の血統に生れてる人だからね」興奮し切つた抱月氏に「度し難い女だ、もう藝術座は解散する」と、即坐に男優の宿へ命令を傳へさせた。

だが翌朝になると、暴模様は急に和いで了つた、居合せた事務のNが「何うも大變でしたね？」と、抱月氏の顏色を覗ふと、「何アに、おそこか善いんだ、天眞爛漫だ……」と、ニタリと笑つてのけた、――さういふ事件も傳へられて來た。

小い危機、大きな危機はそれからそれへとつゞいたが、研究所建築の費用の豫算の狂ひから、藝術座は再び經濟的危機に脅

かされた、元來この研究所の建築には二重の意志が動いてゐた、少くとも抱月氏の企圖した目的以外に、二三の藝術座關係者に勵まされて、自分は現在のスターシテスムに代るべき新システムを育て上る爲めの、一の孵卵場に宛て度いと思つてゐたのだ、何の途がこれが藝術座に一の甦生を與へる新機關だと信じてゐたのだ、抱月氏も勿論そうした希望は描いてゐたに相違なかつた、而もその建築の出來上つた日に、一番先へ見舞つて來たのは、恐ろしい債鬼の顏であつた、その債鬼は藝術座を臺灣へ追ひやつた、朝鮮、大連へまで追ひやつた、最後に、普及興行の名の下に、公園の舞臺にまで立たせる事になつたのだ、併し、さうして廣大な荒地に種を蒔いて歩くやうに驅り立てゝくれた債鬼の鞭が唯呪はしとのみ今から速斷は出來ぬ、蒔かれた種が、そのまゝ腐つて了ふか、何うかは、もつと長い目で見なければならぬからだ。

だが、折角の公園興行も經濟上の大した救ひにはならなかつた、須磨子は十日間、千圓の報酬を求めた、それは普通の標準から云へば決して不當ではない、唯の興行師はもつと餘分に支拂ふだろう、けれども今、病體の藝術座そのものに取つては血を吐く苦みだ、倶樂部の奥坐敷の玻璃窓が毀れたのは、その時の紀念だ、抱月氏は苦笑して、胸のもやくやを晴らす爲めに、殘つた金で倶樂部の門を建てた、自分はそれを「[illegible]門だ」と云つて、人々を笑はせた。

この間にも自分の創作劇は須磨子が女主人公になつてしきりに上演された、「剃刀」のお鹿、「飯」のお市、それは皆に彼女の傑作だと自分は信じてゐる、そのお市は花形の吉右衛門が帝劇の時、始めて見物して「ゑらい女優が出來たもんだ」と感嘆したといふ噂が樂屋へ傳はつた事もある、併し須磨子は、自分の作の女主人公が、何時も汚い身裝の者、卑い身分の者許りなので、あまり氣に喰はない、自分に向つて、屢々然う云つてゐた、それで自分は彼女の好きさうなものを書いてやる氣にはなれなかつた、それに一方、社會劇は官憲の檢閲がむやみにやかましい、此際、何んとか新局面を打開して行き度いといふ慾求が心の奥で燃え上つて來た、さうしてる中に、急に大病に罹つた、それを機會に自分は一旦、藝術座と手を分つ事になつた。

その後、九州興行が、一つは地方の成金氣分と、一つは座の人氣とで、大當りに當つたらしい、經濟的基礎が再び强固にされて、藝術座の運は向直つた、引つゞいて松竹との興行契約が成立つて歌舞伎座で「沈鐘」が鳴つたのだ、人々から傳聞した處では、自分が去つた後で、抱月氏と須磨子との間の、經濟は共通のものとなつたらしい、「二人は猿引だ、私は二人に使はれる猿

見たやうなもんだ」そんな事を云つてた須磨子の心の或る疑惑も自づと解けて行つたのだらう、抱月氏も大分強くなつて「馬鹿ッ……默つて居れ」そんな口調でよく叱つてゐたといふが、それでも地方巡業の先々では自筆で須抱子の踊の看板を書いたり、踊の舞臺を自分で雜巾がけまでしたといふ事だ、それを見て涙がこぼれたと云つてゐる者もある、最後に京都で「沈鐘」の開幕時間の遲い速いのいさくさから、河合一派との確執が生じて、中間に立つて獨りで苦んだ抱月氏が、四條の橋の欄干に凭れかゝつて、チツと夜の川水を眺め入つて立留つてゐた時の、表情は、氣の毒とも憐れとも、云ひやうのないものだつたと、自分の耳へ傳へられた、さう聞いた丈でもその時の抱月氏の遣瀨ない心の影が自分の眼にはまざ〳〵と浮んで來るやうだ。

（四）

自分はあまり多く語り過したやうだ、又語るべき處をあまり多く語つてゐない氣もする、矢つ張まだ落付いてゐない、書き方にむらがある、生前、須磨子に向つて、「僕は島村先生ばかり善い人で君許り惡い人のやうに他へ云つてるよ」と、醉つた元氣で露骨に云つた事がある、「やり切れないね」とか、何とか彼女に答へた、已に死んだ人々の事を筆にする場合には、殊更愛憎好惡の心の着色は拂拭してかゝらねばならぬ、自分はそれは意識してゐる、さう意識して書くには書いた、併し、他人の眼には何う見えるか？ それは見る人々の批判に任すより外、仕方がない。

假令松井須磨子が何んな女性であつたとしても、若くは一種のマニアであつたとしても、女優としての、藝術家としての彼女の際立つて鮮かな光りや、高い匂ひには聊も增減する處はない、時の永遠の瞬間を刻んだ美の幻影！ 力の映像！ それは唯彼女自身のものであつた、彼女のみの創造であつた、我々は地上に生をつゞくる限、心の記憶の中に、印象の再現の上に、それを讃美し、それを尊重するであらう、「人生は短く、藝術は長し」抱月氏が好んで口にした、又筆にした一句は氏の爲めにも、又彼女の爲めにも適切な追福の呪文である、かくて強く活きて弱く死んだ彼女は又、美しく活きて美しく死んだのだ、而して黑い幕は今永久に藝術座の舞臺を閉ぢて了つた。

（八、一、二二）

須磨子と私との交渉

伊原青々園

○

文藝協會で始めて俳優養成所が開かれた時、第一に女優を志願して來たのが三田ちゑ子──今の上山浦路──でした。そうして第二に申込んだのが小林正子──即ち松井須磨子──でした。坪内博士が自分で入學試驗をして、其の結果を報告せられた時、『三田の方は柄も大きいし、眼鼻だちまで女優に適當して居るが、小林の方は柄も小さいし、三田ほどに思はしくない。』

そういふ評點で文藝協會に入學した小林正子が、後に至つて女優の第一人者たる松井須磨子にならうとは、坪内博士をはじめとして、吾々も豫想しなかつたのです。

當時、須磨子の良人は前澤精助氏でした。此の人は藤澤淺二郎の經營した藥店の俳優學校で教師をして居たので、私は既に一面識がありましたが、須磨子が愈々文藝協會へ入學すると極まつてから、前澤氏が須磨子自身を連れて私の宅へ來ました。

『これは私の妻ですが、今度文藝協會へ入りましたから宜しく願ひます。』

そんな挨拶をして、信州から持つて來た手土產を置いて歸りました。私が須磨子と始めて對面したのは此の時でした。

文藝協會の俳優養成所で、私は國劇史を講義して居ました、學年が改まつてから「五大力」の脚本を講義するやうになりました。須磨子も生徒の一人として殆ど缺かさずに教室に出て居ました。然し私の受持は右の通り、講義するだけで、術科でないから、個人として餘り近しくなる機會はありませんでした。

其のうちに帝國劇場で文藝協會の公演があつて、土肥春曙氏のハムレットで、浦路が王妃、須磨子がオヘエリアでした。前にいつた通り、浦路の方が須磨子よりは一枚上の地位に居たのです。

それが、文藝協會の大阪行になつて、大阪の旅先で或る事件が出來した爲め、興行を了つて東京へ歸ると、幹部會で決議した結果、浦路と其の良人で同じく文藝協會員であつた上山草人との二人は退會する事となりました。浦路が退いたので、須磨子は自から文藝協會の立女方たる地位になつたのです。

それからはノラだの、マグダだの、殆んど須磨子の出し物のやうなものばかりで、女優としての名前は次第に高まりました。その末が抱月君とのイキサツから文藝協會の解散となつたのですが、私も幹事の一人でありながら此の間の事情は餘り詳しく知りませんでした。

○

抱月君が須磨子と藝術座を起す前に、私は赤坂の紅葉といふ支那料理で抱月君と差對ひになつて其の擧の非なる事を諫めま

したが、無論抱月君は聽入れませんでした。そうして自分の家庭についての不平をしみ〴〵語りました。

愈々藝術座が出來てから、始めて私は須磨子とも、前よりは近しくなるやうになりました。抱月君に會見する場合には、大かた其の傍に須磨子が居たからです。

其の抱月君が死んだ時、私は葬儀の事や、藝術座對島村家の事やにつき、傍觀するに忍びないハメになつたので多少の斡旋をする事になりました。殊に藝術座對島村家の問題について早稲田大學側から金子、中島、五十嵐、藝術座側から中村、秋田、そうして私だけが何方つかずとして、此等六人の委員で双方を交渉した結果、島村家は藝術座の建物その他一切を須磨子に贈る、又須磨子は島村家の遺子教育費として六千五百圓を贈るし、藝術座を代表する抱月君の負債一切は自分で負擔する、大體がさういふ條件で双方が快よく折合いました。

其れは抱月君が死んだ十一月五日から八月目の十二日でしたが、愈々其の受渡しをする前に島村家では遺産相續の手續をせねばならぬ。所が裁判所で其の手續が後れた爲め、須磨子とは契約だけで實行が延び〳〵になつて居ると、十二月十二日でした。私の勤めて居る都新聞社へ須磨子から電話が掛りました。それは急に面會したい事があるといふのです。

其の電話の掛かつた時、私はまだ出社して居ませんでした。私は其の日の午後一時過ぎに始めて社へでると、受付の交換手から右の傳言を聞いたので、直ぐに藝術座へ電話をかけて、今から社へ來てくれゝば面會するといふと、其の日は横須賀の初日なので、是れから直ぐに立たなくては成らぬから、明後十四日に横須賀から歸つて、午前十一時までに御宅へ行くといふ返事でした。

跡になつて他の人から聞いた所によると、横須賀の初日は十一日であつたが、大雪で延引となつて、須磨子は其の晩無理に東京へ歸つたさうです。そうして其の翌る日、再び横須賀へ行つたので、其の行く前に私へ電話をかけたのです。

で、十三日になつて果して須磨子は私の宅へ尋ねて來ましたが、約束の時間よりは少し遲れて居ました。そうして私は其の日箱根へ行く他の約束があつて、正午過ぎ新橋停車場へ行かねば成らぬので、落付いて話して居る暇がないし、須磨子のいふ事も何だかモヂ〳〵して要領を得ませんでした。それで十六日に横須賀を全く打上げて歸京するから、其の日改めて來るといふ事で、青山五丁目の停留場で別れました。

十二月十六日の正午前、須磨子は再び來ました。此の時も言ふ事が絶句したり、前後したりして、ハッキリしなかつたが、

十四日に來て言つた事とを契合させると、――藝術座はトテモ自分で持切れない、――島村家から建物を貰つても困る――だから、あの契約はよしたいと思ふ――此の事を中村(吉藏)さんまで言つたら叱られた――其んな事は今更自分では言出せないから伊原君に言へと言はれた。――其れが肝腎の用件らしかつたが、尙ほ――其の前にも藝術座を解散しろといふ事は楠山氏が言ひ出したが、他の人が怒つたといふ事や――座員で金錢上の非行があつたので其れをやかましく言つたら、其の座員が自分と脚本部とを離間しようとしたといふ事や――島村先生が無くなつたので、此れからの自分は座員の或る者に壓服されたり脅迫されたりして勤めて行かねば成らぬやうな氣がするといふ事や――楠山君と怪しいと他に疑はれて居る事や――實際自分も餘りに楠山君に賴り過ぎたのが惡かつたといふ事や――楠山君の事につき明日淸風亭で會合があるといふ事や――何うせ男を相手にせねば成らぬ仕事だから、一々疑はれては此れから先き困るといふ事や――其のほかに色々細かい事を語つたが、其れは玆に發表しかねます。

其の時に、私は須磨子自身の話で、始めて藝術座に動搖の起つて居る事を知つて驚きました。そうして私だけの意見は腹藏なく打明けました。

其れは島村家に對する契約を此の場合に變更しようとするのは不當である事――中村君が叱つたは尤もである事――須磨子自身の名譽の爲めにも是非契約は斷行すべきである事――しかしながら藝術座を須磨子ひとりで持堪えて行く事は失禮ながら不可能である事――もし持堪えたとしても、俗務に追はれて舞臺が疎かになる事――だから藝術座主の資格を拋つて只の女優として活動するが得策である事――藝術座の建物は一旦は島村家から貰つて置いて其のうち買ひ手を見付け次第に賣拂ふ事――ざつと要點を摘めば其ういふ意味でした。

其れを聞いて居た須磨子は腑に落ちた樣子らしく見えました。

「楠山さんも先生と同じ意見です。」

斯う言つたのは、藝術座を解散するといふ事についてであつたらうと私は思ひます。

十六日に須磨子は其れで歸つて行きましたが、翌十七日に、松竹社の大谷氏へ對して女優をよしたいと申出でたが、大谷氏に說かれて其の申出を撤回したといふ事を、私は「萬朝報」の記事で始めて知つて意外に感じました。

しかし須磨子からは其の後何等の知らせがなくて、十二月廿三日になりました。其の日は抱月君の四十九日で、夕方から藝

術座で法要を行ふといふ招待狀が須磨子の名前で來ました。そうして其の日の午前に、愈々島村家と須磨子と双方の契約を實行し了つたといふ事を抱月君の弟たる佐々山氏から知らせて來ました。私は其れを滿足に思ひました。そうして夕方から藝術座の法事に列席しました。

法事が濟んでから、神樂坂の末吉で精進ばかしの馳走がありました。藝術座から末吉へ行くまでの途すがら、須磨子は其の後の經過を私に話しました。藝術座の一切は松竹の大谷氏が引受けてくれる、脚本部は解散する事、しかし建物だけは大谷氏が引受けてくれないので、家賃を出す代りと思つて自分で住めと言はれたといふ事、自分も其のつもりで氣長く買ひ手を探がすつもりで居る事、須磨子は滿足に愉快らしく其う語りました。

末吉の席上で、私は來客一同を代表して御馳走の禮を述べ、且つ島村家と受渡しの顚末を六名の委員に代つて報告しました。そうして此の會が了ると、更に長田秀雄君に勸められて講武所の花屋へ行きました。長田君と私とのほかに、中村君と須磨子とで、別に跡から吉井勇君が見えました。席上で吉井君の書いた「京の圓山、を二人づれ」といふ短册を須磨子が貰ひました。須磨子が自殺してから、其の死體の横はつた藝術座の奥二階へ行つて居ると、吉井君の書いた歌は、床柱に掛けられた米亭の菊の短册の上に挿んでありました。大かた其の晩に持ち歸つて其うしたのでせう。

花屋の酒もりは餘り遲くなつたので、私だけ中座して歸りましたが、其れが須磨子と永久の別れでした。

○

新年になつて、一月二日に有樂座を見物しました。それが須磨子の舞臺顏の見納めでした。カルメンに扮した須磨子は横顏が非常にやつれて見えました。

「大分苦勞をして居るな。」

私は其う思ひました。そうして藝も何時もほど緊張して居ませんでした。只カルメンが情人の牢から出るのを待ちながら、骨牌で二人の運命を占ふ獨り舞臺の間が何とも言へず私を引付けました。此の稿を書くので、「早稻田文學」に載つて居る脚本を見ると、此の場面の獨白が斯うです。

『……そして、私とあの人の運命は……二人共に若死だ……私が先に、そしてあの人が……加之（しかも）金曜日に……。』

なるほど、二人とも若死でした。たゞ抱月君の死んだ十一月五日は火曜日で、須磨子の死んだ一月五日は日曜日でした。そうして須磨子の方が抱月君よりも後でした。

○

一月の五日の午後一時過ぎに都新聞社へ出ると、松崎天民氏が忙がしさうに原稿を書いて居ます。何か事件が起つたかと聞くと松井須磨子が自殺して、其の遺書が君の所へ屆いて居る筈だといふので、私は驚きました。遺書どころか、死んだ事も知らう筈がない。私は直ぐに藝術座へ駈附けました。

須磨子の死體は、二月前に抱月君か死んだ奥二階の六疊に横はれて居ました。抱月君を弔みに行つた時、聲を立てゝ泣きながら覆面の片を取つて死顔を見せてくれた其の須磨子が今は覆面されて冷たくなつて居るのです。

次ぎの室には親族の人たちが扣へて居ました。私は其處へ案内されて、令兄の米山氏から始めて須磨子の遺書を受取りました。

跡で聞くと、其の朝早く、須磨子の甥に當る小林武といふ少年が、坪内博士と私の所ろへ遺書を持つて行つたが、私の所が分からない爲め持ち歸つて、更に都新聞社へ電話で聞くと、新聞社では「伊原」を間違ひて、同人の伊藤みはる氏の宅を敎へたので、わざ〱品川まで行つて、見當らないから再び持歸つたとの事です。

其の遺書は、警察署で立會の上開封してもらひたいといふ警官の言葉があつたので、私は米山氏と二人で警察署まで車を飛ばしました。そうして大谷といふ警部補の面前で開いて見ました。文言は新聞に出て居る通りで、小さい封筒に包んだのを、別に半紙に包んだ弗箱の鍵と一所にして大きな封筒に入れてありました。

もう一通は坪内博士へ宛てゝあつたといふから、私は第一に博士の意見を伺ふ必要がありますが、生憎博士は熱海の別莊に滯在中でした。今朝ほど留守宅へ屆けたといふ其の遺書を取返して、米山氏に熱海へ持參した上、博士の返事を聞いてもらふ事にしました。私への遺書には墓の事が三度も繰返してあるから、其れが死者の最もなる希望であると同時に、風敎にも關する重大なる問題です。私が博士へ書いた添狀には、特に此の件についての御指敎を願ふといふ意味を認めました。

熱海へ行つた米山氏は、其の晩、電話で博士の返事を知らしてくれる筈でしたが、電話が込んで居るので間に合はなくて、翌る朝、自身で歸京して博士からの返書を私に渡されました。

遺書にある「あと〱の事」といふと仲々範圍が廣い。私はそれを個條書にして見ました。第一が差當つての葬儀です。抱月君と同じ日に死んだから同じ日に葬儀を行はうといふ事と、儀式も式場も導師も抱月君と一對にしようといふ事は、河村花菱

君が發言したと記憶します。そして法號も抱月君と對偶するやうに撰んでもらひました。

第二に墓地の事は最も重大なる問題です。坪内博士の代人として米山堂の山田清作氏が交渉の任に當つてくれて、此稿を書く時には略決定しましたが、未だ公表し得るまでには至りませぬ。

第三に養女問題は第四の遺産處分と關聯した事項です。これも未だ公表する事が出來ぬが、圓滿に解決がつく筈にはなつて居ます。第五に遺産問題と關聯して、松竹社からの負債問題があります。同社の大谷氏は須磨子の死に大いなる同情を拂つてくれて居ます。これも容易に解決し得られる筈です。

第六に藝術座の今後といふ事と、第七に座員及び奉公人の處分があります。前者は大谷氏と中村氏等との間で決せられるだらうし、後者も好意ある親族たちに一任して憾む所はないと思ひます。

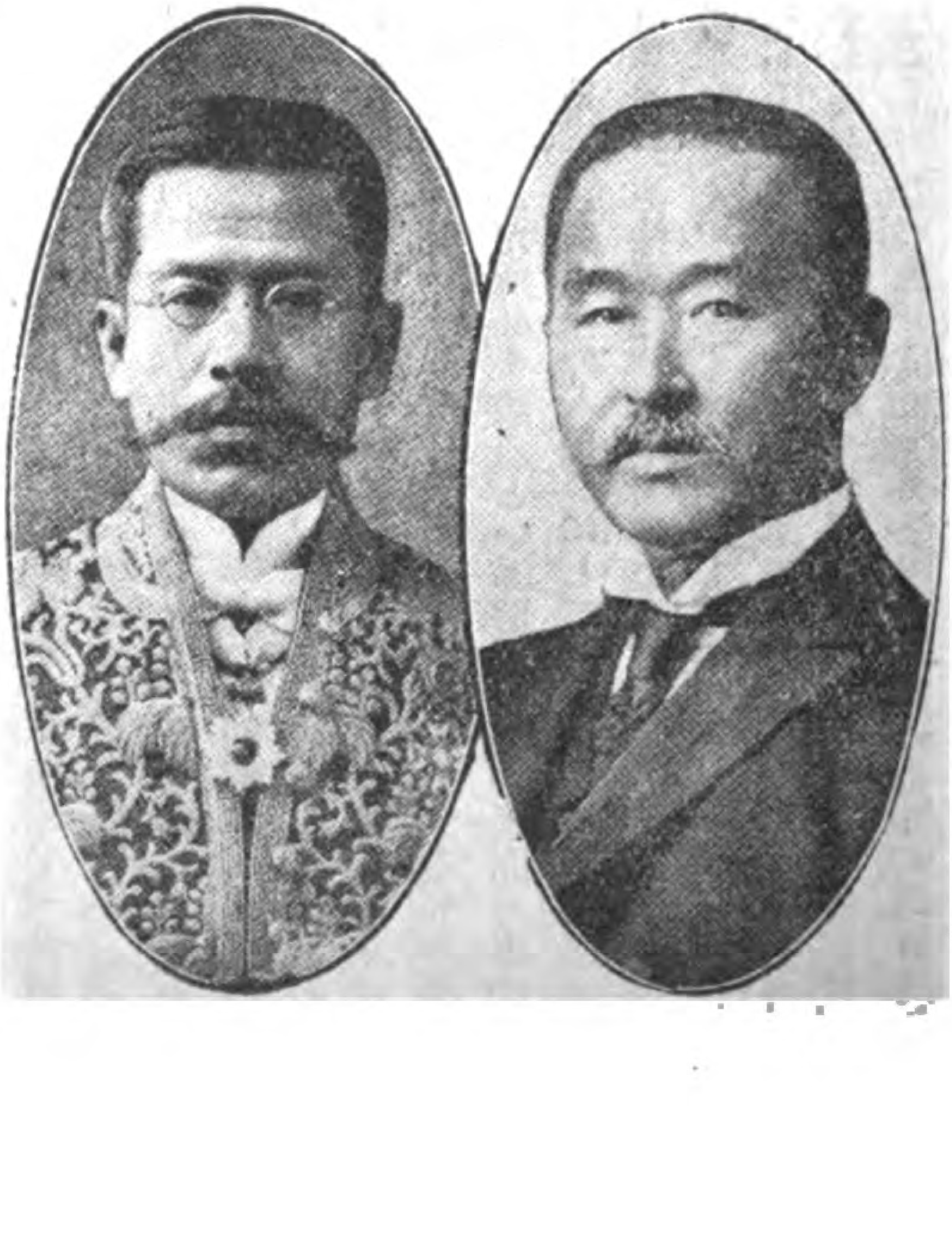
○

須磨子ほど安らかで且つ美しい死顔を私は見た事がありません。七日の告別式に、藝術座の舞臺に横へられた棺を明けると、其れほど安らかで且つ美しい死顔が色とり／＼の草花によつて飾られて居ました。須磨子が初舞臺の當り役であつたオヘエリアの死ざまが矢張斯様であつたらうと私は思ひました。

須磨子の死について兎角の議論や臆說はよしませう。遺書にある墓地云々を評して、死ぬまで抱月君を占領しようとしたといふ人がありますが、日本では昔からの心中女の書置が皆あゝです。彼の女は決して新しい女でなくて、寧ろ舊い女であつた、と私は信じます。

人物評論（一〇一）

米價調節に關する
態度より觀たる
山本現農相と仲小路前農相



▽仲小路前農相と山本現農相

文學博士　三宅雪嶺

山本氏と仲小路氏と何の關係も無いのに、交替して農商務大臣となつたが爲め、

不思議な因縁を形造り、相互に睨み合ふ姿となつて居る。性分もあらうし、行懸りもあらうし、年齢の所爲もあらうし、山本の方で左程意に止めぬやうであつて、仲小路の方で頗る躍起になつて居り、鳥渡面白い取組を見せると謂へる。

國務大臣は強ち專門の知識、特別の經驗を要するのでなく、大局に通ずれば良いといふ位であるが、農商務に關する知識に於て山本氏の上は手である事を打消す譯に行かぬ。何にしても最初から此側に向いて來て居る。教育を受けたのも商業關係であり、後郵船會社や日本銀行や勸業銀行や、特殊銀行會社に經驗を積んで來て居る。國家經濟を考ふるに、好い位置に處つたとすべきである。唯かゝる位置に處る者は兎角勢に重きを置き其自然に動くがまゝに爲ようとする。種々の事情があり、中に如何はしい事があつても、現代の勢已むを得ぬ事として看過すやうな事になる。郵船會社は隨分無理の通つた會社であり、長い物が卷くとも見える。大資本の下に當然の事とする。日銀や勸銀や、之と趣を異にするけれども、成るべく金融に無理をしてたらぬ事を認める。財界には種々の事情があり、無理しては事が面倒になる。實業界の要求の知られる所に應じ、事を處置すべき事とする。勢に應じて宜しきを制しようとし、時として臨時の處置に出るけれど、人爲的手段の餘り效能無いのを知り、動もすれば手を下す處にも下さぬやうに成つたりする。然し大術の勢を見拔き得ゝ事を許さねばならぬ。

仲小路氏は農相たるに不適當といふではなけれど、更に一層適當なる處もがなと思はる。元と農商務に緣故なく、檢事として裁判所で鍛へ上げた身分である。後普通の官吏となつたけれど、檢事の癖が何時でも附纏つて居る。檢事は何でも法律づくめで爲し遂げ得ると考ふるに傾く。官吏の勢力が漸次衰へ、數十年前の權利づくと頗る變つて來たが、最も勢力を感じ得るのは檢事である。罪の疑ある者を檢擧し、法廷で之を叱り飛ばす勢、なかなか凄じい。或時は痛快と聞こえ、或時は殘酷と聞こえ、何にしても並一通りでなく、被告人は唯青くなつたり赤くなつたりする。裁判官は獨立して判斷すべきであるが、檢事は法相の命を承けるもの、裁判官が甚だしく檢事の論告と違つた判決を下しては、司法部内の覺え芽出度くたく、昇進の妨げになる。其處で檢事の勢、往々當るべからざるものがある。我鐵案を下した所必ず成るといふ勢になる。世間の事は罪人と違ふと承知しつゝ、罪人扱ひにして事が濟むやうに思ふ。仲小路は何時でも檢事顏すべきものでない事を知つて居る。相應に解りが能く、勉強もする。然し檢事の癖を除く事が出來ぬ。農相と成つても、如何にも檢事出身といふ所が露はれる。其農相在職中意外にも米騷動が勃發し、之に應ずる處置をせねばならぬやうになつた。當初意外とせず、寧ろ意中の事に屬し、事が大きく成り過ぎたのかも知れぬ。兎も角も米の行渡るやうにせねばならぬ。突發の事變として名案が出ないとて訝しむに足らぬ。仲小路は飛んでもない問題で試驗されることになつたが、彼は敗けず嫌ひであり、かばかりの事を處置し得ぬ乃公でないとて、例

の醜事辨を露はし、姦商を罰し、一味の連中を戒めようとした。即ち暴利取締令を出し、岡半、増貫等を罰した。之れ決して悪い事でなく、人が窮迫して居る時、之に乘じて利を貪るのは罰して然るべきであるが、かゝる事で米價が頓みに下落すると思へば間違ふ。岡半増貫の類は黴菌であつて、虚弱の所に附け入るのである。虚弱の個所を治さねば身體は恢復せぬ。もと米價の騰貴は全國人口に比例して米の足らぬ所に出來する。種々の事情あつて四五萬百石不足するやうに成つて來た。之れ丈け米を食はずに麥又は他の物を食ふか、或は他國から其れ丈けの米を輸入するか、何れかに出るの外は無い。仲小路氏は初めから此邊に氣附いたとしても、暴利取締令で米を吐き出さうとするに頂きを置き過ぎた。米穀收用令を出して外國米輸入に着手したが、威丈高になつて岡半増貫等を叱り飛した事が何程の效能も無いと知れては、所謂鼎の輕重を問はれる事になる。彼畢竟何程の事をか爲し得るといふやうになる。いよ／＼米の不足の爲めと判明しては、外國と交渉するにも捗々しく行かなくなる。既に内兜を看透かされ、相手に於て頭を振らうとする。内兜を看透かされては威丈高になる程いよ／＼事が難つかしく、果ては滑稽視せられるに終る。

仲小路氏が農相職を續けて居れば何程の成績があつたか明白にし難いが、在職中の米始末は失敗に歸したと言はねばならぬ。山本氏が之に代つて農相となるや、前任者の失敗を知り、人爲的細工を爲ぬ事にした。米が不足とあつては價の騰貴するに極つて居り、單に姦商を罰しても之を下げる事が出來ぬ。悪い事を爲るものを罰するにしても、米價を下げるには不足額を補ふの外に途は無い。如何に之を補ふべきかについて色々と案が出て、山本氏は相應に知識を積んだであらう。仲小路の如き事匆卒に出て、何が何やら十分に分り兼ねた處がある。其點に於て仲小路は損な位置に居り、山本は有利な位置に居る。今は世間一般に米の不足を知るやうになつた。根本の原因に於て誰が悪いと云でないと云ふ事を知つて來た。山本氏が手を束ねて居つても特別に攻撃しようとせぬ。けれども全く捨てゝ置く事が出來ず、山本も之を捨てゝ置く氣でなく、何とか處置しようと考て居る。唯如何にも手緩いかの疑がある。關税を免じ米の輸入を圖つて居るが、先方に事情があつて急に纏まらぬ。追つて何とか片を着けようといふのである。何とか片が着くか何うか片が着くとして今後常に外米を仰ぐ事にするか、或は他に方法を講ずるか、其處が山本氏獨特の伎倆の現はるべき所である。いろ／＼と案の出て居る内、行ひ易いものを悉く行ふ心算であらう。未開墾地二百萬町歩を開墾するのも可からう。麥飯又は麵麭を勵奬するのも可からう。造酒用に米五百萬石を費し、造酒を禁ずれば差當り米が不足ない事になるが、之は頗る難問題に屬し、政府の歳入に響く事も少くなく、半額丈けを造酒用にし、税を倍にすれば可からうとの案もある。實に様々の案が出て居る。山本氏は何程之を實行しようとするか。仲小路氏に比べて實際の事情に通じ、岡半一派を叱咤して米が下ると思ふや

うた簡單なる頭腦でなけれど、自然に任すにも程度がある。爲して效能有る事は早速着手すべきである。餘り緩漫に流れては、事情に通じて居るよりも無能といふ事になる。眞に無能でなくとも無能同樣の結果になる。爲し得る限りの事を着々爲して貰ひたい。五年十年後別に良い案も出よう。今は今で最善を竭くすべきである。

仲小路氏が勞して功無かつたのは畑違ひにもよるが、早急の場合事が判明せず、例の檢事辯を出し過ぎた所がある。今ならば何程か巧が違はう。氏に取つて氣の毒な點無いとはせぬ。議會開會劈頭山本氏に突當つたところ、面白い武者振りを見せた。然し山本氏の方一段老巧と見られた。仲小路氏たるもの更に深思熟慮、現農相をして御尤もと言はしめるに力めては如何であるか。

▽仲小路對山本

匿名氏

一

新聞紙の記事に據ると、仲小路は一月二十日頃までに、何とか政府が米價問題の目鼻を付けるか、又は仲小路自身の行つた政策を復活しなければ、貴族院で大に現內閣の米價政策を攻擊するとか公言したやうである。成る程彼の男の事であるから、例の調子で遣り出すかも知れないが、人間も此位廉恥を重んじないやうに爲れば、氣樂なものである。仲小路は農相在職中、如何にも米價問題の解決に努力し、貧弱な知識を絞り出すのに骨を打つたには相違ないが、其骨折りの結果はドコに現はれたであらうか、仲小路が眞劍に爲れば爲るだけ、米價は下落どころか却て騰貴したではないか、詰り暴利取締令や、穀類收用令で、殆ど總ての商賣人を奸商呼りにして、科人扱をしたので、市場に集まる可き米も自然に集まらず、益々米價を暴騰させたのは、爭う可からざる事實である、俗に「お里が知れる」と云ふ言葉は藝者上りの細君が蓮葉な眞似をしたり、富家の嫁と爲つた貧乏人の娘が賤しい動作をした時に、用ひられるやうであるが、私は仲小路の農相時代にやつた失政を見て、此言葉を繰返さゞるを得なかつたのである。即ち仲小路の立身出世は檢事時代に一切の被告人を罪人扱にし、苛察辛辣の論告をして、世間に名前を賣出したのに始まる、隨つて彼の男は今日農工商行政の長官と爲つても、昔の檢事時代の根性を失はない、お上で米價を低落させやうとするのに、商人共が買占や、賣惜みをして、お上の思召を徹底させないと爲ると、直に奸商呼はりをするのは勿論罰則で嚇し付ければ、天下何事も成らざるなしと考へるのである。封建時代の庄屋名主なら、此了簡で勤まるだらうが、明治を經て、大正と爲つた今日まで斯る考の人物が鬼に角一度ならず、二度までも國務大臣を勤めたのに至つては、國民の恐縮する所である。仲小路の政策を山本が覆して、米價が彌が上にも騰貴したならば、仲小路も議會で怒號する理由もあ

らうが、仲小路が極端な干渉を遣つても、後任者が此干渉を撤廢しても、米價の狀況が依然たりとしたならば、双方共同罪である。仲小路が此昭々たる事實にも顧みず、議會で後任者に喰つて掛るのは、恰も監獄で重罪囚が輕罪囚に威張り散すのと異なる所はないのである。

一體大隈內閣の時には米價調節は大藏省の仕事であつたのである。隨て寺內內閣時代に米價調節の問題の起つた時にも、大藏省で暴利取締令を發布する豫定であつたのを仲小路が横合から飛出して、自分の管轄に引つ張り込んだのださうである。官制から云へば、農商務省は農務局を通して、農作物を獎勵したり、商工界を通して、取引所を監督したりする位で、米價問題に接觸するのに過ぎない、仲小路が官僚の通弊たる繩張り取擴げに夢中に爲つて、結局自分で致命傷を負うたのは、滑稽千萬の沙汰である。

二

山本は仲小路に比較すると、遙に豐富なる經濟上の知識を持つて居るし、人物も平凡かは知らぬが、常識一天張の行動をするから、農商務大臣としては、危氣がなく、先づ今日政友會內で大藏大臣や農商務大臣の適任者を求めたならば、此人に札を落すの外はあるまいと考へらるゝ。山本が就任早々暴利取締令や、穀類收用令を寶刀扱にして、事實上の廢止を宣言したのは、誠に鮮な、手際であつて、此位に前任者の政策を覆してこそ、內閣更迭の意味も明に爲るのである。山本が此果斷なる方針を取つたのは、要するに平生彼の信條とする自由放任主義から割り出されたものであらうが、唯今日の米價問題は自由放任主義丈では解決することは出來ないのである。私は始め山本が仲小路の政策を根抵から破壞したるときに、是は山本の政策の序幕であつて、續いて一番目中幕大切と出幕に爲ることゝ考へて居たが、序幕だけで、後の續かないのはどう云ふものであらうか。

今日山本が幾ら我國に於ける米の出入に就て、自由放任主義を實行した所で、急に內地米が潤澤と爲る譯ではなし、之を潤澤にするには、米輸入稅の廢止は勿論、外國をして米の輸出禁止を解かせ、船腹を按配し、更に進んでは通貨を收縮して、一般物價を下落させ、自然買占、賣惜をする者なからしめる方針を取らなければならぬ。斯の如くしてこそ、自由放任主義も首尾相通ずることゝ爲るのである。唯仲小路の試みた干渉を撤廢しただけでは、外國米が日本に輸入される譯でなく、之を輸入させるには、輸入の妨害と爲る可き種々の原因を除かなければならぬ。山本も多少此邊の施設をして居るやうに見受けるが、何分共實行に手間が取れて、見物を退屈させるのは、何う云ふものであるか。此點は山本の爲めに惜む所である。

山本仲小路の兩人を比較して、序に一言したいことがある。仲小路は前に申した通り、實業家を奸商呼りして、其主張や利害を閑却し、官僚一天張りの獨斷的政策で失敗したが、之に反して山本は實業家の言ふ所を聞き過ぎて、案外の失敗を招きはしないであらうか。取引所で熱望して居る小口落復活の如き、

山本は何とか名分さへ立てば復活させる意嚮であり、商業會議所などでは此意嚮を忖度して、取引所と共謀の上、小口落復活の運動を試みたやうである。山本が實業界の一部で存外話せる人と云れるのは、此邊の事情から來るのであらうが、實業界に不健全なる空氣の横溢しつゝある今日、輿論を重んずると云ふ名目で、無暗に一部の運動や、請託に動かされるのは、山本として餘程愼んだら宜しからうと思はれる。

三

然し全體から見れば、山本位ひ幸運な人は少ないだらう。三菱の端役を勤めて居つた經歴から云へば、順當に出世して、郵船會社の取締役位が關の山であるのに、川田小一郎に識られて、日本銀行に入り、日淸戰爭當時の營業局長を勤め上げて、理事から總裁に上り、大藏大臣の曾禰と衝突して、一期だけで總裁を罷めた時分には、山本の前途もどうなるか、少々氣遣はれたし、本人も氣が氣でなかつたやうであつたが、桂に救はれて勸業銀行の總裁に復活し、同銀行の營業範圍を擴張して、存外の手腕を見せ、續いて西園寺の推薦で、大藏大臣と爲つたのが政友會と關係の始まりで、今度で三度まで農商務大臣を勤めるのである。固より此永い歲月の間、川田や伊藤公や西園寺侯に御奉公をした事も容易ならぬ所で、山本のやうな苦勞人なればこそ、今日あるを得たのであらうが、兎に角銀行家としても、政治家としても一流の地位を占めたのであるから、一つ奮發して農商務行政を刷新したらどうか。米價問題に就て云つても、外國米の關税を撤廢することが必要なのは、外國をして日本に供給するだけの米を充分に作らせ、日本では無税で輸入したいからである。然らば日本で內地に米の不足した時だけ、輸入するが、不足しない時には輸入しないと云ふのでは、外國でも日本に供給するだけに餘裕のあるやうに作付を爲さない譯であるから、外國米を輸入しやうと云ふのなら、之を根本の方針とし、日本は未來永劫、米に輸入税などは賦課しないから、外國で充分に米を作つて具れと云ふ政策を定めたらどうか、目前の米價政策では兎に角、將來の米價政策を確立する、之が爲めには政友會の百姓議員共を押へ付ける、まかり間違へば、自分も農商務大臣を棒に振る位の勇氣を出しては、どんなものか。三度も大臣に爲り、一生涯大臣禮遇を賜る身分とも爲つた今日、此位の奮發をしなければ、男が立つまいと思はれる。

▽干渉と放任の兩極端（上）

川尻東馬

▲今期議會に於ける內政上の重大問題は、選擧法改正案と物價調節、食糧需給の論議であらう。中にも物價食糧問題は、最も痛切に且つ直接に國民の日常生活に大關係ある丈け夫れ丈け、國民の一齊に油斷なく耳を聳て眼を張つて、之れが解決方法如

何とも樂觀ならぬ處である。況んや現下世界を通じて混沌動搖の裡にある思想問題は、其根本に遡れば、悉く端を此生活食糧問題に發し居る丈けに、該問題の解決方法如何は、更らに幾多重要若しくは險惡の大問題、大事件を產み出すべき母體となるのである。

▲從來は比較的思想問題に就ても、穩和平靜の狀態を維持し、動搖も少なく、爭鬪も稀薄なりし我國に在りても、世界的大戰爭の影響は、實に驚くべき急速且つ甚大の力を以て流入し來り。之れに物價暴騰、生活困難、食糧缺乏、處世不安の貨物提供を以てせられたる爲め、生存競爭の大壓迫、優勝劣敗の大刺戟は、忽ちにして民心に絶大の不安動搖を惹き起し、從來惰眠を貪り居たる丈け夫れ丈け、一層夥しく深夜の警鐘にも增して、確信なく諒解なく覺醒なく自省なき多數國民を、急劇に脅かすに至つた現在に於ては、先づ頭よりも腹、耳目よりも口に重きを置く事の、物質的且つ直接的要求に向つて、眞先に驀進せんとの結論に到達するのは、蓋し當然の次第と云はねばならぬ。

▲要するに我國現時の思想問題は、智識階級に於てこそ、信念あり主張あり、或ひは世界の大勢と云ひ、或ひは人類の權利義務抔と高唱されつゝあるも。多數國民の間には物價暴騰、食糧缺乏に伴ふ一般生活の困難が、最も痛切且つ直接に之を刺戟したる結果、時に所謂成金者流の不謹愼暴戾なる豪奢贅澤振りに憤慨し、時に少數權力者の拘束壓制的酷遇逆待に激發する者、殆んど其全部を占め居るが實相である。

▲何事に就ても餘り感染性の銳敏ならぬが、我國民性の從來持てる特別な點であつた。然るに世界的思想問題に關しては、最近案外にも急速且つ銳敏に感受し來り、一般國民の心底か、將さに其琴線を何者にか彈ぜられんとする傾向の明かに見受けられるのは、一見如何にも不可思議怪訝の至りに堪へぬが、前述せる如く國民一般に當面直接なる生活問題の爲め、乾燥し切つたる眞最中、宛も風上より思想問題の火粉を頻りに散らし來りたるが爲めにして、濕潤の場合は大抵の大なる火粉を消滅せしめ得べきも、乾燥して可燃性十分なるに當りては、例令小火と雖とも忽ち延燒の原因となると、是れ學齡兒童の尙且つ明確に諒得し居る處。即ち我國に於て思想問題の漸く八釜しからん傾向の顯著なるは、其眞因精神的自覺にあらずして、物質的壓迫にあり、自ら發心せる信條にあらずして、他より餘儀なくせられたる、一種の雷同性自家防衞手段に外ならんのである。

▲故に之を實際問題として取り扱ふに際しては、一方高唱する者の頭腦と、他方共鳴する者の手足とは、其欲求目的に於て、高低深淺又は廣狹大小の差、頗る大なるものありと云はねばならぬ。高唱する者は理義に徹底し、實際に遂行せらるゝことに依りて初めて滿足安心の域に達するも、共鳴する者の大多數は、理義の徹底は暫らく高閣に束ね置くも左程の痛苦にあらず、差當り實際的遂行を見て滿足安定せんとする、極めて低級寡慾の希望者である。即ち高唱者は國家の政治を君民同治の精

神に立脚し、且つ之を明確に體現せしむる爲め、飽迄根本主義として普通選擧の實施をも、緊密分離すべからざる重大問題と確信し主張するのである。之れに對する共鳴者は、全然兩分して普通選擧を第二義に置き、焦眉當面の最大急施案件として、先づ物價調節食糧充實の應急政策實現を渴望し絕叫するのである。是れ吾人が同じく内政問題としては重大案件であるが、最も痛切且つ直接に、國民一般の頭腦に響く大問題を、物價食糧問題と斷言した所以である。

（中）

▲扨此物價食糧問題を、前内閣は如何に處理し樣と努力したのか、又現内閣は如何に取扱ひつゝあるのか、是れは問題が問題丈けに、極めて興味ある比較研究問題である。根本問題に立ち入りて比較論評する日になると、内閣其物の基礎、成立の順序組織から、根本方針、立脚點等、種々複雜した問題を惹き起すことになるが、今は斯樣な問題を詮索論議する場合でない、例令其必要あるにしても、紙幅は第一之を許さない。故に單刀直入、仲小路前農相と山本現農相の施設方針に就て、單純に比較研究して見ることを、最も直接且つ適切の策と信ずるのである。

▲只一言簡單に云ふと、前農相の方針は極端なる干涉政策であつた。官權萬能主義者、法律神權信者で、當るを幸ひ前後左右に官權の大刀を振り翳し、法律の鐵鎖を以て拘禁せんと試みたのである。暴利取締令之が爲めに發せられ、米穀收用令之れが爲めに布かれ、外米管理令之れが爲めに設定されたのである。而して農相自身は之れを以て米價の暴騰を防ぎ、物價の昂騰を抑え得べしと確信し自斷したのである。農相謂らく、諸物價の昂騰は、悉く之れ奸商思惑師等の誘致する處、是等不法不正漢の取締さへ嚴重に勵行せば、諸物價の自然的下落、物資の自然的需給關係は双を迎へずして解決し得らるゝとの強固なる信念であつた。

▲斯て取引所は、全國到る處停止命令の厄運に會ひ、所謂買方と稱する連中は、米穀たると商品たるとに論なく、一度目星をつけられたが最後、戒告警告、果ては法廷に起訴された商人さへ少なくなかつたのである。而して最も滑稽なるは、買方あれば賣方あり、相互合意的ならねば、相場の立たぬ商取引の根本問題を全然無視して、賣方を保護する事極端なる偏頗に失し、之れが爲めには商法若しくは取引所法に違反したる、所謂空賣を誘致して恬然顧みる處がなかつた。何ぞ圖らん此空賣連中が、愈々月末受渡時期に至りて、買方の正物を要求して止まざるに困憊し、自ら衛主に向つて法外の高値を仕拂つても、尙且つ其正物を手に入れねばならぬ羽目に陷り、事實上益々正物の昂騰を餘儀なくせしむる直接誘因を作りつゝ進んだ内情には、一向に氣づかなかつたこと杯、其愚や寧ろ及ぶべからざるものがあつた。

▲又小賣商人中、普通ならば何の干涉をも受くべからざる商習

償に對して、警察官の壓迫制裁極端に嚴重となり、中には永年繼續し來れる商業を一時中止するの止むなきに至りしもの、若しくは無數算外の戒告を受くる者を見るに至つたのである。殊に氣の毒にして且つ無慘なるは、一本の澤庵漬を高價に賣りたる所以を以て、法廷に於ける刑事被告人となり、果ては罰金の刑に處せられた者さへあつた。

▲顧みて豪商大會社の內情や如何、政商大商店の所業や如何。警察權は是等に對して、殆んど何等の實力權威なきは勿論、司法權さへ果して正當に行使されたるや否や、元より疑問の間に葬られたのである。加ふるに大小成金の跋扈は、農相の暴利取締令を裏切らしむべく、黃金を湯水の如く撒布して、一般社會の生活向上、奢侈增長を極端に煽り、物資の要求は世界的關係の大影響もありしに相違なきが、兎に角斯樣の眼前直接の原因も益々之を助長して、常に生產不足、供給間に會はずの苦しき實況を呈する外なかつたのである。

▲更らに不謹愼にして、無責任も極まるは、同じく寺內閣に席を列する勝田藏相にして、極端なる放漫膨脹的の財政政策を實施せる爲め、物資の缺乏に反比例して黃金の洪水を起し、農相折角の精勵努力を片ッ端から破壞し去るはまだしも、更らにヨリ以上の勢力を以て、農相の振翳せる大刀を枉げ、鐵鎖を斷つべく不遠慮に振舞つた事である。此點に就ては、農相も少なからず迷惑困却の跡ありしは云ふ迄もなきが、如何に大藏省の方針全然我れに不利なりとも、自己の翳せる大刀、手にせる鐵鎖の威力實權は、終ひに自己に相當の勝利を與へ、精勵努力に對する報酬の必然到來すべきことは、これ當然の結實として全く自惚れて居たのである、否な確信して毫も疑はなかつた處である。

▲然るに確信は全く裏切られた、自惚れは單に世間嘲笑の資料に供せらるゝ許り、例の八字髯嚴しく威張れば威張る程、物價は逆さに昂騰し、官權の威力を發揮し、法律の制裁を勵行すればする程、物資缺乏、物價昂騰の苦情、全國に囂々たるに至るのである。米價は高きに失する今日に於て、餘りに賣り惜しみすれば、今に思はぬ損害を蒙ると、地方官をして農民に警告諭達すれば、之れ今後益々昂騰する虞あり、政府は之れが豫防策を講ずるものとして、愈々農民に賣り惜しみの傾向を作るといふ實狀、更らに十步を進めて米穀收用令を公布し、不徹底生溫るき米官營を實施し、正面から大刀を振り翳して『それでもか』と農民及び米穀商に臨んだが、屢々行つて其威力を輕蔑せられ、結果を無視せられ、全く鼎の輕重は試驗濟みとなりし農相のこととて、徹底的ならぬ此食糧動員令は、今に於て何等農民乃至米穀商人を威嚇するの實力なく、殆んど死法空文同樣に侮辱されて了つた。

▲最初より農相の此極端なる干涉方針、官權萬能主義に反對するの聲は、國民の期せずして一致する眞の輿論であつた。爾も全然時代錯誤の主義思想の上に立つ農相は、頑として其確信を動かさなかつた。否た輿論に耳聽して再思三考、敢て或ひは自己の所信に誤謬失策なきかを反省することをさへ爲さなかつ

た。此方針政策に對する輿論の反對的態度は、次第に白熱的程度に迄達したが、農相は依然として初一念を斷行すべく、俗に所謂盲目滅法に驀進したのである。輿論も末には頑冥度し難きの農相と侮蔑し、終ひには嘲笑を以て迎へる程、愚弄の的となり下つたのは、寧ろ無殘の境遇と云はねばならぬ。現に貴族院の如き、曾て先例なき休會中の各派聯合會を開き、正式に代表者集會して、物價食糧政策に對する警告決議を爲すに至つた一事に徴するも、如何に農相の物價食糧政策が、國家國民の全體に亘りて、不評判を極め且つ不安の念を、眞宵中心より起さしめたかゞ明かに立證されるのである。

▲國民悉く愚なり、我獨り賢なりと、飽迄自己の所信に徹底したる結果は、終ひに北陸の一角に烽火を揚げ、以て全國に渉る所謂米騷動となり、首都は勿論、各地大都市、工業地、鑛山等殆んど算し切れぬ修羅の巷を現世に演出し、繼續して以て月を閲する一餘、辛らくも寺内内閣の更迭に依りて、自然的之れが鎭靜を見る迄の極度に達したのであるが、此間人命を損する無數、軍隊の出動も時には大勢に抗する能はずして、一地區數日間鎭定を見る能はざりし地方は、又枚擧に遑あらずであつた。若し夫れ警察權の無能力、都市の大損害、個人の大被害等は云ふ迄もなく、國民を擧げて一刻も堵に安んずる能はず、殆んど無政府狀態を繼續せしめたる重大事態に至りては、今更ら云はずと國民の記憶に新なる事實で、之れが直接間接に原因する刑事被告人の驚くべき多數製造は、返す〲も無辜の國民を驅りて、無理に罪人たらしめた其重大責任を、飽迄寺内内閣に窮追詰問せねばならぬ重要事件である。

▲無論此責任の全部を、農相の誤れる物價食糧政策に歸することは、甚だ以て苛酷な論斷であらねばならぬ。第一首相寺内伯の施政方針が、根本に於て全然國民を無視土芥視し居たる事、其政治的思想は軍閥官僚あるを知りて國民あるを知らざりし罪科の報復、第二外相後藤男の一二政商と結托して、一般國民の生活を益々困難ならしめ、自ら豪奢の極を擅にしつゝありとの流説が、深く國民全體の頭腦に信用され居たる復讐、第三藏相勝田氏の放漫不謹愼なる財政政策に反對苦悶し居たる國民的懲戒、其他警察權、司法權の濫用、人權蹂躙行爲の頻々として演出せらるゝ、所謂官權の極端なる壓迫に反抗蹶起せんずる國民的氣運が、全國各地に導火線の今や通じて來るを期待し居たること等、却つて事件を斯く重大濃厚深刻徹底的ならしめた原因の、最も重要部分を占むるのであるが、併し當面の問題は要するに物價食糧問題に繫りて勃發し、大騷擾大修羅場の端を開きたることを思へば、事情如何にも諒察に値し、又氣の毒の感尠少でないが、勢ひ第一の責任者として、農相仲小路氏を指さゞるを得ないのである。

▲外米管理令の如きは、同じ官權萬能主義者の發案にしても、其根本主義は相當時宜に適せる施設に相違なく、殊に食糧缺乏問題に對する應急手段としては、決して無方針無算當の政策にあらずと思ふが、如何せん三四年來生活の資澤に慣れ來りし勞

働者階級に向つては、如何にも米以外の主食物を取るが如き感情を起さしめたのであつた。從つて需給關係にも大なる緩和の功能なく、米價暴騰の防止云々に至りては、連日の旱天に對する一滴の降雨にだも價しなかつたのである。殊に況んや屢々法令を公布し、官權の威力を振り廻はし、其度毎に無能無功として、却つて國民の一種嘲笑心を挑發せしめ居たる習慣は、更らに一令の出づる毎に、之を葬り去ることに依りて、痛快を叫ぶの一種不可思議なる反抗的心理狀態を、激成し居たる折柄、偶偶布かれたる多少共有意味有益の法令迄も、十把一束『また出た』と許りに、幾多の前法令と共に、結局國民の玩弄物に供せられた氣味も亦少なくはなかつた。是れ洵に氣の毒、同情に値すべき事態ではあるが、如何せん前に屢々惡令不法を布いた報酬、今更ら誰れを咎め樣術もなければ、結局自己の不德と諦め、觀念するより外に道はあるまい。

▲若し夫れ彼の米騷動全國に勃發するや、聖上叡慮を惱まさるゝこと事の外に在らせられ、急遽日光の御轉地先より還幸仰出されて、卽日前代未聞の莫大なる御內帑を下賜あらせられたるに際し、直ちに國民に向つて、此聖上の御軫念、叡旨の優渥を徹底的に傳達せしむる手段方法を講ずる能はず、更らに暴動の餘勢を猖獗ならしめ、自ら責任を執つて最後の鎭靜の業を完了し得ざりし、上下君民に對する重大責任問題は、之れ首相寺內伯の徹頭徹尾負ふべき重責にして、例令內閣更迭し政治上の責任內閣は、全然解除されたる今日に於ても、苟くも公人としての寺內伯は、尙其責任觀念の寸時も念頭を去り能はざる重大問題であらねばならぬ。吾人は伯平素の性格主張、殊に其思想上よりして、爾く確信し又斷言し得るものである。

（下）

▲少しく論旨は岐路に外れたが、然らば山本現農相の物價食糧政策は果して如何であるか、之れは前農相に正反對して、徹頭徹尾自由放任主義である。根本方針もなければ、應急手段も行はず、自然の成行に任せて我不關焉の態度、之れは又如何にも奇麗薩張りと、無干涉の極、無施設の行詰り迄實現したものである。成る程事勿れ主義の本山、政友會の領袖丈けありて、更らに人力では出來る所迄より出來ぬものである、夫れ以上は天なり命なり、自然の勢を巧みに利用するものが勝つ。熟柿は落る迄待つのが悧巧で、急いで叩き落せば、隣の畑に落るか、又傷物になつて了ふと、飽迄氣永に隱忍手出しせぬが根本主義の原首相の董督下に列する丈けありて、如何にも好く徹底した遣方である。

▲內閣成立以來既に五閱月、依然として此極端なる無干涉、自由放任主義を執つて動ぜざる、其確信か度胸か將た無能か無策か、之れは全く疑問であるが、兎に角感心と呆然と一時に出て來るのは、恐らく吾人のみではあるまい。就任匆々米穀收用令は撤廢して了つた。次いで暴利取締令や外米管理令、之れは先代から讓り受けたお家の重寶、切れ味は洵に名刀の價値を十分

に有して居る丈け夫れ丈け、平時の使用は最も危險千萬である。當分の間堅く鞘に納めて、寶物庫に大事に藏して置こうと、之も又早速有名無實の反古紙同然に取扱つて了つた。斯て前農相の眞赤になり双肌抜きで振り舞はした兩刀と鐵鎖は、何の一顧の惜氣もなく、物置の隅に叩き込まれた次第である。仲小路前農相たるもの、如何にも心外千萬、不平滿々とは、成る程人情の當然な結論と云はねばならぬ。岡商工局長の引續き辭職したのも、是れ又當然の次第と云ふべきである。

▲斯くて無干渉主義、自由放任方針に徹底したが、扨て天運は却々以て左樣好都合に許りは廻つて來ない。僥倖にも世界大戰爭の終結は、待てば海路の日和主義な原首相に幸ひして、鐵、棉、藥品、機械類等、其他の歐米諸國に於ける輸出禁止の影響を受け、所謂戰時相場を保持し居たる品種に限り、相當の緩和を見るに至つたが、肝腎要めの食糧品種に至りては、却つて昂騰せる物品こそあれ、低落せるものは、殆んど之れが發見に苦しむのである。若し夫れ國民一般の主食物たる米價に至りては、彼の米騷動當時よりも、遙かに上鞘の價格を持續して居る。國民の現に比較的平靜且つ寺内内閣當時の如く、兩く險惡的傾向を今に帶びざるのは、兎に角形式ながらも、國民に基礎を置く政黨内閣を標榜し居る事、更らに寺内内閣程の人權蹂躙、壓迫干渉を國民一般の頭上に加へざる事、今一つは成立未だ日淺く、國民は他日に期待する處、幾分か存置の餘地ある忍耐、別して俗界の人氣取政策にかけては、由來日本國中第一の政黨と自他共に許す政友會内閣である事等、其重なる原因を作し居るのである。

▲併し今や議會も開け、國民自身も亦自家日常生活の重大問題である直接關係上、モウ單なる人氣取りや空粗な煽動に許りは、ソウ〳〵浮かされて居れなくなつた。自家頭上の蝿は頻々として五月蝿く襲撃して來る、搗て加へて戰後の整理緊縮なる聲は、眞先に事業界を警戒せしめて、天井知らずの殷盛を極め居たる各製造工業會社は、漸次合併若しくは工場閉鎖、更らに規模縮小等、自然に失業者問題が、直接起り來るべき最近の重大社會問題として、各階級各方面の調査研究資料に取扱はれることとなつたのである。然るに一方物價食糧問題の解決は、今に何等の曙光さへも見へぬ。否な政府の方針は依然として徹底的自由放任、無干渉主義を動かさんとはしない。國民の漸次不安に驅られ、生活の壓迫に堪へ切れずして、再び民心動搖の兆あるのは、之れ蓋し止むなき當然の結論と云ふのが至當であらう。

▲議會に於ける政府反對黨は、飽迄此食糧物價問題に就て、内閣の方針施設を質問窮追し、是非共徹底的に根本、應急兩方策を樹立せしめねば止まぬと敦圉して居る。之は獨り反對黨としての叫びのみではなくして、同時に國民全般の希望であり又要求である。事態愈々斯くなりては、政府としても最早從來の無干渉、自由放任主義許りでは通れぬこととなつた。況んや貴族院が前内閣に警告したる處、移して以て現内閣に持ち來るべき

は當然の成行き。而して國民の心理狀態は頗る痛切且つ實際的の兆候を帶んで居ること、恐らく社會一般の內部的觀察より出發すれば、前內閣時代よりも、更らに幾倍か希望は組織的となり、要求は深刻となり、決心態度は眞面目になつた樣に信ぜられる。即ち今後の要求的態度、希望到達に關する決心覺悟は、以前の如き半分浮いた野次馬的の眞率氣分を缺く者であるまいと觀測されるのである。

▲斯樣の民心的傾向、社會的內情は、政府に於ても明かに容易ならん重大事題なることを感得したのである。從つて政府としての萬遺漏なき方針施設は、近く愈々着手實行する計劃であると、例令非公式ながらも、外間に向つて聲明し出さるゝことゝなつた。鬼が出るか蛇が出るか、將た佛か神か、愈々秘策妙計の封を切つて出る迄、吾人は玆暫らく論議を謹まねばならぬこととなつたが、所謂泰山鳴動して鼠一匹飛び出す底の秘策妙計ならざらんことを、國家國民の爲めに、特に玆に繰返して渴望し慾求して置くものである。

▲政府は愈々極端なる無干涉主義、自由放任主義の標榜を撤去し、之れより相當の施設干涉を試みるに決し、既に大體成案も出來たるやに傳へらるゝ折柄、先づ差當り前農相に對し、今期議會に於ける痛烈深刻なる言論は、多少緩和的態度を以て、所謂お手和かにとの傳言を賴んだとか賴まぬとか傳へられて居る。之れに對する仲小路氏は、敢然として自餘の問題は兎も角物價調節問題に就ては、不肖不敏なりと雖飽迄所信を披瀝して、國家國民の爲めに貢獻せん處存であると返答したとか。傳ふる處果して眞か僞か、之れは保證の限りでないが、仲小路氏としては如何にも當然左もありそうな話である。果して事實とせば衆議院に於ける憲政會側の窮追論難と合せて、貴族院に於ける仲小路氏の詰問駁擊は、蓋し第四十一議會を飾る花の、最も大なるものゝ一たることは疑問の餘地なき處である。

▲最後に山本農相が、其無干涉、自由放任主義の唯一除外例として、米籾輸出關稅を撤廢した事である。之は最も時宜に適した施設で、吾人大に之を賛するのであるが、只斯樣な歷史附の問題であることを一言して置きたい。仲小路前農相が、物價調節の第一策として、之れが實施を計劃したことは、當時より早くも隱れなき事實。時偶々第四十議會の開期中なりし爲め、政友會內に於ける農民議員の鼻息凄じく、終に幹部は之れが容認を不可能に了らしたのであつた。之れに關する寺內首相の態度も、今少しく熱心强固なれば、或ひは無理に政友會を同意せしむることも出來たのであらうが、之れ以て一度拒絕された從、二度と執拗に交涉を開かなかつたらしい。夫れは兎も角として、折角計劃實施せんとした仲小路前農相の最初の發案は、斯くして到頭流產に終つて了つた。然るに原內閣成立後間もなく、自ら進んで撤廢を斷行して了つたのは、過つて改むるに吝かなる勿れと云へば夫れ迄であるが、餘りに勝手放題、朝三暮四の態度ではあるまいか。少なくとも飽迄自黨本位に徹底する以外、政治道德や國民生活問題抔は、眼中に措く必要なしとの

信條に依るか。然らざれば一寸先は眞の闇、僅か半年前に關稅撤廢其物を有利ならずと確信したる、無定見無方針に居るか。二者必ず其一の誇は、當然之を甘受せざるを得まい。

▲此算法からして、所謂來るべき現内閣の秘策妙計なるものを推測すると、或ひは先代より讓り受けたる重寶として、目下倉庫の片隅に埋藏されつゝある彼の仲小路式名刀が、何時此世の中に鞘拔き拂はれぬとも限られぬのである。最初の標榜が無干涉、自由放任主義丈けに、萬に一つも斯様な取越苦勞は實現の時なしとは思へど、君子豹變、變說改論は由來政友會の常套手段、變通自在は原首相出世の秘訣。詮索すればする程、何だか險吞で堪まらぬから、マア大概之れ位にして置こう。

▽山本氏と仲小路氏

前田蓮山

▲兩氏は努力精進、篤學眞摯の點に於て類似して居る。生一本で自信の強い代りに、聊か融通が利かな過ぎる嫌ひがある點に於て類似して居る。兩氏は共に貧乏の家に生れた。山本氏は鄉里中津に於て慶應義塾支校に學び、進んで東京の本校に入らんと欲するも其の資力なく、先づ大阪に出て教師となり、其處で金を貯へた後に上京して目的を達した。仲小路氏は獨學で裁判所書記となり、以て老母を養ひながら學資を貯へ、上京して判檢事登用試驗を通過した。

▲而して山本氏は實業界に入り、仲小路氏は官界に入つた。斯くて山本氏は英國流の自由主義となり、仲小路氏は獨逸流の專制主義となつたのである。仲小路氏には長閥の背景があり、山本氏には三田學閥の背景があると云ふ點から見るも、兩氏の思想の相違はすぐに推量されるであらう。

▲其れに兩氏の性格上の相違がある。即ち山本氏は智性的で、仲小路氏は感性的である。故に山本氏は冷靜に社會の事相を傍觀して、大局を打算することが出來るけれども、仲小路氏は凡ての事が氣になつてチツト傍觀しては居り得ない、老婆が孫の世話を燒く如く、何事にも干涉しなければ安心が出來ないのである。

▲斯の如き兩氏の性格が、一は專制主義の渇仰者たらしめ、一は自由主義の崇拜者たらしめた源因の一になつて居るだらうと思ふ。若し夫れ貧者に同情し、國民を愛し、國家に忠なる精神に至りては、兩氏の間に何等厚薄はないと信ずるのである。

▲官僚主義者とさへ言へば、世人の多くは直ぐに其の人格を疑ひ、人身攻擊に及ばんとする傾向があるけれども、吾輩は之れには與みする事が出來ない。併し官僚主義者は多くは感情的で世話を燒き過ぎるのである。而かも之れを以て彼等は組織的統一の進步したる手段と信じて居る。

▲如何にも、國民生活を組織的に統一すると云ふことに就ては、吾輩決して異存はない。政治家たるものは此の方針に依りて進まなければならぬと信じて居る。併しながら組織は自然の

組織ほど大なる組織はない。神の組織ほど微妙な組織はない。孔子は其の本に歸れと教へた。實に吾々は自然の組織、神の組織に歸らなければならぬ。

▲人間の禍は、自然に反し、神に背くことに由りて生ずる。政治家の努力は人間の我慾を制して自然の組織、神の組織に順應せしむることであらねばなるまいと信ずるのである。決して自然を阻止するために人間を強制することではない。自然より離れんとする人間を強制して自然の組織に入れることである。政治上に於ける專制主義と自由主義との相違は玆にあると信ずる。

▲自由主義にも或干涉はある。卽ち自然に歸らしむる干涉である。干涉と云ふのに語弊がありとすれば監視と言つても宜しい指導と言つても宜しい。然り指導と云ふのが一當番て嵌まる言葉であらう。卽ち政治家は往々にして自然から離れんとする國民を指導して、以て自然に歸らしめねばならぬのである。

▲吾輩の信ずる所に依れば、昨年來の米價の暴騰は自然であつた。而して此の米價の暴騰の爲めに一方に非常なる不自然が生じたのである。其れは俸給、勞銀の物價に伴はないことである、故に此の不自然すら自然に歸らしむれば、國民の生活には何等不安はないのである。

▲然るに仲小路氏は、此不自然を自然に歸らしむる努力は——遲れながら多少やつたけれども——しなくして、自然なる米價の暴騰を不自然に引き下ぐる事に努力したのである。併し是れは獨り仲小路氏の誤りではない、國民の一部—寧ろ大部分と云つても可い——は政府の力で米價を下落せしむる方法を講ぜよと註文したではないか。人間は甚だ自惚れの強い動物で、人間の力は自然を制御することが出來ると過信して居る。仲小路氏なども其の缺點の多くを持つて居る上に、例の感性が強い性分であるから、無我夢中に騷き立てたのだ。

▲山本氏は當時仲小路氏の政策を非難した。所が自ら局に當つてやつて見ると、依然として米價は下落せぬ許りか却つて騰貴の傾向がある。之れを見た仲小路氏及び一部の國民は、夫れ見よ、山本は仲小路を非難したけれども米價を下落させ得ないではないかと言つて居る。彼等は人爲的に米價を下げ得らるゝものと思つて居るのである。實に笑ふべき批評だ。

▲吾輩は山本氏に對して、米價を落下させ得ないと言つて非難しやうとは思はぬ。唯だ現政府は米價を自然に歸し、國民の生活を自然に歸らしむる事が出來たか如何を見んとするのである。此の立場から批評すると、山本氏のやり方にも滿足が出來ない點がある。

▲山本氏は貴衆兩院に於て、自分は決して自由放任はして居ないと辯疏したけれども、果して適當の指導をして居るであらうか、聊か疑ひなきを得ない。尤も政府は俸給、勞銀を自然に歸らしむる事に就ては、出來る限りの努力をして居る、併しながら外米の輸入は自然に行はれつゝあるであらうか、或國又は或商人の爲めに自然は妨げられつゝあるではあるまいか。

▲併しながら大體に於て吾輩は山本氏の方針に贊成するもの

である。而して吾輩は仲小路氏の政策が下落すべき米價を却つて騰貴せしめたとは信じない、米價は當然騰貴すべきものであつた。米騷動の源因は幾らもあつたであらうが、利益分配の不公平、不自然が其の重なる一つであつたことを疑はないのである。

▲元來日本國民は自然に順應する道を知らないのである。西洋人などは米が騰貴すれば何か廉價な食料を工夫して其れを用ふるのであるが、日本人はそんな研究をしないで米價を下げろと騷ぐ。是れは實に不自然な生活である。手短かに言へば、米が不足と云ふのは東京市と大阪市と此の二大市民の需用に不足すると云ふ事になるのであるから、此の二市民が何か米以外の食料を少しづつ混ぜて用ふれば可いのである。安月給取りなどは智識は中等以上であるから、料理法を工夫して朝食に薩摩芋とか馬鈴薯とか云ふものを用ひたら可からうと思ふ。

▲要するに米穀に許り頼る生活は甚だ危險である。是れから段段世界的の食料品を用ふるやうな習慣を付けなければなるまい。

▽米問題より觀たる農相

鵜崎鷺城

一

現内閣當面の大使命と云ふべきは、外政問題としては講和外交に最善の努力を爲すことと、内政問題としては國民の實生活に安心を與ふること、言ひ換へれば米問題を適當に解決することである。勿論此の以外に重要なる政務はいろ〳〵あるけれども、少くも此の二つは現内閣が最も注意を拂はなければならぬ問題である。特に米問題は前内閣瓦解の直接の原因を爲したものである以上、現内閣が是非とも之れが後始末をして一日も長く米の不足と米價の騰貴よりする國民生活の壓迫を救濟するのは、啻に政治的責任なるのみならず、又た原内閣出現を有意味たらしむる所以の急務である。

特に原内閣は政黨内閣を金看板として、世間でも人氣を以て迎へれば、政友會でも之を唯一の誇りとしてゐる。單に形式論から言へば原内閣を政黨内閣と認むるに躊躇しない。少くも今まで政友會を中心として組織された政府よりも一歩を進めてゐる。然し單に輪廓だけが備つて、國民多數の利害と共通共鳴を缺いて居れば、政黨内閣の政黨政治のと大きな法螺は吹けぬ。政黨内閣は名稱や形式以外に、政治の實質を必要とする。唯だ多數黨が政權を獨占し、我黨内閣になつたと云ふのみで、肝腎の施設が民衆の要望を裏切るやうでは、國民に立脚するとの議論は立たぬ。然るに現内閣の之に對する態度は、必ずしも米問題を全然閑却し去つたとは云はぬが、米價調節の新方策に第一着手を執ると云ふ目標を置いて、熱心に施爲した跡を認めるとが出來ぬ。殆んど議會召集間際までは、原首相を始めとして政友會の大臣が祝酒に羽目を外してゐた形がある。偶々米の問題に及

ぶと、原首相は例に依て例の如く憂慮に堪へぬとして、適當な手段を講じてゐるから、今に滿足な效果を見ることが出來るだらう位な所でお茶を濁し、具體的政策の說明を避けた。特に山本農相は當面の責任者たる位置から云つて、ポカンと手を拱いてゐた譯で無からうが、唯だ一時の場面を糊塗し、其の中に何うかなるだらう位な程度で、自然の成行を俟つと云ふ所があつた。

本來山本達雄氏が二たび農相になつたのは、他の施設よりも先づ米の問題を如何に解決するかと云ふことが第一義で、世間も亦此の點に彼の農相振りを見ようとしたのである。それ故に彼が農相としての聲譽も、政治家としての評價も、此の問題如何に依て定められると云ふ立場に身を置いたのである。彼が山本內閣の農相になつたときは、西園寺內閣の藏相時代と違ひ、幾分か位置が下落した形があり、特に彼よりも後輩の高橋是淸が藏相になつて其の下風に立つたと云ふので、自分も愉快で無かつたのみならず、實際は伴食扱ひされて影が薄かつた。從つて農相としても是れと云ふ仕事をせずに終つたが、今度は以前と違つて初めから爲すべき問題を前にして入閣し、又た世間からも仲小路前農相の施設と對照して注意され、少くも米問題の對策について何等かの期待を置かれた所から云へば、『問題の人』として晴れの舞臺に立つのである。大袈裟に云へば現內閣が國民の信用を得て位置を安うするも、信望を失つて破綻を招くも懸つて彼の態度にあると云ふ所がある。

二

元來國民の生活問題が面倒になることは、歐洲開戰後物價の趨勢に照して明かな現象であるから、當局者が逸早く國民生活に觸れた適切な政策を案じたならば、米問題などは今日迄に何とか調節の方法が附いたのである。而も政府は樂觀して自然に放任し、前農相仲小路君は遲蒔ながら仕事を始めたけれども、元々根本に觸れたもので無いから、結局失敗に歸するは始めから分り切つてゐる。而も仲小路が調節令や外米管理令を出したときは、細工はリユウ〳〵仕上げを御覽じろと云はぬ許りの鼻息で、不正商人を大臣室や官邸に呼附けて警告を與へる時などは大した權幕であつたが、其等の法律や仲小路の拳骨は何のタシにもならずして、米價は奴紙鳶の糸を切つた如く騰貴する一方であつた。之れが爲め終に民衆の思想を險惡に導き、街頭の民衆の叫號と腕力に依て一時米が安くなつたとすれば、農相の面目論は別として、第一法律と云ふものが權威を失つたことになる。法律が權威を失へば國家の威嚴が無くなるのである。

仲小路は米問題に對して初めから誠心誠意であつたに相違ないが、由來評判の好く無い方人、貴族院でも自分で云ふ程重きを爲さず、寧ろ辨を好むの士と見られてゐる。特に彼は功名心が強く、前內閣の農相としても初めから自分が伴食で無いことを世間に示す爲め、何事をかしよう〳〵と焦り、拳骨を振廻して强がつた所がある。多年官僚主義の雰圍氣と因習と形式の間に噉まれて來ただけに、言ふことと爲すことが總て官僚式な所

に人から嫌はれる點があつて、政府の力を以てすれば如何なる事でも出來ると思つてゐる。特に爲政家として彼の缺點は、餘りに形式法令を重んずる以外に、民間の情僞に通ぜぬことで、國民生活と最も交涉の多き農商務の長官としては、少くも民情に迂なることが彼の失敗の元であつた。然し彼に政治家の手腕があつて民間の事情に通ずるならば、米問題の如きもモツト根本的に調節を策し、アンナ騷ぎを起さずに濟んだかも知れぬが、狹い官卓から世間を見て形式的な遣口をしたから、いろいろ手違ひを生じたのである。假に米の强制買收が好いとするも、それなら夫れで最初に實行すべきであるのに、出る智慧は後から〳〵となつて、折角の策も惡い方角に外れる一方であつた。

此の人は昔から策士を氣取り、小刀細工をするに過ぐ。餘りに悧巧振つて上手に立廻らうとするから、動もすれば悧巧馬鹿に陷つて小智小才の爲めに誤られることになる。少くも米問題に對する遣口は、智者振らうとして出來損つた形がないでは無い。特に彼の手落ちは國民生活問題を各方面の人々と相談して、遺漏なく方策を立てることに考へ及ばなかつたことで、餘りに自惚れと自分だけの功名心に囚はれて、農商務大臣一人の力で仕事しようとした生兵法が大瘡の元であつた。

今一つ彼が世間受けの惡い點は、昔し勤めた檢事の頭が今猶ほあつて、稍もすれば理窟と威壓に依て虛勢を張らうとすることである。理窟やコツン〳〵で米價の大問題を解決出來ると思つたのが誤りである。初めから政策が宜しきを得なかつた上に、餘り威張り散らしたので、取引所などは却て依怙地にたつた所がある。少くも彼の檢事氣質よりする威壓的態度に對する反感が米價を暴騰させた原因の一を爲し、米騷動が勃發したとき、若し彼が眞先きに辭職すれば人心を緩和して米價を低下せしめたかも知れぬと云はれた位である。然し仲小路は自分の施設を無論好いとしてゐる。又た彼として斯く已惚れるは當然である。

三

山本が農相となつたについては如何なる抱負經綸があつたか知らぬが、少くも米問題に對しては政友會が前農相の失敗前内閣の責任、及び民心の乖離を口にした手前、前内閣に對しても、國民に對しても、二重の面目を立てるべき譯である。自分の政策を好いとする仲小路は山本に事務を引繼ぐとき、米の問題についていろ〳〵考へを語つたに相違ないが、山本としては無論之れが踏襲を背んずべくも無く、前農相の立てた米價調節の制度を覆し、何か新しい所を見せやうとした。

彼が如何なる政策を執つたかと云ふに、食糧品の關稅撤廢、雜穀類の制限を策し、最近には外國政府に交涉して蘭貢米の輸出解禁とまで漕附けた。是等は無論米價調節の一策には相違ないが、而も極めて迂遠なる政策であつて、生活問題解決の壺に嵌つて居ないから、明効を疑はれる。初め政友會は皮相の觀察を米問題に下し、生活問題に深刻な理由を有たなかつたこと

が今日の不結果の元になつてゐる。彼等は不自然の米價謳貴、各地の米騷動を以て一般人心が前内閣から離れた結果と云ふふとに重きを置き、それ故に内閣が更迭して人心を新にすれば、米價は自然に順調に向ふであらうと思ふてゐた。特に最初政黨内閣平民内閣と云ふので一寸世間の人氣が好かつたから、原首相も山本農相も、此の分ならば好くなるとも惡くなる心配はあるまいと已惚れた氣味がありはしなかつたか。

次に山本の頭では嚢に仲小路が失敗したのは、憖ひ下手細工をいろ／＼加へ過ぎた爲めに、寧ろ自然に放任して置けば好かつたものを妙にコジラして了つたと云ふ風に思つてゐたから、成べく放任主義を執つた所もある。然し政黨内閣平民内閣の空な人氣や自然の成行任せ位では、米の形勢が思ふように向き直らない。そこで關税撤廢、外米代用などを思ひ附いたが、是れも理屈は歪みなりに附くにせよ、實際は徹底しない。と云ふ譯で、山本の樂觀と我黨内閣の已惚れは裏切られてゐる。初め山本は外米管理部を廢止するとまで云ひながら、近頃になつてからは仲小路の轍に倣はんとするなど、彼の米問題に對する遣口はグラ／＼して、歸一する所なく、初めから原カブレの白紙主義で押込んだのではあるまいかと思はれる程無方針な所がある。最近農商務省の役人中には農相の態度に不滿なものがあつて、現に前閣時代から米問題で大分働いた商工局長岡實や外米管理部長片山某等が辭職したのも、多少ゴタ／＼してゐる證據である。

山本を初めて政界に引入れたのは西園寺侯で、今こそ所謂[illegible]定つたけれども、四十三年夏西園寺内閣に入る迄は三田系、三菱系、大隈系、伊藤系、桂系といろ／＼に轉々して、齊に行き魯に行き四方に流寓と云ふ所があつた。元と學校の教師であつたが、三菱と共同運輸會社とが合併して郵船會社となつたとき、其の社員になつたのが財界生活の第一程で、それから日本銀行營業局長、理事、日銀總裁、勸銀總裁を經て大藏大臣となり、財界の人としては修業を積んでゐる。斯くの如く多年財界にありて官間と接觸したから、仲小路の如く初めから役人以外の生活を經驗しないものと違つて、世間の同情を解してゐる。仲小路は元と司法官をしたから多少法律の頭にはあつても、經濟上の知識は皆目ない。經濟の頭もなく、經濟界の事情も知らずして、國民生活の問題を取扱ふのは、初めから不適當と分つてゐるが、山本は經濟專門で多年實地に處して來た男であるから、米價問題を處理するに向くとして、世間が仲小路よりも彼の農相振りに囑望し、少くも To be Something であると認めたのは無理もない。

四

山本は財政家として傑出はして無いけれども、少くも高橋是清に比すれば二三枚役者が上かも知れぬ。深い學問こそ無けれ、財政經濟に趣味を有し、又た研究心もあつて何程か寸法が分つてゐる。而して世には彼の消極主義と高橋の積極主義とを兩極端の二幅對と稱し、旣に第一西園寺内閣の藏相たりしと

き、山本は消極政策を唱へて正直に財政の窮乏を告白したが、之れに反して當時日銀總裁たりし高橋は、積極論を唱へて事毎に反對した。同じ政府同じ政黨に全然財政上の意見を異にしたものが居ると云ふのは變である。

單に積極消極の議論から云へば、政友會には山本よりも高橋の方が向きが好く、山本の消極政策は政友會に於て面白く思はれなかつた。假令ひ積極主義の前提としての消極政策で、結局高橋の説と變つた所がないとの理窟を附け得るにせよ、積極論を唱へ來つた政友會の標榜に副はぬことになる。尤も藏相時代は肝腎の西園寺が彼の積極政策を是認したので何處までも其方針を通し、政友會でも表面異存を云はなんだが、次の山本內閣に及び高橋を藏相に任じて山本を農相に廻はし、消極と積極とを取り換へたのである。元來此の兩人は積極と消極のイガミ合ひ以外に昔から餘り仲の好くない方で、第一經歷や人物からして違つてゐる。山本は初めから順序立つた徑路を履んで來たから、人物も之れに準じて秩序的で、西園寺が惚れ込んだけ丈に氣品に富んでゐる。然るに高橋は發作的で氣紛れで、何程か非常識な點がある。前者はレールを踏み外す心配は無いが、後者は動もすれば脫線の恐れがある。

仲小路は人間の器が小さい丈けに、多量の忌味と芝居氣があつて、特に執拗な點が鼻に附く。山本は器局の大を稱すべからざるも、少くも重厚な所があつて、仲小路のように氣取つたり悧怜振つたりせぬ。仲小路は辯舌に長ずるも、其の辯には一種の臭味があつて熱誠が籠つて居らぬ。自ら肺肝から出るかの如く裝へば裝ふ程、其のアーチフイツシヤルの所が目に附いて、測々として人を感孚せしめる力に乏しい。山本は言論の人では無いが、議會の答辯振などは幾分の眞氣があつて誤魔化しが無いから、聽くものが諒とする。少くも反感を惹かぬだけの德がある。又た山本は仲小路のやうに威張つたり、コセ〳〵したりせずに、オツトリ構へて部下に仕事をさせる丈けの大處がある。仲小路は役人として小手が利いても、人物は山本の方が數段上である。

五

仲小路は嘗て政黨に關係したが、桂が死ぬが早いか飛出して元の官僚に立戾るような薄倖―薄倖は不幸の意に非ず輕薄の意味也―な態度に出た。是れは言ふまでも無く桂を寺內に乘換へる爲めであつたのである。山本は第二西園寺內閣のときから政友會と關係が附いたけれども、初めて正式に入黨したのは權兵衛內閣に二度の勤をしたときで、當時憲政擁護運動の際とて超然內閣反對論の手前、政黨以外の大臣は入黨せねばならぬことになつた。そこで口善惡なき京童は此の意味の政黨入りを一夜漬だと言つたが、山本はそれ以來政友會に辛棒して歷氣とした領袖である。

山本が政友會の地位を得たのは其の閲歷以外に、彼の金力がものを言ふ所があつて、弗函歡迎と云ふ點は高橋も中橋も同じである。尤も山本は是れと云つて纏つた勢力は無いが、併し其の人

物には誰も服してゐる。今まで政友會で何をしたと云ふ事も無く、又た總務になつて總務振りを發揮すること無く、恐らく彼れ自身も特に目立つたことをして見ようとの野心も熱も無かつたらしいと云つて空々寂々唯だ員に備はると云ふのでは無く、少くも政友會其物に對して相當の考へを抱いてゐる。仲小路の舊同志會に於けるが如く、單に政黨を功名利達の踏臺にする料簡で無いらしい。概して生拔きの政黨員は輙もすれば政黨の歴史、感情、因習に囚はれるから、頭が窮屈に傾くのが普通である。是れは獨り政友會のみに限ら無いが、特に久しく全盛期の續いた政友會の如きは一入である。山本にはさうした狹隘な頭が比較的少く、或は是れから先き政黨生活を久しく重ねるに伴うて、段々在來の政黨者流化し、大なり小なり歴史、因習、感情に拘泥するやうになるかも知れぬが、少くも今日の彼は頭がリベラルで、政黨の働は窮屈に律すべきもので無いとの見解を抱いてゐる。

單に個人としては紳士的人格の人で、情誼を重んじ好んで後進の世話をする。其一例を云へば三菱の横濱支店副支配人時代は、月給僅に二十五圓で一家を構へることが出來ないから、或る知人の家に寄寓した。今の夫人は此の薄給生活時代に迎へた糟糠の妻で、兩人とも結婚式に着る衣服が無い爲めに、知人夫妻から借衣して漸く式を擧げた位である。山本は位置財産を得た後も此の舊恩を忘れず、自分の息子や娘には知人夫妻を祖父祖母と呼ばしめ、還暦の祝には金煙管を贈り、又た別に隱居所を造つていつでも知人夫妻が來れば、其所でゆる〳〵保養をさせるやうにしてゐる。昔から書生を愛して學問をさせ、成業後もいろ〳〵面倒を見て世に立たせる工夫をしたが、女婿の松村眞一郎氏なども曾て山本の門長屋から大學に通ふて有用の材となつた一人である。

斯の如く人物の點に於ては仲小路などと比べ物にならぬが、政治家としては經綸手腕を疑はれる。少くも當面の問題を扱ふ農相としては、努力が足らぬ上に手腕も缺けてゐる。或は世論に鑑みて是れから眞面目に問題の解決に務め、案外見直すことになるかも知れぬが、原内閣組織以來四箇月間姑息不徹底のまゝに過したと云ふことは、政黨内閣の標榜に對しても、問題其物の性質に對しても、將た又た農相として位置に對しても、手緩りの誚を免れない。

若し此儘に過せば現内閣は益々民衆を不安に驅り、何日如何なる騷ぎが起つて前内閣の二の舞を演ずるかも知れぬ。昨日は人の身、今日は我身の上で、嘗に仲小路の失敗を笑つた山本は、仲小路からソレ見ろと笑はれて、落第政治家の刻印を永久に打たれることになる。兎に角米問題は現内閣に取つても山本彼れ自身に取つても大なる鬼門であると共に、又た一面には政治的名譽の試金石で、此の議會に於ける大問題の一つである。山本農相たるものウカ〳〵せずに奮發をしたが好からう。

評論

原内閣の施政方針に對する批判

大山郁夫

寺内内閣の下に於ては、その成立の基礎に關する彈劾不信任案が討論せらるのが、年頭休會明けの議會の常例であつた。ところが今年は政黨内閣の下に於て議會が開けるといふので、先づそれがない。過去二個年の今頃のことを追想すれば、政界の空氣は非常に苛ら立つて居て、轉た險惡を極めたものであつた。今更超然内閣のことを彼是いふ譯ではないが、併しその存立といふだけの理由で、あの様に激烈な動搖を國民間に挑發し、同時にあの様に立法府の時間と精力とを無用に浪費させたかと思へば、それが今は如何に時代錯誤のものとなり果てて居るものであるかといふことを、自ら遺憾なく證明して居るものと謂ふことが出來る。

然るに今年は兎に角にも、曲りながらにも政黨内閣と銘打つたる政府の下に於て、年頭の議會が幕を切つて落したのである。それ故、大體に於て友黨と見做れて居る國民黨は素より、反對黨として立つて居る憲政會に於ても、最早現内閣に對して憲政上の原則より爭はうといふのでなく、どこまでも政策問題を中心として戰ふべきことを宣言し、且つこれを實行しやうといふ意氣込を見せて居る。さういふ譯でか、第四十一議會の空氣は、少くともその劈頭に於ては、比較的平穩の氣に滿ちて居るのである。素よりこの平穩が必要なる政爭の回避にまで導くやうなことがあつては、一の弊害より他の弊害に趨ることになる譯になり、從つて我國の憲政上、結極何の得る所なきに留まるやうな事になるかも知れないが、斯の如きことは政黨政治の本質上、容易に起り得べからざることと謂ふことが出來る。殊に現今の政局上に於ては、政黨内閣が國民環視の下に一種の試驗を受けつつあるものであるといふ事を、各政黨とも十分に自覺して居る筈であるから、彼等と雖も總ての點に於て最善を盡くすべきは、先づ期待して然るべきである。尤もそれかと言つて、國民が彼等の上に暫くも監視の眼を注ぐことを怠るべき理

由のないことは謂ふまでもないが、併し兎に角、議會に於ける政爭が、憲政問題から政策問題へと一轉化を試みつゝあることは、我國の憲政上に於ける一進歩と謂はねばならないのであつて、而して此際國民も政黨も、この點に於てその力を糾合して、決して反動的氣勢の再來を許さないやうに、嚴重なる警戒線を張らなければならないのである。

政友會内閣の成立に就いては、單に我國民が多大の期待を以て之を迎へたに止まらず、外國に於ても之に向つて並々ならぬ注意を拂つて居るものが少からずある。今その一例を擧ぐれば、米國の有力な月刊雜誌の一たる『北米評論(ノース・アメリカン・レヴュー)』の如きも、その昨年の十一月號所載の『日本に於けるデモクラシー』と題する社論に於て、原内閣の出現を以て、間接に世界戰亂の中を割つて產れ出でたる重要事件中の一に居るものであるとして、可なり熱心に之を歡迎して居るのである。

無論内外に於ける觀察者が、斯の如く現内閣に對して普通以上の注意を拂つて居るのは、それが政友會内閣である事のためでなくして、それが政黨内閣である事のためであり、殊にそれが非立憲的、非近代的色彩の餘りに濃厚であつたところの寺内内閣の沒落の後を受けて、世界の政局自身が國際的デモクラシーの方向へ一大進轉を試みんとして居るこの際に於て、花々しく政黨主義の旗幟を揭げて產れ出でたる内閣であるからである。此立場より見れば、現内閣が果して當來の超然主義的官僚内閣式の政治樣式より一轉して、眞正の責任内閣の政治樣式に移り得るや否やは、單に我國民に取つて重大なる問題たるに止まらず、同時に世界に取つても可なり關係の深い問題なのである。この理由に依つて我國民は、暫らく政友會の過去に於ける政治的罪惡を見逃がし、且つ現内閣成立前後の變則的過程を咎めることをも跡廻しとする程までの寛大なる態度を以て、只管その前途の成績を見守つて居る譯であり、同時にまたその樣な事には無頓着であるところの外國の觀察者さへも、我國の政治の運用上の樣式が、適當な時に適當な換轉期を劃したことを、深い興味――時としては多少の同情をさへも交へたる――を以て眺めて居る次第である。

斯の如く大なる内外の期待に對して、政友會及び現内閣が果して如何なる態度及び行動を以て酬ゐんとして居るかは、我國民に取つては更にも言はず、世界に取つても亦、非常に重要なる問題でなければならぬ。同時にまた、政黨主義の現内閣に對する期待は、總て政友會以外の各政黨に對する期待をも包含して居る譯であるから、大體友黨と見られて居る國民黨、並に反對黨として立つて居る憲政會の態度及び行動も、自然政友會のそれと同程度の意義を有するものと見なければならぬ。日本橋下の水はテムス川に通ずとかいふ喩は古めかしいが、我國に於ける政情が直ちに世界的意義を得るやうになつた今日に於て、我等は我國に於ける各政黨が、今や將さに開かれんとして居る政爭に於て、眞に國民的立場より各自の行動を律し、異常なる

努力と節制と道德的勇氣とを以て、その和すべきに和し、爭ふべきに爭て、斯くして第四十一議會を以て、新しき時代の機運に適合せる模範的議會たらしめんことに努力せんことを希望するものであると同時に、更に一般國民、及び當然一般國民の機關たることを以てその使命とせざるべからざる新聞紙が、議會及び政黨に對する正當なる注意と監視とを怠らないやうに心掛けんことを希望するものでもある。

政友會以外の各政黨のことは玆には姑らく問はないこととするが、政友會及びその組織する現内閣が、この多事にして同時に多望なる政局に面して、果して如何なる態度を採らんとし、また如何なる行動に出でんとして居るかを豫測することは、政界を表面より觀察することを使命とするのみで、その裏面の情誼に通ずることを能事とせざる我等に取つては、その材料の缺乏よりして、可なり困難な事業であるには相違ない。而して年頭休會明けの議會が、まだやつと開かれた許りの今日に於て、我等がこの目的のために用ひ得る材料としては、政友會大會に於ける原首相の總裁としての演說、並に議會に於ける原首相、内田外相、並に高橋藏相の施政方針演說あるのみである。それ故、我等はこの機會に際し、是等の材料より歸納し得られる限りに於て、政友會及び現内閣の現下の時局に對する態度を批判し、且つ又之に關する我等の註文をも述べて見やうと思ふのである。

併し我等がこの事を企つる前に當り、我等は我等が政友會及び現内閣に對して希望して居る樣々の要點を陳述して置くことが必要であると考へる。蓋し斯の如き諸要點を豫め陳述して置くことは、軈て政友會及び現内閣の方針に關する批判の標準を設定する譯になるのであつて、而して事の順序よりいへば、先づ斯の如き標準を設定して置いて、その上でその方針の適否を論ずることが、最も便宜上の要求に適合するものであると思ふからである。

右の意味に於て我等が政友會及び現内閣に要求したいことは、先づ現下の時勢に對する觀測を誤らない樣にすることである。大戰進行中に於て『曠古の時運』とか、『重大なる時局』とかの標語が、我國の官僚系及び政黨系諸政治家に依つて、口癖の樣に反復せられたことは、世人の記憶の上に尙ほ鮮かに印刻せられて居る所のものである。時としてはその際限なき反復が、此語を極度に平凡化して、それが筆舌の上に現はれて來ると、世人が『又か』と思つて別に取合はない位にまでなつたものである。ところが大戰の終熄したる今日に於て、國内國外の形勢を一瞥すれば、『曠古の時運』とも『重大なる時局』とも何とも形容の出來ない局面――それは殆んど『形成の過程に在る新世界』とも呼ぶべき局面が、まざまざと眼前に展開せられて在ることが、如何なる凡眼にも映ずるやうになつたのである。

斯の如き新局面を見て今更のやうに喫驚したもの丶内には、或は喜びを以て之を迎へたものもあれば、或は憂ひを以て之に面したものもある。前者に屬するもののことは姑らく言はないとにするが、後者の部に屬するもので眞先にその感情を表白したものは、『國民思想の統一』などといつて騷ぎ出した臨時教育會議の面々の如きがそれである。併しながら現下の世界に於ける動搖のために、多少の程度に於て影響を蒙つたものは、獨り國民の思想方面のみではなく、その實生活の方面も亦、同じ運命より免るゝことが出來なかつた。否、思想と生活とは、常に互に影となり形となり合つて居る關係に立つて居るものである。それ故、思想を生活と引離して論ずるのは、無理も亦甚しいものである。臨時教育會議の面々は、外來思想に對して極度に神經を惱まして居るやうであるが、併しながら彼等は、外來思想が幾分でも我國民間にその影響を與ふるやうになる迄には、我國民生活に於て既にそれを受容れるまでの素地の出來て居るものであることに氣附かないか、若しくは氣附かないことを裝うて居るやうである。されぱこそ彼等は、國民生活を離れて國民思想問題をいぢり廻して彼是と評定し合つて居るのである。

流石に原首相は一應この點に意を注ぎ、その政友會大會に於ける演說に於て、現下の時局を呼ぶに、『大變動の時運』といふ極めて印象（インプレツシーヴ）的な語句を以てして居る。併し首相の此語句に對する解釋を離れて、我等の見地よりして之を解釋すれば、それは一方に於ては、國内に於ける社會的再調節の時代（Age of social readjustment）を意味して居ると同時に、他方に於いては、世界に於ける國際的改造の時代（Age of international reconstruction）をも意味して居るのである。尤も是等の兩面は、その基底に於て、双方より相合一して居るものであることは、改めて說明するまでもない。

國内的再調節に關しては、資本對勞働の問題もあれば、國民思想の問題もあり、また國民生活安固の問題も含まれて居れば、是等の一切の諸問題の解決の前提となるべき憲政上より見たる國民解放問題――例へば言論思想の自由の確實なる保障、乃至、集會結社の自由の增進、參政權の擴張、立法司法行政三權の關係の合理化の如き――の如きものも含まれて居る。また國際的改造に關しては、我國を中心として見たる遠近の諸國家――現下の意味に於ては遠近の諸國民といふ方が更に適切である――に對する親善關係の更新を始めとして、講和會議に於ける重要問題たるべき國際聯盟――若くは更に適切にいへば、ウイルソンの所謂自由諸國民間の聯盟（League of free nations）を始めとし、之に附隨する軍備制限問題とか、海洋自由問題とか、外交（少くとも國際條約）公開問題とかに對する、若しくは更に手短に言へば、國際的デモクラシーの確立に對する我國の態度の宣明とかいふ樣な問題も含まれて居るのである。而して斯の如き多くの重要問題に對して此際その態度を鮮明にして置くことは、政友會及び現内閣が先づ第一に取らさるべから

ざる手段であつて、而して少くとも我國民が政黨內閣としての原內閣に對して多大の期待を寄せたのは、この內閣が是等の要點に關して、少くとも從來の官僚內閣とは異りたる道を步むべきことを豫想したがために外ならなかつた。

右の立場に卽して、年頭議會に於ける原首相、內田外相、及び高橋藏相の施政方針演說に對すれば、國民に取つては、前の期待の大きかつただけ、それだけ今の失望も又大きかつたものと謂はねばならぬ。試みに先づ內政の方面より見れば、原首相はその政友會大會に於て現下の時局を『大變動の時運』と呼び、之に對する機宜を誤らざることの必要を强調して居る甲斐もなく、之に對する特殊の政策に關しては、該演說に於ても、將又、議會に於ける施政方針演說に於ても、その大體の方針にだも觸れて居ないのである。彼は所謂政友會の四大政綱たる敎育の刷新、產業の振興、交通機關の整備、國防の充實の必要を事々しく說明して居るが、斯の如きことは、空氣が人體に必要である如く、國家生活に取つて必要なる根本條件であるから、別に彼を煩はさなくとも、又特に現下の時局に對してでなくとも、その一日も缺くべからざるは判り切つた話である。無論、彼が此際特に是等の諸點に關して責任を以て適宜の施設をなすべきことを公約したのは、それも誠に結構のこととは認めるが、併しそれを態とらしく强調することを以て、その現下の時局に對する特別の施設に言及する義務を曖昧にする一種の掩護物として居るかの觀があるのは、遺憾の極みと謂はざるを得ないのである。

殊に社會的再調節問題に關聯して、資本對勞働に關する意見とか、國民生活の安固に關する意見とか、または戰後經營の費用支辨上に於ける國民の負擔の分配の問題に關する意見の如きは、此際國民が最も大なる關心を以て聞かんと欲する所であるにも拘らず、彼は是等のことに就いては、一片の暗示をだも與へて居ないのである。就中、戰後に於ける國民負擔分配の方針の如きは、藏相の豫算案の說明に於ても言及する所がなくてはならない問題であるにも拘らず、彼も亦之に關しては、極めて重寶なる沈默を守つたのである。現內閣成立の時期が豫算案編制の間際であつたといふことが、或は是等の要點が現內閣の豫算に十分に現はれて來なかつた當面の事實の辯解にはならうが、それに對する將來の方針を國民に對して開陳する政治道德的義務を怠つて居ることの口實にならないことは、判り切つた平明の事理でなければならぬ。

更にまた、上に揭げたる社會的再調節問題解決の第一次的手段たる憲政上の諸問題に至つては、政黨內閣が取扱ふには最も誂向きの絕好問題たるに拘らず、各相の演說が申合せた樣にそれを閑却して居るのは、一體どうした譯であるか。現內閣の諸公が是等の諸問題に對して無關心で居ることを示すのは、最も大なる程度に於て國民の期待を裏切ることになるものであることを、彼等は全然心附かないで居るのであらうか。是れ我等

の時に落ちぬ事の随一である。現内閣が今期議會に於て提出せんとして居る選擧法改正案の如きは、纔かにこの重要な全問題の單一方面に、而かも甚だ不完全に觸れんとして居るものたるに過ぎないのである。

若し夫れ外政問題に關しては、首相及び外相が先づ、對支對露の外交に於て、局面を一新することを公言し、對支外交に關しては南北妥協を主とし、且つ從來我國の對支行動の動機に對する諸外國の疑念の種となつて居た對支借款を打切ることを述べ、また對露問題に關しては、露國民の國家的復活を希求すると同時に、同國に對する内政干涉を避けるが、その他の點に就いては極力援助を借す方針であることを宣明したまでは甚だ好く、而して我等は現内閣がどこまでもこの聲言に忠實ならんことを祈るものである。けれども我等は對露政策に關しては、更にオムスク政府以外の各政府に對し、殊に過激派政府に對して現内閣が採らんとして居る態度を、一層巨細に說明して貰ひ度かつた。膠州灣問題や、南洋諸島問題の如きは、それに對する我國の態度に就いては、我國民間に殆んど暗默の一致とも見るべきものがあるが、最後に掲げたる問題に關しては、今尙ほさういつたものが缺如して居るのであるから、外相はこの點を更に明白にすべきであつた。

併しそれにも勝つて、國民が最も熱心に首相及び外相の口より聞かんと欲したものは、現内閣が講和會議の重要問題たらんとして居る國際聯盟以下の上掲の重要問題に關して採らんとした態度である。是は一方に於ては、今後の國際政治上の局面に於ける我國の地位にも關係すれば、また我國が將來太平洋沿岸の諸國の我國民に對して取つて居る差別的待遇撤廢要求の主張にも關係することである外に、他方に於ては、本文の筆者が本誌の前號に於ける『國際生活上の新紀元と我國の政治的將來』と題する論文に於て詳述した通り、我國の將來の憲政的發達に對しても亦、極めて緊密なる關係を有して居るものであつて、現内閣は此機會に於て、特別に此點を闡明して置くべき筈であつた。原首相は一議員の質問に對して、これを今明確に述べることは我國の不利益になると答へたが、是こそ底の見え透いた口實である。苟くも現内閣が我國民の代表者として、是等の諸問題に對して採らんとする態度が、各國が見て以て正當のものとする程のものである限りは、此機會に於て堂々之を中外に聲明するのは、我國の利益にこそなれ、決して不利益になるものではない。否、寧ろ之を聲明しないことが、我國に對する世界の疑惑を促す所以であつて、從つて却て我國の不利益を醸すべきものでなければならぬ。原首相が、『正義人道に基き、公明正大なる態度を以て』講和會議に臨まんとして居ることを說き、内田外相が、『强固なる平和の基礎を確立』する信念を以て同會議に臨まんとして居ることを述べたのは、無論この場合に適合した言ひ方ではあるが、併し斯の如き一寸聞きにも正々堂々たる聲言をなすことは、マキアヴェリズムの外交に於てさへ

その必要を認められて居ることであるから、それが更にその內容の具體的說明に依つて伴はれない限りは、幾ら好意的に解釋しても、紋切形の外交的辭令以上には見られないのである。外相はそれに附加へて、現內閣が極東に於ける商工業上の門戶開放主義及び機會均等主義を恪守せんとして居ることを力說したのは、これも誠に結構なことであるには相違ないが、唯併し斯の如きは、原首相の所謂『正義人道に基き、公明正大なる態度を以て』する立場を離れても尙ほ明言し得られることであつて、これだけでは極めて不十分であることは、現內閣諸公の呉呉も反省せざるべからざることである。

槪言すれば、今期議會の劈頭に於ける右三相の演說には、官僚內閣に於ては見ることが出來なかつた開放味と柔か味とが多少の程度に於て呈示せられたことは事實である。それは單に從來の歷代內閣に於ける各大臣の第一人稱であつた『本大臣』を『私』と改めたこと、及びそれに相應はしき彼等の平民的態度といふ樣な外形上の原因に負うて居るばかりのものでなく、政黨內閣の下に於て、政府と國民とを隔つる城府が幾らか片側に押退けられるやうになつた新事實より生じたる產物である。これは無論現內閣の下に於て實現せられたる憲政上の一進步には相違ないが、併し乍ら、この進步が唯外形上表面上のことに留まり、一皮剝いてその奧を吟味すれば、舊來の弊習——殊に一種の陰性の秘密主義の弊害が、尙ほ依然として殘留して居るのが認められるのは、遺憾千萬のことと謂ふの外はない。

斯の如きは抑も如何なる原因より出でゝ居るものであらうかと考ふれば、先づ第一に氣附くことは、現內閣を組織する諸大臣は、現下に於ける內外の新機運に面し、殆んど眩惑して驚異の眼を見張る程も、その絕大意義を認めて居ながら、彼等が過去に於て受けた永年の敎養が、依然として彼等の潛意識の要素となつて、執念深く彼等の腦裏にくびり附いて居る結果として、それが彼等の現下の時局の動搖に關する對應策を發見する上に、容易ならざる障害となつて居るからでなければならぬ。

それと第二には、彼等の率ゐて居る政黨の歷史、及び現狀の上にも亦、彼等をして此重大なる時運に際會しながら、縱橫にその手腕を揮ふことを得しめない原因もないではない。蓋し今日に在つては、國際的改造問題を取扱ふにしても、將又國內に於ける社會的再調節問題を取扱ふにしても、共に從來の官僚軍閥の痼疾たる一種の統治上の思想より徹底的に脫出する必要があり、特にまた後者に關しては、その上更に財閥の利害關係と根本的に絕緣する必要がある。然るに政友會が右の兩閥に對して持續し來りたる關係に於ては、斯の如き一大轉化を困難ならしむる理由が儼存して居ることは、爭ふべからざる事實である。況んや、現內閣を組織して居る諸大臣中には、財界の代表者と見るべき人々を多く網羅して居ることとて、此困難は一層增大せられざるを得ないのである。けれども、現下に於ける內外の形勢は、文字通りの意味に於ける國民勢力の總動員を要

するものであることが明瞭である以上は、現内閣としては、その樣な階級的世界觀社會觀に執着して、一切の政治的社會的改革を遲疑することを許さないのである。現内閣たるもの今にして此點を反省して、百尺竿頭一歩を進める工夫を講じなければ、それ自身に對する今日の國民の期待は、必ず他日の咒詛となるべきものであることを覺悟しなければならないのである。

非資本主義に就て

（八―一―二四）

法學博士　吉野作造

（一）

昨今我國一部の論壇に所謂「資本主義」（又は資本的帝國主義、資本的侵略主義とも呼ばるる）に對する攻撃が尖鋭く説かれて居る。此方面に於て最も奮鬪して居る者の隨一が福田博士である事は言ふまでもない。然るに本誌前號に於て福田博士の之に關する論文の外に、同じく資本主義攻撃論として鷲尾正五郎氏の論文も現はれたので、二三未見の讀者から之等に關する予輩の見解を質められ、且又福田・鷲尾兩氏の説は全然同一なりや否やの疑問をも質められた。予輩は福田博士のものは最近本誌並に「中外」に發表せられた數篇を讀み、鷲尾氏のは唯本誌前號の論文を讀んだに止まるから、十分の安心を以て論評を下すに躊躇するも、唯之れまで讀んで得たる印象を通つて僅に大體の見解を定むる事は出來る樣にも思はるゝ。此一篇は即ち未見の讀者の質問に答ふるを本旨とするものである。從つて論評といはんよりは寧ろ福田・鷲尾兩氏の論點を明かにするを專らとした。

（二）

福田博士の議論の出發點は、今度の戰爭の原因――少くとも其根柢に橫はる最も深い原因――は資本的侵略主義の衝突にありとするの見解である。而して此の衝突の一方のチャンピオンは英國であり他方のは獨逸であると觀て居る。資本的侵略主義を執るものが數多ければ、其の最も強いものが弱い者を併呑するに成功しない以上、彼此の間に衝突を免かれざるは自然の數である。此點に於て吾々は福田博士の見解に全然同意する者である。

鷲尾氏の出發點は之とは著しく異つて居る。資本的侵略主義を呪ふ點に於ては、氏は福田博士並に吾人と全然同一の見解に立つけれども、氏は此呪ふ可き主義の上に立つたものは英米だけであつて、獨逸は之を粉碎して世界に光明の天地を來さんとする運動のチャンピオンとして現はれたと觀て居る。唯其初め獨逸は此目的を達するが爲めの手段を誤つた。何故なれば彼は先づ軍國主義を以て英米に對抗したからである。今や彼は手段を誤つた爲めに一敗地に塗れた。而して新に覺醒したる革命後の獨逸は今や茲に武器を改め、氏の所謂「徹底的民主主義」を以て捲土重來英米に對抗せんとして居る。斯くして氏は獨逸の努

力の前途を樂觀するのみならず、過去に於ける獨逸主義の動機に對しても異常の讃辭を呈して居る。故に同じく資本主義反對論者とは言ひながら、氏の議論の根抵は福田博士とも異り、又著しく吾人とも異なるものである。恐らく斯ういふ偏した觀方には我國の識者中餘り多く賛成する者はあるまい。

（三）

今度の戰爭を資本的侵略主義の衝突と觀るに異議なきは前述の通りであるが、併し單に是れのみと觀るのは正當の見解ではあるまい。從つて今度の戰爭の勝敗の結果として殘るもの、否、獨り殘りて大に戰後に跋扈するものは、資本的侵略主義のみなりと觀るのは、何うしても偏僻の見解たるを免かれないと思ふ。此點に於て鮮かな對照をなすものは福田博士と姉崎博士との見解である。

姉崎博士は、戰爭は其初め何の原因で起つたにしろ、段々と進み行くに連れて爭點が道德問題に轉じ來るものなるの事實を認め、戰勝は即ち道義の勝利にして從つて資本的侵略主義の如きも之に導かれて醇化さるだらうと確信されて居る。人或は博士を難じて「斯くありたい」又「斯くあらねばならぬ」と「斯くあるべし」とを混同せりと爲すものあらんも、要するに、今日の世界を支配して居るものが、新世界創造の活力の磅礴たる道義的精神たるを認むる點に著しき特色を有し、資本的侵略主義の勢力の如きは殆ど眼中に置かない。之に對して福田博士は資本的侵略主義の恐る可きを見て、殆ど他の何物をも看過さんとして居る趣がある。英米は資本主義の國である。英米の勝つたのは資本主義の勝利である。從つて戰後英米の大に勢力を揮ふは取りも直さず資本主義の大に跋扈する事を意味する。斯て博士は更に一歩を進めて、英米に屬する凡ての者は徹頭徹尾資本主義に根抵する者なるが故に、また徹頭徹尾之を排斥す可しといふ様な見解を執つて居らるる。福田博士が姉崎博士を目して冥想的と評する所以も恐らく茲處にあるのだらう。何れにしても姉崎博士の見解を稍々樂觀に過ぐるといふべくんば、福田博士の見解は餘りに悲觀的懷疑的に失するといふ譏を免れまい。

（四）

資本的侵略主義其物の呪ふ可きは論を俟たない。何となれば、福田博士も指摘せらるゝが如く、此主義は資本家の利益を本位とする所からして、内にあつては社會民主主義の勃興を誘發すべく、又外に對しては侵略的軍國主義を伴つて世界の平和を傷けずんば已まざる可きを以てゞある、日本には資本的侵略主義は殆どないといふ福田博士の見解は、正直の所直に承認は出來ないけれども、此主義の傳播が我國の將來に取つて極めて危險なる事、從つて空疎なる海外膨脹論の如きは却つて大なる危險思想と認めねばならぬとするの點に於ては、予輩は全然博士の見解に賛同するものである。

資本的侵略主義は、戰後に於て尚ほ相當に跋扈するかも知れない。少くとも斯く觀て自ら愼み又他を警戒するは決して無用の事ではない。此意味に於て、福田博士の最近頻りに資本的侵

專ら英米の[illegible]といふのは、オイソレと承認す可きものか何うか、吾人は多少の疑を有つて居る。

今度の戰爭が英獨兩國の資本主義の爭に外ならずとするの見解を取れば、戰後世界を支配するものが英米の資本主義なりと見のは當然の結論かも知れない。けれども、今度の戰爭は其進行に連れて更に新しい內容が爭點に加つて來たと見る一派の見解からすれば、却つて資本的侵略主義を出來る丈け抑へようとする考の方が、强く戰後の世界を支配するだらうと見られないでもない。福田博士は巴里の國際經濟會議は如何とか、英國は海洋の自由に付て故障を申立てゝ居るではないかなどと言はれるけれども、姉崎博士の取つて居る立場から言へば、巴里經濟會議は今は昔の物語となつて終ひ、又海洋の自由の如きも、假令多少の波瀾があるにしても、結局立派に行はるるに相違ないと信じて居らるゝであらう。何れにしても是等は早晩事實の上に現はれて來る問題である。從つて何れの見解が正しいかは近く自ら明かになるの日があらう。

但こゝに一步を進めて考へて見たいのは、今日の英米を資本的侵略主義の張本と觀るの正否如何の問題である。英米兩國が資本家によつて支配されて居ると云ふならば、嚴格に言へば正必ず現はると云はれて居るが、英米兩國は今日西洋に於ても社會民主主義の振はざる處ではないか。今後と雖も他國ほどに急激な社會民主主義の勃興を見るの見込最も少かるべき事は最近の選擧の結果にも現はれて居る。是等の點は、英米兩國の實情をモ少し精密に研究して、モ少し冷靜なる判斷を下すの必要はあるまいか。

要するに資本的侵略主義其物に反抗するといふ福田博士の立場には、何人も進んで贊成するである。但、之に反抗せんが爲に直ちに英米に對抗せんとするのは、坊主を憎んで袈裟を呪ふの類ではあるまいか。而して予輩は此問題に付ては更に次の二點に注意することを必要と考へる。一つは英米と並稱するも、少くも米國は此點に於てヨリ公明正大であり、現に英國に對しては一種の牽制的勢力として働いて居ることである。二は今日の世界に於て、一種の道義的精神が新世界創造の活動力として大に動きつゝあるの結果として、來る可き世界の形勢は、必ずしも過去の歷史の外面的現象のみによつて推測し得ざる事である。

（五）

英米兩國に資本的侵略主義の汚名を着せて漫りに英米罵倒

の聲を逞うするは、日本今日の外交的立場を念とするもの丶必ずや顰蹙すべき所たるのみならず、又冷靜なる論者の快く與する所ではあるまい。夫れでも單に資本的侵略主義の故を以て英米を罵倒するのはい丶。更に進んで英米のデモクラシーを呪咀するに至つては餘りに偏僻の議論と云ふべきではあるまいか。田博福士は曰ふ、英米のデモクラシーは、今日與へられたる政治組織の上にてのデモクラシーである。而して今日の兩國の政治組織の基礎は、資本主義である。從つて英米のデモクラシーは資本的・政治的民本主義、謂はゞ似而非民本主義であると。之は果して英米政治の實情に基くの議論として許されるべきものであらうか。福田博士の說は、議論に透徹の明あるに服すべきも、一旦實情の判斷に至ると、鷲尾氏の如く極端偏僻ではないけれども、聊か冷靜を缺いて感情に馳するの嫌が無いではない。

(六)

今度の戰爭に勝つたものは英米の資本的民本主義にあらずして獨逸の社會民主主義であるといふ說明に對しても、我輩は一矢酬ゆるの必要を感ずる。今度の戰勝は英米の自力に依つて得たものではない、拾つた勝利であるとするの說明は正しいとしても、獨逸をして敗退を餘儀なくせしめたものは、福田博士の言の如く斷じて獨逸の社會民主主義ではないと信ずる。敗退に乘じて社會民主主義が大いに頭を擡げた事實は之れを認むるに躊躇しないが、敗退を導いた直接の原因は物資の缺乏と最後の勝利に對する確信の動搖と、ウイルソンの講和條件の聲明に對する共鳴とであるとは、予が屢々他の機會に於ても述べた通りである。而して社會民主主義は、獨逸を敗退に導いた直接主要の原因でないのみならず、革命後の獨逸を支配すべき主たる勢力でもない事は、獨逸の現狀が露西亞と大いに趣を異にする事實に觀ても明かであらう。

併し乍ら獨逸の社會民主主義が、露西亞の過激思想と共に、今日の世界を支配する最も有力な又最も恐るべき勢力とし、而して大に之を警戒すべしとするの點は、予輩は全然福田博士の說に承服する。何となれば社會民主主義は、兎も角も今日の獨逸に於て見逃すべからざる大勢力であり、而かも露西亞の過激思想と共に、今後大に世界を脅かすべきは疑を容れないからである。福田博士は實際の事實の判斷には稍々精密を缺くの憾はあるけれども、然し將來の世界に於て最も恐るべきものは資本的侵略主義と社會民主主義であるとするの理義の判斷には、確乎として一點の曇りもない。鷲尾氏は資本的侵略主義を呪ふの點に於て福田博士と立場を同じうするけれども、社會民主主義に同情と讃美と歡迎の情を寄せる點に於て正反對の立場に立つて居らる丶。福田博士は英米の資本的侵略主義と獨逸の社會民主主義とに對抗して眞のデモクラシーを發揚するには宜しく日本と佛蘭西との提携を見ざるべからずと說いて多少の滑稽味を發揮して居るが、鷲尾氏は同じく英米の資本主義に對抗するの目的の爲めに、露獨の提携を說いて居るのは、偶々兩氏の素養と頭腦との相違を示すものである。

予に大變面白く讀んだ、就中法律の本質並に主權の本質に關する博士の說明（六六頁乃至七〇頁）は頗る我が意を得たものである。

博士は法律の本質を說いて實質的要素と形式的要素と無かるべからざるを說き、形式的要素としては一定の力によつて强行せらるゝものたるべしとし、實質的要素としては社會的規範として妥當性を有せざるべからずとして居る。斯くて博士は「法律を以て單に法として命ぜらるゝが故に萬能たりとする」の思想を排し、之が一定の有形的の力によつて强行せらるゝといふ事實の外に、社會乃至國民の理解納得の上に立つといふ精神的要素を含んで居なければ、其萬能たる所以が絕對的のものとならないと力說されて居る。恁かる觀方は、斯う說かれてみれば解り切つた事であるけれども、近頃まで形式的法律論の全盛を極めて居つた我法學界に、恁かる客觀的の觀方を流行せしめたのは、確かに博士の功績と言はなければならない。

博士はまた右の論法を主權の本質の說明に應用して居る。主權は形式的に絕對萬能であつても、更に實質上絕對萬能たるが爲めには、一定の合理的規範に拘束せられなければならないとし、更に一轉して主權活動の文化的意義を完うするには、是非とも此合理的規範に從つて作用する所無かるべからずと言つて、實質上の萬能たらしめなければならない。從來の憲法學者は、の第一の點のみを高調した。憲法論としては固より之で十分であらうが、然し之れ丈けで主權論の全部が解かれたものと考ふるならば、之れ憲法論及び憲法學者の不當なる僭越である。而して主として第二の點を專門の考察範圍とする政治學は、殊に主權活動の合理的規範といふ樣な問題に着眼する所からして、例へばデモクラシーの議論の如きが起つて來る。

斯う考へて來ると最後に予は牧野博士に一言反省を促したい點がある。博士は法律並に主權の本質に關する博士の獨特の考察法を官僚主義と民本主義との爭に應用して居る。博士の見解に據れば、政治にも形式的方面と實質的方面とある。而して其實質を專ら說く者がデモクラシイ論者であり、形式を專ら說く者が官僚主義者である。畢竟此兩者は楯の半面を視て爭つて居る者に過ぎないと（六八頁）、之は今日の政治に對する適當なる了解に基く議論とは思はれない。

博士の所謂政治の實質に關しては、今日大體に於て彼我の間に異論は無い。唯、政治を實質的に合理的ならしむる所以の形式的組織如何といふ問題が爭點の目標なのである。此點から觀て、今日の日本の制度は適當なりや否やといふ所から、官僚主

義と民本主義との對立が生ずる。牧野博士の謂ふやうな意味の官僚主義は、吾々の謂ふ民本主義の政治に於ても矢張り其存在を認めらるゝものである。(吉野博士)

上杉博士に

上杉博士の主權論の根本は、少くとも前號の本誌に發表せられたる論文の示す所に據れば、牧野博士の前掲の主權本質論と著しく其論法を異にするものではないやうに見える。上杉博士は例に依つて國家の最高の道德たる所以を國家に於て實現するとか、人民をして其本性を遂げしめ人類の理想に到達せしむるとか、頗る法律的でない曖昧な言葉を使つて居らるゝから、頗る其眞意を捕捉するに困しむが、然し博士の思想を牧野博士の直截簡明な用語に移せば、恐らく「主權は形式上絕對無制限の權力である。而して之は最高の道德を負擔して之を國家に實現する、換言すれば合理的規範に從つて作用するを其本質的任務とするに因り、實質的にも亦絕對無制限の力となる」といふ事になるのであらう。

此處までは可い、是から先になると牧野博士と上杉博士との考は餘程違つて來る。

牧野博士は、主權は自ら形式的に絕對無制限の力であるに相違ないが、更に之を實質的にも然あらしめるには努力を要する。この努力に依つて其間に矛盾なからしむるが必要である。そこで主權の作用は一定の規範によらねばならぬといふ事になる。然るに上杉博士の立場は、一定の規範により拘束するの必要あるは、主權者が其運用を謬ると決つて居る國に於て言ふべく、然らさる國に於ては其必要が無い。外國の主權者は初めから運用を過まるに決つて居る。日本は然らず、過去に於て然らざりしのみならず、未來永劫に亘つて然らさるべき本質的の基礎がある、從つて日本では政權運用の政治論を爲すの必要がないといふに在る。「博士は現に我日本人は此人(君主)に絕對的に憑依し奉る事によつて、人の人たる所以の本性を遂げ、道德を行ひ、其理想に到達する事を得」(本誌前號上杉博士論文九二頁)と言つて居る。

日本と外國との比較に關する歷史的說明は姑く別問題として、主權者は本來主權の運用を謬る能はさるものとして、夫の法王無謬論の如き絕對的信仰を捧ぐるといふ事は、是れ我　陛下の御精神であらうか。吾々は寧ろ歷代の列聖が何故に主權の運用に成功し給ひしかの理由を、正確なる史實に據つて科學的に探求し、其本源に由つて將來も亦同樣であるべき所以の途を明かにして、之を　陛下の御參考に奉るのが、寧ろ忠良なる臣子の職分であるまいかと考へる。國事を擧げて　陛下御一人に御委せ申し、吾々が指を啣へて茫然として居つて可いといふ事は、國君の德と力とを讃美する詩としては深い意味があらうが、實際の政治論としては是程危險なる思想は無いと思ふ。

たる事も功時がて居な。而して絶對的天皇親政論の[illegible]なる思想である事、並に斯の如き事實の殆ど絶對に存在し得べからざる事は、予輩曾て同博士との論爭に於て之を說いた事がある（大正五年四月本誌所載拙論）。而して天皇の絶對的親政といふことは、もとく到底存在し得べきものでないのだから、博士も實は凡ての場合に於て此間違つた議論で一貫して居るのではない。從つて博士の憲法論乃至政治論には、博士の趣味感情に基く極度の專制的官僚主義の謳歌と、誤つた根抵から生ずる所の論理的結論との間に、幾多の矛盾衝突を見るのが從來の例であつた。例へば博士は博士獨特の主權論の當然の論理的結論として天皇親政論を唱へ、從つて元老閥族を罵倒し、又貴族の特權を排斥すべしなどと云つて居る。世間では前月の本誌で博士が華族廢止論を唱へたのに一驚を喫して居るけれども、然し之は今日に始まつたのではない。予輩の寧ろ博士の爲めに驚き且つ惜しむのは、貴族廢止論で終始一貫して呉れない事である。何となれば博士は其著「帝國憲法述義」に於て、貴族院の必要を說き（最新版四九四頁）、又貴族其物を謳歌して「平民に比較すれば國の公益と自分の私益とが一致する點が多い」（同上四九二頁）と言つて居るからである。之を博士が先月の本誌に於て「かの貴族なるものは最も國家の公と自己の私とを混同

反感曲解から醒めて、冷靜に政治社會を觀察する事に[illegible]根本的に改むるを要し、第二に其論理的結論の何時でも飛んでもない所に行詰る事に反省して、其根本思想の誤謬を覺るところ無ければならない。斯くして其思想を整理されたならば、吾人も初めて博士の說に承服する事が出來るであらう。

博士が國體の精華として博士獨特の主權論と並べて君民合一說を揭げたのは、之れ亦吾人の一驚を喫した所である。博士曰く「宏遠なる肇國、深高なる樹德の精神たる最高の道德を行ふに人民の力を合し、人民と天皇と合一して之を實現しつゝある事が我國體の精華として最も尊ぶ可き所である。」（本誌前號上杉博士の論文九二―九三頁）と。天皇と合一するといふのが何ういふ意味であるかは例に依つて用語曖昧なるが故に能くは解らない。けれども「民族の結合は……天皇に統一せらるるも、形式的に絶對無制限の權力に服從するのではない」（九三頁）と言つて居る所をみれば、天皇の實質的意思決定に對し、人民の積極的參加を認むるもののやうにも見える。果して然らば之れ吾人の多年唱道する民本主義の根據と何の異る所かあるか。少くとも上杉博士の此點に關する思想には、[illegible]た問

博士の主權論の據つて以て立つ所の絶對的服從論と全然相容るるものではない。此點に關して博士は尚一層明白に其思想上の去就を明かにするの義務がある。

尤も予輩の考へを卒直に言はしむれば、博士が君民合一を唱へ出したのは、博士の國家論の變革を意味するものと認むべきであらう。予は博士の今度の論文に於て、博士が著しく政界の實情に眼を開いて來た事を認むる。博士が華族を罵倒し、資本家を罵り、又租税制度の不均一、徴兵制度の不公平を說いて一般世人を驚かして居るのは即ち蔽ひ難き其證據である。唯博士は是等の新しい根據に立つて、果して從來執り來つた國家論との間に矛盾衝突を感ぜざるを得るか。予輩は博士の此新しき立場を以て、段々吾人の立場に接近して來たものと認むるが故に、博士より十分納得すべき說明を聽くまでは、已むを得ず博士の變說改論を信ぜざるを得ないのである。

而して右の點に關連し、更に特に博士の慎重なる省慮を煩したいのは、之れ亦世間を驚かした其の普通選擧論である。博士は多年選擧は適任者を擧ぐるの方法として國法の定めたるものであつて、人民の代表者を出すといふ趣意のものではないから、普通選擧が可いの制限選擧が可いのといふ議論は日本に何の拘はりも無いと說いて來たのである。而して予の記憶にして謬らずんば、適任者選擇の方法としても博士は從來曾て普通選擧を唱へられたことは無い。然るに前號本誌の論文に於て、博士は突如、「何故に斷々乎として普通選擧を採用せざる乎。選擧權の制限は其時代其國の事情に由つて之を定むるのであるけれども、特別なる事情が無いならば固より普通選擧でなければならぬ。我選擧法は普通選擧を目標として進む可き事余輩の年來唱ふる如くである」(一〇二頁)と說かれた。之れは博士年來の主張と如何にして調和すべきものであらうか。此點更に精密の說明の公にされんことを望んでやまない。猶ほ博士は年來普通選擧を主張し來れりと云はるゝも、博士が大々的訂正を加へたといふ序文まで添へて去年十月二十八日を以て公にされた「帝國憲法述義」の最新版には、明白に「普通選擧の結果は、國會の信用を高めたかといふに、事實は全く反對であつて、普通選擧行はれまするど共に國會の價値は益々減じたのであります。それといふのは普通選擧の制度を行ひますれば、國民の多數を占むる者は無財産なる又從て多くは無教育なる第四級の民であつて、此のものが自ら勢力を占むるに至らなければならぬ。機械的に頭數によつて多數が勢力を有すべきものとすれば、自ら國中の堅實なる思想は壓迫せられて、動揺常なく、浮薄なる群集の思想が勝を占むる事になる」(五一〇頁)と斷定し、其他隨所に普通選擧否認の聲を揭げて居ることを指摘して置きたい。一體普通選擧の實行が、無教育なる群集の浮薄なる思想をして堅實なる思想を壓迫せしむるに了るものとする考は、政治組織の實際的運用を無視せる妄論である。又普通選擧施行の結果、國會の信用を低め國會の價値を減じたといふは、最近歐米諸國の政治史上に全く事實上の根據なき妄斷に過ぎない。此謬想と妄斷とに基いて最近一二ケ月前まで普通選擧を極端に呪咀した人が、一轉して普通選擧論の多年の主張々たるの權利を要請するとは、洵に不思議の現象である。(吉野博士)

高貴御料の光榮を拜す

人蔘界の一大權威劑

朝鮮 **純人蔘精腦**

定價 十日分壹圓 六十日分五圓廿錢 三十日分參圓 九十日分七圓

本劑の特色

●本劑ハ朝鮮總督府專賣課收納ノ純粹ナル朝鮮産人蔘中ヨリ主精分ヲ煎出シ之ヲ收縮製劑シ絕對ニ他分ヲ混合セズ

●本劑ハ病後衰弱、生來虛弱、腦力疲勞、産前産後、冷性ノ人其ノ他一般精力缺乏ノ人服用シテ忽チ元氣旺盛トナリ疾病ニ對スル抵抗力絕大トナル

●**人蔘寶母散** 試用分 貳拾錢 五日分 壹圓 十日分 壹圓九拾錢 徳用一月分五圓

●**風呂用朝鮮人蔘** 一回分 二十五錢 十回分 貳圓

●**ミツカシワ人蔘水飴** 大貳圓、中壹圓 小五十錢

製劑元 京城府 朝鮮製藥合資會社 振替京城參八壹〇番

關東直轄 東京牛込區白銀町 東京支社 振替東京貳四五貳五番 電話番町五四壹壹番

日印會話捷徑

大谷光瑞師序　廣瀨了乘著

東京神田 東京堂發賣 (振替東京二七〇)

印度と我國との過去の文明の交涉を想ひ、又將來に於ける政治的並に經濟的關係を考ふる時は、印度語を習得するの必要は敢て多言を須ゐるの要なし。本書の著者は多年彼地にあつて佛典を研究するの傍、我國一般人士の爲めに此簡潔にして要を得たる印度語學習の好指針を與へたり。苟も印度に志あるの士、速かに一本を購うて、其雄志の實行を急げ!

定價金卅錢 郵稅四錢

蘇峰 徳富猪一郎新著

（第八版）

内容一斑贈呈

近世日本國民史 織田氏時代 前篇

上製 菊版クロース 天金七百餘頁 定價參圓五拾錢 郵税十二錢

並製 四六版 七百頁 定價壹圓六拾錢 郵税八錢

「大日本史」以外、「日本外史」以外、著者獨特の新文體、新史體、新見解を以て、晩年畢生の事業として、此の「近世日本國民史」の述作に從へり。我が國民思想は、之が爲め更らに、新血液、新生命を注入し來つて、國家は一層の光明に輝かん。

■今や世界的大變轉の機に際し、我が國民思想の基礎、動もすれば輒ち動搖せんとす。著者此に慨する所あり、史的事實に據して、大日本國民思想の中樞點を求め、國民として國民に對し報效する所以の道を、此中より發見せんとを勗む。乃ち一言すれば、國民的教科書として、家毎に備へ、人毎に誦し、以て我が金甌無缺の國體を、萬古に護持し、我が大和民族をして、世界優秀の民族として、世界の文明と、人道の開發とに貢獻する所あらしめんとを期す。古人の所謂る筆墨之外有「主張」もの、之に庶幾し。「大方君子、希くは著者一片の丹誠を諒とし、一切の缺點短處を容恕して、愛讀を賜へ」とは、著者自らの告白也。是れ本社が江湖に推薦する所以也。

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座壹參壹〇〇 民友社

征服被征服

岩野泡鳴

一

『どうせ僕は妻子に絶望した者でありますし、またその絶望の結果が不慣れな事業をやつて失敗したものでありますから、決して贅澤は申しません。向ふの婦人さへ承知すれば、直ぐ夫婦も同様になつていいし、またほんのただ同棲して僕の話し相手だけになつて貰つてもいいのです。ましてそれが向ふの人をその苦しい境遇から救ひ上げるわけになりますなら』と喜んで、耕次は自分の紹介者なる婦人とその母親との許しを得て、近藤澄子を初めて訪問したのであつた。

耕次としては、最後の思ひ出にと思つて試みた事業の失敗の爲めに、自分のあたまもからだも殆んどからッぽになつてゐた。獨りで當てもなく北海道に放浪してゐて、つい、こないだ、東京へ歸つて來たのだ。が、北海道では、あの無秩序ながらに活氣のある大きな世界に觸れてゐながら、無一文の爲めに爲すこともなくぶらついてるやる瀬なさを、薄野遊廓の或賤しい女の爲めに僅かにまぎらすことができてゐた。東京から來て、わざ〳〵そんなことをする物好きと、事情を知らぬ人々にはあざけられたが、自分としては意地にも東京に歸りたくもなくなつてゐたし、さりとて北海道に落ち付くだけのたつぎも發見されなかつた。もう、このまま野たれ死にをしてもかまはないと云ふ氣

征服被征服

岩野泡鳴

一

『どうせ僕は妻子に絶望した者でありますし、またその絶望の結果が不慣れな事業をやつて失敗したものでありますから、決して贅澤は申しません。向ふの婦人さへ承知すれば、直ぐ夫婦も同樣になつていいし、またほんのただ同棲して僕の話し相手だけになつて貰つてもいいのです。ましてそれが向ふの人をその苦しい境遇から救ひ上げるわけになりますなら』と喜んで、耕次は自分の紹介者なる婦人とその母親との許しを得て、近藤澄子を初めて訪問したのであつた。

耕次としては、最後の思ひ出にと思つて試みた事業の失敗の爲めに、自分のあたまもからだも殆んどからツぽになつてゐた。獨りで當てもなく北海道に放浪してゐて、つい、こないだ、東京へ歸つて來たのだ。が、北海道では、あの無秩序ながらに活氣のある大きな世界に觸れてゐながら、無一文の爲めに爲すこともなくぶらついてるやる瀬なさを、薄野遊廓の或賤しい女の爲めに僅かにまぎらすことができてゐた。東京から來て、わざ〳〵そんなことをする物好きと、事情を知らぬ人々にはあざけられたが、自分としては意地にも東京に歸りたくもなくなつてゐたし、さりとて北海道に落ち付くだけのたつぎも發見されなかつた。もう、このまま野たれ死にをしてもかまはないと云ふ氣

になつてゐた。云はば、絶望と燒けッ鉢とが自分のいのちであつた。そしてこの狀態が自分のしげ〳〵通ふ女から與へられる多少の誠實によつて慰められてゐたのである。もう、直きに年が明けると云ふかの女を——年が明けたら、直ぐ——自分の事業さきなる樺太へつれて行つて、共に生き死にのあらかじめ保證できぬ越年をして見ようとまで思つてゐた。

けれども、萬事がぐれて來た爲め、それさへもできなくなつて、早く來る春と分り切つた無一文とに追はれて、東京へ歸つたのがやツとのことであつた。からだの神經衰弱のうへにも亦自分の精神までが衰弱の極に在つた。自分はさきに東京でかち得てゐた立ち場を全く無くなつたものと信じて、自分の生活をまた初めからやり直さなければならぬ身であると思つた。從つて、何よりもさきに欲しい異性の話し相手にはその美醜と貴賤とを問ふまでの資格を持つてゐないものと諦めてゐた。

別に訴へるところもないので、自分の舊友なる房子と云ふ婦人を音なふと、そこで幸ひにも澄子なるものがあるのを聽き込んだ。

『今の婦人としてはなか〳〵の活動家で——婦人の政治結社加入禁止の解除運動を、つい、ことしの春まで、五六年間つづけてましたが、今は社會から遠ざかつて、引ッ込んでゐます。思ふ男の爲めに一旦自殺までしたほどですから、正直な人なことは分つてましよう』とのことであつた。

『…………』思ひ出すと、渠は樺太に於いて自分のかた手間に通信を引き受けてた一東京新聞の三面記事に、何とか云ふ社會主義婦人が男の無情を恨んで鎌倉海岸の海に身を投げたが、漁師に救はれたと云ふことが出た。それから、また引き續いてその本人なる婦人がその新聞に投書して、その事件の辯解のやうなものを發表した。決してわたしは社會主義ではない、然しその男のことは今でも思つてる、と。大膽若しくは正直な女もあるものだとその時寧ろ感心したが、澄子が乃ちそれであつた。渠は自分の精神が疲れ切つてゐながらも、先づそれに對する好奇心からして自分の元氣をふり起したのであつた。『僕の力で救へるものなら、色をんなにするなり、獨立した婦人文學者に仕立てるなりして、

お互ひの爲めになつて見ましよう』とも友人に誓つた。

そして十二月の一日に、友人紹介の名義を以て、初めて、渠は獨りで澄子を訪問した。かの女の住まひは赤坂檜町の幽靈坂を下だつて行つたところの裏長屋で、――そこに達した時はわれ知らずこちらの顏が赤くなつてゐた――三軒並んだそのどん詰まりであつた。二間しかないその奥の六疊に据ゑた長火鉢に向ひ合つて、かの女はこちらをあしらつた。

『そりやア、ね、いてふ返しにでも結はせて縮緬の衣物を素はだに着せて御覽なさい、そりやア美人ですから』と紹介者なる房子さんが云つたのを、案外の儲け物だと思つてたが、それはこちらの豫期に反してゐた。なすび紺の色に雨のかすりが這入つたお召し――と云つても、綿らしい――の書生羽織りを着て、手を火鉢のふちにかけて下向きがちな――然し、どちらかと云へば雄大な――顏は、自殺までしかけた程精神を使つた者としては割り合ひに肥えてゐて、さう美人らしくもなかつた。そして見ツともないやうに幅ツたい。その上、時々、

『ほ、ほ』と、わざとらしく、笑ひながら、こちらの顏を下からのぞく眼にはしろ眼が勝つてゐる。それが少しこちらの感じに添はなかつた。『あなたのお作は初めてこないだ△△と云ふのを拜見致しましたが、――奥さんやお子さんのおありになる方がどうしてあんな氣ぶんになつてゐられるか、それを聽いて見たいとただそれだけ思ひまして、一度お目にかかりたいと房子さんに申しましたことがございますが、それはその時のほんの出來心で申したのでした。』

『そりア出來ごころたら出來ごころでもかまひませんが、ね――あなたがあれを餘りに形式的な道德眼で見てしまつたのぢやアありませんか？』そちらだツて、妻のある男を戀してゐたのではないか？ 然し、斯う答へた、――

『さうでもないでしよう――』

『……………』渠はかの女をまだ人の手まへを取りつくろふ俗見のある婦人と見てしまつた。『人間が眞實に生きようとする場合、時には普通の道德心をぶち破らなけりやアならないことがありますよ。それは何も無道德になると云ふわけぢやアない。ただの習慣道德を眞實の生活につり合ふやうに改造するのです。』

『そりやアわたしにも不贊成はございませんがね――』

『無論、あなたにも、少くとも最後の御經驗が說明してゐましよう』と云つて、渠はかの女とその思ひ物との關係を諷じた。渠の知つてたところでは、かの女が思ひ合つてた男にも妻子があつたのだ。中野と云つて或通信社の政治掛りだが、それがさきに或新聞社の編輯長をしてゐた。そしてかの女もその新聞にゐた。その時代から殆ど五年間、渠とかの女とは懇仲であつた。が、その人並み外れたまじはりは最後に破綻を來たしたのであつた。

かの女の投身記事が新聞に出ると、房子さんは中野を一度呼び寄せて、

『あなたは、まア、ひどいことにさせました、ね』と、取りすがらんばかりにして泣いたが、中野は不斷の親切や溫厚な人物にも似合はず、

『わたしの知つたことではなかつたのです』といつたさうだ。渠に限らず、誰れがまた世に死ぬのを承知してやるものがあらうぞ？　かかる場合の答へとしては實に冷淡であつた。こちらが見ても、それには、だから、渠の申しわけなさのまご付きも加はつてゐただらう。けれども、また、渠の本心が矢ッ張りそこにあつたと云へようか？　なほ續いて斯う白狀したさうだ、『近藤さんが餘り度々わたしの本妻に直せと強迫するものですから、わたしは止むを得ず申しました、別にそれほどの罪もないのに妻を離婚することはできませんと。』

『……………』耕次は會はぬうちから澄子に肩を持つやうになつてたので、中野なる者のその場になつての冷淡、と云ふよりも初めからの意久地なしを心からあざけつた。妻と離婚　てもいいと云ふ覺悟もなしに、なぜ他の女を戀してゐたのだ？　いや、妻の外にまた女を持つことその事は必らずしも惡いことではないが、かかる特別な行爲に對する處置としてなぜ妻にも公然と納得させ、女にもその分にとどまることをしッかり敎へなかつたのだ？　世間の手まへばかり想つてたあり振れた男としては、きッと、そこにその兩方に對して多少の不正直な胡麻化しがあつたに違ひない。だから、また、女の方にして見たところが、そんなあり振れた弱い男に五年間もいい氣になつてゐたのが馬鹿だ。その結果が――あとで何と云つて辯解して新聞紙上に公表したところで――全くうま〳〵と裏切られたことになつてるのは、當り前である。同情して云へば氣の毒だが、惡く見れば應報てきめんだ。だから、――

『お澄さんもお澄さんで、なんて未練がましくも不見識だらう、一旦自分を棄てた男のところへ死にそこなつてまた訪ねて行くなんて！』と、房子さんは義憤を漏らしてゐるのだ。

『…………』耕次には、然し、それほど熱心といへば熱心、馬鹿と云へば馬鹿な女に、接近して見るのも樂しみになつてゐた。『あなたがこれツ切り社會を引ツ込んでしまうのは餘り意久地がないでしたう。どうです、一つ、生活ぶりを一新して文學者にでもなつて見る氣は出ませんか』と忠告した。

『一つ考へて見ましようか、ね、わたしはこれまで新聞や政治の方にばかりあたまを突ツ込んでをりましたので、軟文學の方には關係が疎かつたのですが――』

『さう軟文學、軟文學と云つたツて、俗物どもには夢にも分らない重大な使命が文學にはあるものですよ。』新聞屋からまた小學教員になつてたが、事件以來遠慮してただ自分のうちで英語を――それも恐らく初歩の英語を――人に教へ初めてゐたと云ふばかりの婦人を、渠は異性と異性たる以外のことでさう尊敬を拂ふ氣にはなれなかつた。

が、自分はこの場合、不美人でも無學者でも構はない、一人の異性の必要を感じてゐたものだから、この點から、若し澄子が自分の思ふやうになればこれほどもツけの幸ひはないと私かに考へた。けれども、まだ自分の來意をうち明けるまでには至らなかつた。ただ、自分のやつて來たこと。妻と事實上は既に三年間絶緣してゐるが、妻の同意がない爲めに戸籍の上の離婚だけは成立してゐないこと。その間にめかけ同樣の女もあつたが、その女も北海道までやつて來たのをしほに手を切つたこと。藝者買ひや女郎買ひもしたことがあるが、これから生活をやり直して、しツかり立つて行かうと云ふこと。などを、正直にうち明けて別れた。

二

『さう何もかもいつてしまうかたも少いです、ね』と、かの女は氣取りをませて笑ひながら云つたツけ――それに對して、

『ぢやア、あなたのはさうでなかつたのですか』と、渠は突ッ込んだ。
『ええ――極卑怯で小心な人でしたから。』
『……………』渠にはかの女の答へが房子さんの見てゐたところに一致してゐると思はれたのである。割り合ひにかの女も正直であるやうに受け取れた。こちらが自分の持ち前なる強みを以つて押して行きさへすれば――さうだ！この自分らの問答に得た印象を一番賴母しく思ひ浮べつつ、もう、自分は思ふ壺へ這入つたかのやうに喜びながらも、二三日を無理に自分で遠慮してゐた。
『いづれ文學者になる決心がつきましたら、こちらから御返事をさし上げますから』と云ふのであつたが、五日の日には待ち切れなくなつて、再び訪問に出かけた。午後の三時頃で、格子戸のところに、きたない身成りの老人がゐて、丁度、そのかついで來たのらしい納豆や酒のかすの荷を天秤棒と共に狹いおもて土間へしまひ込んでるところであつた。
『……………』はて、な、違つた家か知らんと思つたとたん、渠はその奥から出て來た澄子を見た。貧乏の爲めに假りにもこんな男の世話になつてるのか知らんと、ちよツといやな氣がした。かの女とその男とに對して私かに顔を赤めながら『おさしつかへはありませんか？』
『ええ、ちツとも。どうか――』かの女は然し別に違つた顔も見せてゐなかつた。
『……………』渠は悪いものがゐたとなほ躊躇してゐると、
『さア、どうかおかまひなく』と、老人がからだをよけて呉れた。
『ぢやア、御免をかふむります。』『思ひ切つて、渠はつか〳〵とあがり込んだ。そして例の火鉢をさし挾んでさし向ひになつたが、先日とは丸で違つて、堅くるしくなつてゐた。
『……………』かの女もこちらの樣子を察したらしく、『あれは父でございます。不斷はよそに住んでをりますが、時時來て呉れるんでございます。物好きに納豆なんか賣つてまして、ね。』
『さうですか？』渠はさう聽いて少し安心したが、この日自分が持つて來た言葉を云ひ出す氣にはなれなかつた。『例の

決心がつきましたか』などと、暫らく文學の話をしてから、『いづれまた明日あがります。少し僕からの要件を申し上げたいのですが――』と云つて、いとまを告げた。

その翌日、渠はかの女に今一度自分の家庭の事情を説明した。それによると、自分は事業の爲めに抵當に入れた持ち家を抵當から出すことはできないが、それでもそれを妻子に與へて置けば、こちらが仕送りをしないでも渠等の日常生活はらくにできて行く筈になつてゐた。妻子は自分を敵の如く惡く思つてゐるが、自分も亦渠等を見てゐたくなかつた。うち明けて云へば、歸京後、もう一週間もうちに寢起きしたが、一度だツて妻に接觸はしてゐない。自分は別に家を持つ必要がある。そして家を持てば、書生の時代とは違つて、自炊もできないから、ひとりは世話をして吳れる婦人がゐる。それには、房子さんのところでのお話では、澄子が丁度都合いいのであつた。自分はかの女を女中代りなどと輕い物には見ないが、その代り、時を見て夫婦同樣になつて貰ふかも知れぬ。いや、それを承知して貰ふまではうるさく全力を擧げて口說くかも知れぬ。が、紳士の體面を守るから、誓つて暴力は用ゐない。そしてそれ位の敎養はさきに自分が耶蘇敎を信じてゐた時代に、多くの婦人と交際してついてゐるから、かの女も安心してゐていいとつけ加へた。

『ですから、どうです、一つ――僕はざツくばらんに申しますが――あなたが僕を色をとこにするか、僕があなたを色をんなにするか、どツちとも氣が向けばかまはないつもりで、先づ一緒に住んで見て吳れませんか？』つまり第一は、同棲、第二に、夫婦の實際――。

『さうです、ね――』かの女は微笑しながらもまじめになつた。『餘り突然のことで――』と、突き出たひさし髮の下からしろ目がちので以つてこちらを見上げて、而も年増らしい落ち付きを以つて、『ですが、その――北海道へまでもあなたを追ひかけた人はどうなすつたのです？』

『…………』渠はそこにかの女に少くとも同棲するだけの氣がないでもないのだらうと分つた。『それは、もう、御心配にやア及びません。すツかり手を切つたのですから。』

『でも――』

『いや、實を云ふと、僕に一日後れてまた出京したのですが、僕を別な男に乘り換へた證據の電報があやまつて僕のところへ達したので、それを封じて送つてやりました。それで全く關係が絕えたのですから。』

『實は、わたしの方にも問題がないでもありませんのですが、ね』と云つて、かの女が語つたところによると、或紳士で、而も金のある若い紳士で、結婚をして吳れるなら、自動車をも備へて、大抵の物質慾は滿足させてやると申し込んだのがある。そしてかの女もあらかた承知して置いたのだが、一つ面白くないことには、結婚の時期を今半ケ年ばかり待つて吳れろと云ふのだ。それも純粹な止むを得ない理由ならいいが、さうではなく、かの女が今のところまだその事件と不評判とを世間におぼえられてゐるから、必らず男の親戚どもから反對が出るにきまつてるからと云ふのだから、その世間體を遠慮する氣が、かの女から見れば、男の心として大して賴母しくもなかつた。且、その結婚で滿足を得られるのは物質慾ばかりで――それも失戀の反動作用として思ひ切り贅澤をして見るのだとすれば面白くないこともないが――失つた戀の痛みを別に恢復できるわけのものでもなかつた。その上、そのやらせると云ふ贅澤がどこまで行けるのか、本人に金があると云ふことが分つてるだけでは見當も付かなかつた。で、『その方は思ひ切つても少しもかまひませんが、わたしの方にも條件があります。』

『何です？』笑ひながら、『何でも聽きますよ。』

『第一に、決して暴力に訴へないと云ふことです、ね。』

『そりやア、無論です。』

『それから、中野とはこれまで通りの交際をつゞけますから。』

『それも承知です。』渠はかの女が既に自分の來たことを中野に報告しに行つたことを聽かせられてゐた。

『とう／＼あなたへまで近づいて來ました、ね――危險ですよ』と忠告したさうだが、

『そんなことは、もう、あなたの干渉する權利内にあることではありません』と、かの女は答へたさうだ。關根さんだッて、さう世間の人が惡く云ふやうな人物ではございません、わ』とも。

これによつて見ても、かの女は隨分未練もあらうが、意地もあつて面白さうな女であつた。晝めしを馳走しに渠はかの女をその近處にあつて自分もよく行つた西洋料理の龍土軒へつれて行つた。そして、杯を少し父からをそはつて知つてると云ふので、かの女に井目を置かせて二回試み、二回ともかの女の負けであつた。それから、また暫らく玉突きをやつて見せた。

かの女の僅かな生活費の大半は矢ツ張り中野から出てゐるのであつた。そして二三日前にも澁谷の奥あたりに家を一緒に見つけに行つてちよツと靜かさうなのができ上りかけてゐたので、それを約束して置いたのださうだ。耕次は然しそんな面白くもないゆかりあるところへ這入りたくはなかつた。どこか全く方角の違ふところへ行きたかつた。

「兎に角、家を借りる準備に預けて置きますから」と云つて、渠はかの女に拾五圓を手渡しした。北海道にゐる時から書き初めて、歸京後急いで完成させた長論文の原稿料のうちからであつた。渠はこの原稿がきのふ賣れたことや久し振りで玉突きをやつたことにやや元氣と都會的氣ぶんとを恢復した上にも、斯う容易に最近に會つた婦人と同棲することができるのを自分ながら勇ましく思つた。

歸宅してからも心が緊張してゐたので、直ぐペンを取つてかの女に手紙を書いた。「同棲のこと御承諾下すつてこれほど嬉しいことはありません。そのついでに第二の條件もお考へ直しの上承知して戴きたいのです。けれども、それがどうしてもできないとあらば、第一條件だけでも兩方を拒絶されるよりは結構なのでございます。僕は飽くまで一個の紳士としてあなたに向ひ、これから自分の新生活を築き上げます。人は僕のことを珍らしいほど傲慢な男だと云ひます。が、その實、ただ思つたことを無遠慮に云つてのけるだけのことでしよう。その證據には、今回、歸京しても、さきに十年間つゞけて奮闘した自分の文學的努力に對して、少しの未練がましい要求も持つてゐなかつたのです。全く初步からの出直しをやらねばなるまいと思つて、これにも餘り望みなく歸つて來たのです。ところが、友人と云ふものはありがたいもので、僕をもとの通りに認めて吳れました。これに元氣を得たと同時に、またあなたと云ふ新らしい獲物が加はりました。これから共同の新生活をやり初めましょう。あなたもしツかりおやりなさい。僕は十分あなたの話し相

手になりましようから、あなたも亦僕の手賴りになつて下さい。』

翌朝、この手紙が屆いたあとへ渠はまた訪問して行つた。

『實は、きのふお預りしたおかねを手紙に入れてお返し致さうかとも思つてましたのですが、――』

『そんなことを今更ら』と、渠は何げなく笑つてしまつた。

『お手紙を拜見しまして、また思ひ直したところでした。』

『無論ですとも!』

暫らく雜談をしてから、家を探しに一緒にそとへ出た。そして先づ飯田町なる紹介者の家へ行くつもりで、電車を九段したで下りる時、渠はかの女よりさきに飛び下りると、あやまつて自分の下駄の歯を折つてしまつた。すると、かの女はあとから下りて來て、

『見ツともないぢやアございませんか、どこか近處で買ひ換へなけりやア』と云つた。そして丁度角から二軒目にあつた下駄屋へ這入つて、かの女のがま口から出して新らしいのを一足買つて呉れた。

『…………』渠はかの女の年が年だけに、もう女房氣取りになつてるわいと思はれた。二十六と申し上げたのは思ひ違ひで、本年二十七歳、明ければ二十八になりますと云ひ直したツけ。一つでも若く云つて置きたかつたのだらうが、同棲するとならば、やがてどうせ分るものだからと思ひ返したのらしい。渠には、さきの色をんなが二十二歳であつたから、今度のもせめて嘘にもモツと若くあつて欲しかつたと云ふやうな慾心が、もう、あたまの隅に出てゐた。

紹介者の家に行くと、房子さんの母親が『それはいいことでありました、ね』と云つて喜んだ。『近藤さんもこれからはまじめになつて、關根先生と御一緒にしツかりおやりなさいませ。中野さんなんか、あれは見かけによらない不まじめな人でしたから、ね。』

『…………』澄子の顏にむツとした樣子が現はれたのを耕次も見た。

『不まじめと云ふのでもないでしょうが』と、房子は取り爲しながら、『矢ツ張り、近藤さんが思つてるほど正直な人で

貰ひたくないとかの女が云つたとかで、房子さんはかの女のところへ二度と忠告しに行かなくころへ來なくなつたことは、渠も房子から聽いて承知してゐた。この行きがかりからであらう、——三人の間に男女貞操問題の議論が盛んに出て、關根さんのやうに妻があつても全く關係を絕して別に女を持つのならまだしもいいけれど、中野のやうに妻と住みながら他にも女に關係しようと云ふのは不都合であり、またその女の方もよくないと云ふ結論に房子さんが達した時、耕次もそれに贊成すると、澄子は興ざめた顔で、かた手をふところに入れたまま、いやなら、よすがいい、さ』と云つた。そして御馳走になつてそこを出てからも、なほ不興な樣子をつづけた。

『あれは誰れに云つたのです』と、渠は不審だからかの女に尋ねて見た。『房子さんにですか、僕にですか？』

『もちろん、あなたにです！』

『ぢやア、あなたの思ひ違ひですよ』と、苦笑しながら、僅かに云ひぬけをした。『僕はあなたの特別な事情をまで含めて云つたのぢやアないのです。ただ一般論で云つたのですか。』けれども、渠はかの女に多少でんばふ肌の口調や態度があつたことを見のがしはしなかつた。そしてこれが毒婦の本性を持つてゐて呉れれば一層に面白いがと思つた。どうせ自然に自分の女が變はるなら、いろんなのに接して見たかつた。

三

『兎に角、けふは、もう、家さがしはやめにしましようよ』と、かの女は云つた。寒いうへに、時間が後れてゐた。一緒に電車に乘つて、渠はかの女の家にまでついて行つたのである。『ぢやア、大久保あたりを探して、あす中には家をきめてしまひましよう、ね。』渠は急いできめないと、かの女の心がまたどう變はるか分らないので、夜に入つても、そのそばを離れたくなかつた。

『明日のことは明日にして、お酒でも飲みましょうよ。』かの女の畑をしたのはおととひかの女の父と一緒に飲んだと云ふその殘りであつた。父は餘り飲めないが、もとから好きであつたのでその相手をさせられたのが地になつて、かの女は社會に出ても隨分多くの酒飲みにつき合つて來たと云ふ。おととひも、『酒あり、肴あり、お出でを持つ』と云ふハガキを出したので、今でも小學教員の恩給を貰つてる父がやつて來たのだが、『まるで赤壁の賦を讀むやうであつたよ』と云つたとか。そしてこの頃では、獨りで考へ込むうるささに、かの女はコップでひや酒をやつてると云ふことが自慢らしかつた。

『つまり、燒け酒でしょう、ね』と、耕次は微笑して最初猪口を受けた。自分が飲み手でないことは分つてるのだが、かの女の相手なら少しは自分もして見たかつた。

『わたしは原稿を書きます時でも、そばにコップを置いとかなけりァ書けない習慣ですの。』

『…………』渠はその點にはかの女に呆れさるを得なかつたが、自分が相手をしてゐるによつてかの女が近頃の寂しみを多少でも慰められてるやうすが見えないでもなかつた。

『燒けにもなりましょう、さ』ともかの女は云つた。

『…………』渠はそれがまた自分に嬉しいやうな、可哀さうなやうな氣もして、雜談をつづけた。『どうです、斯うしていらッしやつたら、いろんな男が張りに來ましようが』と尋ねて見たに答へて、かの女が微笑しながら、然し多少自慢さうに語つたところでは、曾ては地方選出の代議士でなにがしと云ふ有名な色魔的ぢイささんが、夜おそく酒氣を帶びてやつて來た。請願運動の爲めに一度面會に行つたことはあるが、今となつては、而もそんなありさまで會ふ必要がないから、達てと云ふのを無理に玄關から追ひ返した。その頃はかの女が白襟、白すそ、白そで口の美人傍聽者と云はれて、帝國議會に關係あるものらの間におほ評判であつたさうだ。最近の狀態になつてからも、一度、もと同僚であつた教員がやつて來た。その時はかの女が試みに丸髷を結つてゐたところ、その男が變な顏をして、

『結婚なすつたのですか？』

『なに、ほんの、これは狼よけですの。』少し皮肉にさう答へた。

『ぢやア、安心ですが、僕も實はその狼に――然し、おとなしい狼にですが、――なつて來ましたが』と云つて、同じやうな問題を持ち出した。これには、かの女は今でも心に思つてる人は變らないからと返事した。尤も、それには今更ら小學教員風情と結婚する氣もなかつたのだ。

『……………』耕次にはさう云ふ話が私かに自分の好都合に受け取れた。向ふも相當に見識を持つてるのだから、こちらも自分の見識を信じて進めばいいと思へた。

中野との間にまだ事件が突發しなかつたうちは、渠が毎晩のやうに十二時過ぎまで來てゐたさうで、――かの女の見せた追回文によると、渠のことを『半夜の友』と呼んである。無論、然し、とまつて行つたこともあるに違ひない。それに、かの女は男に接近することを平氣になつてゐるらしい。その原因はかの女のまだ〲若い時の初戀が破れたことである。かの女の一番好きであつたいとこが醫學校を卒業して目黑に開業したので、父の許しによつて無人の手傳ひに行つた。やがては結婚式を兩方の親どもが擧げて吳れることにきまつてたのだが、それをも待たないでいとこはまだひよかつた女を暴力に訴へた。で、直ぐその翌朝逃げて歸つてから、かの女の胸に一般男性に對する憎しみと復讐心との芽ばへが生じたのである。

その後、かの女の父の開らいてゐた小學校に預かつて養ひ育ててゐた或小華族の若子なる春夫さんと云ふ、ずツと年したなのを多少不自然な戀ごこちを以つて可愛がつた。一緒に寢せてやつてもゐたのだが、父が學校を賣り拂つて築り屋になり、直ぐ失敗してまたかの女と共に郡部の教員になつてからも、かの女は時々春夫をその家長の家敷へ尋ねて行つて、同じ室にとまつたが、或時春夫の父がそれを餘り好ましいやうな、如何にも氣違ひじみた目つきをして見に來たので、それツ切り行かなくなつた。それから、かの女が最初の教員生活をやめて再び東京市に出で、鐵道局の事務員になつた時も、父のうは役なる郡視學からの達ての願ひで――かの女の言葉では、表面だけは――その視學の甥なる人と夫婦同樣に一つ貸し間に住んだ。けれども、實際は男が餘りに弱くて意久地がなく、かの女を姉さん、姉さんと呼ん

で、かの女の出勤や歸宅を送り迎へするのが却つてありがたくもなく馬鹿々々しくなつて、逃げ出してしまつた。そして男が血で書いた手紙(これをもかの女は耕次に出して見せた)を以つて今一度歸つて來て呉れろと云つて來たが、相手に・なかつた。

かの女はまた或學生雜誌の編輯にたづさはり、その年若い金主兼社長の家に夜おそくまでゐることがあつた。そして歸りには新宿まで送つて貰つて、山の手線から電車を信濃町で下りると、そこにはまた中野が來て待つてるのであつた。が、或夜、餘りおそくなつたので、とまることにして、『いたづらさへしなければ』と斷わつて社長と一つ室に眠つた。ところが、その翌朝、社長なる青年の夢中になつてる醫者が尋ねて來て、ひよんな顔をしたので、遠慮なくお這入んなさい、わたしは別に何でもないのですからと云つてやつたさうだ。

かの女はこちらが正直な態度になつてるのに報いる爲めであらうが、そんなことをもすツかりしやべつてしまつた。一つには、また、そこにかの女が男子どもに對して意張つて來たと云ふ自慢若しくは興味があるらしかつた。最近にはまた若い會社員があつて、夜、英語を習ひに來てゐたが、毎度おかねか使ひ物かを持つて來るのがをかしいと思つてたら、三晩目にはいろ〳〵身の上ばなしを初めて、なか〳〵歸らうともしなかつた。で、とめてやつたら、遠慮がちにだが、だから貰え切れないで、結婚を申し込んだ。それを斷わつたら、その明くる日からばツたり來なくなつたさうだ。

耕次も、だから、とまる氣で火鉢のそばを離れなかつた。すると『まだお話がございますなら、横になつてから伺ひましようよ』と云つた。そして無論別々になつてゐてだが、中野のことばかりは思ひ切れないと云つた風にその話をつゞけた。云はば、のろけばなしだ。然し、こちらにはそれがかの女の男その物を親しむよりも、かの女の戀その物を懷かしんでるやうに取れた。つまり、かの女の戀は既に實際の世界を離れて、全く空想界のあこがれに變じてゐるらしかつた。

『羅曼主義者よ』と、渠は心のうちでかの女を卑しんで呼んだ。そしてその空虛な箇所を滿たしてやるのは自分だと、同時にまた自…の今の空虛にはかの女を入り込ませてやらうと考へた。

『男をいつも引きつけて置くには、女はいつもただ微笑してをれば足る。然[illegible]の微笑[illegible]勞もいとはざるべし』とか、『女は少くとも一度は下だらぬ男の口說きを受けるものなり』とか云ふ文句などが集まつてゐる。かの女はその一句を讀み終はる每に得意さうな顏をこちらに向けて、こちらが何と云ふかをうかがつた。

『面白い』とか、『眞理です、ね』とか、渠は口のうへでは答へた。そしてかの女が起き上つた時にちよツと見せた脛の白かつたことを思ひながら、かの女の朗讀の口調がしツかりして、而も齒切れのいいのがここ地よかつた。尤も、かの女は歌の文句通り芝に生まれて神田に育つたと云ふ。けれども、その先代は地方出であるに對して、こちらはまた生まれたのはかみがたに於いてだが、最近の先祖數代の墓は深川に在り、父も祖父も八丁堀の生まれで、自分の育つたのは芝でだと云ふことを負けずに告げて置いた。こんなことはこちらには實際どうでもよかつたのだが、かの女の氣取りの一つがそこにあつたので、こちらも負けてはゐなかつた。

暫らく二人とも無言であつた。

渠には、自分が靑くさい部屋で賤しい女のやつて來るのを待ち詫びたこともある。そんな時の經驗から云へば、女がそばにゐさへすれば、溜いぬ刺戟を受ける筈であらうが、——種類の違つた女にはまた種類の違つた感じを保つてゐるだけの餘裕があるのを、幸ひにも自分年來の敎養のおかげだと思はれた。自分の神經がますます冴えて行つて眠られないのは、必らずしも一方の暗い刺戟ばかりではなかつた。また、かかる婦人の心のうちがいろいろに考へられて、小憎らしくもあり、また頼母しくもあつた爲めだ。こんな紹介があつたのなら、何も、降り積む[illegible]雪に追ひ迫られるまで北海道などにぐづぐづしてゐるには及ばなかつた。馬鹿な！自分は何であんなにあちらでまご付いてたのだらう？女郎に釣られたり、追ツかけて來たやまひ付き女を病院に入れたりしてゐたのは、——その時にはいろいろの理由もあつたが、——皆、今となつては、自分の絕望から出た無方針の結果であつた。これからは一つまた新しい氣ぶんを以つてこの婦

人にも自分の努力を見せてやらうなどゝ思ひつづけると、自分は思はずしんみりした感激の涙をまでこぼしかけてゐるのをおぼえた。

そしてこのまだ見せはしない涙を以つて自分の本心はかの女を迎へてやるのだと思ふと これが自分その物の正直なところそツくりであるだけに、これを直ぐにもかの女の胸に傳へたかつた。自分は全人的に緊張してゐるやうな、そしてまたデカダン的にだらけ切つてるやうな氣持ちになつて、心ではそれとなく自分にもある寂しみを訴へつつ、右を向いて、かの女の厚化粧をした丸い横がほに自分の目をそそいだ。不眠性にかかつてると云ふかの女も、無論、まだ眠つてゐないやうすであつた。

けれども、こちらはいつのまにか眠れた。翌朝、目をさますと、かの女は既に寢どころをしてゐた。渠は手を延ばして枕もとの時計を引き寄せて見ると、九時を過ぎてる。

『……………』直ぐ起きようとしたが、

『もう少し寢ていらツしやいよ、今に起してあげますから』と、かの女がわだかまりのないやうな聲をかけた。そして來てゐる魚屋にさしみを二人前つくることを命じてゐた。

『……………』渠はかの女が少しも人に憚つてゐないのにちよツと驚きもしたし、また安心もした。そして手を引ツ込めて、再び寢どこのあツたかみに親しんだが、その手がゆふべどう云ふ感じを自分に傳へたかと云ふことを考へて見ながら、私かに寢まき姿のかの女がしてゐることを枕のうへから見てゐた。

その日、二人で府下なる西大久保の方へ出かけたが、電車に乘つてる間にも、耕次は自分のゆふべだらりと延ばした右の手にまだあツたかい夢を見てゐた。

向ふも不眠性の苦しまぎれにだらうが、

『お眠りになれなければ、手を貸しましようか』と云つた。こちらは寧ろ先づ耻かしみを感じた。自分の前にとまつた男もさうして貰つて、自分通り多少の滿足を得たのだらうと思へたからである。切迫してゐた自分の呼吸はその時却つ

て少し落ち付いた。そして、さうだ！ わけもなく無事にぐツすり眠りに落ちることができた。

それから、西大久保へ渠等がわざ〳〵目當てをつけたのは、渠の友人も三四名ゐるし、またかの女は去年まで學生雜誌の編輯に行つて、そのあたりの工合ひを可なり知つてると云ふしするからであつた。その雜誌社は去年でつぶれたのだから、かの女のとまつたこともあると云ふその家が――恰好な家で――ひよツとすると明いてるかも知れぬと云ふ望みであつたのだが、それは明いてゐなかつた。そしてその近處で、戸山の原に近いところで閑靜らしい、そして又ふたりの住むに丁度いいのを見付けた。玄關の間が三疊、客間が八疊、奥が六疊、茶の間が四疊半で、勝手の方には下便所もついてゐた。

『何よりもいいことにア、門がまへで、玄關には式臺が附いてます、ね』と、かの女は嬉しがつた。そして二ヶ月分の敷金も渠がかの女に渡してあつた金で直ぐ間に合つた。

『よくそツくり持つてました、ね。』渠には、かの女の經歷をちよツと聽いたところでは、人の物など何とも思はぬ婦人のやうでもあつた。

『まさか――わたしだツて――』

『實は、つかはれても仕方がないと思つてましたが――』

『わたしだツて』と、またほがらかな聲で笑ひながら、『責任は重んじますわ。』

『…………』渠はそのことに於いて先づかの女を妻同樣に信じてもいいと思つた。

同じ大久保に住む木山と云ふ友人の家に立ち寄り、渠はあす移轉して來ることを報告し、またかの女をも自分のこれからの同棲者として紹介した。その歸りは夜になつたので、かの女を赤坂へ送つて行つて、暫らくまた話をした。

『紀念ですから、庭の乙女つばきと鉢うゑのけやきとは持つて行きますよ。』二つとも多少物ごころが付いてからの豨夫さんが時を異にして持つて來たものださうだ。

『あなたにはいろんな紀念があるから。』斯うぞんざいな言葉が使へるだけ、渠は少しらくな氣ぶんになつてゐた。直接

の返事として、『然しそれも結構です。』
　お互ひに友人のところで飲ませられた酒の醉ひがまだ殘つてゐた。
　渠は家を探して歩いてる時、或雜誌の發行者に出逢つたのを幸ひ、原稿を約束してかねを借りた。その時向ふがにやり／＼と笑つてた樣子を思ひ出しながら、今夜も亦とまりたかつたのだが、もう、たツた一晩のことをあつかましいと思はれたくはなかつた。

四

　九日は先づ澄子の方を引ツ越しさせる手筈にしてあつた。が、餘り早く行つて、男が臺どころの物までかたづける手傳ひをするのは、近處の人に見られても、餘り見ツともいい圖ではなからうと思つた。渠は朝から落ち付きを失つてる心を押さへながら、丁度正午を過ぎてから出かけた。
『大層御ゆツくりでした、ね』と、かの女は不平さうであつた。
『なに、さう早く來たツて仕かたがないと思ひましたから――』
『でも、まア、――もう、車さへ來ればいいんですの。』
『ぢやア、直ぐ呼んで來ます。』
　渠はゆふべの歸りに頼んで置いた荷車屋へ行つて歸つて見ると、お向ふとお隣りとの細君だと云ふのが揃つて來て、まとまつた荷物の間でお茶と餅菓子との馳走になつてゐた。渠にはこの一方の細君だ、な、壁に耳をつけて澄子の話を聽き取つて、近處へ得意さうに布れまわつたと云ふのは、と分つた。成るほど人の惡さうな顏つきをしてゐる。
　それに、今度の男はまたどんな人物だらうと見たがつて集つて來たのでもあらうから、渠は耻かしいやうな氣もした。が、かの女はこちらを皆におほぴらに紹介した。
『都合によると、――さうして結婚するかも知れませんの。』いろんなことを既に話してゐたらしい。こちらに向つて、

『あなた、あのをとめ椿を頼みますよ。』

『さうでした、ね』と受けて、渠は心の足もとを皆に見られないやうにして裏庭へ下りた。二間に一間ばかりの陰氣な庭にただ一つ、枝も少なにひよろ長く延びてる、例の記念だと云ふ木は、わけもなく拔き取れた。それを成るべく多くの土をつけたままで坐敷から玄關の外へ運んだ。それから、また、いや〳〵ながら皆のそばへ坐わると、

『ついでに横手からまわつて下すつたらよかつたですのに。』かの女は疊の上に落ちてゐる土を氣にしてゐるやうすであつた。

『ほ、ほ、ほ！』お客さんどもはわざとらしく笑ひ聲を擧げた。

『…………』渠は苦笑しながら、『どうせ引ッ越すんですよ。』

『でも』と云つた切りで、かの女も亦客と顏を見合はせて笑つた。それはこちらを年うへの女が年したの男を扱ふやうであつた。

『まあ、お菓子がたべたい』などと、かの女の告白によると、夜中にかの女が突然大きな聲を出すのも、隣りに聽き取られた。けれども、中野はめんどうくささうな顏をしながらも、そんな時にはてく〳〵出て行つて正直に買つて來たさうだ。

『…………』耕次には、然し、そんなことは私かに眞ッ平御免の覺悟であつた。

かさ張るものは簞笥一さをと蒲團ふた組と長火鉢とであつたから、外に机や小行李や手桶けを積んでも、荷車一臺で足りた。渠はかの女が來てたとも知らずに一つの古びしやくを取り上げたら、けち臭いと冗談らしく叱られた。そこへおほ屋のおかみさんらしいのがやつて來て家賃を催促したが、

『それは中野さんが承知してをりますから』と、かの女は答へた。ゆふべは行かなかつたので、けさ早く報告に行つて來たことは、かの女の話でこちらにも分つてゐた。が、そこに金錢上の念をも押して來たものらしい。ただそれだけのことに關してでも、かの女をこちらが右から左りへおいそれと承け繼ぐかたちになつたのは、餘りいい氣がしなかつ

た。

『…………』渠は自分ながら卑怯と思へるほど冷靜になつてゐたが、かの女は假りの荷作りの荷積みにも多少の昂奮をしてゐたと見え、かの女の寵愛物がにやア〳〵と泣いてそばへやつて來た時、

『おや！猫を忘れてゐましたよ』と云つた。

『…………』渠としては忘れてはゐなかつたが、そんな物は嫌ひなので成るべくうツちやつて置いて貰ひたかつた。さりとて、これも一つの紀念物で、緣日で拾つて來てから二年間も飼つてあるとかの女が云つてたのだから、萬ざらそれだけを切り離して虐待もできなかつた。『ぢやア、僕にいい考へがあります』と云つて、かの女にそれを捕らへしめて、最も古い風呂敷に包んだ。そしてその前後の兩あしを縛つてから、積めた荷の一番うへになる炭箱の中に入れた。

『ぎやア〳〵』と、猫はびツくりした爲めか、一生懸命にもがき初めた。

『可哀さうに！』かの女は然し半ば微笑してゐた。が、餘りに死に物ぐるひに聲を擧げてもがくのを見て、かの女の顏も見る〳〵眞ツさをになつた。

『…………』渠も自分で笑つてゐられないほどそれの物ぐるひに同情したが、再び手を近づけるとすれば、きツと嚙み付かれる恐れがあつた。そしてもがき狂つてるそのさまを人間のそれにまで想像して、ぞツとしながら見つめてゐた。

そのうちに、どれかのくくりどころがほどけたと見え、猫は荷のうへからお向ふの板塀に飛び移り、そこを渡つて行つてこちらの長屋横手の塀から家根の方へ逃げた。きたない風呂敷をそのからだに附けたままだ。

『仕やうがないでしよう。うツちやつて置いて行きましよう』と、かの女は云つた。『どうせあなたにはお嫌ひのつれツ子ですから。』

『ぢやア、さうしましよう。』渠は逃げた物のことよりも、寧ろかの女が獨り者にも拘らず割り合ひに世故にたけてゐて、近處や知り合ひの夫婦喧嘩を仲裁したり、人の細君の爲めに離婚請求の六ケしいかけ合ひを引き受けたりしたと云

ふことを考へた。

　渠等が轉居さきへ行つた時は、日が暮れかかつてゐたので、差配に立ち寄つて提燈と薪木とを借りた。そして電氣が今夜間に合はないとのことで、戸の突ツかひ棒を持つて來てその横へまた別に蠟燭の火を立てて、それと提燈とのあかりで晩めし代りに蕎麥を喰べた。

『いよ／＼これからあなたのお三どんですか、ね？』

『なアに』と、渠は簡單にうち消した、『條件さへ滿足になれば――』

『ですが、それはまだ分りません、わ、――わたしは男に對して少くとも二度の復讐心こそあれ、戀などは、もう、したくないのですもの。』

『…………』渠はかの女がいとこと中野とのことを云つたのだらうと思つて、『それは分つてますが、ね、やがて第二若しくは第三の戀を僕が産ませて見ますよ。』

『それまではきツと約束を守つて下さるでしよう、ね？』この疑問にはまだかの女の顔に疑惑の色を見せた。

『無論です。僕がそんなことに教養のない人間と見えますか？』

『だから』と、かの女は一段安心したやうに、『紳士として尊敬します、わ。』

『よろしい？　僕もあなたを一つの人格者として取り扱ひます。』渠はかの女の嫌惡や古きずが如何にあつても、それは問はない決心であつた。自分も一新した生活を初める代りには、かの女にもさうさせたかつた。

　荷車が着した時は七時を過ぎてゐた。うす暗いあかりを辿つて、荷を運び込んだ。玄關のから紙の奧なる六疊をかの女の部屋ときめて、渠は客間の八疊を占領することにした。兎に角、友人としてまだ同棲するだけのことだから、お互ひの寢どこは別室に取ると云ふのであつた。かの女の室へは玄關の襖を通つて這入るほかには、茶の間からの開らきを明けるのだが、かの女はそのひらきに内がわからの假り錠をつけることにした。

　氣候が氣候で、根を凍らせる恐れがあるので、をとめ椿をもついでに植ゑてしまう爲め、渠はかの女に提燈を以つて

場所を選定せしめた。そして門内と前栽とを仕切る建仁寺垣のうらがわにきまつた。今一つかへでの木を持つて來たのを玄關さきへ植ゑた。

その翌日は耕次自身の荷物が移轉するのであつた。こちらの懷中が乏しいのを察してゐる爲めか、かの女は『これでもお役に立つなら』と云つて、小形の銀時計をこちらに渡した。が、渠には持ち時計が北海道で無くなつたままになつてるので、一つは必要の爲め、かの女から預かつても質入れはしなかつた。そして自分にたツた一つ殘つて來た北海道製のせびろ服を曲げた。そして荷車二臺の書籍と、夜着と、鐵の手あぶりと、碁盤とを持つて來た。その整理に日が暮れてしまつたが、二人で相談して、自分等の名をあつた板に二つ並べて書いた表札を門の右手にうち付けた。

『…………』渠はそれを人に自慢してもいい關係の表示として餘ほど得意に思つた。

『人が見たら、珍らしがりましようよ』と、かの女も嬉しがつた。

落ち付いて、茶の間の火鉢に向ひ合つてから、渠は自分の舊作詩集を出して、そのうちから四五篇戀の歌を『實は、朗吟などしたことはないのですが』と前置きして、かの女に聽かせた。そして今かの女に對して有する同じ心持ちをそれとなく自分の調子にまで發表した。自分では詩や實生活に現はれた感傷心を卑しめながらも、少からずその感傷的になつてるのをおぼえた。

『あの猫はどうしてるでしよう、ね？』かの女は然しますます沈んで行つた。

『猫ぢやアないでしよう――』少し拍子ぬけがして、渠にはあはい嫉妬が燃えた。『中野のことだ。』

『そりやア』と、かの女はやや引き立つてこちらを微笑しながら見つめ、『わたしにやア戀がいのちですから。でも、中野との關係は、もう、過去のことですから御安心下さい。』

『そこがあなたのまだ羅曼主義者たるところですよ。』

『然し戀は靈で、靈は神聖です』とまた云ひ出したので、渠も意地になつてかの女に反對して、神聖も不神聖もない。靈も肉もない。かかる區別はどツちへかた向いても部分的物質的な考へで、人間の眞相や本心はかかる物質的區別を撥う

去した合致のうへに在ることを說いた。

　然しかの女には矢ツ張りそれが理解できなかつた。肉は物質で、靈はその反對だと云ふあり振れた先入見がある爲めだらうと思はれた。

五

　かの女の父へハガキを出して置いたので、十一日の晝過ぎには早速やつて來た。それが納豆賣り、酒のかす賣りであることは耕次にも別に氣にならなかつた。且、娘のことは一切娘自身の自由にまかせてあると云ふのだから、今回のことはただこれを報告しさへすればいいのであつた。

　が、父がかつぎ荷を裏手の方へまわして、それを臺どころ口へ迎へに出た娘に向つて『けふは、もう、商買はこれでやめだ。こツちの方は初めてたが、かすはよく賣れたよ』と語つてゐるのを聽くと、耕次は八疊の机がはりになつてる一閑張りに向ひながら、少なからず一種の威嚇をおぼえた。そして今までこちらで何げない話をしてゐた澄子が俄かにその態度を改めて、父と共にこちらがしよひ切れぬほどの要求を持ち出したりしてはと云ふ空想と恐怖とが浮んだ。

『…………』が、改めて初對面の挨拶をした時には、まだ澄子の家を初めて音づれた時のやうなうぶな赤面を感じながらも、大分に渠の心は落ち付いてゐた。坐敷の鐵火鉢を三人で取り圍んだのだが、かの女もまじめになつて、渠に。

『事情はあなたからお話しして下すつた方がいいと思ひますから――』

『さうです、ね――わたくしから申し上げますが、つまり』と云つて、渠は自分のかたちを正した。『先刻やつて來た萬朝報の記者にもよく話して置いたので、いづれ明日の新聞には出るでしようが、』渠は簡單にだが明けツ放しに自分等の僅か四五日の間に同棲するに至つた事情や要件をかの女も一致できるやうに說明した。『ですから、僕はまだ戶籍上では別に妻を持てませんが、澄子さんさへ承知なら、いつからでも妻同樣の待遇をしたいのです。』

『尤もです。』父の六十を越えてもなほするどさうな目には、この時うるほひも出てゐるのが見えた。

『…………』耕次は心で父の同情を感謝した。

『わたしは』と、かの女も耕次の言葉を引き取つて、『まだそこまでの決心には行つてゐないのですが、兎に角、さう云ふわけですからお父さんは御安心なすつてて下さい。』

『もう、僕は――いつもお前の自由にまかせてゐるのだから。』

『ぢやア、もうお分りになつたとして』と云つて、耕次は話しを父の商賣のことや、父やかの女が教員をしてゐた時のことに移した。かの女らの赴任地であつたと云ふ方面に、これも矢張り教員で教員の妻になつた昔の友人がゐる筈なのを思ひ出して、その人の名を擧げると、それはまた意外にもこの父が媒介の勞を取つた夫婦であつた。こちらは今一つ意外なことを知つてゐた。自分らの仲間の一人ふたりにいたづらなものがあつて、電車や道ばたで知りもしない女によく物を云ひかけた。そしてそのうちにはそれが爲めに友人になつたり、甚だしいのは、即坐に怪しい待ち合ひへしけ込んだりしたのがある。自分も一度それをやつて見ようとして、最初の試みに最後の失敗をした。もう、古いことだが、芝の品川電車通りで、けば〳〵しい服装で、ちよツと見つきの違つた若い女が通つてゐた。それに話しかけて、

『どうです、蕎麥でも一緒にたべませんか』と云つた。

『それどころですか、今から急いで帝國議會に行くんですよ。』女の昂奮してゐたのは、こちらに對する侮蔑の爲めよりも、議會と云ふ大きな場所でかの女の請願事件がその日の問題にのぼる故であつた。その女がいかなる奇縁か澄子だと云ふことは、おととひ、かの女が思ひ出ばなしにかの女から語り出したので分つた。そして今は巣から一つの笑ひばなしとして父に告げられた。

『だから、世間は廣いやうでも狹いものだ、ね。』父はこちらの私かに緊張してゐる心持ちに比べては一般平凡な意見しか持つてゐないやうだが、そのはなし振りにちよツと物の分つた老人にありがちな超脱味、世の中を茶化してゐる趣きは、昔の士族や老教員の物好きとして――娘には勿論、總領息子夫婦にも手頼らないで、――こんな商賣をしてゐるに

ふさはしく思はれた。

『…………』父を失つてる耕次は澄子の爲めに第二の父を得たやうな懷かしみをおぼえた。

『碁盤があるやうだが、やつて見ようか、ね？』

『願ひましよう。』

『關根さんも強いやうですよ』と云つて、澄子は盤の置いてある方に立つた。やさしく見せる爲めか、かの女は人並みより長く裾を引いてるので、兩手に持ち上げて盤を運んで來るその歩みの間にふとつてゐさうなくるぶしのうへが見えた。

『…………』渠は前にこれをかの女と一度戰つて見たが、全く同樣條件に對する程の手ごたへがなかつたことを思ひ浮べながら、父とは對で打つて、直ぐ負けてしまつた。それからまた何度努めても勝ち味が少く、とう／＼二目の差があることになつてしまつた。そしてこの敵は老人だけに手が鈍いやうでも、なか／＼馬鹿にできぬ野心家であることが發見された。そして殘念さうに考へてた上で、

『えい、やつちまへ』と劫を思ひ切るところなど、まだ／＼老いぼれてるとは思へなかつた。

今夜から茶の間と客間とに電燈がついたので、日が暮れても碁をつづけてゐるうちに、かの女の働きで酒が出た。さしみと、その他にちよツとした物とが出た。そして三人が一緒に耕次の机兼用の一閑張りを圍んだ。

澄子はこちらと二人の時には隨分あまへるやうなおしやべりをするにも拘らず、父の居るところでは言葉すくなであるのが寧ろ思つたよりもこちらには奥ゆかしく取れた。

『僕と澄子さんとはどツか似たところがあるやうです。だから、合はない點もまた明らかであり過ぎるのだと思ひます。』

『これは』と、父は娘をさして、『二つの時に母親に死に別れてから、云つて見りやア、まア、男のあひだに育つたものだから、どうしても女としちやア荒ツぽ過ぎます。』

『そんなことも不斷はございませんよ。』かの女は笑ひながら『中野、にかたなを拔いて出したのは、お向ふの野田の細君が見てゐて知つてる通り、わたしも死ぬ氣でしたのです。』

『それがよくない。』父はまじめ腐つてその手なる猪口を口の方へ持つて行つた。

『…………』耕次も微笑してかの女と目を見合はしたが、そんなことまであつたものとしては必らずからだの關係にも達してゐたに相違ないと察せられた。

『尤も、そのかたなは、もう』と、こちらに向つて、『コツちへ取り返しましたが、ね。』

『あれがありますと、』今度はかの女がその口へ猪口を運びながら、『こんな寂しい場所では泥棒の用心にもなつていいのですが――』

『その代り、僕がきた斬られちやア――』

『ほ、ほ、ほ！』かの女は半ば飮みさした酒をこぼしかけたが、こちらを氣を兼ねたやうに見ながら猪口を置き、絹のハンケチを出して口をふいた。

『…………』渠はかの女を取りつくろつてやるつもりであつた。矢張り笑ひながら、父に向つて、『今ぢやア、然し、いのちの懸けなは僕の方ですから――』

『まア、何でも人は無事圓滿にくらして行くに越したことはない。昔、神田に學校を持つてゐた頃は、僕もこれでも二三名の俠客を獨りで引き受けて追ひまくつたこともあるが――さうして、これがまた子供のくせに大膽で、それを隣りの部屋で寢ころんで見てゐたが――』

『…………』耕次はそのことをも既にかの女から聽かせられてゐた。俠客の前には合ひ口があつたが、父がどうせ負けはしないとかの女は見てゐると、果して手に持つてたきせるをいきなりさか手に振り上げて、俠客の眉間に突き刺した。けれども、初めから向ふの出に弱みがあつたので、それッ切り何も云つて來なかつたと云ふのだ。

『もう、年を取ると、』父の言葉はつゞいた、『然し、何でも人は皆無事にあれかしと願ふやうになるものだ。』

『…………』耕次はここに戀の必要がない人間と自分のやうにまだ〳〵それの必要ある人間とを比べて見た。そしてその間に大きな間隙があるのを、また自分と澄子との間隙の如くにも考へられて、自分の心は人生の思はぬ悲哀に觸れてゐた。そしてまたかの女に對する自分の遠慮がちな心持ちは既に戀になつてることを自覺した。僅かの酒にだが、斯うそそられた自分はわツとでも、喝とでも叫んで、この痛切に振ふ自分の心を皆の前に現させて見たかつた。が、父も案外弱いのだと見え、大して飮まなかつた。そしてとう〳〵醉つてしまつた。

『喰ふ方にかけちやアまだ〳〵誰れにも負けないつもりだが』と云つて、父はまだずツと立派に揃つてるうへ下の前齒をむき出して見せた。が、『鞭聲肅々』や『孤鞍雨』などを得意さうに吟じたのは、奧齒の方からでも息が多少漏れてるやうなかすれ聲であつた。

『父から貰つたのですから』と云つて、かの女は酒のかすを入れた味噌しるを出して來た。

『寒い時アこれに限るよ。』

『…………』耕次もその汁のにほひにあツたかみをおぼえながら、皆と共に飯をたべた。

うら横手の貸し家はまだ人が這入つてゐず、前庭の向ふには支那人らしいのがゐる。こちらの門まで這入つて來るまでに、支那人のと細い道を隔てて並んでる家があるが、その間をまた曲がつて支那人の臺どころ口を通りこちらの勝手へまわつて來るまたのほそ道は、もう、人の廣い大根ばたけの生け垣に添つてゐる。犬の遠吠えが寒さうに聽えるばかりで、戸が締まつてゐれば、あたりはしんかんとして、家の中にのみあツたかい味噌しるに得た勢ひが保たれてるばかりだ。

『…………』耕次は父をどこへ寢かすのだらうと考へてゐた。すると、かの女は明いた物をすべてかた付けてから、父が坐敷に坐わりながらうと〳〵してゐるのに聲をかけた。

『ぢやア、お父さん！』

『おう』と、しよぼ〳〵する目を明けた。

『お休みなさいますか？』
『それぢやア、失敬させて貰ふか、ね？』
『……………』かの女は客間へ父の床を取つた。そしてこちらに向つては斯う云つた。『あなたは六疊の方へいらツしやい。』
『……………』渠は結構だとも、かまはないかとも云へなかつた。まだ關係のない時から父を變に思はせるにも及ぶまへと考へられたが――ここだけは矢ツ張りランプを用ゐる必要があつた室に於いて、
『あすの朝の新聞が見ものですよ』と、かの女は機嫌がよかつた。
『……………』渠も醉つてるが、醉ひとは別な心の壓迫を感じながら、――顏だけを向き合はして、どちらからも微笑してゐると、かの女が先づ低い聲で話をし初めた。
『あなたがさツき憚かりへ行つてらしつた時、父は中野のことを馬鹿なやつだ、なア、と申しました。』
『……………』こちらには都合のいい言葉だと思つたが、さうは見せないで、『どうして？』
『分つてるぢやアございませんか、しツかり踏みこたへてゐさへすりやア、こツちは少しやア不利益な位置でも無事につづいたものをと？』
『……………』渠には然しそんな女と見えなくなつてた。『あなたが女房にしろと迫つたさうぢやアありませんか？』
『そりやア、何度も申しました、さ。でも、向ふがいつも強く出て呉れて、一度も逃げ腰になりさへしなかつたら、わかしだツても事を起しはしませんでした、わ。』
『あア、それでけふの話のかたなですか？鎌倉の前ですか、あとですか？』
『前ですが、ね――あれがあれば鎌倉までも出かける必要はなかつたかも知れませんでしよう。』
『さうとも限らない』と、渠はちよツと別な方へ目を轉じたが、またかの女に向き直つて、父の話を思ひ浮べながら、わざと無理に老人くさく理窟を捏ねた、『かなたと云ふ物は自分を殺すこともある代りに、また自分を自分で活かす爲め

にもなります。』
『それこそどうして？』
『分つてるぢやアございませんか？』渠も亦かの女の言葉を繰り返したので、かの女は
『ほ、ほ』と少し高い聲を出した。實はさう高くもなかつたのだが、それがあたり近處へも聽えたやうに渠には思へてひやりとした。
あの檜町の家に於いてであつたさうだが、お向ふの野田夫人を立ち合ひにして最後のかけ合ひをして見たところ、中野は妻子から云へば卑怯にも、
『まださう妻子を棄てるなど熱心になるまでの關係はできてゐませんから』と答へた。
『…………』耕次はてツきりさうとは思つてないので、そしてまた自分も現に望んでる通り結果を避ける爲めの不自然な辛抱もあり得るので、これとそれとを僞善的に區別してはならぬ。だから、かの女のこの話を聽いてわが身も中野からかかる區別的侮辱を受けたやうに感じて、かの女の爲めに自分の胸が怒りに燃えた。同時にまた自分はそんな卑怯な云ひぬけをする男ではないぞと云ふ氣が出た。『何でまたそんな男に未練があるのです？』
『でも、わたしは關係があるも同樣ぢやアないかと云つてやりましたの。』
『…………』さうだ！尤もには相違ない代りに、それで女がかたなに訴へかけたり、入水事件を起したりしたのでは、どうしてもその女の處女性を疑はなければならなくならう。これが最前から最も自分の氣にかかつてゐたのだ。嫉妬から出る少し皮肉な微笑になつて、『ぢやア、矢ツ張り押し詰めた關係もあつたのです、ね？』
『…………』かの女は答へなかつた。そしていやな顏をして天井の方を向いた。
『それ位なら』と、渠は自分に煎えまでおぼえて口には云ひにくがりながら、かの女の横がほに向つて、『いツそのこと、――僕の――條件も――聽いて下さい。』この頼みは既に時を得てゐなかつた。
『わたしを信用おしなさい！それが先決問題です。』これが本心からか、それとも不本意ながらの胡麻化しか、棄てツ鉢

に兎に角、かの女はその聲までがけんどんであつた。

「…………」七日の夜に於ける如くまた手だけは許して貰へるのかと喜んだのが無駄になつてしまつた。ぐう〳〵と安らかさうに大きないびき聲が隣室から聽える。左りには、また、かの女の息ぐるしさうに出してる鼻いきだ。が、ゆふべは引ッ越しの當夜でありながら割り合ひによく眠れたと云ふから、かの女は父の來たのを安心して今夜は、まだ早いが、一層よく眠るだらう。けれども渠自身は、女の意志を無理に曲げられてその女がさんざん棄てッ鉢ものになつた例を別にも澤山知つてるから、そんな者をしようことの利害上からだけでも飽くまで暴力は用ゐないつもりである。

六

新聞記者が來たのは、こちらから通知した爲めであつた。どうせあとからいい加減な想像を書き立てられるほどなら、寧ろこちらから進んで實際をうち明けて置く方がましだと云つて、耕次の友人にハガキを出した。それでその社の社會部の一記者がやつて來たのだ。

澄子の考へでは、この發表によつて公けにかの中野に對する意地深い復讐の一端を示めし初めるつもりであつたかも知れぬ。いや、さう云ふ口吻をかの女は記者やこちらに漏らしもした。耕次に取つても、また、私かに友人どもを驚かせてやらうと云ふ程のいたづらッ氣がなかつたでもないが、これ程のことは正式の結婚を披露する場合の花婿にでもありがちな意氣込みであつた。で、渠自身には、今度やり出す同棲生活のよし惡しは人の解釋の仕かたによつて何とでも云はせてかまはないのであつた。が、自分だッても再び妻に歸らない以上、また以後は世間の所謂放蕩をばッたりやめてしまう以上、少くとも一人のきまつた女の必要なことだけを誰れにでも理解させて置きたかつた。

それが爲めに全く他人なる新聞記者に向つてもかの女には勝手にかの女自身の云ひたいことを云はせ、その代り、渠も亦自分の俯仰天地に耻ぢぬ自説と誠意とを述べたのである。けれども、その記事が十二日の朝の新聞に出たのを見る

と、先づ第一にその見出しを見てがツかりしないではゐられなかつた。
『賣り物同士の同棲』はまだしもいいとして、『肉が勝つか靈が勝つか』と云ふ割り註は如何にも不まじめに響いた。本文を讀んで見ると、かの女が
『私の愛は今でも中野に集注されてゐる、關根さんとはただ第一の條件通り同棲してゐるまでのことです。現在では露ほどの戀も愛もありません、云々』と云つてるに對して、自分はまた
『澄子はその後强情にも第二の條件を拒絶して今日に至つてゐる。だが、僕に成算あり、近き將來に於いて必ず僕の主義を遂行して見せる、云々』と云つてる。

これは兩方とも成るほど意味から云へばおぼえのないことはない。が、記者が兩方を獨斷的に區別して前者を靈とし、後者を肉とした爲めに、——たツた一言の書き添へに於いてだけれども、——ただそれが爲めにこちらの考へをそツくりぶち毀わされてしまつた。

かの女に取つては、然し、寧ろその方が高尙らしく見えてよかつただらう。が、その反對に、こちらは下等なものに見えてゐるのだ。人生の哲理的眞相から云つても、はたまた人間生活の實際から見ても、そんな區別の僞はりであり、空しく且おろかしくあることが自分には餘りによく分つてるのである。

『でも、大體は間違つてゐないぢやアありませんか？』さきに讀み終はつたかの女はかた膝を立てて得意さうであつた。

『…………』なんだ、目じりにきたない目くそをつけてゐながら！渠は私かに先づ斯う憤慨した。かの女が新聞と云ふ聲を聽いてはね起きたので、こちらも直ぐ追ツかけて床を出た。二人ともまだ寢卷きのままで朝の寒さにふるえながら、玄關の間に集まつてた。中野のことが書いてあるだけに、ますます渠はかの女の喜んでるのが不本意であつた。

『たツた一句、記者の獨斷がつけ加へられてる爲めに僕が臺なしになつてゐます？』

『どれ、お見せ。』父は、もう衣物を着かへて、また一方の室からふすまを明けて出て來た。そのあひだに、こちらの二

人も急いで衣物を着かへた。

茶の間にはその前から父が既に火鉢の火をおこしてあつた。そこへまた集まつた時、父はこれで以つて昔、神田の俠客を威服させたのか知らんと思はれるほど不恰好で、儼丈なきせるを喰はへながら、そらうそぶいて云つた。

『ふたりが勝手に勝手なことを云つてるのも淡白で正直でいいが――』それから娘の方に向つて、『お前が中野のことをまだ愛してるなんか云ふのは――心では知らず――おもて向きよくない、ね。あんなに猫のやうな、陰險で輕薄な男を。』

『…………』耕次には、父がいいことを云つて呉れた。それに似たことを自分も云ひたかつたのである。男は矢ツ張り男の味かただと思へた。

『弱いだけですよ』と、然し、かの女は和らかに反對した。『別に陰險ぢやアございません。』

『さうとしたところでも、さ、ね。』それから、こちらに話題を轉じて、笑ひながら『きのふから僕も氣が付いてたのだが――君は至極淡白で、男らしくツて面白いが、この新聞にもよく人のあらを書いてある通り、ちよツとうすぎたなく見える、ね。』

『…………』澄子も無邪氣に笑ひを吹き出した。そしてこちらを微笑して見ながら、『直ぐお湯に行つて、おついでにちよツと顏を當つていらツしやいよ。』

『さうです、ね。』渠はわれ知らず頬のひげをかた手でなでて見た。そして癪にさはる新聞を取つて、その記事に再び目をそそいで見ると、その前置きには矢ツ張り左の如くある、――

『奥様の年は二十五六、むらさき矢がすりの書生羽織りをぞろりと引ツ掛け、いやと云ふほどひさしを出した厚化粧のなほハイカラなのに引きかへ、旦那と見えしはふけだらけのうすぎたない男、木綿の羽織りに山の出た小倉帶、十日もかみ剃りの當らぬひげづらをのツそり窓から出してゐるところ、その配合が極はめて不調和だ……』

無論、記者の書き都合のいいように誇張してあるのだが、綿服は渠自身の前身に於ける一つの主義だと云つてもよか

つた。藝者買ひにもそれで通して、却つて信用を受けたこともある。樺太へ行つてから、部下のものらがそれではあんまり渠等までの肩味が狹いからと云ふので、絹物を拵らへさせた。が、それは皆北海道で流れてしまつた。で、止むを得ず昔の名殘りを用ゐてゐる。その上、帶の如きは長い間の、親からの讓り物で、殆ど棄ててあつたのが殘つてたのだから、山の出たのは當り前であつた。

それはさうとして、父の注意も新聞記事に從つてわざと冗談をまじへてのことであることは分つてながら、こちらはわれながらまづい氣がして苦笑を禁ずることができなかつた。

九時頃であつたが、かの女の出して吳れた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、渠は先づかの女と共に近處の錢湯に行つた。そして獨りで歸つて來た時には、自分でもひげの剃れた顏が晴れた冬の空氣にすうツとして氣持ちがよかつた。

『…………』自分でまた頬をなでて見ながら、まだ茶の間に立つてるまま、かの女と父とに向つて、『どうです、ね？』

『大層きれいになりました。』父の返事は豫期したよりもまじめ腐つてた。

『ほ、ほ』と、澄子は笑つたが、機嫌よくしてゐる時の聲は相變らずほがらかであつた。

『…………』

その日も、こちらの占領ときまつてる客間で碁をうち初めた。かの女は初めのほどは見てゐたけれども、やがて六疊の方に引ツ込んだ切り顏を見せなかつた。

こちらはかの女の爲めにかの女の父を歡待してゐるつもりだが、かの女は多分おのれだけが忘れられてると思ひ取つてじれてるらしかつた。どうせ初めから氣六ケしい女だと見てかかつてるのだから、時々かの女の部屋へこちらから出かけて行つて、慰めの言葉を與へるだけの勞は惜しまなかつた。その度毎にかの女はにが笑ひを向けるが、見ると、机に向つてけふの新聞記事を讀み返してゐたり、中野への手紙を書いてゐたりした。そんなことにもかの女の寂しさが堪へ切れなくなつたかして、つひにかの女は默つてだが押し入れのふすまや臺どころの戶棚をがたツぴしさせたり、その

急いで往き來の足の疊ざはりを荒くさせたりした。

『…………』父がから紙のこちらでその音に氣付き出した時は、ただちよツと耳をかた向けて向ふの方によこ目を使ふだけであつたが、あまり度々になつたので、『あんな女でもなかつたのだが』とつぶやいた。そして、そんなことの爲めにだらうが、碁盤の一方の隅に重大な失策ができたその防禦の一子を打つた。けれども、もう、父は手後れの爲めに全體を投げにしてしまつた。

『ぢやア、けふはこれでよしましよう。』耕次は父の興をそぐのも氣の毒でならなかつたが、かの女に對しても氣がねがあつた。黑石を納めながら、六疊の方に向いて、『さア、いらツしやい。もう、やめます。』

『…………』父もこちらのつもりは分つてたらしい。かの女のことを『いい年をしてゐるのだが、まだ丸で赤ン坊のやうで――。』

『…………』かの女は茶の間とのあひだのふすまを明けてのツそり出て來たが、少し目を据ゑて、きまり惡さうであつた。こと更らに聲を和らげて、『もう、おやめですか？』かう云つたとたんに、かの女は疊の上に落ちてる毛か何かを發見して、腰をかがめて拾ひ上げ、椽がはへ棄てに行つた。

『みんなでまた話しましよう。』

『もう』と、父は殊に頓狂に大きな聲で、『年を取ると、血の出るやうな決戰はできない、ね。高が碁盤のうへのことだが、どうもおツかなびツくりが先きに立つて、ね。』

『でも』と、これはかの女に向つて、『お父アんは一目うへだけのことはありますよ、なか〱手ごわくツて。』

『全體の通算はどうですの？』

『僕の負け越しです。』

『そりやア、これでも少しやアこツちに強みはあるが――』

『古くからのことですから、ね。』かの女も心がうち解けて來たやうすだ。『わたしの五つか六つかの時からやつてるの

ですもの。』

『これはまた物おぼえがいい子で』と、父はかの女を——これも機嫌取りのやうに——讃めた。『十二の時にやア、もう、自分とおない年の男の子にまで大學や中庸を敎へたものだ。英語もその後どうやらかうやら獨學で讀めるやうになつたらしいが——。』

『…………』耕次は、父から少しもかの女の兄のことを聞かないのは、五六年前から新宿の女郎を受け出してゐて、かの女とも仲が惡いさうだし、父自身も共に住むことを嫌つてるさうだし、する爲めだらうと思つた。

『わたしのして來た學問なんか何の役にも立ちません、わ。』

『そんなこともない、さ。第一、お前だツて敎員もしたし、新聞記者もやつたし——』

『それが皆、わたしの失敗のもとになつたのですから。』

『…………』耕次から見れば、それもかの女の實際上に一理があつた。

『字を知るは憂ひの初めと云ふこともあるが』と、父はさう云ふ方へ持つて行つて、『そんな厭世觀はこの老人にも禁物(きんもつ)だよ。』

『自分の精神からさう厭世になるんなら、仕かたがないぢやアございませんか？』

『そりやア、ほんの、氣の持ちかた、さ。』

『…………』耕次が傍聽してゐると、父がそんな呑氣なことを云つてるには、まだその娘のさうした心持ちがかの女の女性としての根本的失敗をその根本(こんぽん)から後悔してゐるのであることに氣が付いてないらしかつた。こちらには、かの女の厭世的態度や羅曼的(ろまんてき)な得意がりはそれを身づからまぎらす爲め、もツとひどく云へば、人にも胡麻化す爲めであるに相違なかつた。けれども、父はそれに氣付いてゐないのか？それとも、昔は矢ツ張り遊んだこともあり、また自家の女中を孕ませてその結果が、もう、品川あたりでそこの總領息子として十六七歳ばかりになつてると云ふほどの男だから、氣付いてながらも、再び娘に身投げなどしないやうに戒しめるつもりで、わざと呑氣さうにそらとぼけてゐるの

か？兎に角、またこんなことを云つた、

『僕なんざア、もう、至つて樂天家の方だから、自分で働らける限り自分で世を茶化して働らくのだ。人間はどんなに死にたくないと云つたツて、獨り手に死ぬ時が來るものだ。』

『そりやア、さうですが、お父アん』と、耕次はそこで口を出した、『僕らは働らくにも二通りあると思つてるんです。さうして世の中を茶化してなら、働らくと云つても、まだほんとの物でないと思ひますが――。』

『若いものは皆さう行かなけりやアならんが、ね。然し、僕のやうに年を取つて來ると、盛んに働らいて意張つてるものを見ても馬鹿々々しくなつて、なんだ、べらぼうめと云つてやりたくなる。さうして、同じ價の物でも、意張つてるやつにやア意地にも高く賣つてやる代り、貧乏さうなものにやア成るべく負けてやるんだ。』

『それも面白いでしようが――』

『僕らの合宿所にやア、いろんなものがゐて、ね――僕のやうに恩給を貰つてる老書生がゐるかと思へば、親は立派な軍人だが、社會主義の爲めに納豆賣りになつてる人物もあつて、それにこないだ探偵がついたから、僕が仲に這入つてよく突きとめて見たんだが、ね、一向そんな惡い人物ぢやアないやうすだツたよ。』

『さう云やア、あなたも』と、耕次はかの女を返り見て、また鎌倉事件の新聞記事を思ひ出した、『あなたも社會主義者にされてゐました、ね？』これも自分が念の爲めに聽いて置く必要があると思へたことの一つであつた。自分にはそんな主義は野次馬のおもちやとしか見えなかつた。

『間違ひですよ。ただ さう云ふ人の爲めに二三度議會の傍聽券を貰つてやつたばかりです。』かの女はまたむツつりしてゐたが、直ぐ笑ひに持つて行つて、『わたしやア戀でなければ復讐主義です、わ。』

『おそろしい人ですから、ね。』渠は冗談にまぎらせて、自分の目をかの女から轉じて父の方に移した。そして父の顏に困つたものだと云つてるやうなやうすを見た。この親子の間にもまだ理解し合はぬところが殘つてて、そこをかの女がそれとなく云つてるのぢやアないかともこちらには考へられた。『然し復讐もいいです。』さうだ、中野には、かの女が未練を

まだ殘してる中野には、復讐もいいが、その半ばは既にこの同棲によつて果されてゐるではないか？更らに思ひ切つて自分らが夫婦同樣になれば、こちらの熱心な望みが叶ふばかりでなく、かの女の執念深い敵意も十分滿足になるわけではないか？然しそこまでは父のゐる前でかの女へ突ツ込めなかつた。日は暮れかかつてゐた。三人でもツとよく親しめる爲めに、酒の方がいいと見て、『また一つ飮みましようか、ね？』

『別に何もありませんよ。』かの女がちよツとこちらへ目くばせしたのは、さうかねを使つてる餘裕がないとのことらしかつた。

『いや、もう』と、父は遠慮して、『飮むのはかまはないが、肴なんか無くツても――』

買つて來いと耕次は命じたのだが、かの女は寒いからと云つて行かなかつた。そして茶の間の火鉢のそばであり合はせの物にまた、朝と同樣、父の納豆を添へて出した。

七

十三日も晴れてあつた。

ゆふべ、かの女はまたランプの光で新聞の記事を開らいて見ながら、

『わたしだツて靈ばかりを要求してゐるんぢやアありません、わ。心が承知すりやア、あなたの肉にも一致して行きます』と云つた。

『………』數日間の交渉で多少はこちらの說が分つて來たのか？それとも、前々からその本心はさうであつたのか？いづれにしても、まだこちらに取つてかの女の考へは十分とは見えなかつた。云はば、不熟未熟の考へであつた。すべて人間の働らきには――そして戀愛もその働らきの一つだが――肉を受ける靈もなく、靈に與へる肉もない。その承知する力を有する心とは、乃ち、肉であり、さう云ふ肉はまた眞に生きた靈であるから、これをかの女に對してめんと向つてよりも寧ろ皮肉に、『然し、僕と云ふ物をあなたの肉としてばかりとツつかまへれば、その前に、もう、僕はあ

なたをすり抜けてゐましよう。夫婦の眞相は男と女との一致と云ふよりも、男女相互の肉靈が無區別に燃燒合致するのだから』と答へた。

渠はそんなことを思ひ出しながら、かの女と共に朝おそく起きると、井戸端の霜ばしらがなか〳〵解けさうもなく深かつた。それをざく〳〵踏み碎きながら、かの女の炊事の爲めにまた水を汲んでやつた。

第一便に――これがここへ郵便の屆く初めだが――かの女宛てのハガキが一つ舞ひ込んで來た。かの女はその自室に耕次を呼び込んでから、少し氣取つたやうすで云つた、

『これを御覽に入れます。』

『…………』差し出し人の名は匿名になつてるが、簡單な文句を讀んで見ると、

『意外の新聞記事を見て當方は驚き入り候。約束をお破りになるのは御勝手に候へども、まさか當方の姓名だけは先方へお告げになるまじと信じ候。以上』とある。妻にするつもりであつたか、それともめかけか、それは實際にこちらに分らないが、かの自動車をも用意するからと申し込んだと云ふその本人らしい。そしてこの文句の云ひまわしが少なからず恨みや卑しめを帶びてるにも拘らず、大體の禮儀を守つてるところを見ると、かの女がさきに說明した通り、紳士であるらしい。若し果してそれならば、ゆふべ、中野のことを云はせながら、ふいとわざと反對の方へ押し詰めて、既にかの女をして――どうしても云はないと云つたのを、無理に――その住まひとその姓名とを白狀させてある。○○のお宮の森わきに住んでゐて、▽▽▽と云ふ人だ。その森わきの道をこちらもよく通つたことがあるので心に浮べて見ながら、

『あれでしよう――？』渠の微笑した目にも矢ッ張り卑しめや妬みを帶びた。

『えい』と答へたかの女も亦無理に笑ひを見せてるだけのやうであつた。

『…………』渠には、かの女が成るべく秘密を持たないやうにすると云ふかの女自身からの約束を――胸に斬く痛みを感じつつも――直ぐ實行して呉れたのはありがたかつた。それには自分も亦秘密をないやうにして報いなけれ

ちらと共に精神的な評判を取る方がいいのかも知れぬ。若しさうなら、こちらも亦ただの出しに使は[illegible]そして氣が向かなくなると、また、ぷいと約束を破つて行くだらう。こんな短かいハガキの文句に、渠が妬みを產み出すのもその氣まぐれを思つてだ。

さきに房子さんが話つて吳れて置いたところによるも、かの女らが東洋學生會と云ふのに加入してゐたところから、或支那人に熱心に思はれたのをはね付けたにも拘らず、また同じ會員の一人であつた或朝鮮人と共に御獄の山で一週間も暮した。泓子の自家辯護に從ふと、それは向ふが友人の情としてかの女の失敗を慰めて吳れただけで、——眠る時には、疑はれない爲めわざ〳〵から紙を明けて、部屋を隣室の客と共通にして、かの女の寢どこをその中間に敷かせた。で、反對に、山みちを散步しがら口說かれることがあまり烈しくなつたので、二十日の豫定をずツと早く切りあげて歸つたのだと云ふ。

けれども、また、かの女が二三の通信社、さまざまの雜誌にたづさはつた間に、或實業雜誌の社長なる洋行歸りを餘りにうるさい爲め倚子で投ぐり付けたのは、おほできだから自慢をしてもいいとしてからが、或通信社長に待ち合ひで云ひ寄られ、その斷わりの返事をしに翌晚また同じ待ち合ひへ出かけて行つた。酒なら飮みたかつたのだとでも云ふならいさ知らず、成るべく愼み深くあるべき身としては他にどう云ふ意味をも成さないのである。或は、それも結果を遂さぬ用意があらばとでもかけ合つて見て聽かれなかつたのだらうか?

それに、また、かの女はおのれの思はれた若しくはおのれが思つた男の細君のところへ、——白狀してならまだしも殊勝らしいが、——そらとぼけて遊びに行つた。通信社長の場合にもそれださうだが、中野のにもさうだ、前者はやがて本に這入つたので、そのあとで知らせたら、その細君はそんなことがあつたのですかと笑つただけださうだが、後者のは今でも燒き餠を燒くと云ふ。が、男子たるこちらの今の心持ちにだツても違ひはない通り、燒くのが當り前ではな

いか?

かの女のかかる不謹愼、かかる圖々しさをすべて、渠は自分でその場の一瞬間にごちや〳〵と思ひ浮べたのである。そしてかの女を愛してゐるだけに、そんなことが實際になかつたのを望んだ。けれども、あつた事實は、隱し立てや誤解のできる餘地のあるものとしたところが、事實としては動かせなかつた。そしてその動かせない事實のやうに、自分の立つてるからだがいつのまにか堅くなつてゐた。

『…………』かの女も然しこちらに釣られて立つてゐた。

『むッ』と、渠は自分の口を結んだ。そして自分のその堅い心持ちが顏にも出たのを胡麻化す爲めに、わざと首を後ろにそらせて、ハガキを持つてる方の手を不恰好に力を入れてかの女の方へさし延ばした。

『…………』かの女も冗談にそのうすい口びるの口を結んでとがらせた。そしてその和らかい羽織りの肩と手とを怒らせてハガキを受け取つてから、『ほ、ほ、ほ?』

『…………』渠はかの女の頬と足とが可なり肥えて見える割り合ひにその肩などのあまり角張つてるのを初めて見て取つた。が、その聲にして若し全く僞はりがないものになれば、かの女の前身などは――たとへ淫賣であつても、穢多であつても――問ふところではなかつた。立ちどころに自分の愛が動き涌いて來たので、『まア、いらッしやい』と云つた。そして自分がさきになつて、裏の明き家の庭に向つた窓に押しつけて据ゑてある机のそばに行き、そこに坐わつてそのこちらがわの片隅に自分の左りの肱を突いた。

『…………』かの女もついて來て、机の眞正面に坐わらうとしたが、こちらの避けためりんすの坐蒲團を先づ半分押しつけて、投げ出したやうに慣れ〳〵しく『お敷きなさいな』と云つた。そしてあとの半分の上に膝をおろして、その肱を机にもたせた。すると、こちらとの間に坐蒲團のたるみが挾まつたが、渠が自分の揃へた膝をちよッと上げたので、その下にたるみは延びてしまつた。

『…………』渠は燃えてるやうな胸の騷ぎを頬づゑにまぎらして、かの女の自分に向けてるその顏を見詰めなが

ら、『これでこの方は僕にも安心ですが、まだ中野があります、ね。』

『……』ちよツとにツこりして、『あれはきツとやつて來ますよ――もう、わたしからは行かないと決心してをりますが――』

『それはどうも、あなたが會つてやるおつもりがある以上は、止むを得ませんが――』渠はこのことにも父が何とか云つてるだらうと見て、『お父アんの意見はどうです？』

『父は、もう、あなたを信じてをりますから、中野のことはきツぱり思ひ切つて、ここに落ち付けと云つてます。』

『それ御覧なさい！』渠は笑つて右の手を擧げて輕くかの女の肩を叩いた。決してそんなことで樂觀したのぢやアないが、少しでもかの女の心にもツと接近する機會を得ようとしたのだ。

『でも』と、かの女はほほゑみながらも、『わたしのは未練ぢやアありません。復讐ですの。』

『なアに、復讐だツて、未練だツて、向ふを眼中に置いてるのは同じですよ。』

『ぢやア、さうとして――お氣の毒ですが、ほ、ほ！わたしの目がなくなるまでは――』

『無論、一年でも二年でも待ちます！』これは渠がかの女の冗談的誇張に應じて同じくまた誇張した答へに過ぎなかつた。

この日は晩になつてから、かの引ツ越しの前日に澄子を紹介して置いた木山が――こちらに負けない氣でだらう――一人の美人を紹介しに來た。それから、また、つい近處の川上も來た。

その翌日、まだ父がとまつてるのを幸ひにして、耕次はかの女と共に朝めし後直ぐ、十一時半頃に家を出て、自家の後ろ手を一二丁しかない戸山の原へ散歩に出た。風は寒く霜ばしらの深いまばら林の道で若い男女の一組に行き逢ふと、かの女もこちらのからだの左り手へ接近して來た。

『男は女の右手につくものです、わ』とは、かの女がさきに一緒に家を探しまわつた時に云つたことだ。

『……』今は、もう、全くおもて向きだけでは夫婦に見られるのをかの女も恥ぢてゐないやうだが、――いや、

わざとにもさう見せようと云ふやうすもあるが、――あの時、渠はまだ自分の方が、九歳も年うへでありながら、寧ろ少し耻かしかつたので、それをまぎらせながら、『そりアさうでしようよ、左りにゐさへすりやア自轉車や自動車にもぶつかりッこがないでしようから』と高笑ひをしたッけ。

思はず早稻田へ出たついでに、共に眞宮と云ふ友人を老松町に音づれた。そこからまた氣が向いて、電車で房子さんを尋ねた。が、そこでまた前のと同じやうな婦人論、戀愛論で渠は自分の澄子と衝突した。

自分が考へて見るに、房子さんのところへ來る度毎に斯う自分らに衝突があるのは、必らずしも自分らの間に不理解がある爲めばかりではなかつた。澄子は自身に弱點ができて以來、それを無理にでも否定して置かうとして堅くなり、その親同士までこいぎになつてるこの獨身親子に對しても暗に楯を突いてるのであつた。

それに、また、かの女には面白くないだらうと見えることには、渠は房子さんとはずッと以前からの交際で、お互ひにいろんなことも知り合つてる。が、男と女とのことだから、さう痛切に競爭にもならねば、妬みにもならぬ。或時など、ふとした話から、房子さんはこちらに向つて、むろん冗談に、

『あなたはさう女を探しまわりながら、わたしを一度も口說いたことはないの、ね』と云つた。

『口說いたッて駄目だと分つてるから。』渠にはそれ位の理解はあつた。他の婦人で、房子の寫眞を見た者が、この器量ぢやア如何に關根さんでもおとなしくしてゐるのは當り前です、わ、ね、と冷かしたさうだ。渠は男女の接近をさう單純なものとは考へてゐないのであるが――。

こんなことをも澄子は既に聽かせられてるだけに、房子さんが渠の肩を持ち、渠がまた他方に贊成するのを――おのれがうとんじられてると思つて――面白くなかつたにも出るだらう。だから、渠はここを辭する時當分再びは一緒に來ない方がいいと決心した。

『房子さんは理解も同情もないくせにつけ〳〵云ふから癪にさわる！』澄子はそとへ出てから斯う獨り言のやうに云つた。

『ぢやア、僕はただその類の犧牲になつたんですか？』

『あなただツてあんなものに贊成する必要はないでしよう。』

『…………』一概にさうとも行かなかつたのだ。

ふたりが新宿の電車〆點を下りた時は、もう、十時過ぎであつた。暗い方へ這入るに從つて人通りは少く、店屋も多くは戶が締まつてゐた。

『手をつなぎましようか』と、突然かの女は云ふが早いかこちらの左りの手を握つてゐた。

『…………』渠は、歸京早々或友人のお古を貰つたインバネスの羽根の下にかの女の血のあツたかみをおぼえながら、じツとあまく胸のとどろきを辛抱した。そして自然に足の歩みを早めた。

『…………』かの女にもそれツ切り言葉はなかつた。が、これまでにも隨分圖々しく見えてた女も、こちらの動悸か電氣かに感じてゐるかのやうに、その息を急がしさうについてゐる。そしてそれがかたわらの〇〇と書いてある門燈の光に白く見えて、直ぐ消えたり現はれたりしてゐる。

一方は芝草の土手に立派な門がまへ、他方はあらい生け垣なる、その間を少しのぼつて行く道であつた。

『…………』渠はかの子とたツたふたりツ切りの世界であるやうに迫つて來たので、矢張り默つてだが、手を取られてるままいきなりかの女の前へまわり、自分の右の手をかの女の肩にまわした。

『…………』かの女も素直に進んで暫しこちらの接吻を受けてゐた。『もツとゆツくり歩きましようよ』と云つてから、また暫らく間を置いて、『わたし、實は、あなたを好きになつて來ましたの。』

『感謝しますよ。』少し行つてから、また立ちどまつた。

『中野のことはただ過去の追回に過ぎませんから、ね――わたしの一つの趣味として許して置いて下さい。』

『僕としちやア、然し、その趣味もなくなつて貰ひたいのです。』

『また、さう急いで』と、かの女はこちらを力強く引き戾した。再び手を取り合つてるのであつた。

「この奥に關根、近藤」とかけてあるところを曲がれば、四五間で自分らの住まひに達しられるところまで小一丁ばかり、そしてなほ戸山の原までも眞ツ直ぐにとほつてる狹い横丁になつた時、生け垣のあひだから小菊に霜にしぼんだのと白い八ツ手の花が湯のゆき歸りによくのぞかれるあたりで、――川上氏の門よりも少し手まへだが、――もう一遍立ちどまつた。

そしてまた歩き出した時には、手が解けてかの女がさきに立つてゐた。

ところで、渠はかの女をその後ろから見て行くと、かの女は相變らず昔のをとこ書生の如く一方の肩を少し高くいからせてゐる。これは一度その前にも注意したことであるので、『それ』と云つて、突然、かの女の左りの肩を輕く叩いてやつた。すると、

「あ、さう、さう！」かの女は忘れてゐたと云つたふうで頓狂に笑ひながら、それを低めたが、今度はまた右の方が高くなつた。

「…………」渠はいやな癖もあるものだと呆れた。向ふがそれを獨りで氣にし出して、また直して見たりして行くのをもうこちらはほうつて置いた。

女の獨り者がいろんな男に持てゝ來た思ひ上りの結果として、それも面白くない紀念の一つかと思ふと、かの女がその度毎に與へたらしいのと同じ今の接吻には、それだけいろんな黴菌が傳はつてるかも知れなかつた。

で、渠は自分の袂からそツとハンケチを出して、そツと自分の口のあたりのべた〳〵したのを押しぬぐつた。

八

父は娘のところへ來ると、いつも娘の朝寢坊に釣られて自身も寢坊をすると云つてたが、十五日の朝、食事をすますと直ぐ、娘の小使ひとして三圓を置いて、歸つて行つた。その歸る時、臺どころから荷をかついで出るが早いか、うら庭で一つ、

『かすやア酒のかす』と呼んで見せた。
『面白い人』と、かの女はこちらに向つて獨り言を云つた。
『……………』渠はひと風變はつた親子の情を思ひやりながらも、然し笑つてはゐられなかつた。ゆふべは餘ほど砕けて、惡く取れれば馬鹿にして、かの女に當つて見たのである。けれども、矢ッ張り無駄であつた。
初めは、かの女がかけ蒲團の中で腹這ひになつて雜誌を見てゐるのを無邪氣にからかつて見たりした。すると、かの女はおこりもしないで、こちらを見て、
『いたづらッ兒』とかの女のとがつたあごをしやくつた。その子供らしいところから、段々と說いて行つたのだけれども、つまり、徒勞であつた。
かの女は相變らず、それが中野のゐる爲めではない。また、耕次を嫌つてるのでもない、と云ふのである。
『あなたが僕を嫌はないなら、嫌はないやうにしようぢアありませんか？女が男を戀して行くと同樣に、男も女の全部を得てしまうまでは安心ができません。また苦しくッて、精神もからだも痩せて行くものですから。』實際に、渠は淋子を見てから自分のたださへ痩せてる顏が一層痩せて來たやうな氣もしてゐるのだ。
『ですから、これからはおもて向きでは十分夫婦同樣に見えるやうに致しましようよ。わたしも今ぢやアあなたが無いと寂しい氣がしますから。』けれども五年間も戀をしてその爲めにいのちまでも一旦は棄てたそのまとにさへ許さないで來た『處女性』を、今となつてさう容易に棄てたくはないと分ふのだ。
それは、然し、渠には半ば豫期してゐたことのやうでもあり、また半ばはうそのやうでもあつた。正直に云つて、かの女に果して純全たる處女を標榜するだけの資格が殘つてるだらうか？
かの朝鮮人のことは、豚に玉を與ふる勿れであつたとしてもいい。また、皆に或待ち合ひにわざと置き去りにされて、殘つた唯一人の男の爲めに午前の一時、二時まで引きとめられ、それでも逃げて歸つたのを、その男が翌日になつて既に成功した如く吹聽した。それをかの女が怒つて中野を立ち會ひ人にして、皆の前で取り消さしめたと云ふのも、

それで少しもかまはない。が、——

『それぢやア、最初のいとこにはどうです』と、渠は重苦しい挑戦的氣ぶんを以つて突ッ込んで見た。すると、かの女は、

『あれはまだ何にも分らない子供の時で、而もこッちが不承知の無理强いでしたもの。』斯う答へて、平氣であつた。

『では、——ちやア——』中野のことは渠には、もう、よく分つてるやうな、また分らないやうなので、聽きかけたのだが、聽き糺すにも及ばなかつた。

無理强いの不承知を穢れてゐないと云ふ格で、不自然の用意をも『純潔』だと云つてるのなら、注意深い道樂者のやつてることにも純潔で通せるのがあらう。こちらはそんな僞善的申しわけをしないでもかの女の舊惡は——きッとあるものとして——すべて許してやる氣でゐるのに、そこへ信じ込んで來ないのがもどかしかつた。

アメリカのそんな青年のうちには、おのれの愛する婚約者には結婚式をするまで決して身を許さないでゐながら、その間に他の男を——殊に日本人や支那人やアメリカ印度人を——近づける氣まぐれものがあると云ふ。却つて一たび、おのれの一生を共にする男にさう容易に許してしまへば、その男がいい氣にもなり、そしてまたおのれが速かに卑しめられるからである。それに似た考へを澄子も持つてゐるのぢアなからうかとも、渠には臆測できた。若しそれなら、お門が違ふ——『生意氣に、人を——馬鹿に！』

『…………』かの女はこちらがそこまで考へてゐることなどを知らう筈がなかつた。父の歸つたあとでも、また相變らず前夜に見たたわいもない夢のことなどを語りながら、『わたしの親はあれだけよく分つてる人でしよう。然し、わたしが若しほかのことに熱心になれば、親なんぞア——どうでも——』

『…………』渠は、かの女のさう云ふ心持ちが果して生まれ付きの眞實なら、むろん、これまでにもあの男、この男に浮かれるやうなことはなかつただらうとも考へられた。斯うしていろんなことに昂奮し、いろんなことに思ひ惑つた。

十九日のけふは少し氣を拔いて來るつもりで、友人訪問や仕事の要件に出かけることにきめた。そして明けツ放してある室を日當りのいい椽がはに出で立つて、暫らく庭の南天やあすなろや持つて來た椿などに目をやつてゐた。すると、自分の向つてる直向ふの支那革命黨の家の窓から一人の支那人がちよツと顏を出して、こちらを見た。あれが宋教仁と云ふのか？今一人の黄興は西郷隆盛のやうに肥えてるさうだ。そのどちらかのめかけになつてる日本人の女中のゐるのが澄子には自身のいやな對照になつて、一層かの女の思ひ切りを惡くした。

『わたしやアあんな女と逢ひます』とも云つたことがある。おのれも御嶽の山で朝鮮人に或程度までの世話を受けたくせに――。

いろんな支那人も出入りする樣子だが、こちらで困るのは喰つた菓子の紙ぶくろを丸めて窓からこちらの庭にまで投げ棄てることであつた。疊の上に短い毛が一すぢでも落ちてるのまで氣にして拾ひ歩く潔癖な澄子は、きのふ、それに對めする抗議を向ふの女中まで共同の井戸端に於いて申し込んだ。が、また一つ白い紙の丸まつたのが庭の檜の木のしつた根もとに落ちてゐる。まだ棄て立てらしい。

『…………』渠も癪にさわつたので、向ふへも聽えるやうに、『また落ちてる――云つても分らない奴どもだ、なア！』一つには、然し、新聞の記事が渠等にも馬鹿にした興味を持たせたに違ひなかつた。

『あなたは胸が明いて見ツともないから、これをおさしなさいよ』と云つて、かの女は一つのピンを持つて出て來た。

『紀念だから、惜しいんですが――』

『また何かの記念ぢやア――？』

『いやなら、およしなさい。』かの女は有無を云はせず、こちらの襦袢の襟を兩手で直して呉れて、一寸二三分で曲がつたさきに何かの小さな寶石が光つてるのをそこに留めた。

『いい、ね。』渠は今一度自分のあごを引いて、自分の目をピンの光りへ向けた。結婚ゆび輪の代用にも思はれるので、嬉しくもないことはなかつた。

『またのぞいてる！』かの女はこれも聽えるやうに云つて、ちよツと横目をして向ふを睨らんだ。

『…………』渠がまたその方に目をやつた時には、然し、もう見えなかつた。その白國の爲めに亡命して、その苦境を近ごろは懸け軸など賣つて切り拔けてると聽いては、あんまり馬鹿にもできなかつた。貧乏や亡命の所在なさにか、向ふにも時々碁を打つ音がする。

『行つていらツしやい。』かの女のたツた半日をでも名殘り惜しさうにした顏と聲とをそれでも新らしい無事な家庭から出たそれだと空想しながら、渠は先づ或雜誌社へ行つた。

すると、そこの友人が直ぐ澄子の話になつて、あれはね、中野の前にも男とくツ付いたことかあるぞとのことであつた。血で書いた手紙のぬしのことを傳へ聽いてたのだ。『なアに、あれなら今の僕と同樣、ただ同棲してゐたばかりだ。からだの關係があつたのぢアない。』

『若い女にそんなことができるだらうか？』

『現に、僕とまだ潔白ないきさつをやつてるぢアないか？』

『そりやア、發狂になるものか？たとへ人のいい君とはさうやれても、それはもう女も老巧になつたあとのことで――それから、また、中野の方の連中から聽くと、あれは不具者だらうツて云つてる。』

『…………』耕次には寧ろこの最後のことが新らしく發見した事實ぢやアないかと思はれた。不具の爲めに女が男のやうになつて、平氣で男に接近して行つたりまた來たりする。そしてそれが女の氣ぶんに立ち返つた時は、俄かに一般の女よりも痛切にその缺點からの寂しみをおぼえて、男に熱心にもなり、いのちも棄てることがあらうが、それは女の心ばかりのことで男には關係がない。渠は、自分がかの女と關係を遂げて見るまでは、さう考へて却つてかの女を人にも自分にも辯護して置きたかつた。さうすれば何が何でも、かの女の穢はれてる男は――中野でもその他でも――すべて潔白なあひだがらであつた。で、友人の非難をまじへた報告に對しても隨分らくな心持ちになつて、『それが本統かも知れない』と答へた。

そしてその他のところででも冷かしやら忠告やらを受けた時、矢張りその心持ちでらくに受けてしまつた。が、渠はみち〳〵私かに考へて見ると、自分も人にかの女を不具者と云はせて置く方が便利でありまた高潔に見える如く、中野の方でもその爲めにさう皆に云はせて置いたのかも知れぬ。そして中野自身には十分秘密な樂しみがあつて——。

矢ツ張り、どうもかの女の處女性が氣になつたので、房子さんのところへ立ち寄つて、あけすけに聽いて見た、

『どうでしよう、あなたは中野と近藤とがすツかり關係してゐたやうに云はれましたが、近藤は今でもその身を純潔だと意張つてますよ？』

『わたしにやアさうは云はなかつたですよ』と、房子は答へた。『ぢやア、あなたはからだもすツかり許してあるのですかと尋ねて見た時、無論と返事しました、わ。』

『あなたにやア止むを得ないから白狀したんでしよう、ね。』渠は鬼の首でも取つたやうに心がすツきりした。それが自分の愛してゐる女の前身を不純潔にきめてしまう所以ではあつたけれども、その方がかの女に對して自分がもツと多くの征服力を持てるのであつた。

市中の空の一方につるぎの兩端をぴんと上に反らせて冷たさうに光つてる三日月のかたちに、渠の心もぴんと振つた。そして今夜こそかの女の僞善を素ツぱだかにして、生まれたまま又けがれたままでこちらに降服させてやらうと樂しんだ。が、これは取りも直さずかの女に對する自分の切實な愛であつた。

けれども、歸宅して見ると、迎へに出たかの女は先づこの報告をした、

『先刻、中野がまゐりました。』

『…………』客間からさしてゐる電氣の光にかの女がにこ〳〵して見えたのも却つて面白くなかつた。この女も亦かのアメリカ女の如く、婚約實行までを、假りに他の男をおもちやにする種類のにもなれるだらうと云ふことが切にこちらのあたまに響いた。『さうか』と、わざと輕く受けて、茶の間へ來た。これから再び中野に對するかの女のよりが戻らうとは決して思つてゐないが、けふの房子さんの證言が氣にかかつた。

『…………』かの女もこちらと向ひ合つて火鉢のそばに坐わつたが、こちらの顏を見い〳〵また報告した、『一時間ばかりゐて歸りました。』

『…………』。

『よろしくと申しました。』

『さうか』と、また二度目には答へた。渠には、かの女がさう問はず語りをするのは自分らの間の約束を守つてるのであるに違ひなかつたけれども、それが却つてかの女の逆襲であるやうに取れた。

『…………』かの女もそれツ切り默つて、少しいやな顏つきになつた。

『…………』暫らくしてから、渠は食事を命じ、それの給仕をかの女にして貰ひながら、『どうでした？』

『どうツて』と、苦笑しながら、『餘ほど謙直に遠慮してゐました。』

『謙直はあれのお箱ぢアらないのですか？』渠には、實際、世間を憚かることに勝てぬやうな謙直は、そしてその謙直から愛する女を裏切るやうな男は、問題にならなかつた。

『あなたからおつしやれば、さうかも知れませんが――報告だけは致して置きます。』

『…………』渠はこの方はすべきが當前だと思ひながら、『いや、あなたから云つてもでしよう――？』

また兩方からの沈默が少しあつた。

『…………』かの女は火鉢にあたりながら下に向けてた目をちよツとじろりと上げて、『ぢやア、來させてはいけないとおツしやるのですか？』

『それは最初からの承知ですから、いけないとは決して云ひませんが、ね――』渠には今やそんなことを一小事件に過ぎないものにしてしまうほどのことがあつた。そして房子さんを裏切るにはよくないと思つたけれども、止むを得ないので聽いて來た言葉を持ち出した。『飯田町ではあなたが中野とはからだの關係もあると白狀したさうです。』

『そりやア、俗物には』と、眉をきりりツと上げて、『面倒なことを說明したツて分りません分から、ね。』

『…………』渠はさうきつぱり云はれて見ると、それもさうだと云ふやうな方面へ自分の疑惑を轉じさせないでもなかつた。かの女にして若し世間の一部で評判されてるやうな不具者であつたら、一層のことだし――また然らざるも、現に自分が一個の紳士としてかの女に暴力をさし控へてゐるのをも、ただ凡俗の考へしか有しないものらは、或は、あんな體裁のいいことを云つても、實は何とか馴れ合つてるのだらうと、見當違ひのうがちを云つてるかも知れなかつた。

九

一般婦人の感傷的な態度に小理窟を加へてだが、かの女は轉居早々から同棲日記を書いてゐた。そしてそれが――こちらの論文や創作をするに對して――かの女の何よりの仕事であるかのやうに見えた。

渠は試みにその十二月十五日のくだりを讀んで見ると、

『乃父歸る。無事。中野氏來る。君は留守なり。坐に在るやや一時間にして恐縮頓首して去る』とあつた。

『…………』渠はかの女が筆に多辯なのにも拘らず、その思想上に一番大切な男の來たのを書きしるした物としては、あんまりあツけない書きかただと思へた。いや、いろ〱書きたいことや書けることがあつたのだらうが、こちらに遠慮して詳しく云はないのだらう、と。渠には、かの女が一面には水くさく取れたが、また一面には、それでも、中野の『恐縮』してゐたのは恐らく事實であつた――中野の人物から云つても、またかの女がそれに對する一種の復讐的決心のあるところから想像しても。

さうだ、かの女には向ふにうそにも見せつけてやれ、燒かせてやれ、羨やまして向ふを後悔に苦しめてやれと云ふやうなたくらみもあるに相違なかつた。

このたくらみのわなへ向ふが這入つて來たのであるから、かの女の心は先づ待ち受けた最初の凱歌を奏した筈だ。が、それを例の感傷癖から羅曼的に多辯を弄してないのは確かにこちらへの遠慮であつたらう。渠の心が落ち付いた時に口

で聽いて見ると、『どうお暮しですか』と尋ねたに答へて、『至極平和ですよ』を以てしたさうだ。そして日記の十六日にも『無事、できるなら斯うした平和な生活にゐたいと思ふ』とある。また十七日には、『淡々として水の如し』ともなつてゐる『…………』それを渠が、實際に解釋して見ると、水の如しとは決して淡々としてゐるのではなく、こちらが蟲を殺して隨分さりげなくしてゐる爲めである。從つて、その平和と云ふのもほんのおもて向きの、うはツつらの狀態に過ぎないのであつた。

かの女だツて多少はそれを知つてるだらうし、それに對するかの女自身の不滿の原因も分つてる筈だ。が、中野に對して無理にも無事滿足のやうすを示めしたのが嬉しくなつたからでもあらうか、

『わたしは當分あなたのおそばでこの日記を書くのを仕事に致しましよう。このままで決してわたしは不滿足でもございませんから』とも云つた。

『さうですか――決して惡いことぢやアありませんから』と、渠は答へた。さうしてゐるあひだには、段々かの女の心がこちらへばかり向いて來るだらうと思はれた。

成るべくかの女をして過去を過去として葬むらしめ、執着の種となつてるものは速やかにその根がなくなるやうに、渠はさきにかの女がこちらへ讀んで聽かせたところの追回文――その中には中野のことを『半夜の友』と呼んである――を或雜誌に公表するの發議を出した。かの女も異存はなく、喜んでそれをその雜誌の記者に渡した。まだ新年號に間に合ふと云はれたので。

十二月二十日には、眞宮が尋ねて來た。耕次は渠の關係してゐた新聞の文藝欄に長らくその時の問題を發表してゐたし、また渠と共に度々かきがら町の暗い怪しい小路へ行きもした。が、今では、もう、向ふもこちらの事情を知つてそんなところへ誘はうともしなければ、こちらでも二度と再び行きたくはなかつた。茶を汲みつつ碁を打つたり、雜談に耽つたりしてゐるうちに、溜子が鐘淵からお化粧を新たにして歸つて來た。

『いるやうな目つきをして人をじろ〳〵と見る』と云つて、かの女がさきに初對面のあとでいやがつたその人の來訪であるから、かの女はちよツと挨拶に出た切り、ふすま一つ向ふの自室に引ツ込んでばかりゐた。

『まだか』と、眞宮は向ふの澄子にも聽える聲で云つた。

『まだ、さ。』耕次は斯う事實を以つて答へるのが寧ろ苦痛であつた。

が、澄子はそれをふすま越しに耳に入れて面白かつたと見え、早速この問答をその通り日記へ書き入れてあつた。そして更らに左の如き文句だ、――

『われは今日では關根氏が世間の定評の如き、單なる放蕩者でないことを認めたり。赤坂の家に在りし時より今日まで十有餘日、私に處女性を犯さざるを見ても、此の定評の誤まれることを知る。』

『…………』こちらは然しそんな呑氣なことに滿足してゐられなかつた。

二十二日は晴れたり曇つたりして、寒いばかりの日であつた。共に一歩も外出せず、夜になつて耕次はかの女の前で詩を歌つたり、うろおぼえの長唄や淸元をやつたりしたが、その間にも流れ出ようとする暗涙をつとめて押し忍んでゐた。

ただ冷淡に考へて見れば、純潔か不純潔かも分らない高が一婦人のことではないか？若し腕力を以つてすれば、そしてそれツ切り喧嘩してしまうつもりなら、實に、何でもないことだ。が、一新した生活をつづけようとしてゐるものには、そのあとの寂しさが火の消えたあとのやうになるだらうと思はれて、寧ろこのままでも今更ら喧嘩別れをしたくなかつた。

さうかと云つて、また、ただ獨り冷たい蒲團の中に目をさまして、そとなる雀のちゆうちゆう云つてる聲を聽くと、その僅かに小さい愉快な鳥に對しても面目がなかつた。大の男が朝早々からわざ〳〵陰氣な不滿足を心にいだいて起き出でねばならぬとは！

兎に角、こちらの誠意誠心がまだかの女に十分に屆かぬのだと、殘念であつた。成るべく皮肉や嘲笑を出さないやう

にして、かの女の心を荒立たしめなかつたので、かの女からの發議によつてその夜からかの女も耕次の勉强室に眠ることになつた。

『わたしの室は聲ひとへでそとになつてますから――』少し大きな聲を出してれば、立ち聽きされる恐れがあると云つた。そしてその翌日、耕次が東京へ出てゐる留守に、かの女は多くの手紙や書類を燒き棄てた。

『中野のもですか？』

『あれだけはどうしても燒けませんでしたの。』

『…………』それもそうだらう。入水の節にもしツかりそれをかかへて死んでたので、助かつてからも、警察の人が何か大切の書類でしようから、御身分に對して開らきませんでしたと云つたほどの物だから。

『然し、行李の底深く納めましたから、再び取り出して見ることはございますまい。』

『…………』こちらには、然し、燒かない以上は、どうせどちらでもよかつた。が、かの女がそんなことをするだけでも、少しはこちらの物に成りつつあると思はれた。

二十五日に中野からハガキが來て、その一友人なる松山と共に明日やつて來ると云ふのであつた。二十六日は耕次も敵意と好奇心とをまじへて待つてゐると、おひる頃に二人同道でやつて來た。一方の男は極らいらくな代りにあたまは粗笨らしく。

『おい、姉御』と澄子のことを呼んで、前々から來ると必らず酒を要求し、とまつた時は朝になると、自分からさきに立つて家ぢうを箒木を以つて掃除してまわるほどちよくであつたと云ふ。それに、話して見ると、その男の一友人がまた耕次の友人であつたので、そんなことから話が進んで、割り合ひに圓滑な小酒宴がひらかれた。

別な來客の爲めに、耕次が暫らく別室にゐると、かの女は不斷よりも堅苦しくなつた手つきや物ごしでこちらの世話もした。が、隣室のやうすに耳を傾けてると、男の方の聲はひそめられてるが、かの女のは却つて晴れやかな笑ひ聲にもなつてゐた。これは必らずしもこちらへの申しわけばかりでもなかつただらう。かの女は機嫌よく醉つて來ると、そ

の聲がいつでも高く晴れやかになるのであつた。

　こちらが再び一方の男と盃を取かりはせることになると、澄子は獨りでその自室の方へ立つて行つた。そして窓を明けた音がすると、

『中野さん、ちよいといらしつて御覧なさい、月がいゝから』と云つた。今夜は確か十四日の月で、天は晴れてるのであつた。

『…………』中野もこちらへ氣がねしたやうにだが立つて行つた。

『…………』耕次には、もう、それを惡い方へ怪しむなどの氣はなかつた。人のかげでまた手を握らせるやうなことはないと信じてゐた。が、澄子が一旦世を悲觀してからの天然憧憬を以つてまた平凡な感傷だらうと思ふと、それを尤もらしく聽いてるらしい若の馬鹿げたつらが見たかつた。二人が歸つて行つてから、『僕は中野のやうな人物はきらひです』と、かの女に告げた。『正面から人の顔を見詰め得ないやうな男は邪心が多いものです。僕はあア云ふ男と交際したくない。』

『それは全くあなたの誤解でしようよ。』かの女は遠慮がちに渠のことを辯解した。『不斷は如何に弱い人でもあんなではありません、わ。胸にこツちに對する弱みと痛みとがあつて、冷靜にわたし達に向つてることができなかつたのです。』

『ぢやア、どうしてそれが分りました？』耕次は、それでは中野がまた慾を出して來て、今までの詫びやら後悔やらを述べて、かの女を再び取り返す氣であつた、な、と思はれた。そして多少氣がのぼせて、こちらがまた元の獨りになるかも知れぬ時の寂しさを想像した。

『松山が申しましたのですが、わたしと別れるやうになつたのはほんの氣が弱かつた爲めで、素よりの本意ではなかつたさうです。』

『だから、今一度歸つて吳れろと云ふんですか？』

『向ふでは、まア』と、かの女はこちらのじツとさし向けた目をまたじツと見つめながら、『さう云ふつもりでしたでし

ようが――』

『……………』なほ進んで聽いて見ると、松山からは澄子に直接に今一度逆戻りすることを勸めたさうだが、中野はただかの女に

『あなたは細根君と結婚なすつたのですか』とまでしか立ち入つて來なかつた。そしてそのあとはかの女を眞正面から見つめて、かの女のけしきにかの女の心を讀まうとしたさうだ。

『……………』耕次はあんな氣の弱い者にも見つめられねばならぬ關係を有するところのかの女を、心ではさげすまざるを得なかつた。然し、かの女はその時中野に向つて、

『どうでもあなたの御想像にまかせます』と答へたさうだ。これはこちらに取つてもかの女のおほ出來で、ちよツと氣持ちがよかつた。

『……………』然し渠は、かの女がまた直ぐ日記に向つたので、きツとまたこちらの神經にさわることを書くに相違ない、そしてけふのことには殊に不快を感ずるやうな感想が一層多いだらうと思つた。で、かの女をうツちやつて置いてさきへ床に這入り、習慣通り電氣を消した、そしてふすまを隔てて、『以後、もう、あなたの日記は讀まないことにしましよう。』

『何もあなたに讀んで戴く爲めに書いてるのぢやアありませんから。』

『……………』その癖、初めのうちはその古くさい文章を得意さうにこちらにも讀ませたのだが――。

獨りで天井に向つてそぞろに考へてると、何となく熱い涙がほど走るのであつた。この愛に於ける征服を自分は切實にまた眞實に考へてゐた。飽くまで亂暴はしたくない。かの女がその醜惡とその肉體とを心から投げ出して降服して來るのを――じツと辛抱して――意地にも待つてゐるより仕方がない。が、小理屈の多いかの女には、それができるであらうか？どうせそれができないほどなら、まだ純潔をかの女が標榜してゐるのを幸ひ、そして中野の方ではまだよりを戻さうとするところがあるのを幸ひ、こちらがこちらの友人どもから不成功の爲めに逃げられたと云ふあさけりを受

ける恐れなどはかまはないで、下手な妥協をするよりも、寧ろ今のうちに隨分面倒なかの女をそツくりのしを附けて還してやる方がよかつた。

つまり、さう云ふ風に考へて、自分の誠實心が自分の胸を無闇にはち切れさうにしてゐたところへ、かの女も日記を終へてやつて來た。が、こちらの樣子をこちらの迫つてる呼吸に氣付いたと見え、そのかた手で以つてかの女はこちらの枕もとを探つて見た。坊主枕のしめつて熱くなつてるのが分つたらしく、

『わたしはどうしたらいいのでしよう』と歎息した。

『…………』向ふの決心一つであるから、こちらは何も返事をしなかつた。

夜が明けて、二十七日の朝、渠が目をさますと、かの女は直ぐまた夢を語つた。

『ゆふべのはおそろしい惡夢でしたよ。黑い蛇があつて、わたしに向つて來ましたの。わたしは一生懸命に逃げまわりましたけれど、とう／＼追ひつめられたのを、自分のうなされた聲で目がさめました』

『…………』渠は純粹の征服をそんな風に進めたくはなかつたが切實な精神では然し、もう、そこまでも行つてるのだと思つた。『その蛇は、つまり、僕の執着心であつたのでしようよ。』

かの女をさきへ湯にやつてから、渠はゆふべの會見にまだ何か殘つてる秘密でもないか知らんと、かの女の机の引き出しから矢張り日記を出して見た。

『中野氏、松山氏と同道にて訪問せらる。君と初對面の日なり。胸のあらしは知らねども、兎に角、無事なり』と云ふ、氣取つたやうな文句に初まつてた。そしてそのあとは斯うだ、『中野氏とわが部屋の窓より十四日の月を望む。澄み渡る空、物凄きまで淸し。嗚呼、この月、去年の今日はわれも人も世にも人にもうらやまれし相思の人なりしを、浮世なれや、今年の今夜、利鎌とすめる月影を同じ窓に眺めながら、お互ひの胸は月とわれらとほどの距離あり。今やわれは彼れの愛人に非らず、彼れはわれの戀人に非らず。胸に悲哀を抱いて、つとめて笑みを含む。かの明星はわれよ、われに光明のあるあひだ、この戀のさかゆるあひだ、かの星も亦永劫の空に輝かんと誓ひしが、明星はさんとして光なは

なてどもわが胸は無限の闇に閉されて。』

『…………』如何にも古くさい想でもあり、文章でもあるとは思へたが、ゆふべかの女に向つて、『けふの會見に、若し僕が旣にあなたの全部を得てゐたら、中野に對しても勝利者として臨む强みがあつたでしようが、それがない爲めに、隨分侮辱されてるやうな氣がしました』と云つたことを、もう、撤回してもよかつた。

一〇

『わたしは戀と愛とは少し意味が違ふと云ふ說ですが、ね――』

『…………』また何を呑氣に考へ出したのかと渠は思つた。が、何か返事をしてやらないとかの女がすねてしまうのだから、そしてそのすねかたと來たら、無邪氣な娘などのと違つて、なかなか執念深く、その幅ッたい顏が二度と再び見られないやうないやな物になるのだから、こちらも微笑と云ふよりも苦笑と見せて、『ぢやア、どう云ふのです?』

『簡單に云へば、戀とは詰り間接に思ひ忍ぶのでしよう。だから、どうしても自分のそばから遠く離れてゐるものに向けることになります。』

『ふん――』渠はをかしくなつたのを無理にこらへてゐた。かの女がこちらをこの十數日間苦しめてゐたところの、中野に對して有する考へに段々と體裁のいい申しわけ付きの見切りをつけて來たのぢやアなからうかと思はれた。『ところで――』

『ところで、愛はその反對で』と、かの女はこちらに微笑を向けながらも、なほこちらに負けて行くのぢやアないぞと云はねばかりに眞面目腐つた目つきを見せて、『間接でなく直接に、遠くなく近く、自分のそばに親しく心の相手を持つことです。』

『して見ると、中野に對するあなたは戀で、それとは衝突もしないであなたは僕にはまた僕に對して愛を持てると云ふ意味ですか?』

『若しその氣が出ました時にはです。』

『無論でしょう——』渠はかの女の云ふところを、かの女がさう無理に靈愛的に持つて行つたよりも實際的に、理解することができないではなかつた。『それは然し珍らしいことでも何でもないのです。誰れでもその初戀が死に別れか生き別れか見棄てられかで破れた痛みをまだ持ちながら、再び別な男に心が向いた時の感じです。だから、あなたの所謂愛も第二の戀に過ぎず、あなたの所謂戀は最初若しくは一つ以前のそれでしょうよ。』

『さうすりやア、矢ッ張り、靈も肉も一緒くたになつて』と、かの女はなほ未練らしかつた。『つまり、あなたの合致論になつてしまうぢやアございませんか？』

『無論、それでいいんです。』渠のこの答へには自分ながら隨分威壓の力を持つてゐるやうに思へた。『あなただツて、まさか、戀が靈で、愛が肉だと云ふやうな馬鹿なことを云つてるんぢやアないでしよう。』

『でども、ツちかと云へば、愛は合致的、實際的で、戀は靈的な傾きがございましよう——？』

『さう云ふ靈的を僕らの新らしい哲學では矢ッ張り部分的、物質的だと云ひます。』ここまで來てまだ分らないぢやア、もう、議論で數へたッて駄目であつた。

渠には、然し、そんなことよりも別に一つまた氣になることを思ひ出してゐた。『初戀若しくは一つ以前の戀』とわざ〳〵區別して云つたのもそれが爲めであつた。しば〳〵夢を語る女は馬鹿だと云ふ例へがあるが、澄子はそれをやつてるのである——無邪氣にだが、もういい加減な年になつてのかかる無邪氣はどこかにぬけてるところがあるとも見られ易い。つまり、そんなところからでもあらうか、かの女はよく易を見て貰ひに或易者を訪ふてたさうだ。その有名な易者が例の新聞記事を見て、あの女なら度々男が變はつた、そして變はるたんびに今度のは長くつづくかどうかを見て貰ひに來たと、耕次の一友人へ直接にしやべツた。それをまた聽きに聽かせられた耕次自身は、その時、あまり念頭には置かなかつた。蓋しかの女に語つて見ると、一度は行つたが二度と行かなかつたと云ふから、向ふが人違ひをしてゐるのかも知れないし。又、實際に度々行つたとしても、同じ男の逢つた事件毎にそれがどうなるかを見て貰ふのを、別ま

でが違ふのだと向ふが思ひ取らないとも限らなかつた。その間を誰れだツて、まさか、はツきり區別して行くものもなからうから。

けれども、自分でも昔、耶蘇教を信じてゐた時は、澄子とはまた反對に、戀は卑しいもので、愛は高尚だなどと考へさせられてゐた。その時のあはれ貧弱な知識程度と生活内容とを、今、かの女のうちにも想像して見ると、おのれの思ひに餘つて、據ん所なく、その足らぬ眞ごころを迷信やら神秘的方面やらに馳せて行くこともあつたかも知れない。その場合、たとへ何人目の男に關してであらうと、女が今度こそは長くつゞくかどうかをうらなつて見ると云ふのは、寧ろ氣の毒にもあはれで、而も男から見れば、奥ゆかしいことではないか？

で、渠はその夜、かの女を珍らしくもさう云ふ女として心に描きながら、矢ツ張り、私かに暗涙を催してゐた。かの女が枕もとをさわつて見るのも前夜と同じであつた。そしてとう／＼かの女の方から許しが來た。

その翌二十八日は、一旦門を明けてから、いつもより遲くまで朝寢をしてゐると、突然、その室へ這入つて來たものがある。さぶあツたかくうと／＼してゐた目を明けると、それは耕次の妻であつた。

『なんしに來た！』渠は斯う叫ぶが早いかはね起きた。

『いくら御免なさいと云つても』と、妻は痩せて尖つた目をきよと／＼させながら室内に突ツ立つて、『御返事がないのですから。』

『あるまで待つてるがいい！』睨み付けながら、渠はかの女を玄關の室に締め出してしまつた。

『何物ですか、失敬な！』澄子も斯う向ふへも聽えるやうに云つて、急いで衣物を着かへてた。

『…………』どうせ妻がやつて來たのだとは分つてるだらうから、渠はわざと、『僕の一番きらひな婆々ア、さ。』

『婆々にやアきまつてまさア、ね』と、ふすま越しに尖つた聲で、『ながねん、苦勞をさせられて來ましたから、ね！』

『默れ！』あいつがこちらの北海道から弱わつて歸つた夜に早速やつて來たのかと思ふと、それをきツぱりはね付けたのでさへ何だかごつ／＼した感じがあとに殘つたのを思ひ出されて、今や新らしく得た感じの方をも半ば興さめさせられ

るやうであつた。それでも、北海道までとう／＼やつて來た女の東京に於ける隱れ場所へ躍り込んで來た時とは違つて、今回は初めからよく明らかに分らせて置いただけに、その出が割り合ひに穩やかだと思はれた。人の寢室へ無案內で這入つて來たのも、澄子が怒つてるらしいほどには無謀をしたのでなく、こちらが蹴えつけなかつたのが惡いのであつた。

女ふたりで理解が仕合へるならしろと云ふつもりで、兎に角、うツちやつて置いて渠は先づ湯に行つた。錢湯にはこれも湯好きの川上が來てゐた。あとから、また木山も落ち合つた。こちらは最初の征服を仕就げたと云ふ、何だか樂しい誇りを私かに胸にいだいてゐたので、いつになくゆツたりとした氣持ちで皆と話しをしながら、度々湯に這入つたり出たりした。そして考へた、若しけふの突然な闖入がきのふの朝あつたとしたら、或はゆふべの成功はできなかつたかも知れぬが、然し、もう大丈夫だと、そしてかの女に貰つたピンを襟に刺した時も、その感じが新らしかつた。

そして歸つて見ると、もう女ふたりは火鉢のそばでうち解けて語り合つてゐた。澄子の感想文がのつてる新年號がそばに出てゐるのを見ると自慢さうに見せたものらしい。

『…………』妻は然し皮肉さうな目をこちらに向けて、『大相いいかたを今度はおえらびになつたのです、ね。』

『ほ、ほ』と、澄子は笑つた。

『…………』渠はわざとそれには返事をしなかつた。が、皆と一緒に食事をしながら、妻に向つて、『お前の飛び込んで來るのは、いつも、きまつて金の時だが――』

『そりやアきまり切つてまさア、ね。』

『…………』渠はその語調からして圖々しいのがいやなのだ。それでも、まア、おだやかに、『今一度念を押して行くが、おれがお前にまかせたと云ふよりも、やつてあるその家をうまく經營して行きさへすれば、決してお前らは困るわけはないのだ。』

『わけはないと云つても』と、もう、こちらの云はうとすることに突ツかかるやうになつて、『困るから仕かたがないぢ

やアありませんか？』

『…………』わざと暫らく間を置いてると、妻はこちらの返事を見越したやうに、

『子供までが困つてるのに、それを――』

『まア、待て』と、突然叱り付けてから、またおだやかに、『あの家にはおれの事業失敗の借金が附いてゐる。然し、あの先代から讓り受けた商賣を尋常にやつて行きさへすりやア、少しづつ借金を返しながら、らくに親子四名は喰つて行ける筈なんだ。』

『それが行かないんですよ。』

『いや、誰れに云はせても――たとへば、親類のものでも、他人でも――そんなことはないと云ふんだ。』

『そりやア、なにも知らないものは――』

『馬鹿！貴さまの不精でだらしなさを自分で分らないんか？』斯う怒鳴つてから、『また心を落ちつけるやうにして、『お前が甲斐性なしだから、あんな單純な商賣さへうまくやれない。どうせ男か何人ゐたツて役に立たない商賣だから、お前が承知して貰つた以上は獨りでもツとしツかりやるべきだ。』

『それにしたツて、この年末に迫つちやア――』

『だから、少しでもやれたらやるが、ね、こツちだツつて澄子さんの衣物を質に入れたりまでしてやツと行つてる始末だ。金のことは例の通りここでもまかせツ切りだから、ふたアりで相談して見るがいい。』けれども、澄子が思ひ違ひをしてまた氣を惡くしないやうに、『が、できなけりやア仕かたがないんだぞ。』

渠は妻子に對する金錢上の責任だけは家をやつてあるので十分に帳消しになつてるつもりであつた。だから、それ以上妻に話しをしたくもなく、またその顏を見てゐたくもないので、早く歸れと云はないばかりにしてちよツと木山のところへ出かけてしまつた。

それでも、しやべり出すと誰れに向つてもくど〳〵しい妻のことであるからと思つて、二時間ばかり留守にしたあとで

歸つて見ると、幸ひにもかの女はゐなかつた。

『仕かたがございませんから、三圓渡して置きました。』澄子はそれだけしか告げなかつた。

『…………』こちらも妻のことに就いては餘り云ひたくも思ひ出したくもなかつた。

澄子が湯に行つたあとで、またその日記を引き出して見ると、もう、ゆふべのことやけふのことも書けてゐた。

『二十八日。古き戀はわれに寐ざめの涙となれり。われは君の僞りなき告白、抑へがたき男性の要求、熱烈なる君のセコンドラブに訴へられて、われは犠牲となりぬ。昨夜、われは精靈にそむき、わが特色を棄てて』とあるが、この特色などとは僞はりでなければ、かの女の氣休めに拵らへて置かねばならなかつた偶像の一つだらう。ゆふべの降服をかの女が中止しかけた時のわざとらしい處女氣取りがまた思ひ出された。が、なほ讀んで見ると、『君の熱情に燒かれたり。ただわれら寂しき人々が互ひに半生慰藉の友となるべく誓ひぬ。』それから、またこちらの妻が來たると云ふこともあつて、『この人も亦同情にあたへすべき人なり、然しながら、これ運命なり。』

『…………』その最後の句には渠もちよツと考へさせられた。と云ふのは、女が他の女の亭主を、わざとではなく自然にだが、取るやうになつたその時に、その女がどう云ふ風に覺悟してゐられるかと云ふ問題の一實例を示めしたものだ。同情をするが、運命だと。そこに渠は澄子なる物の女らしい而も冷酷な本性を見當つたやうな氣がしたのである。かの女が頻りにわざ〳〵戀を標榜して、殊更らに人の熱意を求めるのは、自己の本性に於ける缺陷を無意識に補はうとしてゐるのであつて、だからかの女の現實を一足飛びに飛び越えて、空想などを高尚らしく見てゐるのだらうかとも思へた。

二十九日には、二人の名を並べた年始狀を郵便局へ持つて行つた。

『あれでまた文人間や新聞社に新年早々また一と問題起りましようよ。』かの女はこんなことを考へて嬉しかつた。

松山がまたやつて來て、渠の經營してゐる滿洲の新聞への寄稿を耕次に頼んだけれども、それはほんのおもて向きのことであつて、實は、私かに澄子の中野に對する秘事を聽きに來たのだ。この日の記事には、

『來は僅つて、來月見るべからず。されどわれは幸ひ多し。熱なき戀に獨り悶へし過去にくらぶれば、すべてを燒きつくさんとする君のパーニングラブはわれにより多くの幸ひありと信ずるが故に』とあつた。

三十日には、中野が房州からハガキをよこした。大原や勝浦方面へは澄子も渠に伴はれて行つたことがあると云ふから、その舊跡を思ひ忍びつつまわつてゐると云ふ思はしめ振りに、きのふの松山の來訪を思ひ合はせると、向ふは餘ほど用意ある二度目の手を盡してるらしく見えた。が、もう、耕次には少しくも恐ろしくも妬ましくもなかつた。

三十一日、おはつごもりの晩には、かの女は吉例として毎年市中を歩きまわつたと云ふから、渠もかの女の乞ひを容れて家をそとから締めて共に市中に出で、先づ淺草の活動寫眞を見たが、雨に降られて午前一時頃に歸宅した。

二

年が明けても昨夜からの雨は降り續き、風までが烈しくなつて板戸をかた〱と叩いてゐるので、起きる氣がしなかつた。まだ珍らしいだらけた氣持ちで、元日早々から寧ろ蒲團のあツたかみに親しんでる方がよかつた。年賀に出るのも詰らないやうだし、その訪問客にも來て貰ひたくなかつた。

『何と云つたツて、兎に角、元日ですから、ね』と、それでもかの女が先づ九時頃に床を起き出でた。そして空の雲からは日光も照らすやうになつた。

最初の訪問客は眞向ふの黃興氏であつたが、これは名刺を置いただけで行つてしまつた。次ぎは、すぢ向ふに住んでる若い新聞記者で——お目にかかりがてら伺ひましたと云ふので、ちよツと上げて耕次は面會した。が、この人やそこへやつて來る連中のいたづらに相違なかつたことには、そこの家の前板壁に、かの萬朝の記事が出たその翌朝には、『この奥に關根近藤』の手引きをもじつて、『この奥に醜根、妾澄子同棲』と、白墨で大きな文字を落書きし、いろんな惡口をも記してあつた。澄子が最初に氣が付いて、怒りながら、

『どうしたらいいでしよう』と云ふので、耕次もちよッと見に來てから、來てゐた父に賴んで、濡れ雜巾を以つて行つてぬぐひ消して貰つた。けれども、もう、そんなことは念頭から去つてゐたし、また今思ひ出しても根に持つ必要がなかつた。

それから、木[illegible]が不斷着のままでやつて來て、

『御年始ぢやアありませんよ』と云つた。その姿や物ごしのすツきりしたのを、澄子は初めから氣に入つてゐた。そしてその夫人も東京生れであると云ふのを、かの女は一人の味かたでも得たやうに自慢であつた。若しこちらがゐなかつたら、かの女は或はそこへものこ〱細君に會ひに行つて、おしまひにはまたその家庭に一波瀾を起したかも知れぬと、耕次には思はれるやうになつてゐた。

二日から四日にかけては、客が來たり、客に行つたりして賑やかであつたので、寂しがりの澄子をも喜ばしめたが、かの女の心は初めて會つた人に一々好き嫌ひの斷定を與へてゐるやうであつた。

四日のゆふかた、耕次がかの女をつれて訪問したのは、昔、渠が書生同様に取りあつかはれてゐた人であるから、つそしてさきの女をもつれて行つたことがあるから、十分氣を許して馳走になつた。そのあとで將棊をさしたのだが、王のあたまに步を指されてゐるのを知らないでうと〱といい氣持ちに醉つてゐた。

『どうしたのです、ね』と云はれて渠は目をさますと、澄子がをかしさうにこちらの顏をのぞいてゐた。

『おやア、失敬しよう。』醉ひさめの爲めに俄かに胸がむか〱して來たのでそとへ出た。そして淺嘉町の暗い道を步いて行く時、かの女はこちらの手をしツかり握つて、笑ひ聲で、

『あなたはほんとに可愛い人、ね。』

『………』渠は言葉なしにかの女を接吻した。が、この時にはその意味も感じも近い去年のとは違つてゐた。不自然がある爲めに本氣にならないのか、それともうわさ通り生理上の不具者か？兎に角、かの女のからだと心とがいつまでも一致して來ないやうなのを渠は非常に面白くなかつた。

初めは自分で一氣にかの女の許しを求める爲めに進んで行つたものが、今や許されてるのは却つてこの數日間の自分にまた新らしいこの疑問を生じて、馬鹿々々しくもあり、また苦しくもあつた。

若しこれがうわべばかりの征服で、ほんとうはさうでないとしたら、金を出して賤しい女を買つてるのも同樣ではないか？自分は眞實を以て眞實を得たつもりであつたが、かの女から與へてるのはよしんばそれとしても一部分の眞實であるらしい。矢ッ張り、中野から手紙の來るのが餘ほどの邪魔になるとは思はれるが、こちらにも無心を云ひに來たやうな妻があるので、この點は五分五分にされてしまうだけ不愉快でもあり、不滿足でもあつた。

で、用もないのに渠は木山のところを初めとして、その他へも獨りで出かけるやうになつた。錢湯で友人と落ち合ふのをいいしほにして、二時間餘りもそこで暮して來ることもあつた。すると、かの女も亦、早速その手に丸めた手ぬぐひとしやぼんとを持つて、式臺の上でこちらと行き違ひながら、

『わたしも行きたくッてお待ちしてましたのに』と、不機嫌であつた。『あなたはわたしのからださへ自由にしてゐればいいのですか？』

『…………』いや、その心をまでも十分に自由にしたいのだが、かの女の既成觀念に成る小理窟が邪魔になるのであつた。『僕には、あなたがすッかり中野との文通や交際を絶たなけりア駄目だと思はれます。』

『ぢやア、わたしはあなたの條件を二つとも承諾してしまひましたのに、あなたはわたしの條件の一つを御承知なさらないのですか？』

『今となつちやア、おそらく、あなたがたそれを撤回しなけりやア、僕の第二條件が合致的に承諾されたことにはなりますまい。』

『…………』かの女が強情に出れば出るだけ、こちらも亦頑固になつた。そしてこんなことは晝間のことばかりではなかつた。共に眠つても互ひに物を云はないこともできた。

一月九日になつた時、かの女の赤坂におけるおほ屋の主人が年賀がてらにやつて來て、猫を預つてあるが、どうした

わけか、糞性が惡くなつて困つてるから、取りに來て吳れろと云つて歸つた。が、こちらではそれも面倒なので、矢ッ張りそのまゝにして置くことに一決した。耕次には猫なんぞのことどころではなかつた。

『僕はいツそのこと蛇になりたい、ね』と、渠は云つた。かの女の一番きらひだと云ふ物になつて、どこへでもぬらりくらりと這ひまわつてやりたかつたからである。けれども、かの女は無邪氣であつた。そして斯う答へた、

『わたしがなるなら小犬です、ね。さうして方々の坊ちゃんや孃ちゃんのお相手をしたり、雪の中をころげ歩いたり――』

十日からみぞれが降つたりやんだりしてゐたのが、十一日の朝から雪になつて、正午ごろは本降りになり、午後三時には一寸ばかりの厚みを以つて見える限りを白くおほつてゐた。座敷の椽がは下に埋めて置く小鉢のけやきは、いつのまにか落葉して枯れ木のやうになつてゐたが、その枝にも雪が降り込んで積つてる。六坪ばかりの庭ではあるが、そこにある檜葉の四五本、椎の一本、かへで、乙女椿、あすならふ、南天などの枝にも、垣根以上に出たのは垣根以上に、地べたに近いのは地べたに近く、それぞれ綿帽子をかぶつてる。そこから右手の垣根を越えて見える廣い畑も、一面に眞ッ白であつた。

きのふは戸山の原へ行つてどこかの子供と一緒に、あのどツしりとした重苦しさうな圓ウ體で、たこを擧げて來たと云つてたお向ふの黄さんは、けふはうちに引ッ込んで碁を打つてるかして、ぱち〳〵云ふ音が聽える。大森の體育學校へかよつてるその子の方がおやぢよりつよいので、おやぢが負けて躍起になるさうだと云ふのが面白かつた。

こちらでも寂しさうに獨りでその室に引ッ込んでた澄子が、その窓を明けた音がするかる思ふと、直ぐこちらへ聲をかけた、

『まア、奇麗ですよ、あなた、來て御覽なさい、な。』

『…………』渠はかの女と淺薄な感傷心を分ち合ふことなどは好まなかつたけれども、呼ばれたので行つてやつた。そこから僅かな低い人家を押し分けて見える原のつゞきも、眞ッ白であつた。が、たとへ世界中が雪で眞ッ白にな

つたとて、それが自分の得られぬ眞實には何のことでもなかつた。

『奇麗ぢやアございませんか』と、かの女もこちらをわざと見ないやうにして話しかけてた。

『…………』雪がきれいなのをちよツと月がいいのに取り替へて見ろ。それはさきにかの女が中野をこの窓に呼んだ時の言葉ではないか? きツと雪に對してもそんな思ひ出があるに相違なかつた。

矢ツ張り、不愉快なので、晩食をすまして、直ぐまた獨りで木山を尋ねようとすると、かの女は例の寂しがつた顏つきをして、自室へ引ツ込んで行つた。

『あなたはいつも口か手を動かしてる人です。人間の群れの中にゐて絕えず話をしてゐるか、さうでなければ仕事に熱中するか、この二つしかない人です。共に靜かに戀を樂しむやうな人ぢやアありません。』

『然し戀は決して閑散な人のすることにやアきまつてゐませんよ』と答へたことを、みち〳〵思ひ浮べた。

かの女が然しこちらの爲めに直接に餘ほど心を勞してゐることは、その顏が瘦せてその聲がいつもけんどんになつて來たのに見えてゐる。割り合ひに太つてるらしいと見たかの女のふくらツ脛が案外瘦せてて、而も俄か瘦せであつたのでその皮膚が大きくたるんでるのは、中野の薄情な爲めであつたとして、こちらには責任を帶びない。が、かの女が近頃の顏の瘦せにはこちらに直接の罪があると思へた。けれども、また、この罪はかの女の眞實をかの女がかの女の方で徹底させさへすれば補へるものと思へた。

そしてかの女の眞實の徹底とは、こちらには、かの女が中野のことを根本から忘れることであつたが、かの女と向ふとがまだ下だらぬ感傷を交換し合つてる限りは駄目であつた。

木山から耕次が夜おそく十一時頃に歸つて來ると、果して中野からのハガキがかの女に來てゐた。雪に對してその二人が見た過去の感慨を漏らしてあるのだが、これにまた返事を出すのだらうと思ふと、そして向ふのハガキ(これはきツとわざと向き出しにして置いて、こちらにも直ぐ見えるやうにだらう)に對してかの女はいつも封書をやると思へば、かさねがさねその不見識が憎ましかつた。

癖にさわつて溜らないのだが、それとなく、わざと、來客がこの遲くまで待つてゐたのをあしらひながら、午前の一時まで碁を打つた。

『すみませんが、わたしはおさきへ失禮致します』と云つて自室へこちらの室から蒲團をも引ッ込んだかの女は、客が歸つたあとまでも寢つかなつた。見ると、中野宛の手紙が机の上に乘つてゐた。

『…………』渠はかの女に向つて、『これから以後は、もう、中野の書信は見せて貰はないでもいいです』と宣言した。そしてかの女の方からはどんなことを云つてやつてるのであるかは、こちらが想像してゐるだけで、初めから少しも見なかつた。

二

矛盾(むじゆん)とはかかる心か、熱烈の
　君を思はず、無情を慕ふ
からうじて忘れはてむとする我れに
　思ひ出でよと雪ぞ降りける。
われはなほ寂しく暗し、石炭(せきたん)の
　ほのほの如き戀せらるれど。
思ひ出は兎まれかくまれ、君なくば、
　この戀なくばわれは死ぬべし。
君いはず、われも語らず、ただ讀みて
　ただ書きてあり二とき餘り。

このやうな歌がかの女の十二日の記事中に盗み見られた。

十三日はまた耕次の妻がやつて來たが、

『ある時にはやる』と云つて、それを突つ返した。

實際に融通が利かなくなつて、二人は湯錢や電車賃にも乏しかつた。どうせ蒲團は一組ですんでるのだから、耕次の方のを――少しよくないので使つてゐないから――賣り拂つてしまはうかと云ふ話も、ちよツと相談だけはあつた。

十七日には、澄子がいよ〳〵辛抱できなくなつたと見え、雪ぬかるみを踏んでその父を淺草の福井町に訪ふて、小遣ひ錢を貰つて來た。久し振りでかの女は獨りで外出をしたのであつたが、

『どうもわたしは親しいお友達のうちに寄留でもしてるやうな氣がして』と、かの女の歸りがけの時の感想を述べて、

『自分の家に歸つて行くのだとは思はれませんでしたよ』と云つた。

『…………』渠にはかの女が笑ひながらでもそんなことを云ふのが氣まづく取れた。そして、ついこんな皮肉に馳せた、『そりやアさうでしよう、貧乏してますから、ね。』

『…………』かの女もただいやな顏をした。いかにかの女だツて貧乏にひるむやうなことのないのは渠にも分つてたが、お互ひに別々な意味で氣がいら立つてゐたのだ。そのゆふがた、相並んでお互ひに物は云はずに庭を見てゐると、そのかた隅の小さい椎の木のまだ雪を消え殘してゐる枝の上に、六日ばかりの月が淡くかかつてゐた。

十九日に、渠はまた留守であつたので、中野がまたやつて來たのを知らなかつた。かの女の日記には、――

『今あるも昔なりしもわれはまた
憎みはてかね悶え苦しむ。』

『…………』渠には、然し、それが全くかの女の眞實なのか、それとも半ばは例の羅曼的趣味からの拵らへごとか、いづれとも分らなかつた。然しまた廿日のくだりを見ると、

『ああ、われあやまてり。戀を捨てしはわれに非らさるか？捨てられしと信ぜし古き戀の却つてわれより去りたるに等しき事を見出せし今日、わが胸の苦悩！恨みし人に誠ありて、われの輕卒なりしを悔ゆる今日』とあるので見ると、向

ふから餘ほどおだやかに口說き返されたものらしい。一たび捨てた女を人が拾つたからツて、また取り返したくなる男の心持ちは、耕次もさきに經驗して知つてゐないではなかつた。が、それが自分の時には尤もな理由となつたけれども、人からの場合には妬ましく、憎ましく、失敬な侮辱を與へられてる氣がして溜らなかつた。そしてこちらも以前の女に云つたおぼえのあるやうなより戻しの言葉に多分かの女が釣られてゐるのを心外であつた。文句のつゞき、『わが胸の懊惱、義理てふのがれ難き人情のとりことなりて、今更らに捨て去り難きわれの、昔しの人、今の人、いづれにもかた糸のより分けられぬ窮境を如何にすべき？ああ、われ過まてり、われ過まてり！死！死！われに最善の道、たゞ一の死あるのみ。』

『…………』えい、死ぬなら、いツそのこと死ね！と、渠もつひ私かにその面白くない意味に怒つて釣り込まれてゐた。

けれども、――二十二日に渠がよそから歸つて來て、ふと直ぐに自分の一閑張りの前なる坐蒲團に坐わると、誰れがゐたのか、そこに人のあツたかみを感じた。そして何よりもさきにくわッとして耳を臺どころの出ぐちの方にすました。不都合な男でも來てゐたのぢやアないか知らん、そして今こちらに見付からないやうに逃げたかとおもへたからである。

『何をお考へですの？』かの女もそばに來てゐて、こちらの素振りに感づいてゐた。

『…………』渠は餘りにかの女を侮辱したやうなことになりかけたのを悔いた。そしてまだ多少は不審さうに、『誰れか坐わつてましたか？』

『わたしが坐わつてをりました。』

『…………』それも亦意外であつたが、『僕はまた』と、久し振りの冗談にまぎらせて、『あなたのあだし男でも來てゐたのかと思ひました。』

『そんな女に見えますか、ね？』かの女もこだわりなく微笑した、『あなたのお留守をせめてはあなたのお机のそばにで

もと思ひますから、わたしはいつもさうしてをります。』

『……………』渠はそれを聽いて、以後用事の外は、あまり外出しまいと考へた。自分がゐないと、矢ッ張り、かの女は實際に寂しいのだらうから。

　けれども、二十三日のゆふがたにはどうしても出なければならぬ用があつて、そこでヰスキと日本酒とをちやんぽんに飮ませられて歸つて來た。まだ八時をちよツと過ぎてゐただけだが、わる醉ひの苦しさに直ぐ床へ這入つた。そして前後も知らず眠つてしまつた。あとになつてこの日の日記を見ると、

『わたしは君の机に向つて靜かに坐わつてると、戸山學校の消燈喇叭が寂しい冬の夜の靜寂を破つてきこえる。場所は違ふが、檜町の寓居で五年間きき慣れた聯隊のそれと同じ喇叭だと思ふと、一種懷かしい響きだ』とあつて、いつのまにか文章が口語體になつてるが――『君は昏醉してゐる。喇叭の音が消えるとまた元のしんとした夜にかへる。机の上のウオツチのセコンドが僅かにこの間の靜寂を破つてゐる。ああ、君は何と云ふ多感な人だらう？戀も事業の一つだと云つて、戀の爲めには家をも社會をも無視して返り見ない程、強い熱烈な人で、自覺して耽溺し、又自ら社會公衆の前にそれを告白して耻を感じない程の人でありながら、愛人の前では若い青年よりまだ感じ易い涙を持つてをる。わたしは幾度か君のあつい涙をわたしの袖でふいてあげた。そしてその熱した額に手をあてて青春の血にもゆる君の顏を見た。外に向つて強いだけ、胸の中の寂しさと苦悶とに痛む君の寂しみを同情せずにはゐられない。わたしは自分ら二人こそ眞に寂しき人々だと思ふ。』

『……………』そこまでになつてゐながら、然し、なんでまた全人的になつて與れないのだと思はれた。そしてかの女の『寂しき人々』と云ふには、かのハウプトマンの脚本に捕はれた型になつてるのが想像された。

　二十四日には、兼て賴んで置いた女中がやつて來た。これで澄子にこの一ヶ月半ばかりもお三どんをやらせてあつた勞が省けるわけだ。かの女も亦それをありがたがつたが、二十五日に耕次の妻がまたやつて來たので、またかの女の落ち付きかけた心が亂れた。その日記も亦文語體に返つて、

『ああ、われは複雑なる戀の生活に堪えず。われはひたすらにもとの――寂しくとも、もとの獨身生活を思ふ。一身の不滿足、そはわれの覺悟するところ。ただ老いたる父の思ふところを如何？心しらぬ社會の誤解をいかん』云々。この夜、然し、二人は女中に留守を賴んで久り振りに淺草へ行つたのである。

二十六日には雪が降つて、三寸も積んだ。二人は別々に自室にとぢ籠つて、興奮してゐる心持ちを――互ひに誤解や憤激からの中止やのない爲めに――手紙を以つて取りかはした。そして夜中になつてから、かの女の發議で木山その他一名と四人して、そとを步きまわつた。舊曆十五日の月が寒く澄んで眞ッ白な地上を照らしてゐた。

光つて而もさく〳〵云ふ地上を踏んで、この一團は鬼王神社の橫丁をさきの通りへ出て、左りへまがつて高千穗學校の前まで行き、また左りへ一度まがつてもとの通りを歸り路になつた。その左り側で、けやきや椎の木らしいものでちよツと樹立ちをかたち造つてるその高枝を漏れる月の光の中に、大きな古めかしいわら葺き家があつて、可なり廣い庭を隔てて、また低い離れ屋が見えた。その屋敷のかまへが耕次には何だか自分の記憶に殘つてるところらしく思はれた。

『若し果してそれなら』と前置きして、渠はそこを通り過ぎながら、二十何年か昔の友人に關することを語つた。友人はそこの植木屋に下宿して、早稻田の政治科へ通學してゐた。離れが建つた當座のことで、食事はその度每におも屋からそこの娘が運んで來た。そのうちに友人とその娘とは互ひに若い思ひの仲になつた。けれども、娘の父はそれを許さなかつた。友人が暑中休暇に歸省して、秋を待ち兼ねてまた上京して見ると、かの女は既に人に嫁してうちにはゐなかつた。そして友人の机の引き出しには、女の止むを得ない事情の訣別狀が這入つてて、花かんざしを一つ添へてあつた。

『さう云ふことはただほんのあまい感情の話ではあるけれど、聽いて矢ッ張りあはれを催す、ね。』と、木山は云つた。

『わたしもそんなお話を好きです、わし』澄子は斯う木山に同感さうに告げた。『わたしもと云ふ……………』耕次は、無論、それとなくかの女の心をやわらげるつもりで語つたのではあるが、わたしもと云はれては、如何に木山だツて、そのおのれのくろうと人じみに氣取つて見せた意味を臺なしにされたに相違なかつた。

それから三四日の間は、たツた一度或大學へ臨時講演をしに行つた切り、耕次は引ツ籠つて創作に沒頭した。生活が迫つてゐて、さう〱かの女の本意を云はせようとばかりもしてゐられなかつた。二三日前の手紙往復の結果でだらう、中野がまた三十日にかの女を訪ねて來たが、渠は自分から渠等の話に立ちまじらなかつた。そしてかげにゐて、自分の心はくさ〱した。が、それは不思議にもこの客の來た爲めではなかつた。渠には、かの女がいつもこちらに許してゐながら、いつもまたとぼけてゐるやうなのを痛く遺憾にばかり思はれたのだ。

客がかの女の室から歸ると、かの女はひらきを明けて茶の間へ來るけはひがしたので、渠もこちらのふすまを明けて行つて、いきなり、兩手をひろげて踊りながら、

『お澄ひとりか――おいらなんぞは目が一つで、舌が長くツて油をなめる!』

『…………』呆れたやうにぼんやりとこちらの顏を見上げてゐるのは女中であつた。もう、ついてる電燈のもとで何か責ものをしてゐる。が、冗談と分つたかして、やがて吹き出してをんな主人の方を見た。

『…………』澄子はおだやかに微笑して手を鍋のよこにあぶりながら、『こないだお話ししてあげたお化けのお眞似ですか?』

『…………』渠はかの女から聽いた『おきよ獨りか』を踊り出す東京流のお化けばなしの文句を、かの女の名に變へて川鱈目にもじつたのであつたが、自分がどこかの坊ちやんの如くかの女から輕く取り扱はれたのを寧ろ自分からの痛快な皮肉だと思つた。自分はかの中野のやうな生まじめのうそ付きや未練ものではなかつた。直ぐ苦笑に變じて火鉢のそばへ腰をおろしたが、そこにもゐたたまらず、また自分がさきに立つて澄子をかの女の室につれて行つた。そしてまたかと云はぬばかりの顏をしてゐるかの女に向つて、先づ『僕はいくらあの人が來たツてあなたが再び誘惑されて行かうとは思ひません。それは安心してゐますが、ね』と、鎌をかけた。それから、『然し、どうしてあなたの眞實の全部が僕に與へられないのです?

『…………』

『あなたは實際に不具なんですか？』

『さうかも存じません。』こちらをまじめに見つめて涙ぐみながら『世間がさう云つてるさうですから。』

『若・さうなら』と、渠も全身がまじめになつて、『若しさうなら僕も決心して不具になる手術でも施しましよう。どうせ部分的關係なんかなくッていいんですから！』

『許して下さい、ね、わたしにはこれがほんとうの性分なんですから！』かの女から髪まで顫はせながら進んでこちらの手を取つてゐた。

それから、お互ひに氣を取り直すつもりになつて、共に散歩に出かけた。そして下が大分に缺けて出た月の寒さうな姿にも二人のあツたかみをおぼえつつ、柏木まで行つて友人を訪ねた。大酒家の友人は澄子にも酒を飲ませようとしたけれども、かの女は兼て耕次からとめられてゐる通りよそでは固く辭して一杯も飲まなかつた。庭にはその主人の趣味でいろんな草ばなの根や芽ばえが雪どけの中から月の光に見えてゐた。それをまたかの女は提燈をつけて貰つて近く見る爲めに庭へおりた。

『うちでもこの春は花を植ゑましようよ』と、かの女は歸り路で何つた。寒いので、二人はしツかり寄り添つて歩いてゐた。

『それもいいが――』渠には人間の眞實に添はないでは春も園藝趣味もなかつた。

二月一日からかの女は風を引いて發熱したので、渠はかの女のあたまを冷い水で冷やしてやつたりした。二日に二六新聞の記者が來て、また二人の生活のことを聞いた時、かの女は

『わたし達の間ですか？お互ひに一歩づつ讓り合つたのです』と答へた。

『…………』けれども、こちらには、そんな解釋では征服したのでもなく、されたのでもない。そして熱ある眞實には、國家の生存と同樣に、必らずどちらかが征服し、他のどちらかが征服されねばならぬのであつた。そして征服被征服を戀愛以外のことででもあるかのやうにして讓歩や妥協にとどまる位なら、寧ろこの最初の狀態とは既に違つてる

同棲をけふ限りに破壊すべきであつた。

二月三日には父が二度目で來たけれども、耕次はその相手をする餘裕もなく、涙を呑みながら最近に思ひ付いた一つの脚本を書いてゐた。女がその男に棄てられたと思つて、その腹いせに直ぐ第二の男を持つた。ところが、さきの男はかの女を棄てたのではなく、周圍のもの〻讒言であつた。第二の男はまた女がまだ純潔であると人に云はれたのを信じて受けたのだが、さきの男があるを知つたので直ぐ離れた。つまり、女は男を棄ててまた棄てられたのだ。第一の男は中野よりも罪や弱みがない。第二のは耕次自身とすれば思ひ切りがよ過ぎる。そしてこれは佐用姫の傳說を改造して見たのだが、女を澄子に比べて見れば、初めはちと輕卒であつたが、二度目に得た男がかの女を棄てて海に出たのを、飽くまで石にかじり付いても呼び慕ふ點は、多少は遊戯的氣ぶんに古い戀を持てあそんでるところの澄子よりも果斷で而も賴母しいのであつた。

澄子はその脚本の趣意を聽かせられて、こちらが直接にかの女に何を云つてるかが分らないほどの頑迷をんなではなかつた。かの女の自室に引ッ込んでまた考へ込んでしまつた。

一三

二月四日も渠は自分の坐で朝から頻りに脚本を書いてると、郵便をほうり込んで行く聲がした。茶の間で父と話しをしてゐる澄子がその自室の方からまわつて行つて受け取つた。

『どこからです』と、渠はふすま越しに聽いて見た。

『わたしのところへ』と云ふ返事はまた嬉しさうであつた。

『……………』また中野からに違ひないと思つたが、うツちやつて置いた。

かの女が父のそばへ立ち戻るけはひがいつまでもしないので、耕次は筆を置いて先づ茶の間へ行つて、暫らく自分で父の相手をした。それから何げなくかの女の室へ行つて見ると、かの女は机にもたれて泣いてゐた。

『どうしたのです？』渠はついそれに釣り込まれて、そのそばに坐わつた。そしてそれとなく見ると、封筒の裏が出てゐて、そこには果して中野の姓名があつた。

『これを見て下さい』と答へて、かの女はそれの中味が矢張り机の上に乘つてるのをこちらへ近づけた。

『別に見たくはありませんが、何を云つて來たのです？』

『別の手紙です。』

『…………』ぢやア、とう〳〵向ふから負けて來たのか？さうだ、——いや、——向ふはかの女がどうしても動かないのを知つて、今一つ最後の手を思ひ付いたのであらう。もう、止むを得ないから此後は一般的な交際をも絶たうとでも云ふ訣別の文にこと寄せて、つまり、今一度かの女の氣を引いて見ようとしてゐるのだらう。かう考へると、こちらには、中野なる物が少しく手ごたへある人物になつたやうで、氣持ちよくもなると同時にいよ〳〵氣の毒にもなつた。『けなげにもよく云つて吳れたとでも返事したらどうです？』つい、またこんな皮肉が出た。

『…………』かの女には答へがなかつた。

『然し若し眞實の力が向ふに強いと思ふなら、今から直ぐにでもお歸りなさい——いやな義理などをこツちへ立てる爲めにあなたがわざ〳〵僞善の生活をつゞけるにも及ばないでしようから。』

『さうわたしをお突ツ放しになるなら、わたしも考へます。』

『それがいいでしよう。』義憤のやうな感じに滿ちて渠はそこを立ち離れた。そして父と共に茶の間で碁を打ち初めた。そして、父をさへこちらに取り込んで濟けば、かの女が逃げようたツて逃がすものかと云ふ意氣込みで碁盤のおもてに向つてた。

　すると、午後三時頃であつたが、かの女は獨りでどこかへ出て行くやうすであつた。そしてまだ玄關を出るか出ないうちに、父はこちらからかの女に聲をかけた。

『いいかい、まだよく風が直つてないのにそとへ出て？』

『…………』耕次はかの女に返事がないのをちよツと不思議に思ひ、茶の間から立つて行つて客間の障子を明けると、今、不斷着のままで門を出て行く後ろ姿があひの垣根の上から見えた。まさか、中野のうちへなど行くつもりぢやアあるまいと安心して坐に戻つて來て、『實は、中野から絶交狀が來たので考へ込んでるのです。』

『馬鹿な』と、父も受けて、『丁度いいぢやアないか――あんな男を！』

『そりやアさうですが、澄さんにはさうも行かないんでしよう。』

『僕の番だ、ね』と云つて、父はまた碁盤のおもてへ熱中して來た。

『あら手のやうに盛り返して來ました、ね』と云ひながらも、耕次はそれとなくまだ心配が殘つてて、かの女の早く歸るのをこころ待ちに待つてゐた。が、その勝負が付いても姿を見せなかつた。今の負けをまた取り返した時も、まだであつた。次ぎにまた負けてもだ。

『おそい、ね』と、父も少し心配をし初めたやうすだ。

『…………』あんなざまで矢ツ張り中野のところへ行つてしまつたのか知らん？若しさうなら、ああ云ふ風に突ツ放した言葉を用ゐたのがこちらの悪いのだから、今更らのやうにそれが後悔された。そしてかの女が行つてしまつたものなら、ここに殘つてる老人も直ぐこちらとのゆかりが絶えるので、これも亦向ふへ行つてしまうに相違ない。そしてまたかの女の爲めに置いてやつた女中も必要がなくならう。斯うして耕次は自分がたツた獨りぽツちになる時の狀態までが思ひ見られて、父に對しても世間に對しても、もう、自分の面目が全くつぶれたかのやうにこころ苦しかつた。女中が食事の仕度をどうしようと聽いたのに對しても、自分の燒けやら憤りやらの爲め、わざとうツちやつて置かせるつもりで、それとなく、まア、待てと答へて、父に向つては『もう、歸るでしようから――』

二時間ばかり勝負をしたところへ、かの女は歸つて來た。そして、

『今戸山の原へ行つてまゐりましたが』と、泣いてたらしい目を見せまいとしながら、父へとも付かず、こちらへとも付かず、何げないやうに、『冬の日が火葬場の森に沈んでゆくところがようございました。』

『そりやアよかつただらう、ね。』父は娘の方を見向きもしないでだが答へた。『冬の入り相は一體に氣がしまつていいものだ。――さア、占めたぞ！』

『…………』こちらは父の突然な叫びで氣が付くと、大きな石の唯一の聯絡點を中斷されてしまつてた。そしてこの投げでおしまひにした。

『けふは舊曆の年越しだから――一つ景氣よく』と云つて、食事に晩酌の勢ひも添つた父は大きな聲で舊式な豆まきを初めた。『鬼はアそと、福はアうち！』その聲がさきに『鞭聲肅々』を吟じた時のやうにかすれたけれども、夜の空氣をまことに平和に破つて聽えた。が、それはただ父のやつてることに對して一時の敬意を表したあひだのことで――そのあとはまた家のうちにもそとにもうわツつらにだけの靜けさであつた。

病後の身をそとで冷えて來て燒け酒をあふつたせいか、かの女はおこりに取りつかれたやうに振るつてゐた。

『お先きへ休ませて貰ひます。』斯う云つてかの女はこちらの書齋兼用の客間へ立つて行つた。

『…………』渠はその後ろ姿を目で見送つて、さまを見ろと云つてやりたい氣も出ないではなかつた。が、この不快をうち消してしまうほど痛切な情愛がかの女に對して起つて來たので、自分もあとを追つて早寢に行つた。そして自分は一ことも口に發しなかつたけれども、かの女のふるへと忍び泣きとを自分にも感じつつ、同じやうな思ひをしてゐた。

まだ十時頃であつたが――締まつた門の戸を叩くものがある。そして木山の聲やその他のものの聲が聽えた。で、父が門を明けに出たあひだに、こちらは蒲團をすべて茶の間の方へ押し出して置いて、また衣物を手早く改めた。すると、這入つて來たのは木山、外二名と、木山夫人とであつた。こちらもこれに元氣を得たので、老人なる父までも入りまじつて、雜談をしたり碁を打つたりして、午前の二時までに及んだ。

その翌朝は不斷よりもおそく起きて、二人一緒に湯に行つたが、耕次は湯屋でいつも衣物の襟にさして置くピンを失つた。かの女からゆび輪がはりに貰つた純金ネクタイピンで、梅のすかしが這入つてたものだ。歸宅のうへ、殘念がつて

かの女に告げると、かの女はちよツといやな顔をして、

『わたし、知りませんよ――また不吉なことができて!』

『どうも濟まないことをしたが――』渠は斯う多少とぼけて云ふほかには申しわけの仕やうがなかつた。そしてこれをまた一つの不吉と云ふなら、かの女の今一つのそれは何であらうと考へて見た。中野の絶緣狀若しくは絶交狀のほかにはないではないか?そしてそれをも一つのつぢうらと見てゐるやうでは、かの女がよく易者にかよつたと云ふ世間のうわさも嵩さらうそでないやうな氣がした。こちらには、かの女がよく夢を語つたりまたつぢうらを見たりする女の一人になつてゐた。して見ると、かの女が戀に遊戯分子をまじへたり、羅曼的に走つたりするのも止むを得まい。渠はなほかの女のかかる無意識の迷信を破らねばならぬのであつた。

ところが、同じ日に、三度定の目の不吉が來た。中野の絶緣狀にかの女はなほ未練らしくも返事を出したと見え、それが封じのまゝ向ふから返されて來た。

『失敬ぢやアございませんか、向ふから永別の手紙が來たから、こツちからもおだやかに永別の言葉を送つたのですのに?』かの女は斯う云つて、耕次の見てゐる前で、添へ書きも何も這入つてないおもて封筒と共に、かの女の封じのまゝなる手紙を引き裂いた。

『…………』渠はただ見てゐて、向ふとかの女とどちらに對しても痛快であつた。

『あんな　らない人ツたら、ない!呆れてしまつた!もう、誤解なり呪ふなり勝手にするがいい!それから、こちらに向つて、『わたしはあなたのおツしやつた通り揶揄されてしまひました。』

『いや、その力が向ふも氣が利いてるんぢやアないのですか?』

『どうしてです?』かの女はこちらに對しても亦ちよツと不機嫌を見せたが、直ぐなほつた。と云ふのは、渠が斯う云つて聽かせたからである、――

『それで向ふも』と、笑ひながら、『あなたに心を僕ばかりに向けろと忠告したやうなものですから。』

『…………』かの女は然しちよッとにッこりするだけであつた。

『まア、湯にでも行つて一あびしていらッしやい』と云つて、かの女の留守にまたかの女の日記を盗み見ると、中野からの永別狀が來た二月四日のところに、

『熱い涙がとめどもなく出る』と書いて、左の文句が引用してあつた、——

『僕はあなたを今一度私の手に取りかへす時があると信じ候。澄さん、今一度かやう呼ばして下さい』とは、こちらに安ッぽい新派劇の泣き場を思はせたが、却つてそれでよく向ふの下品なした心が讀めた。『若しあなたがた圓かな月を眺める時は、同じ月をどこかの空で失戀の恨み——『馬鹿！向ふはおのれの意久地なしから自身で失戀と云へば失戀をしたのぢやアないか？お友だちを思ふ房子さんのくやし泣きに對して、その時どんなに冷淡な返事をしたかを正直に白狀して見ろ！如何に房子やこちらをそのことでは信じない澄子だッても、一遍にその白狀で愛想をつかしたに相違ないのだ。——『を抱いて見てゐる人があることを思ひ出して下さい。戀を失つた淋しい人にも——』ふん、何が淋しいのだ、飽くまで妻子と共に住みながら！『まだなすべき仕事があるでしよう。僕はもう再びお目にかかりますまい。あなたの幸福を祈つてゐます、」』

『…………』こちらには、矢ッ張り、かの女をおびき出すあまい手としか讀めないのである。けれども、かの女はこれをそッくり正直に受け取つたものと見え、

『今これだけの熱があるなら、なぜあの時もう少し強くなれなかつたのです。周圍の爲めにでも、なぜすげなくわたしを突ッ放したのです。わたしはそれをあなたに聽きたい』と、口語的に書き足してある。

『…………』こちらには、かの女の云ひぶんの方が、尤もに見える。そして多分この意味でかの女が最後の手紙をやつたものとすれば、相變らず向ふに於いては手ごたへがなかつたのだから、七分まではいよ／＼の斷念と三分のその賴みとを以つて、それを思ひ切りがいいかの如く突ッ返して來たものらしい。兎に角、もう、これでその方はすッかり安心になつた。

市内へ用事があつたので、午後二時頃から出て、十時過ぎに歸宅して見ると、澄子は客間の疊の上に横になつて、その上から蒲團を着てゐた。そして、

『お歸んなさいまし』と、近頃にない優しみを表して起き上らうとした。その顔がおそろしいほど眞ツ青であつた。

『どうしたんです？』また燒け酒でも飲んだのかと、こちらはその實かの女の馬鹿々々しさをむツとした。

『苦しいので、早くお歸りをお待ちしてゐました。』

『どうして苦しいんです？』立つたまゝかの女を瞰み付けて、矢ツ張り、つよい語調であつた。

『…………』父がそこへ茶の間とのふすまを明けて出て來た。『實は、今、木山さんがどこかの雜誌記者をつれて來て、これに隨分飲ませたのだから――』

『誰れです、その記者は？』

『秋田とか云つてたが――』これも立つてたが、少しおど／＼してゐた。

『ぢやア、おほ酒飲みです！』これは些か誇張に過ぎたやうに思へたが、耕次は父とかの女とをおどし付けるには役に立つと見た。

『さうだらうよ、一升徳利を下げて來たくらゐだから。これがまたさう知つたらよせばいいのに、調子に乘つてばかりゐて――。』

『お父アんが見てゐて、またどうしてとめなかつたのです？』

『いや、とめても聽かないんだから――とう／＼みんなが歸つたあとで喰べた物を戻してしまつて。』

『馬鹿げ切つてる！』渠はかの女がまたぐツたり倒れたのを上から見おろしながら、涙となつて溢れ出ようとする忠告を自分の喉のところで暫らく差し抑へて、『あなたもまたなぜさう飲んだのです？』

『あなたがお留守でしたから』と、かの女は全く往生してゐるやうになつてた、『お代理をつとめなけりやアと思ひましたので――』

『馬鹿なことです。そんな代理なんか何もするにやア當りません！』友人どもから自分が侮辱されたも同樣だと思ふ憤りでだが、渠には、自分が斯うまで意張つて物が云へるのはかの女の中野との絕緣があづかつて力を添へて呉れてるのであつた。『早くお休みなさい、早く！お竹もなんで床を敷かなかつたのだ？』

『さうだ、らくに休む方がいいよ。』父もそれから女中に向つて、『早く床を取つてやんな。』

澄子が床に這入ると、耕次はその枕もとに坐わつて、先づ自分の手をかの女の仰向きのひたひへ當てて見た。まるで死人のやうにつべたかつた。

『…………』渠はこちらがあべこべにぬくめてやらねばならぬ順番が來たと思ひながら、聲をずツとおだやかにして、『以後、あなたは酒をうちでもお愼しみなさいよ。』これは自分がさう飮まぬだけに十分うらはらなしに云へることであつた。

『許して下さい、ね』と、かの女もすツかり從順になつたやうすだ。『わたしが惡うございましたから。』

一四

二月六日には、古谷露子と云ふ小說家志願の婦人が尋ねて來た。この婦人は耕次がこちらで弟子にしてゐるのでもないが、向ふから弟子のつもりで前にはよくやつて來た。そしていろんな相談をも持ちかけられるところから隨分渠の心に親しく這入つてゐた。

丁度渠が北海道まで追ひかけて來た女を東京でめかけ同樣に世話することになるその以前のことであつたが、渠は露子をその借り二階の住まひに訪問した時、何かの話から持つて行つて、さツくはらんに、

『どうです、僕の女房になる氣はありませんか』と云つた。

『…………』かの女はこの時その脊中で泣く兒をゆすりながら、疊の上に立つてゐた。凄いほど美人の資格ある顏をちよツと赤くして、それでもこちらを信じ切つてると云ふやうな落ち付きで微笑しながら、『奥さんがおありぢやア

ございませんか？』

『あれはどうせ別れるつもりだが――』その時にはまだ渠は容易に自分の妻と離婚ができる、のと思ひ込んでゐた。離婚をいよ〳〵持ち出して今に至るまで手こずつてる經驗がまだ附いてなかつたからである。が、斯う云つてかの女を見あげながら直ぐそのあとをつづけた、『然し、それには條件がある。』

『…………』かの女も微笑をつづけてこちらの顏を素直に見つめながら、一二歩あるいてゐたのを立ちどまつた。

『その赤ン坊をどこかへ呉れてしまうのです、ね。』

『…………』かの女は自身を棄てた男にはもう思ひ殘りはないが、そのかたみだけは――と云つた風にして、『子どもがあツたツてかまはないぢやございませんの？』

『ぢやア、駄目、さ。』渠はそこまでの責任を持つ氣がなかつたので、その話はそれツ切りにして、相變らず無事につき合つてゐた。が、渠が妻のゐるところへ滅多に歸らぬやうになつてからは、かの女は來てもこちらが留守がちなので來なくなつてから、こちらが樺太へ渡つたりして、その間殆ど一ケ年半ばかりを置いて、久し振りの訪問であつた。

　こちらがまた東京に歸つたのに張り合ひができて、かの女も創作を二篇ばかり書いたからと、菓子折りなど持つて來て、二時間ほど話していとまを告げた。が、その歸らうとする時に、かの女はつれてゐた子供――もう、ちよこ〳〵歩けた――の小便を椽がはのはなでさせた。これを見つけた澄子は、云ひやうもあらうに、つけ〳〵と、

『そんなところでおしツこをさせちやア困りますよ』と云つた。

『僕の客になぜあんな失敬なことを云つたのです』と、渠はあとで澄子を責めた。父もそのそばで聽いてゐた。『正直に云へば、曾ては一緒にならうかとも思つた人ですが、云ふが子供は手離したくないと云つたので、その後も交際はしてゐますが、決して關係などあるんぢやございません。それに、澄子さんは何だか燒き餅らしくつんけんと――第一、初めての客に對して見ッともないぢやアありませんか？僕はあなたの』と、今度ははつきりかの女に向つて、『お客

が來た時にはそんなざまを見せたことがありますか？』

『ですから、わたしは最初おだやかに會つてやつたぢやアございませんか？然し向ふが苟くも一家の主婦たるものを馬鹿にしてかかつてました。』

『いや、そんなやうすはなかつたが――』小說の原稿などはそれを見て貰ふ者に手渡しするのが當り前だらうからと思つた。

『ありましたとも！第一、みやげを持つて來てゐながら、わたしが出てゐる時にわたしに渡さないで、あなたに出すとはどうしたことです？』

『成るほど、ね。』渠は女がいよ〳〵主婦氣取りになつて來るとそんなこまかいことにまでも氣をもむのかと感心した。が、なほ、歸つて行つた方をもかばつてやるつもりで、『然し、向ふはそんなことにやア無邪氣であつたのだらうよ。』そして心では、露子が或は澄子をどう見ていいのかに迷つたから、兎に角、こちらにさへ渡せば間違ひツこはないと思つたのぢやアないかとも考へられた。

『なんにしろ』と、父も最後に口を出して、『僕もあの時直ぐ思つた、ね――主人のところへ來た客が如何に女だからツて、主婦たる者があア叱り付けるのはよくなかつた。』

『何もわたしやア燒き餅なんかで――』

『さうでないにしても、さ。』

『…………』耕次は、もう、その親子の話にまかせてしまつて、自分では露子さんがこれで二度と再び來ないだらうと考へてた。然し、もう、たとへ來ないでもよかつた、澄子の征服をして行けさへすりやア。

ところが、かの女はこれまでに於いて最も從順であつたゆふべでさへ、その心とからだとが合致しないで、別々であつた。そして渠がそれを追窮すると、かの女は

『中野の爲めでなかつたのがお分りでしょう』と云つた。

『ぢやア、何の爲めです？』

『多分、あなたにまだ奥さんがおありの爲めでしよう。』

『…………』そんな平凡なことを云ふ女であつたのかと、一ときは興ざめてしまつたが『僕は、然し、あなたが中野のことを思つてたやうに僕は僕の妻を云つてやアしません。』

『五十歩百歩でしよう。』

『…………』渠はそこで考へた。かの女はそんなことを云つた上にも、けふはまたこまごましい主婦の權利じみた物などを求めて、こちらの左ほど重んじてもゐない家庭のことまで氣にして、つまり、いよ〳〵出てます〳〵平凡なのである。渠はそれを卑しむよりも寧ろあはれましくなつたので、つとめて惜しんでた自分の涙と共に、夜になつてまた部分の全體化的燃燒とその眞實とを說いた。そしてそれが人間の生活としては偏肉や偏戀よりもずツと正しく、ずツと高尙で、而もずツと大切なことを說き明した。『よく考へて御覽なさへ。不斷のことは緊張した一刹那の餘波に過ぎません。その大切な刹那に全人的合致ができないで、どうして不斷にばかりその合致の結果なる愛がありましよう？で、あなたが若しどうしてもこの愛を實現させることができないとおツしやるなら、僕はあなたを矢ツ張りうわさ通りの不能者と見て、僕も亦こんな要求の生ずるその根元を切斷致しましよう。』

『…………』かの女は顫えながら暫らく考へてゐた。そして淚ごゑになつて、『では、あなたもお死にになろうとおツしやるのですか？』

『いや、お付き合ひに不具となつてあなたと生きたいのです！』

『感謝します。』かの女は暫らくまを置いてから、『然し、それだけ貴いあなたを不具者にしたくはありません。わたしはいつ死んでもかまひませんけれど——』

『僕の爲めに死ぬだけの氣があれば、その氣であなたの全部をお投げ出しなさい。』

『…………』かの女はます〳〵顫えてゐたが、溜らなくなつたと見え、起き出しながら、『わたしはあなたの御親切

にはお報いすることができない身でしよう。死ぬか、投げ出すか、どッちとも父に正直に相談して處決致します。』

『…………』渠はかの女が直ぐ六疊の方へ行くかと思つてひやりとしたが、かの女は椽がはへ出て便所に行つた。

そしてまたこちらへ歸つて來てから、

『わたしにはまだ一つ云ひ後れた條件がございます。それを云はないのに免じて、どうか今少しおそばに置いて下さい、ね――父にまた心配をかけるに忍びませんから。』

『何です、それは』と聽いて見たが、かの女は云ひたくないとばかり答へたので、どこまでも何か一つ秘密を持つてゐたがる女だ、わいと思はれた。

一五

その翌日、父が歸つてから、かの女が俄かに丸髷を結つて見たいから許して吳れろと賴むので、耕次は女中に命じて髮結ひを呼んで來させた。そして六疊の方でかの女が近ごろ珍らしくほがらかな聲を出してるのを、こちらの想の中絶した間を利用して二度も見に行つた。

髮結ひの年はまだ若いやうだが、その腕は十分にあるものと見えた。髮は立派にでき上つたのである。

『どうです、ね』と云つて、かの女がこちらの机のそばへ來て坐わつて、結へた髮を見せた時には、人がらが殆ど全く改まつたかのやうに引き立つてゐた。そして右やひだりへ肩があがるやうな、もとの堅苦しいからだ付きのあとなどは少しも見られなかつた。

『なか〳〵結構だよ。』斯う一つ嬉しがらせて、渠は何げなくかの女の髮を左右に見まわしながらも、私かに自分の顏が赤くなつたやうに思へた。さきに紹介者の房子さんが美人だと說明したのも、多分こんなところを見て知つてたからだらうが――それを今、自分は全く競爭者なしに引きつけてゐるのであつた。できることなら、一組、立派な裾模樣をでも拵らへてやりたかつた。

ふと、かの女に自動車をも備へてやらうと云つたと云ふ男はどうしてゐるだらうと思ひ出された。

兎に角、けふの丸髷は、もう、かの女の所謂『狼よけ』ではなかつた。そしてかの女が中野に對して『關係があるも同樣ぢやアありませんか』と云ひ迫つたと云ふその關係は、今やこちらに於いてもツと實際化してゐるのであつた。若しここにかたなが一と振りあつて、それをこちらが拔いてかの女に迫ることができるなら、かの女が中野へ迫つた時のよりも一層深い理由を以つてだらう。が、かの女の所謂肉を征服するにもこちらが全く强迫がましいことをしなかつたのであるから、かの女の分離した心を奪取するにも無論强迫はしたくないのであつた。

兎に角、かの女が眞劍な戀を初めて中野におぼえて、それを今ではこちらに移さうと努めてゐることだけは事實だと感じられるので、渠はその點ばかりにでも可愛さが餘つて溜らなくなつた。そして直ぐ引き寄せてかの女を接吻してやつた。

かの女の前身に對するいろ／＼な疑ひなどは、もう、渠に少しも問題ではなかつた。が、二月九日に、かの女が或人から聽き込んだと云ふところによると、渠にまた新らしい問題ができた。簡單に云ふと、渠にも友人なる島田と云ふ男のやつてた仕事にかの女が雇はれてゐたが、あまり面白くないのでやめた。すると、同じやうに雇はれてた一名の男もまたやめて、かの女のところへ島田に對する不平をこぼしに行つた。それを島田は、この二名がくツ付き合つたが爲めに面目がなくなつて同時に辭職したのだと、今になつてまたこと新らしく吹聽してゐた。

『あれはあすこの下女から成り上つた細君が下らない卑劣な根性から割り出した想像ですが』と、かの女は憤慨してこちらに辯解した。『若しあの時わたし達が關係してゐたとしても、わたしはあんな夫婦に面目ながるやうな意久地なしぢやアありません。』

『ぢやア、さう云つて念の爲め手紙でも出して置けばよからう。』

『いえ、わたしはぢかに行つてあいつの青瓢簞のやうな横ツつらを張り倒して來ます。』

『…………』渠は、如何にも、向ふの島田と云ふ男が女にかげでだけもそんな意氣込みを見させさせるに適するやう

なひよく／＼した弱みのあることを思ひ浮べた。だから、それに對してかの女が若し言葉通りの亂暴をしても困ると思つた。十日になつて、かの女が獨りで行くと頑張るのをなだめて、自分も一緒について行つた。

『細君をお呼びなさい』と、かの女は迫つたけれども、島田はわざと呼ばなかつた。そして渠自身で茶の世話などもした。それを一層不滿に思つてか、かの女は、『ろくに約束通りの月給も出さなかつた癖に、よくもそんな下だらないことが云へたものです、ね？』

『あなただツて』と、島田は青くなつてからだを顫はせながら、『かさを借りて行つた切り、返さなかつたでしよう？』

『あれは、もう、初めから破れてゐましたから、お返ししたツて使へる物ぢやアなかつたのです。』

『…………』耕次はこれを聽いて、かの女も餘りに思ひ切つたことを云ふと思へた。その當座に既にさう云つてもいい物であつたのか、それとも今云はれて俄かに賣り言葉に買ひ言葉を出したのか、どちらともこちらには分らなかつた。

『然し』と、島田は口をむぐ／＼させながら、『直す道もあります。』

『ぢやア、わたしの方でも取るべき物を取らなかつたのはどうして吳れます？』

『まア、そんな過ぎ去つたことはお互ひに云はないことにしまして、さ』と、耕次は兩人の仲を取つた。そして兎に角誰れと誰れとに澄子のおとこるやうなことをしやべつたのかと聽いて見ると、島田は三四人の名を擧げた。そして、

『それにもそんなうわさがあつたと云つただけで――』

『そのうわさのもとはあなたの細君ぢやアありませんか？』

『…………』島田はかの女の追加に取り合はないで、『別にさう云ふ事實だと斷言したのぢやアありません。』

『兎も角も、ぢやア、その人々には君から今度お詫ひの節に思ひ違ひのないやうに取り消して貰ふことにして』と、耕次は渠に賴んで、かの女にも口をつぐませた。自分もかの女をやがては正式の妻に直すつもりでゐる以上、かの女に一つでも面白くないうわさの多いことは望んでゐなかつた。

自分がついて來たからこそ島田も、無事に済ませることができたのだが、渠には恐らくさうとは思へまい。で、このことの爲めに、自分はどうせ淡い交際仲間の一人をまた失ふのだらうが、それは自分もかの女の愛に對して止むを得ないのであつた。

が、――斯うしてこちらは自分のたださへ少い友人のうちから二人なり三人なりを失ふに從つて、自分の心はますますかの女にばかり熱中して行くのだ、それにも拘らず、かの女の方は最後に中野を失つても、直ぐまたその代りに何か別な詰らない物をその心に補つてゐるのである。一つには、又こちらどもの生活に冷かし半分の興味を持つて訪ねて來る客が少くなつたからでもあらう。それを趣味からであると思へばそれまでだが、こちらには何だかそれだけ水くさかつた。八日には花屋が白桃を持つて來たと云つて、その喜びかたが尋常ではなかつた。わざ／＼さうしてこちらの一直線な態度に反抗を見せてるのぢやアないかとも考へられた。

『如何に奇麗な花でも、人間眞實の生活に添つて居なければ何でもない。』

『あなたは文學者に似合はず無趣味なんですよ。』

『そんな淺薄な趣味なんかで文學者は動いてるんぢやアない――一番重大なのは矢ツ張り人間その物の趣味です。』

『花を愛するのも人間の趣味でしよう。』

『…………』渠はかの女との間にいつも斯うした行き違ひがあつた。そしてそれを一々說き明すのも、もう、面倒であるほど毎日の仕事が急しかつた。そしてその間のかの女は、こちらから見ると、まことにゆるみたるんだものであつた。

かの女が白桃を愛するのもいいが、かの女の白好きは既に姑息な因循になつてるのである。帝國議會の傍聽席に於ける『白襟、白うら、白そでの美人』をいまだに夢見てゐるのに過ぎなかつた。そしてまたむく毛がこれも白いからであらう、かの女はどこかよそから近頃よくやつて來る小犬をいつも『ポチ、ポチ！ポチや、ポチよ』と呼んでわが子のやうに可愛がつた。

『…………』女房がその子に目もなく持つ愛情をも半ば燒き餅じみて見る男の經驗をして來たこちらには、そしてかの露子との交渉にも先づその子をよそへやれとまで云つたこちらには、澄子が犬や花を愛するに對しては一層抗議がましい言葉が出ないではゐなかつた。

十二日には、音樂と芝居とに關係ある友人來がて、澄子を女優にしたらどうだと勸めたのである。

『舞臺に出てさう引き立たない顏でもないから』と。『近代劇の女優なら、踊りの素養などはなくツたツてできるから。』

『それもいい、ね。本人がやらうと云へば、僕に不賛成はないが――』實際、若しどうせかの女が最後の不具者なら、今日以上に追窮しても駄目なことであつた。寧ろ、その不具から來た、不滿や寂しさを花や小犬に費やさしめるよりも、一つ花々しく舞臺にでも立たせる方がかの女の爲めにも一生の思ひ出にならうと思はれた。けれども、自分はこれまでに、もう、三名も女優の志願者には失敗してゐた。一には、藝者を受け出して裏切られたし、二には、有名な本願寺の役僧の落ちぶれた家族の娘をその約束で引き受けて、見習ひの最初から立派な衣物を要求された爲め駄目になつた。三には、餘りに不美人であつたが爲め、芝居の關係者がはから受け付けられなかつた。兎に角、かの女を友人もゐる前へ呼んで話して見ると、

『惡いことでもないと思ひますから、暫らく考へて見ます』と答へた。で、その翌日になつて、渠はあまり熱心でなしにだがまた尋ねて見た。

『きのふの話はどうです？』

『…………』かの女もさう乘り氣になつてゐなかつた。『それよりも、わたし』と、ちよツと云ひにくさうに言葉を切つてから、『矢ツ張り、斯うしてあなたの熱い愛を受けてゐたいのです、わ――あなたさへこの狀態でお許しになつて下されば。』

『これ以上に』と、渠は重苦しい氣持ちで、『若しどうしてもあなたが進めないとすれば――』この夜は寒かつたけれども、月はまたよかつた。その輝くおもてに、ふと、渠は鏡を思ひ出したので、自分の机の前へ行つて懷中かがみに自分

を爲して見ると、一時は多少恢復して來たと思へた顏が、また自分ながら凄いほど痩せてゐた。

かの女の近況を心配してか、それともこちらにも親しみをおぼえてか、十六日に父がまたやつて來た。すると、生憎、その日になつて初めて、北海道からの途中で別れた女が——新聞でこちらの住所を知つてたからであらうが——尋ねて來た。そしてさきに東京でこちらがかの女のよそ行き衣物を質に入れたが、それを出す金二十圓を渡せとのかけ合ひであつた。

渠はこの女の最後に於ける不都合などを殊更らなじりたくもないので、云はれるままに金をやることにして、それができるまでの期日を入れた證文を書いて渡した。そしてこちら二人も同じく電車へ出るついでを、かの女と共に出た。そしてその途中で澄子がたばこを買ひにちよツと店屋へ寄つたあひだを、渠は久し振りに自分の心の緊張をゆるめて、笑ひながら低い聲でかの女にのしかゝるやうに斯う云つた、

『さうこわい顏をして來ないでもいいぢやアないか？今度來る時はおとなしく、もツとおだやかにして來るがいい。さうすりやア、あれだツて萬ざら惡い氣の女ぢやアないから、お前も多少話し相手にならうと云ふものだ。』

『…………』かの女はこちらを矢ツ張り恨みがましく見詰めたが、その目つきには少し和らぎが見えた。

『…………』さうだらう。たとへさうでも、今更らこちらはもと／＼通りによりを戻さうと云ふやうな野心は微塵もないが、何といつても小一年ケ間は、隨分いろんな苦勞を共にしたのであつた。思へば、可愛さうなこともあつた。

一六

最初の女中はお嫁に行つたので、近處の桂庵から老婆が來てゐたが、それが十七日の夜に金を持つて買ひ物に行つた切り、とう／＼歸つて來なかつた。すると、夜明けの五時半頃に臺どころの戸口を叩いた。どうしたのかと聽いて見ると、狐につままれて一晩中歩いてゐたとの答へだ。馬鹿々々しい！こちらの想像では、買ひ物の金で酒屋をちびり、ちびり飲み歩き、いい心持ちに醉つてしまうと、裏手の明き家まで歸つて來て、そこの床の上でぐう／＼眠つてゐたの

だ。そして餘り寒くなつたので、斯う早くそこを出て來たのだらう。皆もこれには呆れてしまつた。一錢でも一錢でも持てばちよツと酒屋に行くと云ふ惡い癖の老婆で、これまでにも買つてある酒がいつのまにか思つたよりも減つてゐた。

『なんしろ着がへ一つない婆アやで』と、澄子は顏をしかめて父に語つた、『寢まきの上に袢のぼろを隠す前かけを一つして來たのですから。』

『…………』さうかと云つて、それをこちらが追ひ出せば、早速澄子が困るのであつた。

ここ一週間或は十日ばかりを、渠は自分の仕事にばかり熱心であつた。そして夜も午前二時より早く寢に就いたことがない。その間に雪が降つたり雨になつたり、また雪やみぞれがあつたりしたけれども、自分と澄子との間には殆ど葛藤がなかつた。蓋自分がかの女をその根本において追窮するひまさへもなかつたのである。

かの女は却つてそれを喜んでるやうに、ただこちらの餘りに仕事に精力を籠めてる爲めの健康をばかり心配した。が、それだけこちらはそこに一方の空虚を無理にこらへてゐたのである。それとも知らないで、老いてる父はこちらどものおもて向きだけの無事を喜んで、十九日に引ツ返して行つた。

その夜、二人がまだ床に這入らぬうちに、互ひの暗闘がまたおもて向きにもぶつかつたのである。かの女は『わたしは刹那の滿足で明くる日は行路の人となつても構はぬやうな發作的の戀には不贊成です』と云ひ放つた。

『…………』まだかの女の生熱氣がぬけてないのかといきどほらしくなつたので、渠は『何が發作的です』と少し聲を荒らげた。『僕は刹那の緊張に吸收されてない日常や永久なら、あつたとしても取るに足りないと云つてるんです！』

尖つた一點にはいのちが充實するが、延びた尺度は死んだ物に過ぎない。どちらの主張してゐる戀を『たわむれ』であるかと云へば、寧ろかの女の尺度癖にあるではないか？戀の永久とはその尺度で、その內容は却つて刹那の充實緊張に在る。そしてそれを實現させようとするのは、決してたわむれでも下等でもない。熱烈の度から云つても、戀なり愛なりを一日でも二日でも押し延べようとして、その刹那をうとんじ忘れる方が不熱心に傾いてるのである。

これほど簡單明瞭なことを云はれて分らないかの女でもないが――と思ふと、矢ツ張り、こちらには、かの女がこちらを愛しながらもその自己の不能を飽くまでも云ひのがれようとする口實を拵らへてるのではないかと云ふ風にばかり見えた。今夜はどうしてもそれを突きとめてやらうと考へながら、渠はかの女を無理にさそつて家を出た。その留守中に、だらしない酒飲み婆アやの爲めに、たとへ無けなしの家財道具をすツかり持ち運ばれてしまつたとしても、そんなことは少しも憂へるどころではなかつた。

舊曆十一日の月は、もう大分に中天を外れて冴えてゐたけれども、まだ滿ちるに至らないその光に却つて原ツぱへの霜のぬかるみ道を目の前にちら付かせた。そして夜ふけの寒い風がうす暗く二人の足もとに吹いてゐた。が、それを避けないで寧ろ氣持ちよく歡迎したほど、渠のあたまは熱してゐた。

家から左りへ一直線の道をいよ／＼人家のなくなつた原ツぱへ突き當ると、渠は大きく掘れた穴の左りへ道を取つて、枯れ芝の上を五六歩さきへ出た。が、考へて見ると、その向ふにはまばらなくぬぎ林しかなかつた。その間へ初めての雪を踏みにかの女と手を取り合つて來たことはあるが、その時を今から思へばただうわツつらの情愛を交換した言葉しかなかつた。今やそんなあまいことではうそにも滿足してゐられないのである。

ちよツと踏みとまつたが、それからあと戻りをした。そして工兵どもの練習のあとかたなる大きな長四角畑のやうな穴のふちをまわつて、さきの角からその穴と陸軍射的場のまとなる山との間を二十間ばかり眞ツ直ぐに進んだ。そこでは射的場が二つに分れて、その兩方を二つの高い煉瓦塀で仕切つた狹いぬけ道が右の方へ長く向ふまでとほつてゐる。渠はそれへかの女をつれ込まうかと考へた。そとからよくのぞいて見ると、うへの方へ少し月の光が横照らしに照つてるけれども、壁のふもとは暗かつた。這入つてもいいが、ちよツとした聲でも籠つて遠く響くのを知つてるのでそれを恐れた。

また同じ方向を穴に添つて進み、とう／＼、最大距離の射的場の內部に來てしまつた。つい、こないだのこと、矢張り西大久保に住む或紳士が散歩がてら何も知らないでここに這入つたところ、射的の眞ツ最中であることを横はばの眞

ン中ごろへ來た時に初めて氣が付いた。ぶす〳〵と云つて彈丸がいくつもあたまの近くを掠めた。進退に苦しんで地べたを這つて逃げてると、今度は狙らひ外れのが横ツ腹の前後にも落ちて來た。どうにも仕やうがないのでまた立ち上つて一目散にやツと驅け拔けたと云ふ。

さう云ふ苦しいあわてかたの場面をその起つた場に於いてじツとまじめに想像して見ることができるに付けても、今や渠は自分の眞劍になつてることが確かめられた。若しかの女にしてなほ曖昧であつたり、なほ不正直であつたりしたら、今夜こそここで刄物が光つたかも知れぬ。こちらのやうすでかの女もそれと察してゐるかして、餘ほど覺悟のやうに見えた。

こちらが然し言葉を發しなかつたので、かの女も亦ただ默つて附いて來たのだが、縱に長く渡つた廣ツぱの一方で、低いいばらや枯れ草の間に突ツ立つて、暫らくふたりは互ひに月の光りをかすめて互ひの顏に互ひの心を讀み合つた。そして高みや地べたのところどころに白いのがまだ殘つてるのが、却つて人の目をちら付かせた。

まと山の後ろを一回、重い荷物列車の通過するのが聽えたあとは、全くしんとして、もちろん他に人げなどあらう筈はなかつた。『いらツしやい！』渠は突然自分の足もとなる枯れ草の上に腰をおろした。そしてそばなるかの女を引き寄せて、橫抱きに抱いた。

『…………』かの女は素直に抱かれて、燃えてるやうな目つきでじツとこちらの顏を見詰めたのが、光りにかすれてちよツとよく見えた。が、恐怖の色もまたまじつて見えたので、こちらも餘ほどこわい目つきをしてゐるのだらうと身づから思へた。

『十二月の二十七日以來』と、成るべく優しくしようとした聲がそれが爲めにうつろに顫えて、『あなたはいつもからだと心とが分離してゐたんですか？』この問ひがおしまひになるに從つて、渠は憎しみと可愛さとが一緒に溢れて來て、かの女を半ば夢中でゆすぶつてゐた。

『…………』こちらをなほも見つめてるかの女は、その首のがく〳〵するのがやむと、むせびをこらへてるや

うな聲で答へた、『一番初めはさうでもございませんでした。』

『ぢやア、矢ツ張り、不能者ではないのです、ね！』渠は實際に一たび斷念したことがまた有望になつたのを喜んだ。

『でも』と、かの女もつづけてまじめに『わたしが一生懸命になればなるほどまた中野とのことを繰り返すやうなものですから。』

『と云ふと――？』渠にはちよツとその意味か分らなかつた。

『…………』まを置いて、かの女は、『それがわたしの云ひ後れた條件ですから。』

『…………』何だらうと考へながら、渠はかの女の少し和らいで來た顏を見てゐた。

『あなたはそれをも白狀しろとおツしやるのでしようから、今、申し上げますが、あなたにはまだ正式の奧さんがおわりです。』

『ああ、分りました！』渠はそこにも既に意外でもなかつた意外のことを發見した。『あなたは、成るほど、それが爲めにこないだも僕等が不自然なまじはりになつてるのを氣にしてゐたんです、ね。』

さうだ、自分はもう占めたと云ふ――と安心の爲めに、割り合ひに平凡な理性の勝つてるかの女の立ち場を全く踏み付けにして、かの女をばかり追窮してゐたのであつこ。そしてかの女が最後に中野に要求して失敗したことをこちらにも云ひたいながら遠慮してゐるのであつたことが分らなかつた。然し今や、理性の平凡は女としてまぬがれないものでー―かの女は矢ツ張り正式の妻になりたいのであつた。自分は今やそれに十分の同情を向けることができる。かの女が無邪氣に猫を紀念にしたり、わざとらしくも主婦の權利を主張したり、ただ丸髷を結つて見たり、頻りに小犬を可愛がつたりするのは、結局、みな子を欲しがる年輩に達した證據ではないか？かかる爛熟した女を手に入れながら、自分らは今日までそれに子を與へる道を取らなかつたのだ。中野にしても、自分にしても、『關係したも同樣』でありながら、よほ且かの女に『處女性』主張の餘地を殘す所以は、乃ち、そこであつたらう。そこには正式の手つづきをすませてかの女を安心させる必要があつたのだ。若しかの女の肉靈區別觀で云ふと、かの女の最も否定する肉を實際にもツと多く要

求してゐるのはこちらではなく、却つてかの女自身であつた。かの女にそれを直接に與へて子のできる道をひらかないでは、かの女をこちらの所謂合致の愛に救ひ上げることができないのであつた。澄子の如き女に對しては、如何に熱烈な合致觀も、正式な、それが爲めに平凡な家庭を持たせないでは實現できないことが分つた。かの女のいろんな小理窟や思はせ振りも決して空想や僞善ではなかつたのだ。

『よろしい！僕は中野とは違ひます。成るべく早く、あなたの望み通り、あの死んだも同樣の妻と離婚する方法を考へます。』

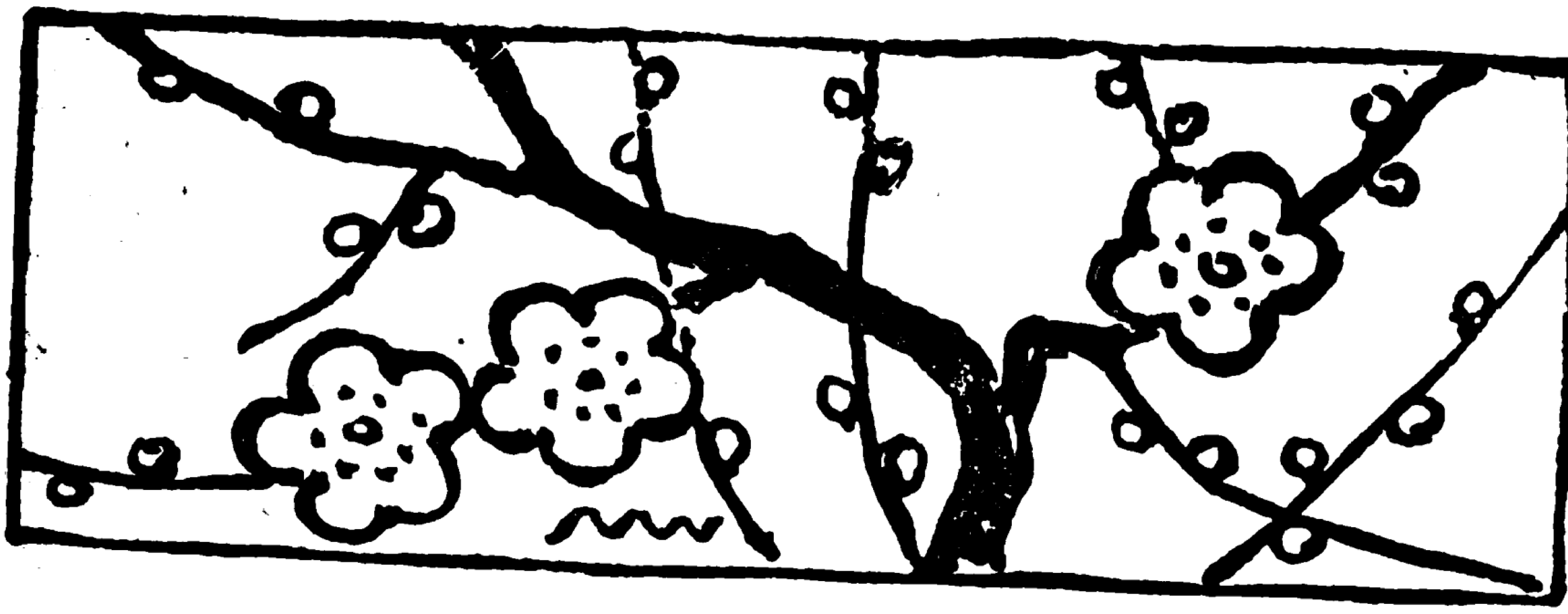
『わたしは然し』と、かの女は全く淚ごゑになつてその顏をこちらの胸に埋めて、『そんなことをなさらないでも、もう、あなたの物ですから！』

『いや、分りました。僕が惡かつたのです。幾たびもあなたばかりに許してを云はせましたが、最後に今僕から返します――どうか許して下さい。』斯う云つて、今一度かの女を抱き締めて接吻を與へた。そしてこの心持ちを自分らの家庭に實行してこそ、さきに房子さんらに誓つた澄子の救ひが初めて全くされるのであつた。そしてこの救ひがまた自分自身の救ひにもなるのであつた。『もう、すツかり分りました。さア、歸りましよう。』

『…………』かの女も一緒に立ちあがつて、下向きがちに歩き出しだ。

『…………』渠は無言でだが、かの女を導きながら射的場のいばらや枯れ草の間を出る時、仰いで西の空を見ると、冷たさうならは虧けの月にも熱い感じが伴つてゐた。

――大正七年十二月二十九日――



蘇州紀行

谷崎潤一郎

私が蘇州に遊んだのは昨年の秋、十月の二十二、二十三、二十四、二十五の前後四日間であつた。第一日は午前中に南京を發して、支那中で最も豐饒な江南の綠野の景色を眺めながら、夕方の五時頃に閶門外にある蘇州の停車場に着き、坦々たる南北濠大街に馬車を驅つて、一里半の途を日が暮れてから日本租界に着いた。道すがら戈登橋を渡る時に、左手の濠の方を見ると、長い長い城壁が、其の裡に殷賑な蘇州の市街を包んで居ようとも思へないほど穩かに、まるで牢獄の塀のやうに靜かに靜かに續いて、其の向うにはたつた一つ、灰色の高い塔が聳えて居るだけであつた。其の塔は水のやうに澄み切つた夕闇の空にくつきりと立つて居ながら、天も地も死んだ如くに靜まり返つて居るせゐか、ぢつと眺めれば眺めれるほど何だか幻のやうにしか思はれなかつた。第二日目には、驢馬に乗つて呉門橋を渡り、盤門を潜つて始めて蘇州の城内に這入つた。孔子廟から滄浪亭のほとりを過ぎて護龍街を眞直ぐに飲馬橋を渡り、樂橋を渡り、觀前大街の繁昌を見て陶器商や寶石商の店を冷やかし、玄妙觀に詣でて再び護龍街に戻り、譚興寺橋、裝家橋、香花橋を渡つて、橋畔の北寺の塔を見物した後、寺の前を左折して桃花塢大街に出て、草家橋を越えて堀割りに沿ひつゝ四義橋の袂から、城壁の内側に附いて左へ曲り、水關橋を渡つてやつと城外なる閶門のほとりの吊橋に到つた。呉門三百九十橋と云ふ言葉に違はず、蘇州の市街には運河が縦横に貫通して橋の數が非常に多い。それらの橋は殆ど悉く石を以て造られ、横から見ると美しいアーチの形を成して町の家並よりも高々と虹のやうに水の上に懸つて居る。なほ東洋のヱニ

スであると私は思つた。それから郊外の留園西園に行き、虎丘に登つて羊の群の眠つて居る塔のほとりの高台から附近一帶の平野を遠望し、更に驢馬に揺つて有名な寒山寺を訪れた。徳富蘇峰氏を始めいろいろの人の紀行文や談話に依つて、寒山寺は詰らない所だと云ふことを度々聞かされて居たけれど、私は決して詰まらない所だとは思はなかつた。寒山寺その物は詰まらないにしても、あの附近の運河の景色――楓橋、鐵鈴關のあるあるあたりの風光を、私は未だに忘れることが出來ない。私は一體山岡よりも水郷の景色を好むせゐか、殊に町の中なぞを流れて居る河の景色を好むせゐか、此の一日の遊びで、蘇州がすつかり氣に入つてしまつたのである。運河の景色があまり氣に入つたので、第三日目には天平山の紅葉を見がてら、更に畫舫を傭つてもう一遍ぐるつと運河を漕ぎ廻ることにした。今玆に掲げるのは即ち其の第三日目の記事である。

完全なる蘇州紀行を書く爲めには、第一日から筆を起さなければならないのであるが、ちやうど去年の暮れに私が支那から歸つて來ると間もない時分から、父が病氣に罹つた爲めに騒騒しい日本橋の家へ看病がてら來て居るので、到底落ち著いて原稿を書く事が出來ない。そこで已むなく病室の二階に寐轉びながら、時々隙を見ては筆記生に口授してやつとこれだけ書き上げたのである。いづれ後になつてから、前後の記事を補足して纒つたものにしたいと思つて居る。どうか其の積りで讀んで貰ひたい。

十月二十四日、午前八時半頃に床を離れて朝飯を食つて居ると、下から女中が上つて來て船の用意が出來ましたからそろそろ御支度を願ひますと云ふ。船は宿屋の直ぐ前の濠に來て居るのださうである。驢馬と違つて時間がかかるし、天平山迄は道のりが可なりあるから、早くしないと歸りに日が暮れると云ふので、女中は頻りに氣を揉んでくれる。しかし實を云ふと、私は天平山の紅葉なんかはどうでもよい。寧ろ道中の運河の景色が目的なのである。殊に今日は日曜で上海から日本人の團體が紅葉見物に繰り込むと云ふ話であるから、そんな連中とカチ合つたりすれば何だか瀧の川へ遠足にでも來たやうな氣がして面白くなからうし、成るべくなら紅葉の方は好い加減にしたいものだと思ふ。兎に角今日船を傭つたのは成功であつた。陸を行けば否でも應でも其の連中と一緒にならなければならない。それに昨日一日驢馬に乗つたせゐか、臀の皮が擦り剥けてヒリヒリして居る。とても今日は驢馬に乗るだけの元氣がない。

船へ行つて見ると、案内役の女將が一と足先に乗り込んで私を待つて居るところであつた。昨日の案内役は宿屋の番

頭であつたが、今日は番頭が團體見物の方へ取られたので、女將が代りを勤めるのである。五十近い、痩せた小柄な、色の淺黒い愛嬌のない顏立ちの女であつた。なまじ愛嬌のあるおしやべりの女よりか此の女將の方がいくら好いか知れないけれど、川の景色を獨りで心置きなく味ふ爲めには、其の女將さへ餘計な邪魔者であるやうな氣がした。實際支那語が少しでも出來れば案内者の必要なんか全くない。案内者を賴みにして居るといつも名所や風景を見落してしまふ。昨日も西園の戒幢寺へ案内しながら、俗惡な金ピカの五百羅漢のお堂の中を馬鹿丁寧に見せて歩いて、其のお堂の直ぐ傍に純支那式の林泉があつたのを、敎へもせずに通り過ぎてしまつたのはあの番頭である。そればかりか、虎丘へ行つた時にも有名な古眞孃の墓のありかをさへ注意してはくれなかつた。其の墓は小さな見すぼらしいもので、始めての人にはちよいと氣が付きさうもない道端に立つて居るのである。無知なのか不親切なのか其處はよく分らないが、繪葉書にまでなつて居るほどの名所を、案内人たる者が知らないと云ふのはあまり無責任過ぎて居る。何にしても私は甚だ不愉快を感じたので、以後絕對に案内者を信用しない事にきめた。案内者はただ通辯をさせるに止めて、飽くまでも鐵道院のガイドブックと地圖とに據つて自分の勝手に步き廻る事にした。今日は船であるから、いつそ案内者を斷らうかとも思つたのだが、歸りに閶門外の支那料理屋へ行きたかつたので、結局やつぱり賴むことにしたのである。

船は所謂畫舫と云ふ奴で、本來ならば此れに多勢の歌妓を乘せて歌を唄ひ酒を飲み料理を食ひながら、大いに水郷の情趣を味ふべき性質のものである。しかし畫舫の繁昌するのは春の末から秋の初め迄で、もう此の頃ではそんな眞似をする人も少ないと云ふ。それに歌妓を呼んで一日船遊びをするには五十弗——日本の金でざつと百圓ばかり懸ると云ふので止めにしてしまつた。此の間南京の秦淮でもちよいと畫舫に乘つて見たが、あの時のよりも今日のは少し裝飾が立派である。船の中央に日本の屋形船のやうな屋根があつて、舳の方を向いた入口の左右の扉には、金地に黑の牡丹の彫刻が一面に施してある。室内に這入ると、眞中に小型の四角な食卓が置いてあつて、その周圍に椅子を設け、兩側には硝子窓を入れた板戸が篏まつて居る。さうしてそれらの板戸にも悉く金色の梅の模樣の彫刻がある。突き當りの左右の柱には「一簾波影」「四壁華香」と記した一對の聯が懸つて居る。私は表の景色を見るために室外へ出て舳の椅子に腰を掛

けた。今日も相變らずの好い天氣である。南方は雨が多いと云ふが、それでも一旦晴れたとなつたら容易に降らない。昨日ほど暖かではないけれど、日本の十月に較べれば非常な相違である　現に私は南京以來の薄い黒羅紗の間着にクレバネツトを纏うて居るだけで、少しも寒さを感じない。何しろ四五日前に南京では蟬が啼いて居たくらゐだから、どんなに陽氣が暖いか想像することが出來るだらう。この邊の春は短いが、反對に秋の氣候は長く續いて、而も其の間は春のやうにぽかぽかと長閑なのである。

やがて纜を解いた船は、日本租界の石崖を離れて、ぐるりと舳を西へ廻した。時計を見るとちやうど九時十五分過ぎである。此のあたりの濠の幅は東京の外濠よりもいくらか廣く、水は勿論たつぷりと湛へられて居る。船の右舷には、一昨日の夕方幻のやうに見えた彼の城壁と高塔とが、眞に一點の曇りもなくくつきりと晴れ渡つた空に、蜿蜒と連つて居るのである。さうして今日も亦、城壁の向うの空があんまり冴え冴えと澄み切つて居るせゐか、其の下に人口三十萬の大都會が匿はれて居ようとは、到底信ぜられない。如何に城壁の石垣が厚いにしても、其の蔭にある城内の市街の雜沓が少しはガヤガヤと響いて來さうなものだのに、そんなものは全くカタリとも聞えない。朗かな朝日を一面に浴びてしーんとして立つて居る城壁を、一心に眺めて居ると、何だか其の石垣迄が芝居の舞臺に使ふ張り物のやうに思はれて來る。

「あれ御覽なさいまし、彼處にあんな鳥が飛んで居ります。――」

室内に腰を掛けて居た女將は、かう云つて舳の方へ乘り出しながら、城壁の上の高い空を指した。成るほど其處には眞白な鳩のやうな五六羽の鳥が、一とかたまりになつて、濠を横ぎつて郊外の方へ飛んで行くのである。鳥の名を聞いて見たが女將は知らないと云ふ。

左舷の岸には蘇綸紗廠の工場があつて、それを通り越すと左方の運河に甘棠橋が見える。右手の城壁の外廓にもいつの間にやら五六軒の人家が見え出して、白壁がきらきらと日に映えて居る。水の上には往來の船の數が次第に多くなつて來る。大運河から上つて來たらしい帆掛け船だの、ジヤンクだの、小蒸汽船だの、發動機船だの、種々雜多な船が前からも後からもやつて來る。中にはアンペラの苫を被せた小さな乞食船なども交つて居る。

「乞食はあの船を住居にして、大概五六人の親子が住んで居るのです。」

さう云つて、女將は說明した。

間もなく私の船は、蘇經絲廠の煉瓦の柵のほとりに來た。が、もう私の眼の前には吳門橋が右のアーチを開きながら、私を迎へて居るのである。昨日其の上を渡る時に、石段があまり急なのでわざわざ驢馬を下りたくらゐだから、アーチはなかなか高い。船から見ると、アーチの下に橋の向うの家々の甍が續いて、遠くの空に虎丘の塔と靈巖山の塔とがぼんやりと霞んでゐる。船が其處をくぐる時、アーチの左右の柱に、「同治十一年壬申夏四月」「蘇州水利工程總局重建」と云ふ刻字のあるのがはつきりと讀めた。

橋の先から濠は右へ曲つて行く。しかし私の船はやがて濠に別れて、水門塘のところから左の運河へ這入るのであつた。其のあたりは日本租界の近所よりも賑かで、兩岸には人家がぎつしりと詰まつて居る。左側には目下警察の分駐所になつて居る水仙廟があつて、廟の前の石垣に二三人の巡査が佇みながら、私の船を珍らしげに眺めて居る。右側は不揃ひな齒列のやうに並んだむさくろしい矮小な町家ばかりである。川筋の混雜は前よりも一層甚しく、殆んど深川の小名木川を想ひ出させる。例に依つて乞食船がある、泥船がある、蝦をあさる船がある、肥船がある、其の間を掻い潜つて、鶩鳥がガアガアと啼きながら、騷々しく水の上を泳いで廻る。町家の女房らしい婦人が、汀の石段にしやがんでサラでお鉢を洗つたり菜を洗つたりして居る。そんな間を一町ばかりうねうねと漕いで行つたかと思ふと、右側の町の中に又幅の狹い運河があつて、それに皷橋が懸つて居る。私の船はその運河の方へ曲つて行くのであつた。

空には相變らず白い小鳥や、鵲や烏などの舞つて居るのが見える。私の船の船頭は氣樂さうに長い煙管で煙草を吹かしながら、悠々と櫓を漕いで行く。兩側の人家は追ひ追ひに少くなつて、岸は石垣の代りに靑々とした雜草の生茂つた土手に變つてしまふ。運河は坦々たる姑蘇城外の沃野を貫いて一直線に流れて居るのである。私は時々舳に立ち上つて土手の向うの野の景色を見ようとした。土手が思ひの外高いのでよくは分らないが、何でもその邊は一帶の田圃であるらしい。ところどころに墓地があると見えて、土饅頭や墓石の頭だけが土手の蔭から覗いたりする。此の近所は蘭が富

んで居るせゐか、土民の墓もなか〳〵に立派である。滿洲の荒原などにある墓はたゞ簡單に土を盛り上げたばかりで、其石の附いてゐるのは殆んど一つもないけれど、此の邊ではどんな粗末な墓にでも、必ずしるしの石が立つて居る。中には土饅頭をセメントで固めて、堂々たる影壁で圍つたり、こんもりとした竹藪を繞らしたりしたのもある。墓の外には、をりをり土手の陰を羊の群が通つて行く。それも見えるのは纔かに脊中だけであるが、眞白な綿のやうな毛が後ろの青空から落ちて來た一と塊の雲のやうに思はれる。その青空には一羽の鳶が大きな圏を描きつゝ靜かに浮かんで居る。船の往來もだん〳〵稀になつて、たまに一艘の浚渫船が川底の泥を搔い出してゐたりする。行く手の方には更に新らしい皷橋が現れて來る。見ると、その皷橋の向うにも亦もう一つの皷橋がある。その先に亦一つある。三つの皷橋がいづれも十町ぐらゐな間隔を置いて、殆んど同じやうな弧を描きつゝアーチを重なり合はせて居る。運河はそれ等のアーチを潜つて、次第に細くはるばると遠い野末に消えて行く。河上の方には兩岸に一と叢の灌木の林があつて、水はその林の枝葉の下に隱れてしまふのであるらしい。此方から眺めると、林のあるあたりがいかにも清い美しい仙境のやうに感ぜられる。お伽噺のお爺さんやお婆さんの住んでゐる村は、きつとあゝいふ所にあるのではないか知らん。さうして、桃太郎の桃の流れて來る川は、大方こんな川だつたらうなどと思ふ。殊にその川上を仙境らしく見せてゐるのは、林の後ろに聳えてゐる山の姿である。いや、聳えると云つたのは妥當でない。岡と云ふのには少し高過ぎる山のやうではあるが、……可なり遠くにある爲めか、さうして姿がいかにも穩かに閑々としてゐる爲めか、ほんのちよつとした丘陵のやうにしか思はれない。と同時に、山の肌は全部水で洗つたやうなきれいな石から成り立つてゐて、それが廣い廣い野の中にたつた一つ、盆石の如くに置かれてゐるのである。それ等の川上の山や林が、飽く迄も透き徹つた秋の朝の空氣の底に淸く霞んでゐる情趣は眞に何とも形容することが出來ない。すると、その川上の仙境の方から、一艘の船がゆるゆると、桃が流れて來るやうにゆるゆると、櫓の音も立てずに此方へ漕いで來る樣子である。船は第一の皷橋を潜り、第二の皷橋を潜り、第三の皷橋を潜つて漸く私の方へ近づいて來る。それは私の船と同じくらゐな大きさの畫舫であつた。屋根の下にはどんな客が乘つてゐるか分らないけれど、舳には扉の左右に二人の歌妓がうづくまつて居る。右

の方のは淺黄の服を着た、細面の色の白い女。左の方のは茶色の服を着た、瞳の大きい色の黑い女である。二人とも片膝を立てゝ頰杖を衝いたまゝ身動きもしない。あの盆石のやうな遠山を背景にしてゐるので、その女までが箱庭の中の人形のやうである。船が擦れ違ふ時に、私はちらりと二人の顔を偸み視たが、どちらも人形と云ふ感じに背かない美女であつた。色の黑い方の女は特徴のある眼の玉をぎろりと私の方へ向けたが、依然として身動きもせずに居るうちに、畫舫はゆるやかに去つてしまふ。

私の船は三つの鼓橋を此方側から順々にくゞつて行く。第一の鼓橋には、水面に接するアーチの柱の兩側に、「兩岸桑麻翠綠野」「一溪煙雨帶春山」と刻してある。第二の鼓橋には、「兩岸桃花迎曉日」「一渠春水漾恩波」と刻してある。盆石に似た遠山の蔭にはもう一つの山が見え始める。その山は一面に紅葉に蔽はれてあか〱と日に照つて居る。第三の鼓橋に近づいた頃から、川の面目は一變して、もう運河らしい樣子は少しもない。水には無數の落葉や木の實や浮草がどんよりとたゞようて居る。土手には穗の出たすゝきが夥しく繁茂して、その間にところどころ菊の花が咲いてゐる。さつき見えてゐた林の傍へ來たのであらう。岸の樹木はいつからともなく多くなつて、楊柳、櫨、合歡(ねむ)などの大きな幹が、枝を長々と交へつゝ川の面を暗くしてゐる。水は青い寒水石のやうに澱んで、木の葉の影の斑紋を作りながら、金の破片を落した如く飛び飛びに光つてゐる。やがて右舷の最も樹林の茂つたところに牛王廟の白壁が見え始める。第三の鼓橋を過ぎてから程なく、川は行き止まりになつて居るのである。

われ〱の船が右岸の碼頭に漕ぎ寄せると、もうその前から河岸傳ひにわれ〱を追ひかけて來た百姓の女達が、一度にどやどやと集つて來る。乞食かと思つたら、さうではなくて天平山へ行く女の轎舁きなのださうである。女將はその女どもとしきりに何か支那語で談判をしてゐたが、結局一臺五十錢といふことに極まつて、そこから轎籠で舁がれて行つた。

轎籠と云つても日本の山駕籠とはまるで違ふ。籐椅子の兩側へ長い〱棒を附けて、二人の女が前後からそれを擔いで行くのである。棒はスプリングの作用をなして、でこぼこの路へ來ると自然に上下へ快く搖れるやうに出來てゐる。

私は先日廬山へ登つた時に、既にこの駕籠を經驗してゐたけれど、あの時は筋骨逞しい苦力が而も四人で擔いだのに、今日の駕籠舁きはかよはい女二人である。尤も廬山と天平山とは、山の高さも路の險しさも到底比較にはならないから、女の駕籠舁きが相當であるかも知れない。廬山の場合は一つ間違つたら千仭の谷底へ落されさうなので、隨分膽を冷したが今日は落されても大丈夫である。それに山がもう眼の前にあるのだから、多分半里か一里も乘ればいゝのだらう。

田圃や、桑畑や、竹藪や、小川や、それ等の間を縫つて行く路は細いけれども平坦である。上海から來た日本人の團體の一部であらう。會社員らしい脊廣服を着た若い日本人が、驢馬に鞭をあてながら、ちよいと女將に會釋をして我々の駕籠を追ひ拔ける。竹藪の向うからちりんちりんと勇しい音を立てゝ、銀の鈴の附いた眞白な驢馬に跨りつゝ、もう此方へ歸つて來る支那人もある。私の駕籠を舁いでゐる女は、前の方のが五十餘りの老婆で後ろの方のが十七八の小娘であつた。老婆は白毛交りの髮の毛を後頭部で束ねて、それを眞鍮の簪で止めて居る。さうして藍地に白く更紗模樣を染め拔いた上衣を着て、耳には金鍍金だか眞鍮だかの耳環をさげて居る。駕籠舁きの癖に耳環は贅澤なやうだけれども、支那では乞食までが耳環や指輪を嵌めてゐるのだから敢て不思議でも何でもない。それはいゝとして、少し勾配の急な坂路へかゝつて來ると、その老婆はわざと仰山に、世にも悲しげな切ない聲を出してひい〱と喘ぐ。揚句の果は駕籠をおろして、坂の上まで歩いてくれなどゝ云ふ。

「なあに此奴等は横着なんです。酒手が欲しいもんだからそんなことを云つてゐるのです。」

かう云つて女將は突慳貪に駕籠舁きを叱り飛ばす。叱り飛ばされると仕樣ことなしに、再びひい〱と悲鳴を擧げながら擔いで行く。

天平山の麓へ着いたのは午後一時頃であつた。そこには數頭の驢馬や駕籠の外に、純支那式の風雅な輿が五六臺も客を待つてゐた。一體に、蘇州の輿は北京や南京邊のよりもずつと上品に綺麗に出來てゐる。何となく日本の王朝時代の乘物に髣髴としてゐて、それが靜かに練つて來るのに出で遇ふと、いかなる佳人が乘つてゐるのかと、奥床しい心地か

する。しかし今日の此の輿は、恐らく日本人の團體に加はつて來た夫人や令孃たちのものであらう。

いづれにしても、此れから山へ登ればその團體と一緒になるにきまつてゐる。私は成る可く紅葉見物をさつと濟ませて、日の暮れないうちに再び畫舫で寒山寺の方へ行つて見よう。さうして、あの剪燈新話の聯芳樓記の中にある、蘭英英蕙の美しい姉妹が住んでゐた閶門外の運河の方にまで、船を廻して見よう。さう思ひながら、私は轎を下りててくてくと山路を登つて行つた。（大正八年一月）



本誌の頁數について

次頁の廣告に有之候如く、本誌は定價十錢を引上げ候も、こは紙價暴騰の已むを得ざる原因に出づるものにて、頁數に於ては、從來より僅かに十頁前後しか增加するの餘地無之、普通號は二百二三十頁、倍號は四百五六十頁位の平均と相成る都合に御座候。只時々長編大作を掲載し、若くは或重大なる問題に力を注ぐことあるの結果、時に或は二百五十頁を超ゆることあるべく、時に或は二百頁を上らざる時有之べしと存じ候へば、此旨豫め特に讀者諸彥の御諒解を祈り置き候。現に本號の如きは、吉野博士の選擧論の長篇、松井須磨子の死の研究、岩野泡鳴氏の二百枚以上の小說等有之候爲め三百頁に近き大册と相成り候へば、今後一二ケ月間は、頁數に多少の減少を來たすべきにつき、此事も亦お含み置きを願上候也。

大正八年一月廿七日

中央公論社編輯部

本誌値上げ廣告

世界大戰も終熄して、各種の物價追々低落の傾向あるに拘らず、獨り「紙」の價格は低下せざるのみならず、本誌の特用する「赤菱」の如きは、近半年間に於て、五割に近き昂騰を來たし、昨年十二月を以て舊特約期限の切れたると共に、本年一月より此五割に近き暴騰價を以て購入せざるを得ざるに至り、我社は已むを得ず、從來の普通號の定價三十錢を改めて四拾錢とせざるべからざるに立ち至りたることを、深き遺憾を以て讀者諸君に謹告し、且つ併せて其御諒恕を乞はんと欲す。從つて春秋二期の附錄號及び七月十五日發行の臨時號は定價八十錢となるべく、此旨亦併せて御承知置きを希ふもの也。

尙近來關西地方に於て自働車を乘り廻はして本誌の購讀及び廣告等を勸誘する者あるの噂を耳にせるが、本社に於ては、取次書肆若くは廣告特約店の手を經ずして直接に購讀廣告等の勸誘をなすこと絕對に無之を以て、かゝる詐欺的手段に陷れられざらんことを念の爲めに御注意申上候。

大正八年一月二十七日

中央公論社營業部

○定價　金四拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金**口座は東京三十四番なり**
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せす
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年一月廿八日印刷納本
大正八年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長小石川一四四）（小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す